

鳥取県日野郡溝口町

中国横断自動車道岡山・米子線建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

# 下山南通遺跡

寄贈



1986



財団法人 鳥取県教育文化財団

『下山南通遺跡』正誤表

箇 所		誤	正
P 52	113	堅固である	堅固である
P 57	挿図37	⑨暗黄褐色土(張床)	⑨暗黄褐色土(貼床)
P 79	18~9	様子が何がわれる。	様子が窺われる。
P 125	挿図138	Po305	Po289
P 149	113	平坦面	平坦面
P 156	挿図194	S K -177	S K -117
P 157	挿図195	S K -188	S K -118
P 162	17	複原できた個体	復元できた個体
P 178	挿表21	弥生土器観察表①	弥生土器観察表①
P 185	挿図28 挿表28、Po252	弥生土器観察表⑧ 征底径	弥生土器観察表⑧ 復底径
Po196	挿表40	弥生土器観察表	弥生土器観察表
Po202~205		Po202、203とPo204、205が順序入れかえ	
Po218、挿表53		甕	中期中葉
S K -77時期			
Po218、219	挿表53	床面積(cm)	床面積(m <sup>2</sup> )
Po220	118	変化を窮う	変化を窺う
Po221	121	端部平坦面	端部平坦面

## 序 文

中国横断自動車道岡山・米子線の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、日本道路公団の委託を受けて当財団が実施しているところで、昭和60年度には日野郡内の2地区を調査したが、そのうちの佐川遺跡群については、第20集として既に発刊の運びとなっている。

本書は、溝口町に所在の下山南通遺跡の調査結果であるが、この遺跡は昭和59年度に発見され、急速調査することになったものである。

調査の結果、遺跡は弥生時代中期から後期を中心とする集落跡で、中期中葉、中期後葉、後期後葉の住居跡が確認され、出土遺物も豊富で、特に中期の土器は保存状態もよく量も多いものである。

また、縄文時代早期から後・晚期までの遺構・遺物が一部で検出されたほか、9世紀後半の製鉄関連の遺構・遺物も検出されており、これらは今後本県における発掘調査の参考資料として役立つものと期待している。

おわりに、この調査に多大の御協力をいただいた町ならびに地元の皆さんをはじめ、御指導いただいた方々、そのほか関係の各位に対し心から感謝し、厚くお礼を申し上げます。

昭和61年3月

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 西 尾 邑 次



秀峰大山  
遺跡よりみた秀峰大山



## 例 言

1. 本報告書は1985年度、中国横断自動車道（岡山～米子線）建設計画に伴う日野郡溝口町上野・金屋谷に所在する下山南通遺跡の発掘調査記録である。
2. 下山南通遺跡は新発見の遺跡である為、字名を探って命名したものである。
3. 出土遺物の整理は鳥取県埋蔵文化財センターの協力を得て調査員が行なった。
4. 遺跡、遺構の実測は調査員、補助員が協力して行なった。遺物の実測は鳥取県埋蔵文化財センターの小林、桑崎、田中山、田中真、福田、山崎が行ない調査員が補足した。
5. 遺跡、遺構の写真撮影は調査員が行なった。遺物の撮影は太田と中原が行なった。
6. 図面の作成は、左藤、田中真、中原が行なった。
7. 本報告書の作成は調査員の討議に基づくものである、執筆は調査員が分担して行ない、執筆担当者は文末に記載した。編集は中原が担当した。
8. 出土遺物、図面等は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されており、出土遺物は将来的には溝口町に移管する予定である。
9. 本書に掲載の地形図は国土地理院発行の5万分の1地形図「米子」他を使用した。
10. 本遺跡出土の鉄滓に関しては、日立金属株式会社安来工場、和鋼記念館に自然科学分析を依頼し、同副館長佐藤豊先生には玉稿を戴いた。共伴した炭化物については京都産業大学理学部、山田治先生に<sup>14</sup>C年代測定をお願いした。また、鳥取大学教育学部赤木三郎先生には、現地において地学的指導をお願いし、出土石製品の石材鑑定にも御協力を戴いた。記して謝意を表します。
11. 現地調査及び報告書作成にあたって下記の方々に助言、指導を戴いた。  
足立克己、飯野学、網見安明、久保権二朗、小原貴樹、真田廣幸、杉谷愛象、田中精夫、田中弘道、田中義昭、角田徳幸、中村徹、根鈴輝雄、野田久男、原俊一、東森市良、平勢隆郎、松沢聰生、松本岩雄、村上勇、森下哲哉、柳浦俊一、柳沢一男、益田晃
12. 発掘調査に際しては地元の方々を始め、下記の方々に便宜をはかっていただいた。謝意を表します。  
溝口町教育委員会、溝口町金屋谷（代表：影山博人）、太平原（代表：井上祥一郎）、上野（代表：斎田候公）、岩立（代表：足立豊）、岡野風子

## 凡 例

1. 本報告書における方位は、すべて磁北を示す。
2. 本報告書に収載した遺物には観察表中の〈取上番号〉をネーミングしてある。
3. 本報告書における遺構記号。遺物記号は次のように表記する。  
S I : 懸穴住居跡、S B : 堀立柱建物跡、S K : 土壙、P : ピット  
S : 石器、H : 刻片、F : 鉄器類、Po : 土器
4. 遺構・遺物挿図中における表示は下記の表記に従う。  
焼上~~面~~、焼上面~~面~~、磨滅範囲~~面~~、敲打範囲~~面~~、凹み範囲~~面~~、壇面及び磨耗~~面~~、敲打痕~~面~~、凹み~~面~~、煤~~面~~、灰汁~~面~~
5. ピットの計数はP（長径×短径×深さ）で示した。単位はcmである。
6. 遺構挿図中におけるセクション・エレベーションの基準線標高はH=の記号で表わす。

# 目 次

序文

例言

凡例

目次

## 第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過と方法	1
第3節 調査の概要	3
第4節 調査体制	4

## 第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	14

## 第3章 繩文時代の遺構と遺物

第1節 遺構	16
第2節 遺物	17
第3節 小結	33

## 第4章 弥生時代の遺構と遺物

第1節 堅穴住居跡	41
第2節 掘立柱建物跡	63
第3節 土壙	73
第4節 その他の遺構	160
第5節 遺構外遺物	162

## 第5章 古墳時代以降の遺構と遺物

第1節 製鉄関連遺構と遺物	201
第2節 陶磁器	204

## 第6章 若干の考察

第1節 繩文時代——居住空間の復原	206
第2節 弥生時代	210
1. 堅穴住居跡 2. 掘立柱建物 3. 土壙 4. 集落 5. 土器 6. 石器	
第3節 製鉄関連遺構について	228
第4節 おわりに	231

報 告 烏取県口野郡溝口町下山南通遺跡出土鉄滓の調査

（株）日立金属安来工場和鋼記念館副館長 佐藤 豊 ..... 232

## 挿 図 目 次

挿図 1	下山南通遺跡調査前地形測量図	折込	挿図40	S I -14遺構図	60
挿図 2	下山南通遺跡の位置	5	挿図41	S I -15遺構図	61
挿図 3	鳥取県の地質層序	7	挿図42	S I -15遺物図①	62
挿図 4	遺跡周辺の地形分布図	9	挿図43	S I -15遺物図②	62
挿図 5	下山南通遺跡周辺セクション柱状図	11	挿図44	S B -01遺構図	63
挿図 6	周辺跡分布図	折込	挿図45	S B -02遺構図	64
挿図 7	A区集石01遺構図	16	挿図46	S B -03遺構図	65
挿図 8	S K -6遺構図	17	挿図47	S B -04遺構図	65
挿図 9	A区出土繩文土器実測図①	19	挿図48	S B -05遺構図	66
挿図10	A区出土縄文土器実測図②	20	挿図49	S B -06遺構図	67
挿図11	A区出土縄文土器実測図③	21	挿図50	S B -08遺構図	68
挿図12	A区出土縄文土器実測図④	22	挿図51	S B -09遺構図	69
挿図13	A区出土縄文土器実測図⑤	23	挿図52	S B -10遺構図	70
挿図14	A区出土縄文土器実測図⑥	24	挿図53	S B -11遺構図	70
挿図15	計測箇所	26	挿図54	S B -12遺構・遺物図	71
挿図16	A区出土剥片石器実測図①	27	挿図55	S B -13遺構図	72
挿図17	A区出土剥片石器実測図②	28	挿図56	S B -14遺構図	72
挿図18	A区出土石核・疊石器実測図①	30	挿図57	S K -01遺構・遺物図	73
挿図19	A区出土石核・疊石器実測図②	31	挿図58	S K -02遺構・遺物図	74
挿図20	A区出土石器実測図	32	挿図59	S K -03遺構図	75
挿図21	S I -01遺構・遺物図	42	挿図60	S K -03遺物図	76
挿図22	S I -02遺構・遺物図	43	挿図61	S K -04遺構図	76
挿図23	S I -03遺構図	44	挿図62	S K -05遺構図	77
挿図24	S I -04遺構図	44	挿図63	S K -05遺物図	78
挿図25	S I -04遺物出土状況図	45	挿図64	S K -06・22遺構・遺物図	79
挿図26	S I -04遺物図①	46	挿図65	S K -07遺構・遺物図	80
挿図27	S I -04遺物図②	47	挿図66	S K -08・31遺構・遺物図	81
挿図28	S I -05遺構図	49	挿図67	S K -09遺構・遺物図	82
挿図29	S I -05周辺出土遺物図	50	挿図68	S K -10遺構図	83
挿図30	S I -06遺構・遺物図	51	挿図69	S K -11遺構・遺物図	83
挿図31	S I -07遺構図	51	挿図70	S K -12遺構図	84
挿図32	S I -08遺構図	52	挿図71	S K -13遺構図	84
挿図33	S I -09遺構・遺物図	53	挿図72	S K -14遺構図	84
挿図34	S I -10遺構図	54	挿図73	S K -15遺構・遺物図	85
挿図35	S I -10遺物図	55	挿図74	S K -16遺構・遺物図	86
挿図36	S I -10遺物出土状況図	56	挿図75	S K -17遺構・遺物図①	87
挿図37	S I -11遺構・遺物図	57	挿図76	S K -17遺物図②	88
挿図38	S I -12遺構・遺物図	59	挿図77	S K -18遺構図	89
挿図39	S I -13遺構・遺物図	60	挿図78	S K -19遺構図	89

挿図79	S K - 20遺構図	90	挿図120	S K - 56遺物図	110
挿図80	S K - 21遺構図	90	挿図121	S K - 57遺構図	111
挿図81	S K - 23遺構図	91	挿図122	S K - 57遺物図①	112
挿図82	S K - 24遺構図	91	挿図123	S K - 57遺物図②	113
挿図83	S K - 25遺構図	92	挿図124	S K - 58・59遺構・遺物図	114
挿図84	S K - 26遺構図	92	挿図125	S K - 61遺構図	115
挿図85	S K - 27遺構図	93	挿図126	S K - 62・72遺構図	折込
挿図86	S K - 28遺構図	93	挿図127	S K - 62・72遺物図①	116
挿図87	S K - 29遺構図	93	挿図128	S K - 62・72遺物図②	117
挿図88	S K - 30遺構図	94	挿図129	S K - 63遺構・遺物図	117
挿図89	S K - 32遺構図	94	挿図130	S K - 64遺構図	118
挿図90	S K - 33遺構図	95	挿図131	S K - 64遺物図	119
挿図91	S K - 34遺構図	95	挿図132	S K - 65遺構・遺物図	120
挿図92	S K - 35遺構図	96	挿図133	S K - 66遺構図	121
挿図93	S K - 36遺構図	96	挿図134	S K - 66遺物図①	122
挿図94	S K - 37遺構・遺物図	97	挿図135	S K - 66遺物図②	123
挿図95	S K - 38遺物図①	97	挿図136	S K - 67遺構図	123
挿図96	S K - 38遺構図	98	挿図137	S K - 68遺構図	124
挿図97	S K - 38遺物図②	99	挿図138	S K - 69遺構・遺物図	125
挿図98	S K - 39遺構図	99	挿図139	S K - 70遺構・遺物図	125
挿図99	S K - 39遺物図	100	挿図140	S K - 71遺構・遺物図	126
挿図100	S K - 40遺構図	100	挿図141	S K - 73遺構・遺物図①	127
挿図101	S K - 41遺構図	101	挿図142	S K - 73遺物図・石②	127
挿図102	S K - 42遺構図	101	挿図143	S K - 74遺構図	128
挿図103	S K - 42遺物図	102	挿図144	S K - 75遺構図	128
挿図104	S K - 43遺構・遺物図	103	挿図145	S K - 76遺構図	129
挿図105	S K - 44遺構・遺物図	103	挿図146	S K - 77遺構・遺物図	129
挿図106	S K - 45遺構図	104	挿図147	S K - 78遺構・遺物図	130
挿図107	S K - 45遺物図	104	挿図148	S K - 79遺構・遺物図	130
挿図108	S K - 46遺構図	105	挿図149	S K - 80遺構図	131
挿図109	S K - 47遺構・遺物図	105	挿図150	S K - 81遺物図	131
挿図110	S K - 48遺構・遺物図	106	挿図151	S K - 81遺構図	132
挿図111	S K - 49遺構・遺物図	106	挿図152	S K - 82遺構図	133
挿図112	S K - 50遺構・遺物図	107	挿図153	S K - 82遺物図	133
挿図113	S K - 51遺構図	107	挿図154	S K - 83遺構図	134
挿図114	S K - 52遺構図	108	挿図155	S K - 83遺物図	134
挿図115	S K - 52遺物図	108	挿図156	S K - 84遺構図	134
挿図116	S K - 53遺構図	108	挿図157	S K - 85遺構・遺物図	135
挿図117	S K - 54遺構図	109	挿図158	S K - 86遺構図	135
挿図118	S K - 55遺構図	109	挿図159	S K - 87遺構図	136
挿図119	S K - 56遺構図	110	挿図160	S K - 88遺構図	136

挿図161	S K - 89遺構図	137	S K - 121遺物図	157	
挿図162	S K - 90遺構図	137	挿図196	S K - 122遺構・遺物図	158
挿図163	S K - 90遺物図	137	挿図197	S K - 123遺構図	159
挿図164	S K - 91遺構・遺物図	138	挿図198	集石 - 01遺構図	160
挿図165	S K - 92遺構・遺物図	138	挿図199	集石 - 01石器図	160
挿図166	S K - 93遺構図	139	挿図200	集石 - 01遺物図	161
挿図167	S K - 93遺物図	139	挿図201	C区 pit出土土器実測図	161
挿図168	S K - 94遺構・遺物図	140	挿図202	B区自然河川出土土器実測図	162
挿図169	S K - 95遺構図	141	挿図203	南部遺構群遺構外遺物図①	163
挿図170	S K - 96遺構図	141	挿図204	南部遺構群遺構外遺物図②	164
挿図171	S K - 97遺構・遺物図	142	挿図205	南部遺構群遺構外遺物図③	165
挿図172	S K - 98遺構図	142	挿図206	北部遺構群遺構外遺物図①	166
挿図173	S K - 99遺構図	143	挿図207	北部遺構群遺構外遺物図②	167
挿図174	S K - 100遺構図	143	挿図208	北部南部遺構群出土石器①	168
挿図175	S K - 101遺構・遺物図	144	挿図209	北部南部遺構群出土石器②	169
挿図176	S K - 102遺構図	144	挿図210	北部南部遺構群出土石器③	170
挿図177	S K - 103遺構図	145	挿図211	北部南部遺構群出土石器④	170
挿図178	S K - 104遺構図	145	挿図212	北部南部遺構群出土石器⑤	171
挿図179	S K - 105遺構・遺物図	146	挿図213	S B - 07遺構図	201
挿図180	S K - 106遺構図	147	挿図214	S B - 07遺物出土状況図	202
挿図181	S K - 106遺物図	148	挿図215	S B - 07闊連遺物図①	202
挿図182	S K - 107遺構・遺物図	149	挿図216	S B - 07闊連遺物図②	203
挿図183	S K - 108・109遺構・遺物図	150	挿図217	S B - 07闊連遺物図③	204
挿図184	S K - 110遺構図	150	挿図218	C区自然河川出土近世陶磁器 実測図	204
挿図185	S K - 110遺物図	151	挿図219	下山南通遺跡	
挿図186	S K - 111遺構・遺物図	151	第 20tr DOT-MAP	205	
挿図187	S K - 112遺構図	152	挿図220	縄文土器出土状況	206
挿図188	S K - 112遺物図	153	挿図221	A区土層断面	207
挿図189	S K - 113遺構・遺物図	153	挿図222	遺物分布範囲	207
挿図190	S K - 114遺構図	154	挿図223	遺物分布範囲	207
挿図191	S K - 115遺構図	154	挿図224	堅穴住居模式図	208
挿図192	S K - 115遺物図	155	挿図225	土壤の最小傾斜角	213
挿図193	S K - 116遺構図	155	挿図226	下山南通弥生中期中葉土器群 器種分類図	折込
挿図194	S K - 117遺構・遺物図	156			
挿図195	S K - 118・119・120・121遺構図				

## 挿 表 目 次

挿表 1	石鐵 長・幅相間表	25
挿表 2	石鐵 長・厚相間表	25
挿表 3	石鐵 幅・厚相間表	26
挿表 4	下山南通遺跡縄文土器観察表①	34

挿表 5	下山南通遺跡縄文土器観察表②	35
挿表 6	下山南通遺跡縄文土器観察表③	36
挿表 7	下山南通遺跡（A区）剥片石器一覧表①	36
挿表 8	下山南通遺跡（A区）剥片石器一覧表②	37
挿表 9	下山南通遺跡（A区）石核石器・鍛石器一覧表	37
挿表10	下山南通遺跡（A区）剥片一覧表①	38
挿表11	下山南通遺跡（A区）剥片一覧表②	39
挿表12	下山南通遺跡（A区）剥片一覧表③	40
挿表13	遺構群別石器個数表	168
挿表14	下山南通遺跡堅穴住居跡弥生土器観察表①	172
挿表15	下山南通遺跡堅穴住居跡弥生土器観察表②	173
挿表16	下山南通遺跡堅穴住居跡弥生土器観察表③	174
挿表17	下山南通遺跡堅穴住居跡弥生土器観察表④	175
挿表18	下山南通遺跡堅穴住居跡弥生土器観察表⑤	176
挿表19	下山南通遺跡堅穴住居跡弥生土器観察表⑥	177
挿表20	下山南通遺跡掘立柱建物跡弥生土器観察表	177
挿表21	下山南通遺跡土壤弥生土器観察表①	178
挿表22	下山南通遺跡土壤弥生土器観察表②	179
挿表23	下山南通遺跡土壤弥生土器観察表③	180
挿表24	下山南通遺跡土壤弥生土器観察表④	181
挿表25	下山南通遺跡土壤弥生土器観察表⑤	182
挿表26	下山南通遺跡土壤弥生土器観察表⑥	183
挿表27	下山南通遺跡土壤弥生土器観察表⑦	184
挿表28	下山南通遺跡土壤弥生土器観察表⑧	185
挿表29	下山南通遺跡土壤弥生土器観察表⑨	186
挿表30	下山南通遺跡土壤弥生土器観察表⑩	187
挿表31	下山南通遺跡土壤弥生土器観察表⑪	188
挿表32	下山南通遺跡土壤弥生土器観察表⑫	189
挿表33	下山南通遺跡土壤弥生土器観察表⑬	190
挿表34	下山南通遺跡土壤弥生土器観察表⑭	191
挿表35	下山南通遺跡土壤弥生土器観察表⑮	192
挿表36	下山南通遺跡土壤弥生土器観察表⑯	193
挿表37	下山南通遺跡土壤弥生土器観察表⑰	194
挿表38	下山南通遺跡土壤弥生土器観察表⑲	195
挿表39	下山南通遺跡集石弥生土器観察表	195
挿表40	ピット出土弥生土器観察表	195~196
挿表41	遺構外弥生土器観察表①	196
挿表42	遺構外弥生土器観察表②	197
挿表43	遺構外弥生土器観察表③	198
挿表44	遺構外弥生土器観察表④	199
挿表45	下山南通遺跡剥片石器一覧表（B・C区）①	199

挿表46	下山南通遺跡剝片石器一覧表 (B・C区) ②	200
挿表47	下山南通遺跡石核石器・礫石器一覧表①	200
挿表48	古墳時代以降土器觀察表	205
挿表49	A区出土繩文土器組成表	208
挿表50	A区出土石器・剝片・石核組成表	208
挿表51	堅穴住居一覧表	211
挿表52	掘立柱建物一覧表	213
挿表53	土壤一覧表	216

## 図版目次

図版1	下山南通遺跡調査区全景航空写真	
図版2	A区全景・縄文遺構	
図版3	縄文土器・出土状況	
図版4	A区縄文土器①	
図版5	A区縄文土器②	
図版6	A区縄文土器③・剝片石器	
図版7	A区石核・砾石器	
図版8	S I - 01・02遺構	
図版9	S I - 03・04遺構	
図版10	S I - 05・06・07遺構	
図版11	S I - 08・09遺構	
図版12	S I - 10・11遺構	
図版13	S I - 12・13・14遺構	
図版14	S I - 15遺構	
図版15	S B - 01・02・03遺構	
図版16	S B - 04・05・06遺構	
図版17	S B - 07・08・09遺構	
図版18	S B - 10・11・12遺構	
図版19	S B - 13・14遺構	
図版20	S K - 01・02・03遺構	
図版21	S K - 04・05・06・07遺構	
図版22	S K - 08・09・10・31遺構	
図版23	S K - 11・12・13・14遺構	
図版24	S K - 15・16・17遺構	
図版25	S K - 18・19・20・21遺構	
図版26	S K - 23・24・25・26遺構	
図版27	S K - 27・28・29・30遺構	
図版28	S K - 32・33・34・35遺構	
図版29	S K - 36・37・38遺構	
図版30	S K - 39・40・41遺構	
図版31	S K - 42・43・44遺構	
図版32	S K - 45・46・47・48遺構	
図版33	S K - 49・50・51・52遺構	
図版34	S K - 53・54・55・56遺構	
図版35	S K - 57・58・59・60遺構	
図版36	S K - 61・62・72遺構	
図版37	S K - 63・64・65遺構	
図版38	S K - 66遺構	
図版39	S K - 67・68・69・70遺構	
図版40	S K - 71・73・74・75遺構	
図版41	S K - 76・77・78・79遺構	
図版42	S K - 80・81・82遺構	
図版43	S K - 83・84・85・86遺構	
図版44	S K - 87・88・89・90遺構	
図版45	S K - 91・92・93・94遺構	
図版46	S K - 95・96・97遺構	
図版47	S K - 98・99・100・101遺構	
図版48	S K - 102・103・104・105遺構	
図版49	S K - 106・107・108・109遺構	
図版50	S K - 110・111・112・113遺構	
図版51	S K - 114・115・116・117遺構	
図版52	S K - 118・119・120・121遺構	
図版53	S K - 122・123遺構	
図版54	弥生土器①	
図版55	弥生土器②	
図版56	弥生土器③	
図版57	弥生土器④	
図版58	弥生土器⑤	
図版59	弥生土器⑥	
図版60	弥生土器⑦	
図版61	弥生土器⑧	
図版62	弥生土器⑨	

## 写 真 目 次

写真1 小学生による発掘体験

写真4 弥生中期中葉土器文様 ..... 224

写真2 握立柱建物 ..... 68

写真5 調査に参加した人々 ..... 225

写真3 調査風景 ..... 146

## 附 図 目 次

附図1 下山南通遺跡遺構配置図

附図2 下山南通遺跡 A区出土遺物 DOT-MAP (土器)

附図3 下山南通遺跡 A区出土遺物 DOT-MAP (石器・剥片・石核)

附図4 下山南通遺跡 A区出土遺物 DOT-MAP (断面)



写真1  
溝口小学校児童による遺跡見学と発掘体験

## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経過

日本道路公団による中国横断自動車道（岡山・米子線）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は昭和57・58年度の西伯郡岸本町久古第3遺跡（主要地方道名和・岸本線道路改良工事関連）、貝田原遺跡、林ヶ原遺跡。昭和59年度の米子市上福万遺跡、石州府29・30号墳、日下遺跡、石州府第1遺跡の調査が行なわれている。昭和60年度は日野郡江府町佐川地内の中川第1遺跡、佐川第2遺跡、佐川古墳群が江府インターチェンジ建設計画地内に既知の遺跡として存在しており、発掘調査が予定されていた。ところが、昭和58年12月に溝口町金屋谷字下山南通の溝口インターチェンジ建設予定地内に土器の散布が認められるとの情報が入り、昭和59年1月10日から13日迄、鳥取県埋蔵文化財センターと鳥取県教育文化財団が担当して、重機を導入しての試掘調査を行なった。その結果、土壤を始めとした遺構と縄文～弥生時代の遺物を多数検出した。すでに建設計画の変更が困難であった為、ここに江府町佐川遺跡群とともに、記録保存を目的とした発掘調査を行なう必要が生じた。新たに発見された本遺跡は字名をとり下山南通遺跡と命名された。試掘調査結果を受けて、日本道路公団は鳥取県教育委員会と協議し、鳥取県教育文化財団が発掘調査の委託を受け、西部埋蔵文化財調査事務所が調査を担当した。本書は溝口町上野字大平ル原、王ノ原二、金屋谷字下山南通一に所在する下山南通遺跡の発掘調査報告書である。（中原 育）

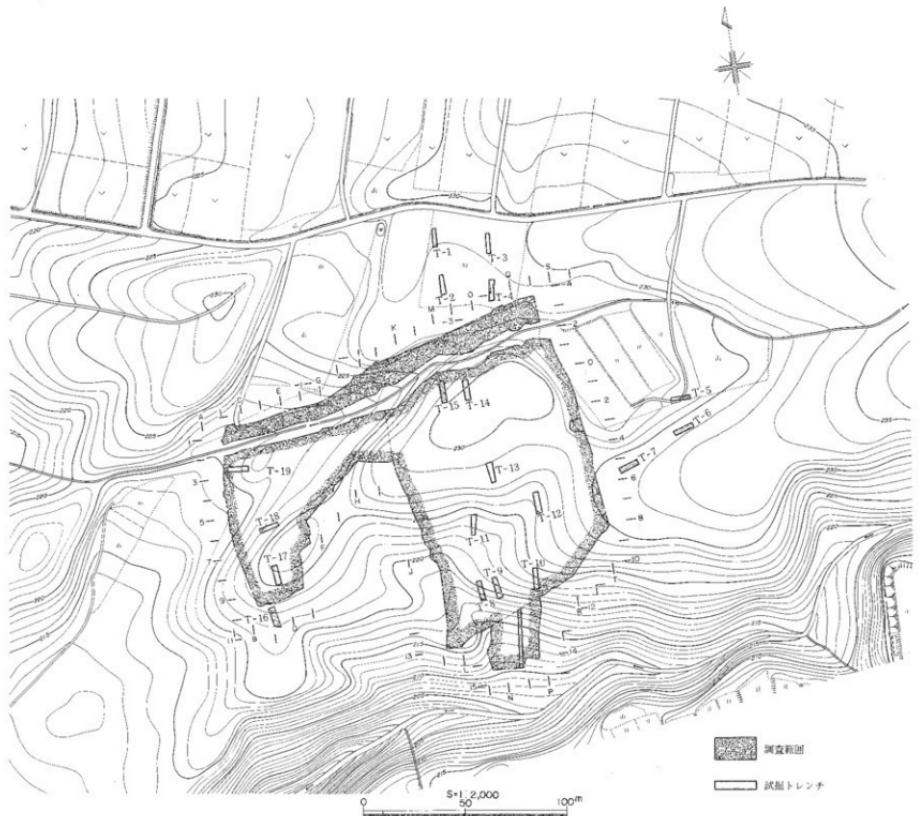
### 第2節 調査の経過と方法

**調査の経過** 調査範囲は試掘調査の結果をもとに鳥取県埋蔵文化財センター、鳥取県教育委員会が協議し、調査対象約40,000m<sup>2</sup>のうち盛土工区及び遺構、遺物が発見されなかった地区を除外して、約16,000m<sup>2</sup>の全面発掘調査を決定した。これを受けて現地での調査は4月8日から開始されたが、先述した試掘調査が嚴冬期の降雪についての緊急確認調査であり、トレンチにおける土層の検討が十分でなかった為、試掘トレンチの清掃から行なった。トレンチ再検討の結果第17トレンチで遺構（S K-123）を発見し、日本道路公団、鳥取県埋蔵文化財センターと協議してC区南側約1,000m<sup>2</sup>を拡張することとした。実際の調査は江府町佐川遺跡群の調査と併行した為、4・5・6月の3ヶ月は主に重機による表土除去と遺構検出に努め、佐川遺跡群の調査が一段落した6月24日より本格的な発掘調査にかかった。当初予想に比べて遺構分布の密度にはかなり疎密があったことと、小規模な土壤が大多数を占めたことにより、調査は順調に進み、10月3日に若干の補足作業を除き現地作業を終了した。調査の経過は調査日誌（抄）を参照されたい。9月26日にはラジコン飛行機による全体写真の撮影を行ない、9月28日は雨天にもかかわらず約50名の参加者を得て現地説明会を開催した。遺物の整理は現地調査と併行して鳥取県埋蔵文化財センターにおいて行ない、現地調査終了後、12月から埋蔵文化財センターにおいて報告書の作成を進めた。3月20日すべての整理作業を終了した。

〈調査日誌抄〉

4月8日	下山南通遺跡調査開始。試掘トレンチの清掃。	6月26日	休憩小屋建設。
4月10日	第8トレンチで縄文土器の出土を確認。	6月27日	C区SK-106遺構調査開始。10mグリットの設定。杭打ちを行なう。
4月11日	埋文センター・文化課・公団現地協議。	7月3日～	降雨による作業中止続く。
4月15日	重機を投入して表土除去開始。	7月15日	旧C区SK-09をローム特殊土壌と判断以後、多数検出。D区調査開始。
4月17日	A区第20トレンチより縄文早期末～前期の土器を検出する。	7月20日	鳥取大学赤木三郎教授による地学的現地指導。併せて溝口町長山遺跡見学。
4月20日	表土除去と平行して、遺構検出開始。	7月23日	溝口小学校見学。発掘体験学習。
4月22日	C区遺構検出開始。	7月27日	調査区全域の表土除去終了。
4月23日	B区遺構検出開始。B区第8～10トレンチ拡張部より弥生土器多量検出(土器窪)。	7月29日	調査の重点をB区南部遺構群に移す。土壌多数出土。
4月25日	A区本調査開始。遺物は全点ポイント取り上げ。	8月28日	A区調査終了。
5月17日	B区拡張トレンチにおける包含層の調査結果をもとに現地協議。	8月30日	B区調査後地形測量。
5月24日	C区において堅穴住居跡2基検出。	9月6日	C区に調査の重点を移す。
6月13日	B区において堅穴住居跡を検出。	9月26日	ラジコン機による全景写真撮影。
6月24日	佐川より中原、西原、浅川着任。	9月27日	D区の調査終了。
6月25日	埋文センターと遺物整理方法について協議。	9月28日	PM2:00より現地説明会。雨天強行。
		9月30日	B区調査終了。
		10月3日	C区調査終了。現地作業全て終了。

**調査の方法** 先述の如く鳥取県埋蔵文化財センターにより19本の試掘トレンチが入れられ、調査範囲が決定された。調査の方法としては、下山南通遺跡が新発見の遺跡でもあり、調査面積とのかかわりで、期間が限定されることから、表土除去に重機投入はやむをえない判断された。重機投入の場合どこまで掘り下げるかが問題となるが、先の試掘調査が気候条件等により土層断面の観察が十分ではなかったため、試掘トレンチの断面清掃を行なった。これによりI表土、II黒褐色土(クロボク)、III暗茶褐色土(中間層)、IV黄褐色土(地山)の基本層序を確認した。また、試掘トレンチが重機の使用により遺物の出土層位が不明なことと、清掃中にT-8トレンチ東壁III層から縄文土器が出土したことから、T-8、9、10間を拡張して掘り下げ、遺物の出土層位、散布の把握に努めた。結果、弥生時代遺物はII層中位で面的に散布しており、III層中と思われた縄文土器はIII層に掘り込まれた縄文時代土壌SK-60埋土中の遺物であることが判明した。したがって、III層以下は無遺物層であり、II層途中までが旧表土と考えられた。本来の遺構面はII層中に存在すると思われるが、平面的に遺構を確認するためにはII層を除去し、III層上面を確認面としなければならないことが再確認された。一部にはII層すべて重機で除去すべきだという意見もあったが、II層中に散布する遺物を考慮し、重機はII層中で止め、以下III層上面まで遺物を取り上げながら人力で除去した。これと併せて、縄文遺跡の存在が予測される下谷川に面したテラス(A区)にトレンチT-20を設定した。T-20において良好な縄文遺物包含層を確認したため、A区調査は遺物の全点Point取り上げを行ない、縄文時代生活空間の復原を試みた。A区を除く約15,400m<sup>2</sup>は調査区北寄りに流れる水路を境にして、南側は中央稜線より東をB区、西側をC区と呼び、水路より北側をD区として地区設定した。B～D区の本調査は磁北にあわせて南北にA～



插図1 下山南通跡調査前地形測量図

T、これに直交して-4～0～15の10m間隔のラインを引き、このラインに匯まれた10m方眼のグリッドを調査区全域に設定した。このグリッドの北西コーナーの杭名（例3-E杭）をグリッド名（3-Eグリッド）として測量の基準とした。遺構外の遺物はグリッド単位で一括し、散布が稠密な場合は1グリッドをさらに4分割して、取り上げを行なった。遺構の実測には簡易通り方を用い、平板測量を採用した。写真は35mm白黒、カラーリバーサルを撮影している。図面、写真等の記録は鳥取県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

註 ここにいう基本層序は調査開始段階で調査員が視覚的な分層を行なったもので、後日、鳥取大学赤木三郎教授の指導を得て地質的な層序を確定した。第2章第1節を参照されたい。（中原 齊）

### 第3節 調査の概要

下山南通遺跡の調査は、調査期間等の関係から調査対象約40,000m<sup>2</sup>のうち盛土工区を除外するなどして、調査範囲の縮小に努め、約16,000m<sup>2</sup>について発掘調査を実施した。C区南側において遺構を追跡し、約1,000m<sup>2</sup>の拡張を行なったが、B・C区とD区の境を流れる水路の両側約2mについて水路保護の為、調査を断念し、調査面積は当初計画とほぼ同じである。調査成果の概要は下記の如くである。

#### 〈A区〉

下谷川に面した、幅25m、奥行18mのテラスで、B区との段差5mを測る。試掘調査の段階で、このテラスに設定したT-20から縄文土器・石器の良好な包含層が確認できたため、重機を投入せず、手掘りで掘り下げを行った。遺構としては集石遺構1基とピット4基を検出したのみであるが、遺物は縄文土器・石器を多量に検出している。主体をなすのは早期末～前期初頭の縄文・条痕・沈線文系の土器群であり、他に早期の押型文・無文土器、後・晚期の無文土器が少量出土している。石器は、黒曜石・サヌカイト・チャート・鉄石英製石鏃等の剝片石器・磨石・敲石・石皿・石斧・石錐等の礫石器・石核石器を検出している。A区調査ではほぼ全ての遺物をポイント取り上げし、その分布をDOT-MAPによって観察することにより、当時の生活空間の復原を試みている。

#### 〈B・C・D区〉

調査の便宜上、A区を除く調査区全域にB～D区の3小区を設定したが、遺構の分布にはC区からB区の北西隅部をかすめてD区中央まで広がる遺構群と、B区南東側に分布する遺構群の2つが認められた。前者を「北部遺構群」後者を「南部遺構群」と呼称した。両者の間には、低い稜線と自然河川「旧河道」があり、約70mの距離を測ることができる。南部遺構群は堅穴住居6・掘立柱建物5・土壙85・集石1を検出しており、縄文土壙（早期末）1基を除けば弥生時代中期中葉の集落であった。北部遺構群では堅穴住居9・掘立柱建物9・土壙38を検出した。遺構群の北寄りには中期後葉の遺構が集中し、南寄りには後期後半の遺構の集中が見られた。弥生時代集落に伴う土器・石器は多量に出土しており、特に弥生中期中葉の土器は良好なセット関係を把握し得る資料が出土している。この2つの集落跡には有機的な関係が想定できると考えられる。この他にSI-10に重複したSB-07周辺ピットから鉄滓を検出しており、平安時代前期にこの地で鉄生産が行なわれていたことが確認できた。この後はB区南側で鉄岸、C区河川で近世陶磁器を発

見ており、江戸時代終り頃の一時期を除いて、人間が生活した痕跡はみとめられなかった。

#### 第4節 調査体制

調査は鳥取県教育委員会、鳥取県埋蔵文化財センターの指導のもと下記の体制で実施された。

○調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長 西尾 邑次

副 理 事 長 坂田 昭三

常務理事兼事務局長 平木 安市

財団法人鳥取県教育文化財団 埋蔵文化財センター

所 長 田淵 康允

次 長 田中幸治郎

庶務係長 竹内 茂

○調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団 西部埋蔵文化財調査事務所

所 長 永原 功

主任調査員 中原 齊 松本 琢己

調査員 太田 正康 浅川美佐子 西原 徳善

調査補助員 野崎 正美 左藤 博 西田 直史 長谷川薫代

事務担当係員 杉田千津子

○調査協力 溝口町教育委員会 上野、大平原、金屋谷、岩立地区

下記の方々に発掘調査作業員、整理作業員として協力していただいた。記して謝意を表したい。

発掘参加者（五十音順）

足立近子、飯塚富吉、井沢牧子、石本茂雄、井上みのり、入江和子、入江喜美枝、入江恵子、入江純正、入江正、入江智嘉子、入江典子、入江幹子、入江八世栄、入江教之、上田千恵子、内田千登世、遠藤和子、太田一子、大塚夏枝、岡野里子、岡本恵美子、岡本千鶴子、奥田浩志、影山君子、加美谷正毅、幸形勝男、幸形砂恵子、権代寿久、権代史枝、権代義孝、佐々木誠、下高瑞哉、下村君子、下村磨理枝、鈴木茂雄、砂口豊子、宅野正清、戸田鶴子、長井千登世、仲田茂、仲田茂子、西村和子、西村武夫、西村波子、野坂綾子、野坂貞子、野坂真、野坂正美、野坂好夫、畠繁秋、飛田初江、深田正子、深田百合子、福田崎枝、松原孝雄、松本光子、宗政久和子、村尾愛子、村尾千鶴子、村尾照子、村尾矩男、村尾瑞葉、村尾ヤスエ、村上美之、森下秀夫、森田幸子、森田しな子、森田美津枝、森田芳子、森本貞純、矢田貝真澄、山崎巧枝、山本邦丈、山本節、吉岡幹江、米山喜美栄、渡辺義行

整理参加者（五十音順）

神矢紀子、河上敦子、桑崎知早子、小林美奈、酒巻佐代子、笹尾千恵子、田中出夫、田中真由美、谷口恭子、福田和美、松岡朋子、山崎保子、山根八重美、山本久美恵

（中原 齊）

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

#### 鳥取県

**位置** 本州の西部、中国地方の北東に位置し、東は兵庫県、南は岡山県・広島県、西は島根県に接している。北方には日本海が広がり、南方には標高1,200mを越える山地が連なっている。県域では、東西126km、南北61.85km、総面積3,492.34km<sup>2</sup>で、日本全体の約1%を占める。また県土の約75%は林野である。気候は、比較的温暖で、年平均気温14.3~14.7°C（冬季：0.7~1.1°C、夏季：29.4~30.8°C）である。これは本県沖合を流れる対馬暖流によるところが大きい。また本県は震国でもあり、年間の降雪日数は人口39.1~42.8日、最大積雪深は80~129cmである。人口は、61万6,025人（男29万5,498人・女32万527人、昭和60年10月1日現在）で県庁は、鳥取市に所在する。

**地形** 山地が総面積の86.3%を占め、脊梁部に、県東部では、氷ノ山(1,510m)、三室山(1,358m)、那岐山(1,240m)、県中部では高鉢山(1,203m)、蒜山(1,200m)、県西部では毛無山(1,218m)、道後山(1,269m)などが高くそびえている。また、県西部には、東は倉吉市周辺、西は米子市付近、南は脊梁山地などに接し、北は日本海へ没する、広大な裾野を持つ大山（弥山：1,710.6m）が中国地方唯一の秀峰として、ひとときわ高くそびえている。晚秋初冠雪の頃（10月下旬）に、米子市、島根県松江市側から眺める大山の山容は、「伯耆富士」の名にふさわしい。志賀直哉「暗夜行路」、大町桂月「一蓑一笠」、島崎藤村「山陰土産」、など大山の登場する文学作品も數多くあり、なかでも浜虚子の「秋風の急に寒しや分の茶屋」が大山寺参道に句碑となって、また郷土の文学学者大江賢次の「望郷」の一節「おお大山！いや大山さん／おんみは私の親父／永遠に慈愛と威厳をもつ／母なるふるさとの父よ」は日野郡江府町大平原に文学碑となっている。平野は、県三大河川と呼ばれる

千代川（東部）、天神川（中部）、日野川（西部）、に沿って発達する。上～中流域には、小規模な谷底平野がみられ、下流域には三角州平野、砂丘（又は砂州）が



插図2 下山南通遺跡の位置

広がっている。東部では、鳥取平野一鳥取砂丘、中部では、倉吉・北条平野一長瀬・北条砂丘、西部では、米子平野一弓浜半島の砂州（又は砂丘）があり、これらの三角州平野は、東部では湖山池、中部では東郷池、西部では中海などの潟湖を有し、地盤は軟弱である。鳥取砂丘は、東西15km、南北幅最大2km余の規模を持つ。その起伏に富んだ地形や砂表面の風紋は、四季を通じて、あるいは1日のなかで様々な表情を見せ、これは、田賀久治写真集「砂丘の幻想」で紹介されている。郷土作品を含め、多くの文学作品に登場し、阪本四方太「夢の如し」、志賀直哉「暗夜行路」、「城の崎にて」、島崎藤村「山陰土産」、高浜虚子「砂丘秋晴」などがある。有島武郎は、「浜坂の迷き砂丘の中にしてさびしきわれを見出でけるかも」と詠み、砂丘に句碑が残っている。

**地質**  
本州地向斜～本州造山 県内最古の岩石は、三郡變成岩と呼ばれ、県東・西部の脊梁部に小規模に分布している。この岩石は、本州地向斜時代のうち、古生代石炭紀～二疊紀にかけて堆積した海成層を源岩とし、古生代二疊紀末～中生代二疊紀初めに变成作用を受けたもので、このことは、当時（約3.45～2億年前）本県は海域にあったことを示している。その後、古生代二疊紀末～中生代三疊紀前半に起きた地殻変動（本州造山）によって海域が縮少し、本県は陸地化していった。中生代ジュラ紀中頃以降、西南日本内帯において広島変動と呼ばれる大規模な火成活動が起こった。本県では、中生代白亜紀後期～新生代古第三紀初頭と古第三紀の2回の火成活動がみられる。この火成活動は火山岩類の噴出とそれに続く花崗岩類の貫入がセットになっている。火山岩類のうち流紋岩質の碎屑岩は溶結した構造を示すが多く、このことは火山活動が陸上で起こったことを示している。火山岩類のうち前者は中生代火山岩類と呼ばれ、主に県東・西部の脊梁部、東・中部の海岸部に分布する。後者は、主に中部脊梁部に分布する。花崗岩類のうち前者の代表的なものは、鳥取花崗岩と呼ばれるもので、分布は本県全域にわたり、その延長は県境を越えて東方及び西方へと続く底盤状岩体を構成する。後者の代表的なものは船山文象斑岩と呼ばれ、主に県東・西部の脊梁部、東部の海岸部に分布する。広島変動の時代が終わり、新第三紀初頭になると、地殻の陥没による堆積盆地の形成と、これに続く海底（または湖底）および陸上での火山活動で特徴づけられるグリーンタフ変動が始まった。本県は、山陰一北陸区と呼ばれる西南日本内帯を占める新第三紀の地質区に属し、東部では鳥取層群が発達した。また西端部では法勝寺火碎岩層（中新世中期）、西南端部では、多里層（中新世中期）がみられる。グリーンタフ変動期が終わると、島弧変動と呼ばれる時代に入り、火山活動と山地の上昇があり現在にいたる。中新世末～更新世前期にかけて、東部では、靈石山安山岩・錫葉山玄武岩、中部では、ウランを含む陸水成層と隕成火山岩類とからなる三朝層群、西部では、長砂流紋岩、無斑晶安山岩、鶴田玄武岩、霧山火山の活動などが見られる。

大山火山 更新世中期には、東部で扇ノ山火山の活動が始まり、これに遅れて西部で、大山火山の活動が始まった。大山火山は、更新世中期頃～更新世末にかけて活動した二重式火山で古期大山、新期大山となる。古期大山噴出物のうち最も広い面積を占めるのは

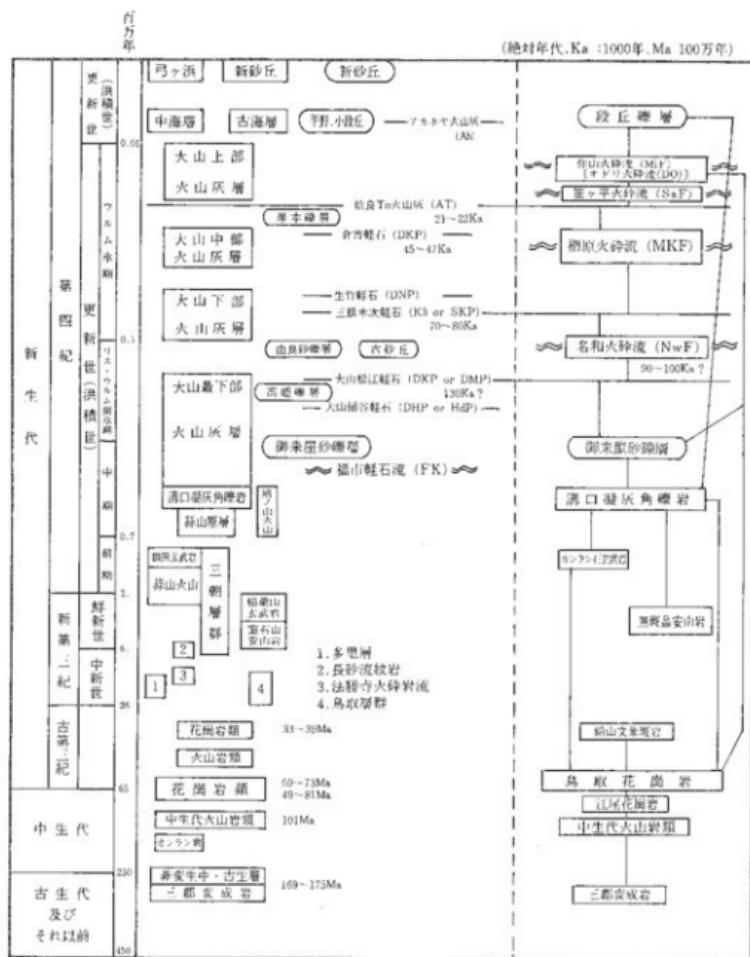


図3 鳥取県の地質層序

溝口凝灰角礫岩と呼ばれる火碎流(又は火山泥流)堆積物で、大山の周辺部とくに東側に広く分布し広大な裾野を形成する。また、船上山溶岩、甲ヶ山溶岩、矢ヶヶ山溶岩、吉原溶岩、城山溶岩などの厚い溶岩や、孝雲山、鎌坂山、飯戸山、豪円山などの側火山もこの時代のものである。新期大山噴出物は、古期大山の中央部で現在峻険な山肌を見せる弥山、三鈴峰、鳥ヶ山などの溶岩頂丘と、古期大山噴出物やこれ以前の岩石(基盤岩類)でできた山地の侵食谷を埋める、新期火碎流堆積物と、これらを覆う大山火山灰層で構成されている。また大山火山の休止期には、侵食、移動、堆積によ

って下流域に火山麓扇状地が形成された。その堆積物は、古いものより御来屋砂疊層、高姫疊層、由良砂疊層、岸本疊層と呼ばれすべて段丘化しており、大山火山灰層が被覆している。また、大山火山灰層中には大山起源の軽石層、<sup>215</sup> 外來の軽石層・火山灰層<sup>216</sup> 砂丘<sup>217</sup> が挟在しており、鍾層として第四紀層の研究に活用されている。海岸部には砂丘が発達し、<sup>218</sup> 大山中～上部火山灰層を挟んで古砂丘と新砂丘に分けられている。完新世、繩文海進最盛期（約6,000年前）に県東、中部では古砂丘背後は、入海的環境（潟地）にあったが、その後の海退に伴って河川による土砂の堆積が行なわれ、現在の軟弱な地盤（古海層）からなる三角州平野が形成され、古砂丘の上位に新砂丘が発達し現在に至る。西部では若干様相が異なるが、ほぼ同様の形成をたどり、中海層が堆積し現在に至る。また、新砂丘には、クロスナと呼ばれる砂丘の安定期を示す腐植土層が介在しており、繩文時代～中世末に至る遺物、遺跡が包含されている。

### 溝口町

**位置** 烏取県、4市6郡のうち、県西部日野郡の北部に位置し、東は西伯郡大山町、日野郡江府町、西は西伯郡会見町、同郡西伯町、南は日野郡日野町、北は西伯郡岸本町に接する。中央部を流れる日野川に沿って交通が発達しており、国道181号線、国鉄伯備線が通り溝口には伯耆溝口駅がある。総面積100.06km<sup>2</sup>、人口約6,000人の町で、総面積の51.44%を山林と原野が占め、耕作地（水田・畑）は11.27%を占めるに過ぎない。

**地形** 中央部を北北西に日野川が流れ、大江川、白水川、野上川などがこれに注ぐ。日野川、野上川流域には沖積層からなる谷底平野が発達し、溝口・莊付近では小規模な河岸段丘がみられる。大部分は高地（海拔200～800m位）で占められ、日野川を挟んで北東側は、大山火山の新期火碎流堆積物からなる高原（桟木高原・福永高原など）が広がり、大山火山の溝口凝灰角礫岩からなる丘陵などが小規模に見られる。南西側は日野川右岸域（鬼住山など）から南方向へと、主に白堀期後期～古第三紀の花崗岩類からなる小～中起伏山地がそびえ、北端に更新世前期に噴出した玄武岩類からなる台

#### 用語解説

**沖積平野** 現成の日野川流域、または日野川水系流域に沿って発達する谷底平野と扇状地（小規模に段丘化しているものも含む）。主に水田として利用されている。

**屢 雜** 新期大山噴出物の溶岩円頂丘の裾部に円錐状に発達する堆積物。

**低位段丘** 沖積平野との比高差が10～20mの平坦地、主に水田として利用されているが、溝口町溝口付近の段丘面は畑地として利用されていることが多い。大山上部火山灰を被覆していないため形成時期は完新世以降であろう。

**高位段丘** 沖積平野面との比高差が40m上の平坦地。溝口町溝口、同町莊付近に小規模に見られ、主に水田として利用されている。大山上部火山灰を被覆している可能性があるが確認していない。

**高 原** 新期大山噴出物の火碎流堆積物で構成された、海拔200～900mと大山に向かって高度を増す、表面起伏の小さい緩傾斜地（3°～6°）。後述の丘陵・台地・山地が開析されてできた谷部を埋めるように発達する。海拔200～500m位までは、水田として利用されることが多いが、大半は原野か植林（または雑木林）地である。岸本町岸本東方に発達する岸本疊層からなる段丘化した扇状地堆積物もこれに含めた。

**丘 陵** 古期大山噴出物の溝口凝灰角礫岩（火碎流または火山泥流堆積物）で構成された、海拔100～1,000mと大山に向かって高度を増す。高原よりはやや開析の進んだ緩傾斜地（3°～4°）。後述の台地・山地にせき止められる様な分布を示す。畑地、植林地として利用されているが大半は雑木林である。岸本町岸本西方に発達する、御来屋砂疊層からなる段丘化した扇状地堆積物もこれに含めた。

アーチーク・リバーフロントの開拓地図。谷川東方、大内、越後山、三鈴山、高塚山、越敷山、水無原、樹木原、金屋谷、大江川、大内、高塚山、三鈴峰、岸本町、別所町、溝口町、日野町、金花町、栗津町、西野町、高塚山、越敷山など。

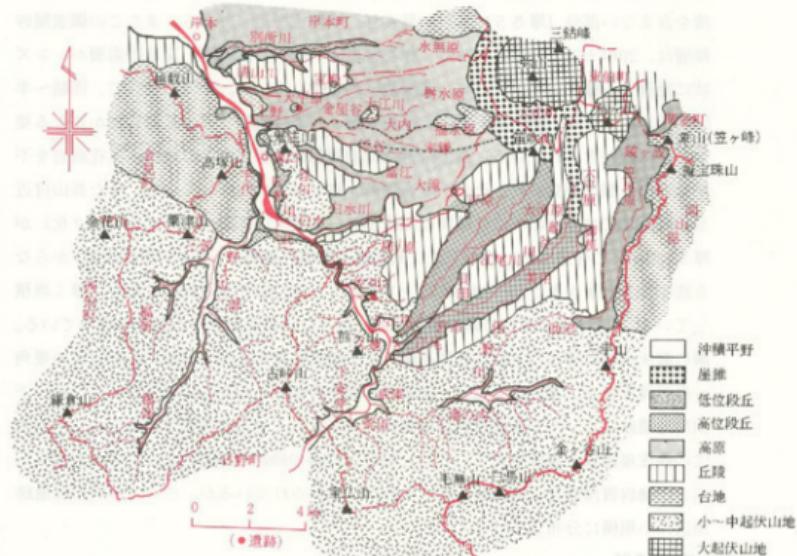


図4 遺跡周辺の地形面分布図

地（高塚山・越敷山など）がみられる。また、三郡變成岩が谷川東方及び大内の谷に沿って小規模に分布している。

**台地** 鶴田玄武岩と呼ばれるカンラン石玄武岩溶岩で構成された、頂上に海拔200m以上の平畠地をもつ、沖積平野面と急崖をなす卓状の高地。主に畑地、果樹園として利用されていることが多い。溝口町宇代西方、会見町鶴田付近では、この玄武岩が下位の花崗岩類を不整合に覆い、上位に溝口凝灰角礫岩が不整合になり、その上位に、大山最下部火山灰層（風化してけばけばしい赤色を呈する）、大山松江輝石層（DKP or DMP）が被覆する様子が観察できる。カンラン石玄武岩が分布する岸本町上細見、溝口町大平原東方、同町金屋谷南方、及び普通輝石・カンラン石玄武岩が分布する溝口町宝殿付近もこれに含めた。また無斑晶安山岩が分布する溝口町大内東方、岸本町水無原北方及び薄山火山群（象山、擬宝珠山など）もこれに含めた。

**小～中起** 三郡變成岩と、白亜紀後期～古第三紀の火成岩類（火山岩類と花崗岩類）で構成された、海拔200～1,200mのやや急峻な地形を呈する山地。主に植林地として利用されているが、大半は雜木林である。三郡變成岩は、溝口町内にも小規模に分布するが（谷川東方・大内付近）、その大部分は、江府町武庫一池の内を結ぶ断層線より南側に分布する。火山岩類はこの断層線に沿って分布し、北方の江府町江尾付近まで広がる花崗岩類は、溝口町溝口一江府町江尾一同町助沢を結ぶラインより南側に、主に、鳥取花崗岩、船山文象斑岩などが分布し、溝口一江尾ラインの北側（日野川右岸域）には、主に江尾花崗岩が分布する。たら製鉄遺跡は、この花崗岩の分布する地域に集中している。

**大起伏山地** 新期大山噴出物の滑落円頂丘で構成された、海拔1,200m以上の急峻な地形を呈する山地。弥山、三鈴峰、鳥ヶ山があり、崩壊が激しいため、土地利用は見られない。

**周辺の地質** 弥山火碎流堆積物は、大平原付近で新鮮な部分が見られ、青灰色を呈する。ここでは上位に向かって風化が進み、赤色化、粘土化がみられる。粘土化した部分の上位80cm土は黒ボク化している。上野付近では、御来屋砂疊層を不整合に覆う同堆積物の岩塊を含まない部分（厚さ5m土）が見られ、淡桃色を呈している。またこの御来屋砂疊層は、20m以上層厚を持ち、疊を含まない層や、疊岩層、又は砂岩層がレンズ状に発達する様子などが見られ、成層構造が発達している。全体に灰色で、固結～半固結である。また、無斑晶安山岩、花崗岩類、三都変成岩などの基盤岩類からなる亜角～亜円疊が含まれている。長山付近登山橋東部の露頭で本火碎流が江尾花崗岩を不整合に覆う様子が見られ、その不整合面は、右上がりに傾斜している。また長山付近登山橋西部では表土の下位に硬質の黒灰色ローム質火山砂層（上位はクロボク化）が厚さ140cm土で発達する。その下位に未固結の黄褐色疊層（一部中～粗粒砂層）からなる底段丘疊層が厚さ20～80cm土以上で発達し、高位段丘疊の裾部に向かい厚く堆積している。また本層は下位の溝口凝灰角疊岩層及び江尾花崗岩を不整合に覆っている。溝口凝灰角疊岩層は、下位の江尾花崗岩を不整合に覆う。20～40cmの花崗岩質の亜角～亜円疊を含み、基地は半固結～固結の赤褐色中粒砂からなり、粘土化している。下山南通遺跡では、やや新鮮な鉄滓が表探されており、また小規模ではあるが、平安時代の鉄生産遺構も確認されている。一般に、材料の砂鉄の源岩として、安山岩質火山岩、花崗岩質深成岩、紫蘇輝石斑レイ岩などが知られているが、これらの岩石は遺跡周辺に小規模に分布している。

### 下山南通遺跡

**位置** 鳥取県日野郡溝口町上野字モノ原ニ、<sup>標高名</sup>大平ル原、同町金屋谷字下山南通一に所在する。溝口の北方約2km、大平原部落東方に位置し、新期大山山裾より西方へ広がる、弥山火碎流堆積物（津久井、1984）（荒川（1984）はオドリ火碎流堆積物とした）で構成される高原上に立地する。西部を日野川が流れ、北部の清山川、南部の大江川によって開析されている。本遺跡の総面積は約16,000m<sup>2</sup>（うちA区は約600m<sup>2</sup>を占める）である。

**地形** 下山南通遺跡の大部分（縄文時代後期・晩期、弥生時代中～後期）は、海拔216～230mで、南西下がりの緩傾斜地上（2°～4°）に立地し、下山南通遺跡A区（縄文時代早期・前期・後期・晩期）は、南端を流れる小河川に向かって舌状に伸びる海拔約214mの平坦地上に立地する。以下前者を本遺跡、後者をA区、两者を下山南通遺跡と記述する。遺構検出後（調査終了後）の等高線図（付図1）をみると、下山南通遺跡には北東～南西方面に伸びる数本の谷部および尾根部からなる微地形が認められる。本遺跡の遺構は、中央の尾根部と小河川（破線部分）を挟んで北西部と南東部の2地域に分布しており、前者は谷部に、後者は尾根部にそれぞれ北東～南西方向に伸びる分布域を示し、微地形に支配されている。A区の遺構もこれとほぼ同様である。また、A区南端の小河川と接する部分が急崖、又はこれを覆う二次堆積のクロボクからなる斜面をなすことから、それ以後この河川による削剥を受けたと考えられ、遺構が現在より広範囲に

分布していた可能性がある。また本遺跡内で確認した、小河川〔弥山火碎流（地山）を削り込んで南西流するもの〕のうち、中央部の河川はその堆積物中にこれより南東側に広がる遺構群と同時期の遺物（弥生時代中期）のみを包含し、表土（又は風成のクロボク）に覆われているため、遺構群と同時期に存在していた可能性が考えられる。北西部の河川はその堆積物中に、弥生時代中期～近世に至る遺物を包含し、かつ周辺に分布する遺構（土壤・掘立柱建物跡など）を壊していることから、新しい河川（近世以降）と判断した。また現在では、これを切って、貯水池用の水路が作られており、本遺跡の北部を流れている。遺跡より西方を臨むと、眼前に大山がせまる。四季折々とまた日刻刻と移り変わるこの雄大な姿は、遺跡発掘中、我々に深い感動を与え続けた。

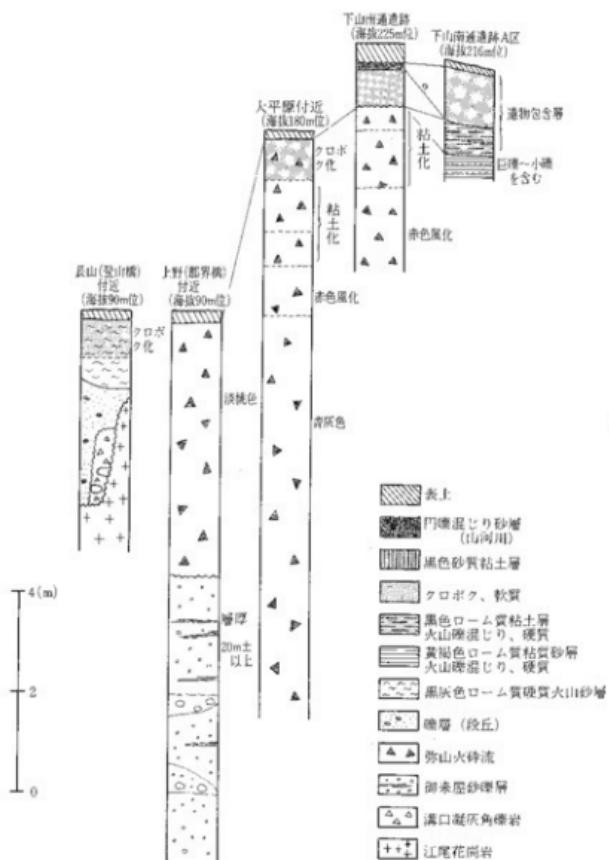


図5 下山南通遺跡セクション柱状図

生まれる喜びと死んでいく悲しみ、生死をかけた争いと収穫を分かち合う心。はるかなるその昔、繩文人・弥生の人たちは、何を想い、何を考えて、日々を過ごしていたのだろうか。

**地質** 下山南通遺跡の柱状図は、本遺跡の東壁中央部、下山南通遺跡A区の柱状図は、A区の東壁中央部の土層を表わしたものである。本遺跡では表土下に小河川による砂の薄層（厚さ5cm土）が発達し、その直下にこの小河川の影響による

と考えられる黒色粘質砂層（下位のクロボクの砂質部分、厚さ10cm土）がみられる。この下位にはクロボクが厚さ70cm土で発達し、遺物包含層となっている。遺物には縄文時代早期末～前期（本遺跡南端、A区近く、SK-60）、後期～晩期（本遺跡北部中央付近）の土器が若干含まれている他は、弥生時代中期～後期の遺物が圧倒的に多く含まれている。また遺物は地表面下20cm土の付近に平面的分布を示すことが多く、生活面であった可能性が考えられる。また本遺跡では、その後の小河川などによる遺物包含層の削剥が考えられ、その堆積物は、A区の表土下に厚さ100cm土のクロボク層（二次堆積）として発達する。クロボク層下には黒雲母・紫蘇輝石・角閃石デイサイト質の岩塊と同質の基地からなる固結～半固結の弥山火碎流堆積物が320cm土以上で発達する。その上位2層は粘土化し（上部はクロボク化して暗茶褐色を、下部は黄褐色を呈する）、その下位は赤色を呈する。また地表面には、径2～3mを越える巨礫が尾根部に多数みられ火碎流堆積物の特徴を示す。A区では、表土下に厚さ100cm土のクロボク層（二次堆積）がみられる。これは、本遺跡から流入したものであり、縄文～弥生時代までの遺物が、不規則（渾然と）に包含されている。軟質で、砂質っぽく乾くとしまりがない層である。この下位の黒色ローム質粘土層（火山礫を多量に含む、硬質）が厚さ55cm土で発達し、これが縄文時代早期・前期・中期の遺物包含層となっている。遺構は下位の黄褐色ローム質砂質粘土層（厚さ40cm土以上、火山礫を多量に含む、硬質）を検出面として確認した。この層は、径2～3mを超える亞円礫と、径10～20cmの亜円～円礫を多く含んでおり、特に尾根部に密集している。この下位には弥山火碎流堆積物が堆積していると予想される。

（松本琢己）

註1 三 郡 变 成 岩 中国地方東部から、九州北部にかけて各地に分布する低変成度の広域後成岩。県内では、泥質の堆積岩を源岩とする黒色片岩、石英長石質の岩石を源岩とする珪岩、塙基性火山岩を源岩とする緑色片岩が卓越し、石灰質の堆積岩起源のものは極めて少ない。最近、八頭郡船岡町大江川の河原で、初めて本岩中より中生代三疊紀（約2億年前）の化石が地元の小学生によって発見されたのは記憶に新しい。

註2 西 南 日 本 内 帯 日本列島の本州区のうち、糸魚川一静岡線（フォッサ・マグナ）より西方を西南日本といい、さらに中央構造線より大陸側を内帯、南側を外帯といいう。

註3 溶 結 し た 構 造 色、組成または組織を異にする部分（蛭石や火山ガラス等）がしま状またはレンズ状に重なり合う構造で、これは火碎岩、凝灰岩などが堆積時に高温を保っていたことを示す。

註4 鳥 取 花 岩 岩 土に粗粒黒雲母花崗岩と僅かに角閃石を含む中粒黒雲母花崗岩の2相からなり、細粒相、アブライト相、ベグマタイト相を伴う。カリ長石が淡紅色を呈し、黒雲母は六角板状、石英は球形に近いのが特徴。

註5 底 盤 土 として造山帶に分布する花崗岩質の大規模深成岩体で、算出面積が100km<sup>2</sup>以上にわたるもの。パソリス。

註6 鉛 山 文 象 斑 岩 三朝町鉛山地区を模式地とし、岩相は、文象斑岩、微文象花崗岩、花崗斑岩、石英閃綠岩などがある。石英と長石（ふつうカリ長石）が楕円形文字状に組み合った文象組織（顕微鏡的大さきのものは微文象組織という）が顕著に見られる。

註7 グ リ ー ン タ フ グリーンタフ変動によって堆積した、溶岩、火碎流堆積物、火山灰等の

火山岩のうち、中新世中期以前のものをさす。一般に緑色を帯びているためグリーンタフ（緑色凝灰岩）と呼ばれる。

註8山陰一北陸区 大規模な堆積盆地が形成された北陸地方の北陸層群、近畿北部の北但一照木層群、島根県地域の石見一出雲層群が代表的である。鳥取層群は、北但一照木層群のうち北但層群に含められている。

註9法勝寺火碎岩層 米子市の南から西伯郡西伯町法勝寺にかけて小範囲に分布する、石見一出雲層群の緑色凝灰岩。玄武岩～安山岩とその碎屑岩を主とする下部層、石英安山岩とその碎屑岩を主とする中部層、流紋岩とその碎屑岩を主とする上部層からなる。

註10多 里 層 日野郡日南町多里の南方に分布する。中国脊梁山地の南麓に点在する備北層群の一部である。礁岩、砂岩、泥岩の互層からなる。

註11満口凝灰角礫岩 古期大山及びそれ以前の噴出物が、火山泥流として2次的に堆積したもの。東麓における典型的な岩相は、淘汰の悪い、最大径50cm以上の岩塊を含む凝灰角礫岩で、厚さ数cm～約20mの多くのフロースニットからなる。

註12滑 岩 円 頂 丘 粘性の大きな滑岩からなる急傾斜の側面をもつ丘状の火山。鐘状火山、塊状火山ともいう。

註13侵 食 谷 河川の流水や氷河などの侵食作用によって生じた谷。

註14新期火碎流堆積物 活動の時期によって古いものから順に、名和火碎流堆積物(津久井、1984)〔太田1962a、bの名和鉢石層にはほぼ相当し、北陸香取から北西へ名和付近を経て日本海へ達するもの、甲川に沿って北へ分布するものの2流からなる〕、樺原火碎流堆積物(津久井、1984)〔太田、1962a、b、cの弥山熱霊のうち、草谷原、樺原から赤松にかけて、末兼から添谷にかけて、吉原から江尾にかけて分布する4つの分流からなる〕、笹ヶ平火碎流堆積物(津久井、1984)〔太田、1962a、b、cの弥山熱霊のうち、鏡ヶ成から笹ヶ平を経て関金付近に達するもの、鏡ヶ成から南へ分布し、下牧原へ至るもの、美用から江尾に至るもの、弥山南方から西南西へ富江、白水へ至るものの4流からなる〕、弥山火碎流堆積物(津久井、1984)〔太田、1962a、b、cの弥山熱霊のうち、弥山北方清水原から大曾付近まで阿弥陀川に沿って分布するもの、西麓樹木原から西へ向かって分布するものからなる〕に区分されている。

註14火碎流堆積物 火山灰や軽石などが火口から空中高く吹き出ないで、地表をはう乱流となってある方向、または四周へ流れ下ったもの。地形の凹部を埋めて流下する場合が多く、また一般に分級が悪く（碎屑物あるいは碎屑性堆積岩を構成する粒子の粒径の分布のひろがりが広いこと）、類質や異質（同じ火山体の岩石を類質、その火山体と関係のない岩石を異質と呼ぶ）の岩片を含むことが多い。

註15大山火山灰層 活動の時期によって、大山最下部火山灰層（御来屋砂礫層を被覆する）、大山下部火山灰層（山良砂礫層を被覆する）、大山中部火山灰層、大山上部火山灰層（岸本礫層を被覆する）に区分されている。

註16大山起源の蛭石層 大山最下部火成灰層中では、大山鰐谷蛭石層（DHP or HDP）、大山松江蛭石層（DKP or DMP）が、大山下部火山灰層中では、生竹蛭石層（DNP）が、大山中部火山灰層中では、倉吉蛭石層（DKP）が、それぞれ知られている。

註17外来の蛭石層、火山灰層 大山下部火山灰層中の、牛竹蛭石層より下位に、三瓶木次蛭石（K3 or SKP）層〔島根県の三瓶火山起源。大山西麓で厚さ40～45cm、東麓で厚さ20cm程度〕が、大山上部火山灰層中の最下部に発達する始良Tn火山灰（AT）層〔南九州姶良カルデラ起源。大山一帯に分布があり厚さ約20cm程度〕が、それぞれ知られている。また、約5,000年前に噴出した、南方の火山島起源と考えられているアカホヤ火山灰（Ah）層〔黄褐色、おがくず状、種しうで可塑性のないガラス質火山灰、黒ボク土層中に火山ガラスの密集帶として介在する〕が知られている。

註18層 層 (Key bed) 任意の地域内で、比較的短期間に堆積し、相対的に大きな広がりをもち、かつ、他の層とくらべて特徴のある岩相を示す地層。それを手がかりとすることによって、その地域の層序、構造の解明を容易にし、また、地層の区分、対比の一つの基準となりうるもの。鍵層が、鍵單層（一枚の単層）または火碎質鍵（単）層（凝灰岩などの火碎質岩からなるもの）の場合には、厳密に同時面をしめす。

註19砂 口 ス ナ 砂丘を構成している砂層中に介在する厚さ20~50cmの黒色を呈する砂。過去の砂表面が、植物遺体の腐食によって黒色に土壤化したもので、砂丘の安定期（飛砂などによる砂の供給の休止期）をしめす。日本海沿岸の砂丘では普遍的に見られ、かつその形成期が同時期であることなどから、鍵層として、砂丘発達史の解明に役立っている。

註20江 尾 花 岩 岩 日野郡江府町江尾から同郡溝口町長山にかけて、おもに日野川右岸に分布し、ほぼ北西~南東方向の分佈傾向をもつ。主に角閃石黒雲母花崗閃綠岩~石英閃綠岩からなり、しばしば、有色鉱物が一定方向に配列して、片麻状構造を示す。鳥取花崗岩によって各地で貢献されている。

#### 参考文献

- 赤木三郎 「大山火山の地質」『大山隱岐国立公園、大山地区学術調査報告』(財)日本自然保護協会調査報告第45号、P 9~32、1973  
赤木三郎 「上福万遺跡の自然環境」『上福万遺跡、日下遺跡、石州府第1遺跡、石州府古墳群』、鳥取県教育文化財団調査報告書17、P 9~15、1985  
津久井雅志 「大山火山の地質」『地質学雑誌』90 (9)、P 643~658、1984  
豊島吉則 「大山の地形」「大山隱岐国立公園、大山地区学術調査報告」(財)日本自然保護協会調査報告第45号、P 43~54、1973  
鳥取県 「10万分の1鳥取県地質図および同説明書」鳥取県、1966  
地学団体研究会山陰支部 「続山陰地学ハイキング」、1983  
溝口町誌編さん委員会 「溝口町誌」、溝口町、1973  
江府町史編さん委員会 「江府町史」、江府町、1975  
角川日本地名大辞典編纂委員会 「鳥取県地名大辞典」角川書店、1982  
新日本海新聞社鳥取県大百科事典編纂委員会 「鳥取県大百科事典」新日本海新聞社、1984

#### 第2節 歴史的環境

旧石器時代 鳥取県内では現在のところ旧石器時代の遺跡は確認されていない。しかしながら、旧石器時代人の落とし物と考えられる遺物がないわけではない。大山山麓一帯で発見された柳葉状尖頭器、舟底形石核（黒曜石製）、ナイフ形石器（淀江町小波出土）、撫袖等がそれである。またそれらに若干後出するとみられる有舌尖頭器が、岸本町貝田原、会見町諸木、米子市奈良良遺跡等で表採され、大山町坊領莊田遺跡でも出土している。現在に生きる我々にとって、その間に止まり易い土器を所有しない旧石器時代遺跡の発見は非常に難しいことではあるが、この時代の文化充実には、それを持つしか方法がない。

縄文時代 彼の土地に住み着いた人々と同様、此の地の人間も土器作りを実現させる。縄文時代及びその前段階の文化的内容はほとんど解明されていないが、文化的変化の必要に迫られ、その後現在迄脈々と受け継がれる土器生産が開始されたのは具体的な事実である。現在のところ県内最古段階とされている土器は、縄文時代早期のものと思われる押型文土器であるが、溝口町長山第1⑥、米子市上福万⑦、岸本町林ヶ原⑧、北田山遺跡⑨等で出土している。大山西麓に存在する早期の遺跡としては、溝口町長山第1・

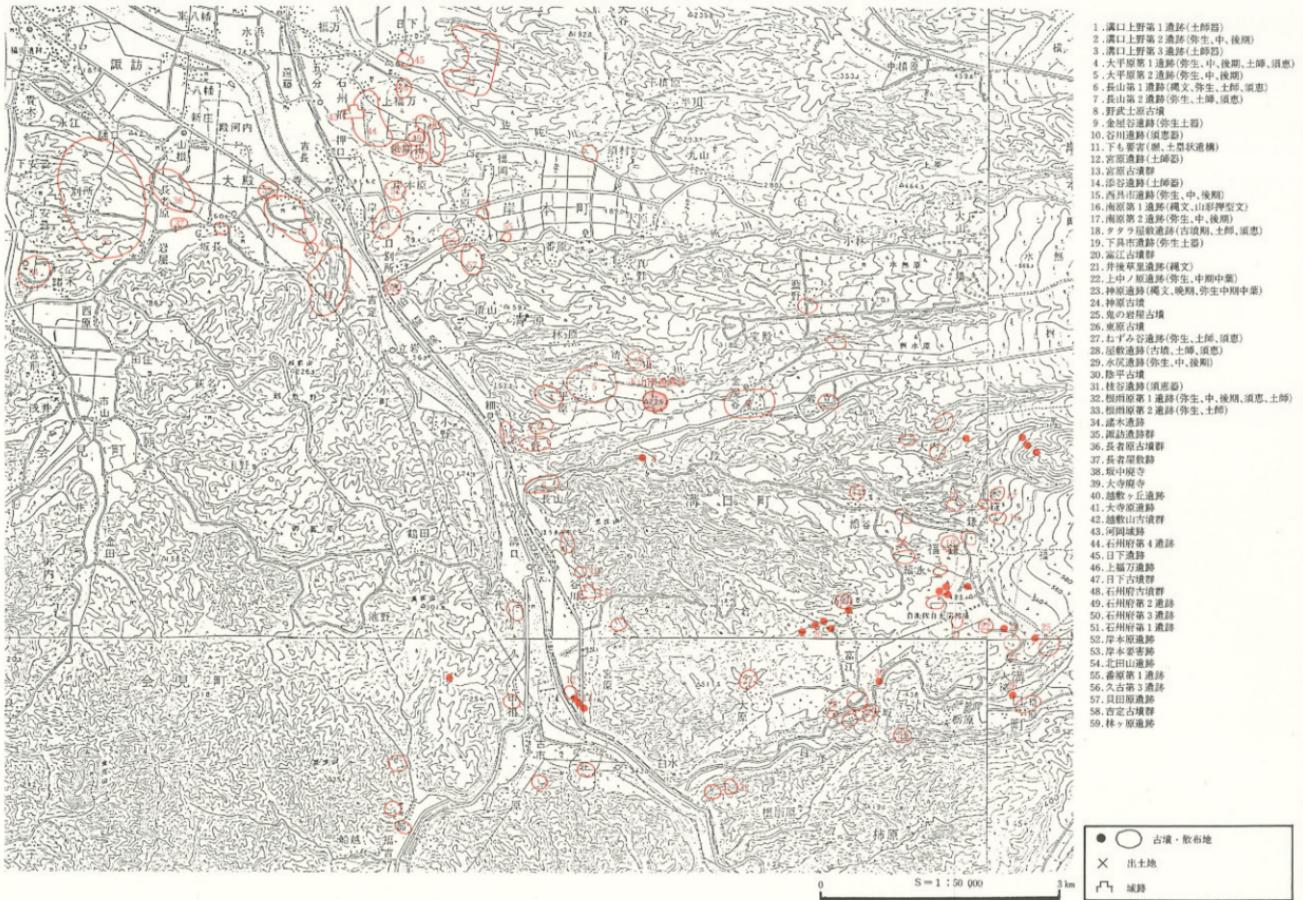


插图6 周边遺跡分布図

井後草里⑩・下山南通・南原第1⑪・江府町佐川第1・岩屋ヶ成・日南町折渡・岸本町林ヶ原・北田山・米子市上福万遺跡が主なものとしてあげられる。特に上福万遺跡では莫大な量の遺物と共に明確な遺構を数多く検出しており、今後当地における縄文時代を考える際に重要な遺跡となるであろう。前期の遺跡としては溝口町下山南通・江府町佐川第1・助沢竜王・江尾宿、米子市上福万・日久美・陰田遺跡等が知られる。中期の遺跡は江府町竜王・岸本町林ヶ原、米子市日久美・陰田遺跡等があるが確認されている遺跡数は他の時期に比べるとまだ少ない。後~晩期になると溝口町下山南通・長山第1・井後草里・神原⑫・江府町佐川第1・岩屋ヶ成・竜王・美用第1・美用第2遺跡等周辺地域だけ見てもわかるように遺跡数が増加する。そして大山西麓に生活した縄文人は山陰の厳しい自然環境に耐えながらも農耕文化の到来を迎えていくのである。

**弥生時代** まず縄文時代後期~弥生時代前期の海退によって形成された低湿地で水稻耕作が開始され、平野をかかえる丘陵地にも前期の遺跡が存在する。水稻耕作の山間部への波及は、その自然的条件によりかなり遅れるが、中期中葉になると溝口町下山南通・神原・上中ノ原⑬・日野町岩田遺跡等で集落が営まれる。後期に入ると灌漑技術・農工具の発達やそれによる人口増加がさらに進み、米子市青木・福市遺跡のような大集落も形成される。溝口町でも下山南通・大平原第1⑭・大平原第2⑮・溝口上野第2⑯・長山第1・水尻⑰・根雨原第1遺跡⑱等その数は明らかに増加する。ねずみ谷遺跡⑲から石庖丁、磨製石斧が出土しているが時期は不明である。

**古墳時代** 溝口町域には鬼の岩屋古墳⑲・上双子古墳・闇地古墳・宮原古墳⑳等の後期古墳が存在する。いずれも主体部は横穴式石室であり、2~3基まとめて分布するもの、散在するものがある。今回調査した下山南通遺跡の対岸に存在したとされる野武士原古墳㉑については詳細不明である。周辺地域では穹窿天井をもつ貝田1号墳を含む貝田古墳群・佐川古墳群・美用古墳群・また杉谷横穴墓群・内ノ倉山横穴墓群等が知られている。その他の遺跡としては、溝口上野第1①・溝口上野第3③・大平原第1④・谷川㉒・添谷㉓遺跡等が存在する。

**歴史時代** 溝口町域は、律令制下では伯耆国日野郡野上郷（和名抄）に属していた。条里制の施行は不明瞭で、溝口に「中坪上」「中坪下」等の坪付地名があるが、明確な地割遺構は発見されていない。中世の当町域は久古牧・新印郷・三部荘から成る。久古牧は大山寺西明院領莊園、新印郷は国衙領で、日野郷に本拠をもつ日野氏の所領だったと推定されるが三部荘を史料上に見出だすことができない。今日の町名「溝口」の名称は戦国期に入ると見出される（年未詳 7月24日毛利元就他二名連署状）。近世の当町域は溝口荘・三部郷・佐川郷・久古荘・大山寺領からなり、それらは池田鳥取藩主の大名領地、角盤山大山寺の寺領、鳥取藩家老福田氏の知行所に分けられる。（太田正康）

参考文献『島根県地名大辞典』角川書店 1982  
『溝口町誌』溝口町誌編さん委員会 1973  
『荒田景仙』上中ノ原・井後草里遺跡系縄向相内畠、溝口町教育委員会 1983  
『大山西麓埋蔵文化財分布調査報告書』鳥取県教育委員会 1977  
『大山西麓遺跡群調査報告書(2)』鳥取県教育委員会 1977

## 第3章 縄文時代の遺構と遺物

### 第1節 遺構

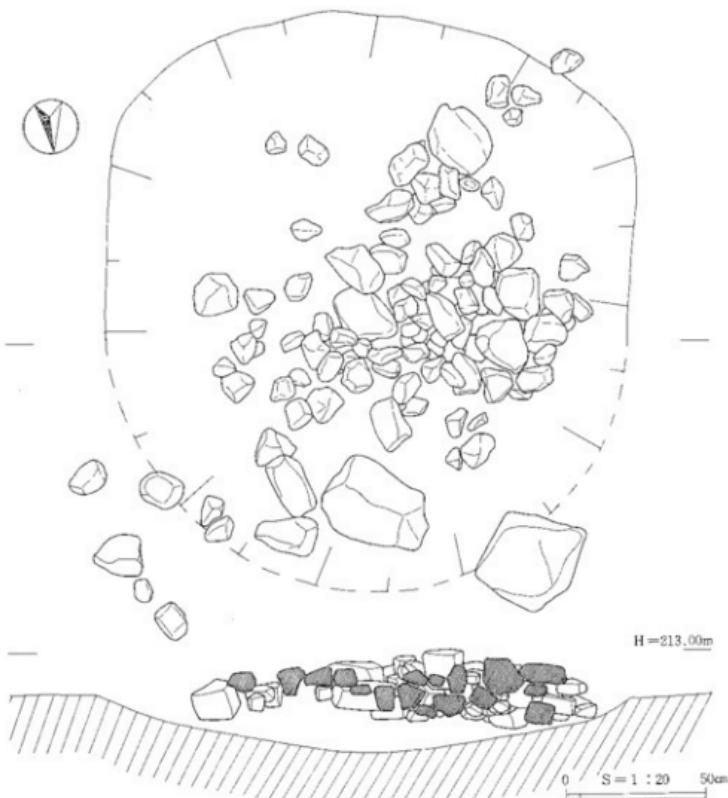
下山南通遺跡では縄文時代遺構として、集石遺構（A区）・土壙（B区）・ピット（A区）を検出した。いずれも当遺跡南隅に存在する。

#### 1. 集石遺構

##### 集石-01

位 置 13Nグリッド南隅に位置し、本遺跡南端の一段低いテラス上に立地する。

形 態 橢円形の掘り方 [ $1.86 \times (2.04 - 0.20)m$ ] の中央部に5~25cmの隙を配す。隙の重なりは中央部に近いほど厚みを増しほば20cm程度である。南側で若干破壊を受け配石が乱れている。また焼石は認められなかった。



挿図7 A区集石01遺構図

遺物 Po5 を含め押型文土器 4 片、無文土器 3 片を検出した。  
 時期 出土遺物より縄文時代早期後半と考える。  
 特筆事項 挖り方底面に接する疊がほとんどみられないこと、下位に配された疊のレベルがほぼ横一線であることから推察すると、掘り方を穿ち土入れを行ない、その後疊を配したと考える。

## 2. 土壌

SK-60

位置 10N グリッド北西隅に位置し、縄文時代遺跡が確認できた A 区より 1 段高い緩斜面上に立地する。SK-58・59 に切られる。

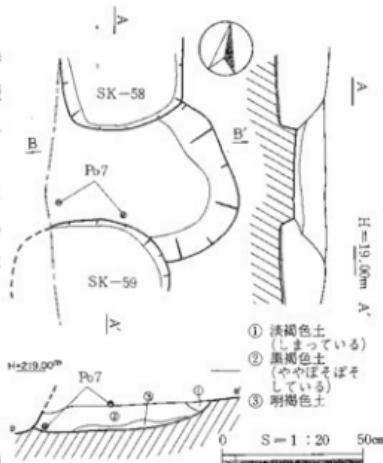
形態 試掘トレンチ T-8 及び SK-58・59 に壊される為、平面形及び規模は不明であるが、その深さは 18cm を測る。断面形は壁の立ち上がりが不明瞭である。

土層 挖り込みは黄褐色粘土に迄達しない。  
 埋土は①～③層である。

遺物 縄文 R 施文の土器 4 片 (Po7 (1 個体)) を検出した。

時期 出土遺物より縄文時代早期末～前期初頭と考える。

(太田正康)



挿図 8 S 挿図 8 SK-60 遺構図

## 第 2 節 遺物

下山南通遺跡の調査により縄文土器（早・前・後～晩期）及びそれに伴なう石器（石錐・磨石・敲石等）が出土した。それらの遺物は特に遺跡南端（A 区）に集中している。以下 A 区出土の遺物を中心に報告する。

### a 土器

本遺跡出土の縄文土器をその文様形態により I ～ VI 類に分類した。また、各遺物の詳細は挿表 4 ～ 6 に、出土位置は付図 2 (下山南通遺跡 A 区出土遺物 DOT-MAP) に示している。

#### I 類 押型文土器 (挿図 9 Po1～5 図版 4)

Po1 は縦位に横円文を施す。口縁端部内面に不明瞭ながら平坦面をもつ。Po2 は外間に横位の横円文を施すが、内面の施文は若干斜位である。Po4・5 は特殊菱形 (変形山形) 文を外間に施し、他の押型文土器に比べ胎土は緻密である。

#### II 類 縄文土器 (挿図 9・10 Po6～25 図版 4)

##### ① R の縄文を施すもの (Po6・7)

Po6 の施文は羽状を呈する。Po7 は B 区 SK-60 出土の遺物である。いずれも胎土中に纖維を含まない。

### ②R Lの縄文を施すもの (Po8~12)

Po8・9は口縁下に押し引き沈線、Po10は貼付け突帯上に刻みを施す。Po11・12は薄手で口縁端部は外に張り出す形態である。Po8~10は胎土中に纖維を含むがPo11・12は含まない。

### ③LRの縄文を施すもの (Po13~25)

Po13は全体の器形がほぼ把握できる唯一の縄文土器である。おそらく底部は鈍い尖底で、その底部より胴部へやや広がり、口縁部は直立気味に立ち上がる。胎土中はキメの粗い纖維を多量に含む。Po14は口縁端部外面に不明瞭な平坦面をもち薄く仕上げる。Po15・16・17の口縁端部には刻みを施す。Po16の口縁下には押し引き沈線を施す。Po18・19はいずれも胴部片である。Po19は外面に段を有する。Po20・21の内面にはヘラ調整痕が明瞭に残る。Po22~24は内外面に縄文施文が行なわれる。25は平底の底部片で外面に沈線が施される。上位に縄文施文が行なわれることがかろうじて確認できた。Po20~24以外は胎土中に纖維を含む。

## III類 沈線文土器 (挿図10・11 Po26・41 図版4・5)

Po26は、一見した感じでは燃糸文かと思われたが、条の中に擦りが確認できず沈線文土器とした。Po41は外面に、3~4mmの凹状沈線、横位の刺突、縦位の突帯を施す。内面は条痕調整が認められる。

## IV類 条痕文系土器 (挿図10・11 図版5・6)

### ①折り返し口縁を有するもの (Po27~35)

Po27~32は折り返し口縁部及び胴部外面に連続刺突を施す。内面のナデ調整は粗く、粘七積み上げ痕も残存するなど凹凸がはげしい。Po33~35は内外面条痕地文のみである。Po27~32の無文（刺突を施さない）のタイプと考えられる。

### ②条痕地文に刺突を施すもの (Po36)

内面にナデ調整を施し口縁は単純に仕上げる。

### ③その他 (Po37~40・44)

Po37・40・44は条痕地に突帯を貼付け、その上に刻みを施す。38・39は条痕地のみである。

## V類 刺突文土器 (挿図12 図版6)

### ①極細工具による刺突を施すもの (Po42・43)

### ②半截竹管による刺突を施すもの (Po46・47)

### ③劣截竹管による刺突を施すもの (Po45)

## VI類 無文土器 (挿図12~14 図版6)

### ①ナデ調整・条痕調整により仕上げるもの (Po48~59)

Po48は口縁端部に沈線、口縁下に円孔が施される。Po50は口縁下に円孔を施そうとしたものらしく、その痕跡が内外面に認められる。Po54の口縁端部内面には斜行沈線、Po56の口縁端部内面、Po57の口縁端部外面には絞条体圧痕が施される。Po58・59の上部については不明である。

### ②粗製土器 (Po60~64・69)

Po60・61の口縁端部は、粘土貼り付けにより肥厚する。Po62の口縁は直行し、口縁下に円孔が施される。Po63の口縁はやや内傾する。Po69は上げ感気味である。



插图 9 A区出土绳文土器实测图①

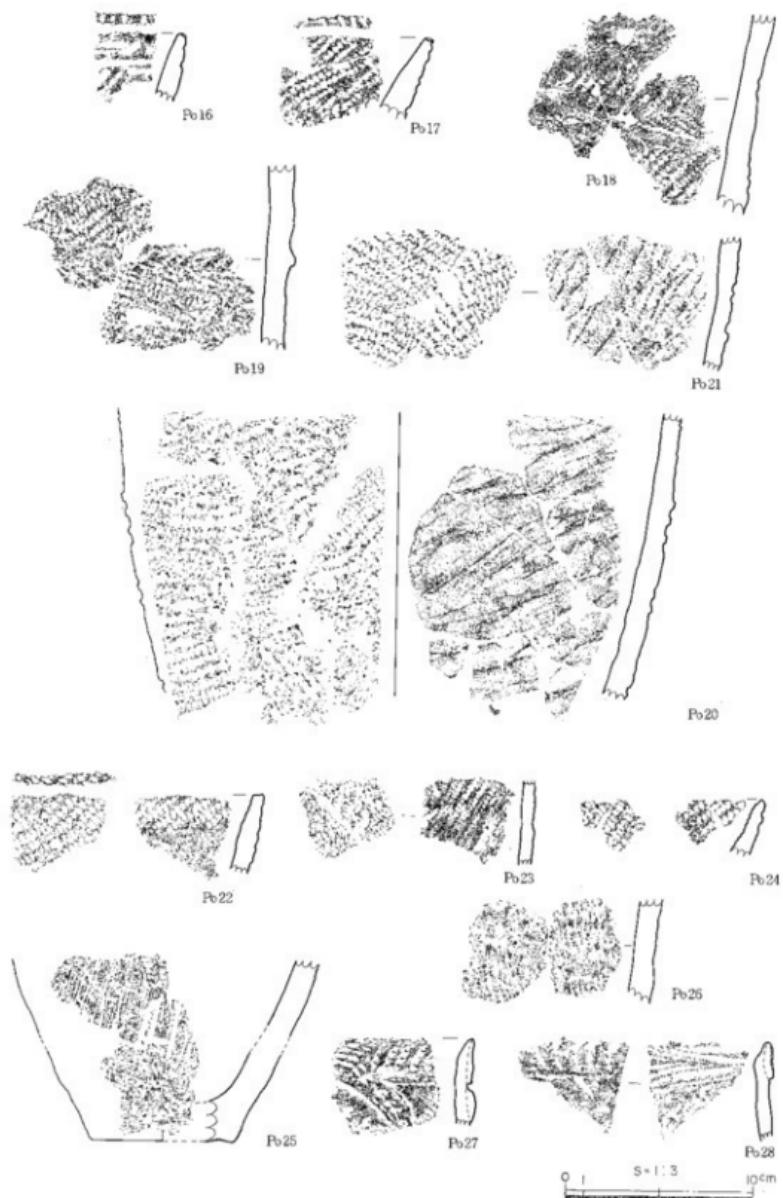
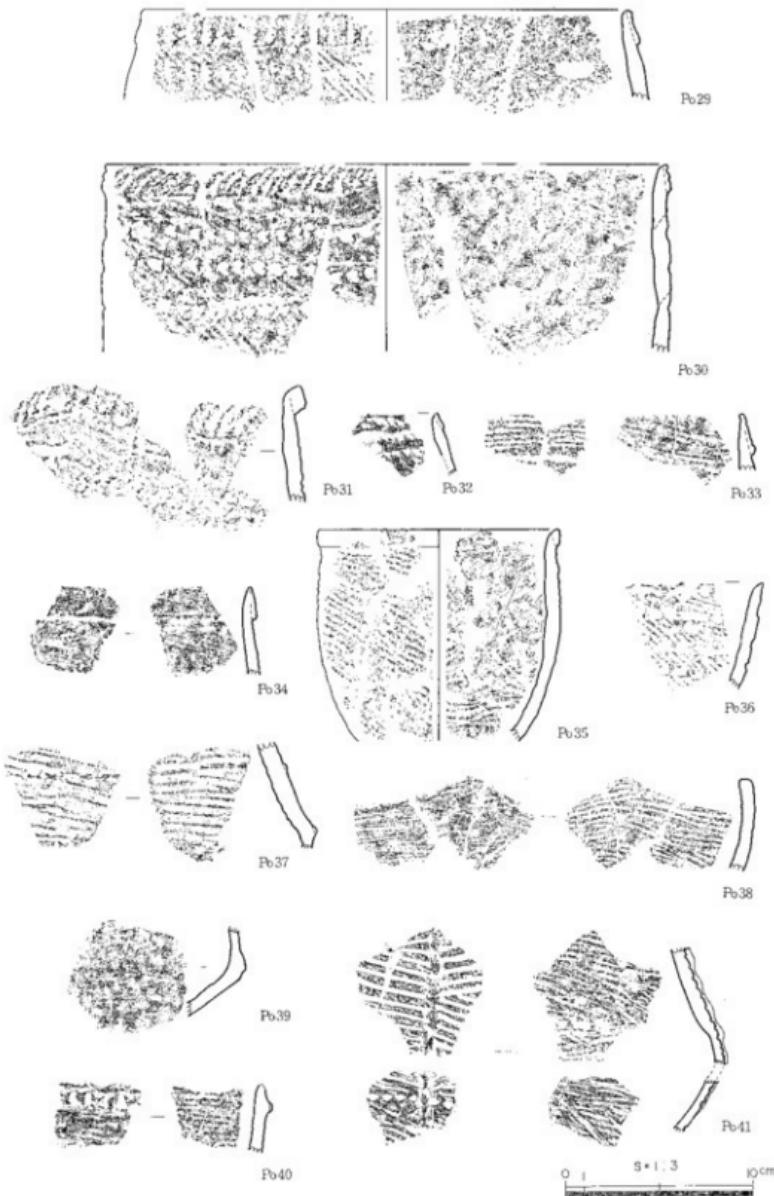
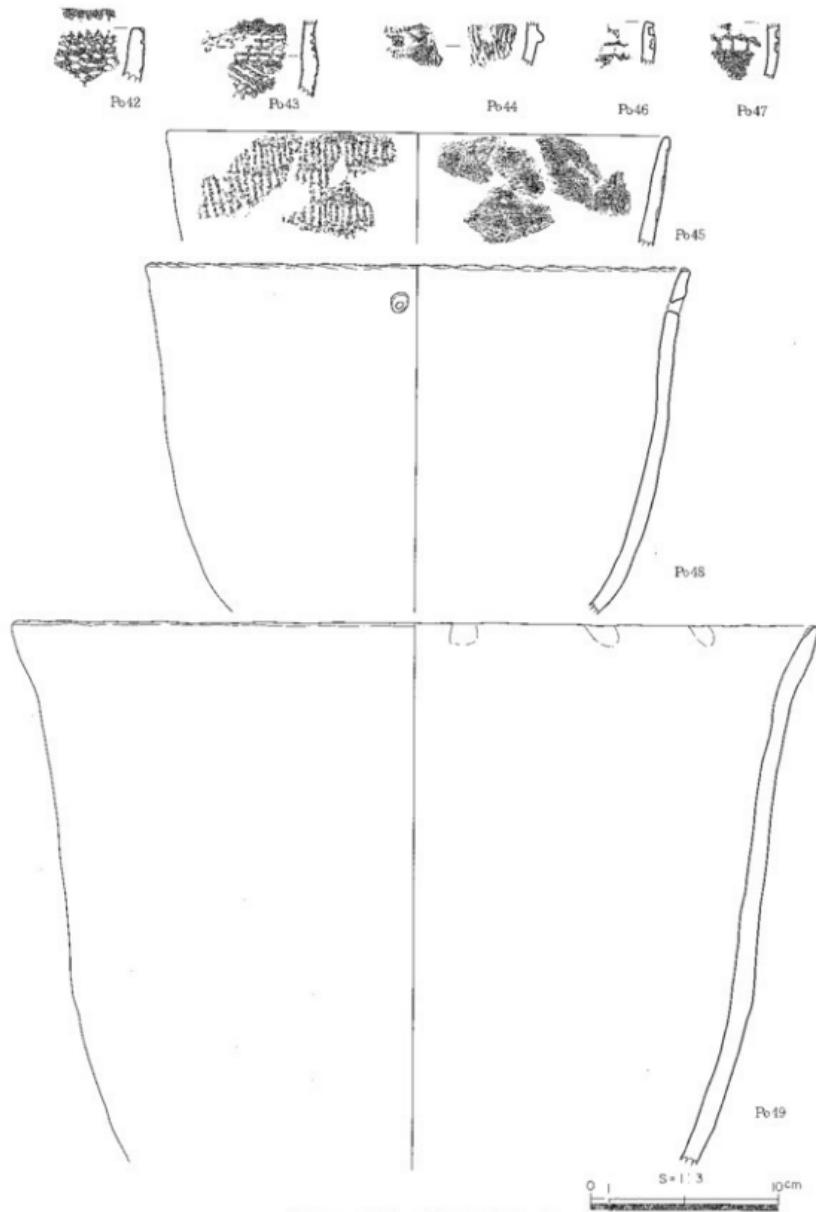


图10 A区出土陶文土器实测图②



插図11 A区出土縄文土器実測図③



插図12 A区出土綱文土器実測図④



Pb50



Pb51



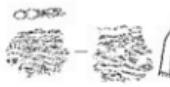
Pb52



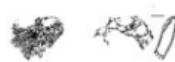
Pb54



Pb53



Pb55



Pb56



Pb57



Pb58



Pb59



Pb60



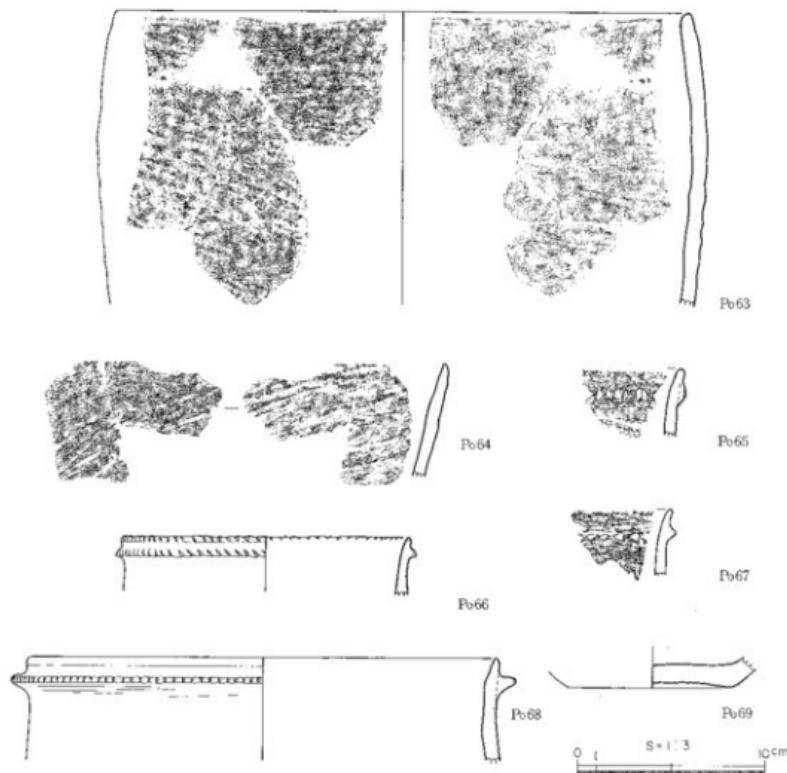
Pb61



Pb62

0 1 S=1:3 10cm

插图13 A区出土绳文土器实测图⑤



挿図14 A区出土縄文土器実測図⑥

③刻み目突帯を有するもの

Po66は口縁端部にも刻みを施す。

註1 「鳥取県教育文化財団調査報告書17・上福刀遺跡」1985における縄文土器の中でI類D種とされるものと同タイプの土器である。

註2 褐色、暗褐色を呈し、焼成も良好、胎土中に砂粒を僅かに含む程度である。

### b 石器

下山南通遺跡の石器は、剥片石器と石核石器・礫石器の2つに大別した。その使用時期については、A区出土の石器を縄文時代早～前期（北部・南部遺構群出土の石器を弥生時代中～後期）として取り扱った。

#### 1. 剥片石器・剥片・石核（挿図16・17 挿表7・8 図版6）

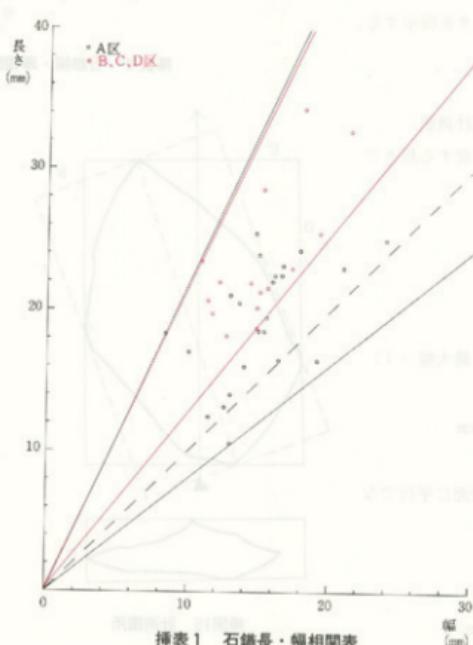
A区出土の剥片石器は石鏃・尖頭器があり、石鏃未製品と思われるものもある。また、剥片・

石核も出土している。

#### 石錐 (S 1~29)

総数29点。このうち、石材は黒曜石22点 (76%) サヌカイト 6点 (21%) チャート 1点 (3%) である。完形23点についての長さ・幅の相関を挿表1に示した。長さは10.5~25.5mmの間にある。15.1~20mmの間にあるものは8点 (35%)、20.1~25mmの間のものは10点 (43%) 存在する。幅は9.4~24mmの間にある。10.1~15mmの間のものは11点 (48%)、15.1~20mmの間のものは9点 (39%) 存在する。長さと厚さ、幅と厚さの相関は挿表2・3に示した。厚さは2.2~8.6mmの間にある。

石錐の製作を考えると、その製作技術が違えば仕上がる製品の形態的特色（長さ・幅・厚さ）にその影響が現れるのは言うまでもない。そのことをふまえて挿表1~3の中でA区とB・C・D区出土の石錐を見比べる。長さ・幅の相関（挿表1）を見ると、グラフ上のポイント分布は、A区とB・C・D区では27度と14度の範囲内にそれぞれおさまり、そこにはかなりの差が認められる。興味深いのは、双方の石錐幅及び幅に対する長さの比の最大値を示す直線の傾きが双方とも同様であるのに対し、幅と長さの比の最小値を示す直線の傾きは大きく異なるということである。特にA区では、幅が長さを上回るものも存在する。B・C・D区では19.1mmの石錐が最も短いが、A区ではそれ以下のものが8点存在しその最短のものは10.5mmである。



挿表1 石錐長・幅相関表



挿表2 石錐長・厚相関表

次に長さ・厚さ・幅・厚さについてのグラフ中のポイントに着目すると、A区出土のものがB・C・D区に比べより広がりをもつことが窺える。以上のことからA区の石鎌に比べ、B・C・D区の石鎌は長さ・幅・厚さにより企画性をもち全体的にスマートであると言える。

最後に、A区とB・C・D区出土石鎌の時期であるが、共伴する土器から類推し、縄文時代早期後半～前期前半、弥生時代のものがそれぞれ大半を占めると考える。

#### 尖頭器・石鎌未製品 (S 30・31)

S 30の素材は剝片である。尖端部が僅かに欠損する。背面側は両縁に剥離調整を施し尖端部を作り出すが主剥離面側には一部に剥離調整が認められるだけである。S 31はおそらく約尾が欠損すると考えられるが、未製品であろうか。

#### 剝片

A区出土の剝片総数は286点であり、石器遺物全体の83%を占める。これらの遺物を分析し検討を加える事は、当時の石器製作技術を知る上で必要不可欠である。今回の報告では検討を加えるまでには至らなかったが形態分類を行ないそのデータを提示する。

#### I 剥片分析方法

##### i 計測 (挿図15参照)

A 単純最大長 (最も長い部分の計測値)

B 単純最大幅 (単純最大長に直交する長さで最大のもの)

C 最大厚

D 最大長 (剥離軸方向)

E 最大幅 (剥離軸に直交する)

##### ii 形態分類

最大長 (L) と、それに対する最大幅 (l) の比によって5分類を定義する。

石刃  $L \geq 21, L \geq 5\text{cm}$

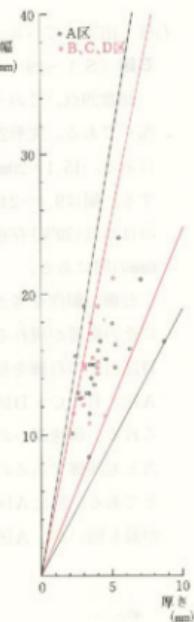
石刃状剝片  $l \geq 1.2\text{cm}$

石刃状剝片は両縁が主剥離面に平行でない場合を呼ぶ。

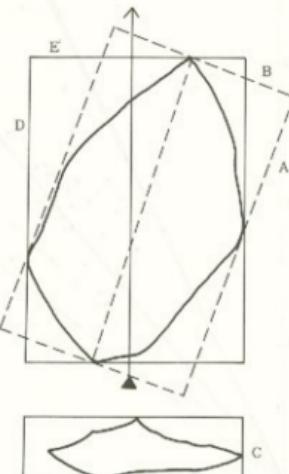
剝片

横形剝片  $L \leq 1$

細石刃  $L \leq 21, l < 1.2\text{cm}$



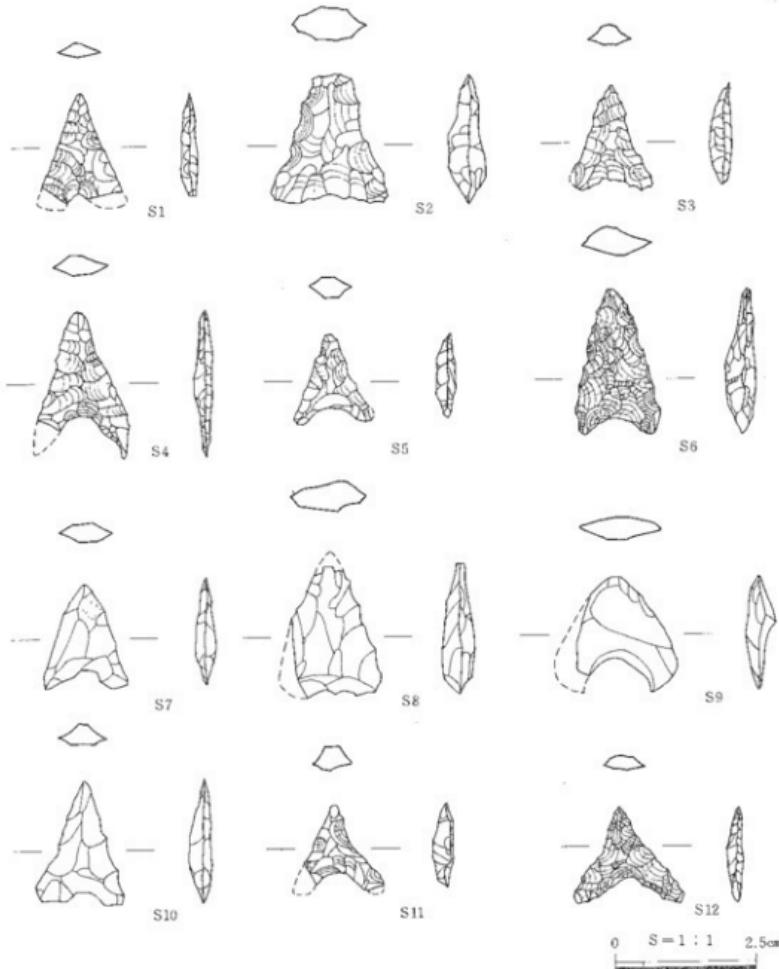
挿表3 石鎌幅・厚相関表



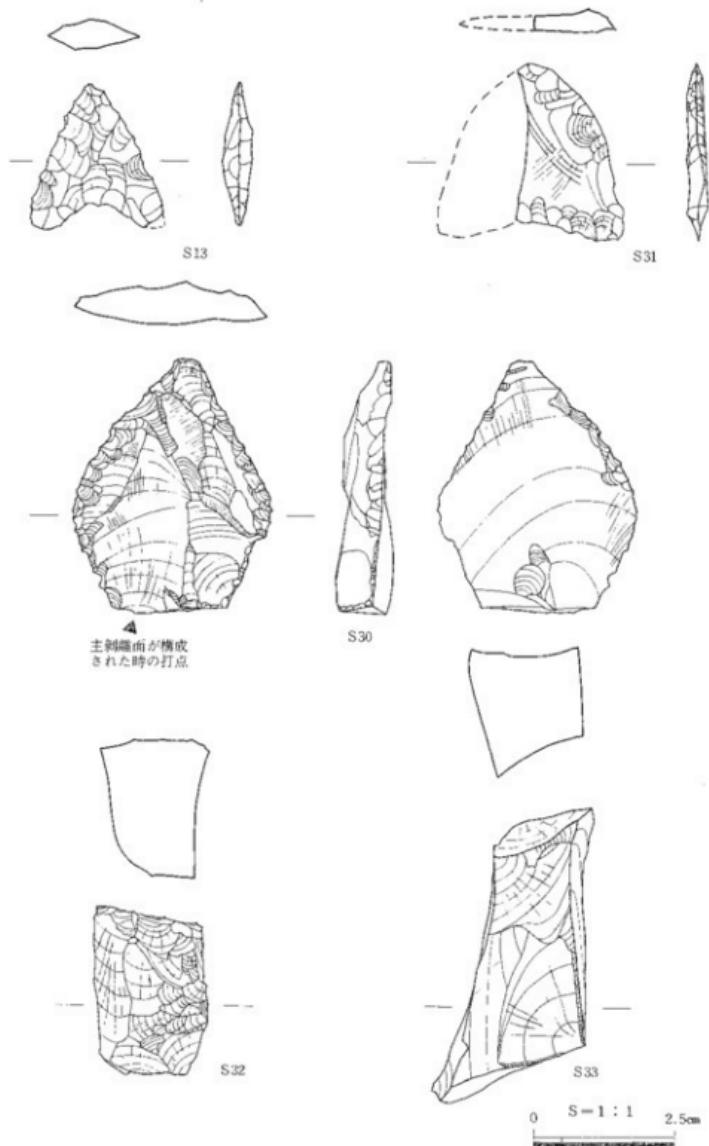
挿図15 計測箇所

## II 分類結果

分類した各形態別点数は(挿表10~12)、剝片125点(44%)、横形剝片150点(52%)、石刃1点(0.5%)、石刀状剝片1点(0.5%)、細石刃9点(3%)である。石材別に見ると黒曜石257点(90%)、サヌカイト12点(4%)、珪岩6点(2%)、その他頁岩・メノウ・ジャスパー・鉄石英・アプライトが11点(4%)である。黒曜石が大半で僅かにサヌカイトが利用され、その他の石材はほとんど石器素材として用いられることがなかったことを示している。



挿図16 A区出土剝片石器実測図①



挿図17 A区出土剥片石器実測図②

先述したA区出土の剥片石器の石材別点数をみても同じ傾向を示している。

剥片と横形剥片の比率は1:1.2でやや横形剥片の点数が多く、石刃・石刃状剥片等の石器素材になり得る様なものはごく僅か認められたのみである。剥片・横形剥片の剥取はほぼ同程度になされ、石器素材になり得るものは無駄にされることはほとんどなかったということであろう。この状況は上福万遺跡（米子市上福万）における様相と合致する。本遺跡出土の細石剣については、それを利用して製作した小型の石器は確認しておらず、石器製作過程における副産物（屑片）かと考えられる。<sup>32</sup>

#### 石核（挿図17）

6点出土しておりいずれも黒曜石である。

### 2. 石核石器・礫石器

本遺跡の石核石器・礫石器は、次の様に分類した。（鈴木道之助『国録石器の基礎知識III』1981、柏書房のP22表1を参考にした）

- ① 磨石・敲石……磨痕・磨面・敲痕・敲面、凹みが一個体に併存する場合が多いため、その組み合わせにより次のI～VIの6タイプに細分した。I（磨痕のみ）、II（敲痕のみ）、III（磨痕+敲痕）、IV（磨痕+凹み）、V（敲痕+凹み）、VI（磨痕+敲痕+凹み）
- ② 石斧……打製石斧、局部磨製石斧、磨製石斧、環状石斧がある。
- ③ 石錘……円錐（又は丸石）を利用して、その長軸方向の両端を欠いた石錘。
- ④ 石皿……中央部に磨耗による大きな凹みを有する石器。
- ⑤ 磁石……使用面がほぼ平坦な砥面を有する石器。一部には、磨耗による小さな凹みや、線条痕などが認められる。
- ⑥ 石庭丁

A区出土の石核石器・礫石器の総数は21点である。その分布範囲は、土器・剥片石器の分布範囲と重なる。

- ① 磨石・敲石〔挿図18・19 挿表9 図版7〕

#### 磨石・敲石I（S38～42）

5点出土した。両面に磨痕の認められるもの（S40・41・42）、片面に磨痕の認められるもの（S38・39）、周縁部に磨痕の認められるもの（S42）などがあり、これらの中には過度の磨耗によって平坦になった磨面を持つもの（S38・42）、磨面が光沢を持つもの（S41）がある。

石材は、角閃石安山岩、花崗閃綠岩、花崗岩である。

#### 磨石・敲石II（S43・44）

2点出土した。敲痕が長軸方向の上端に認められるもの（S43）、両端に認められるもの（S44）がある。

石材は、砂岩、黒雲母花崗岩である。

#### 磨石・敲石IV（S45～49）

5点出土した。片面に凹みの認められるもの（S45・47・48）、周縁部に凹みの認められる

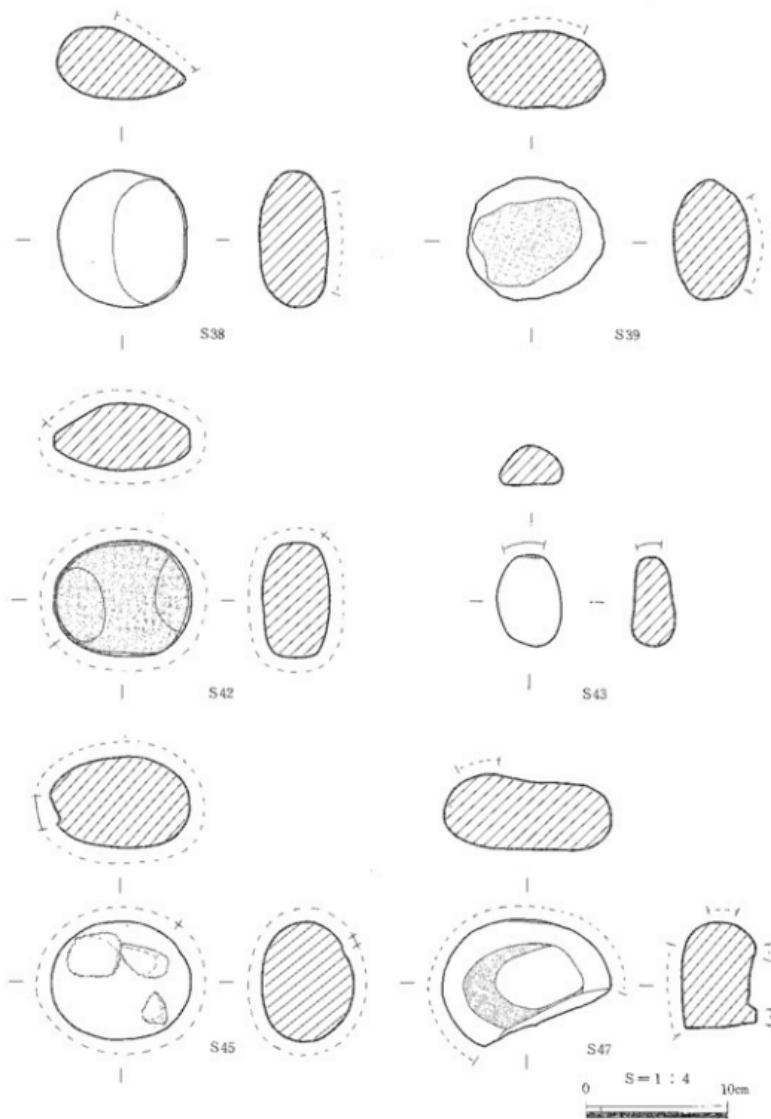


插图18 A区出土石核石器・権実測図①

もの（S45・46・49）があり、これらの中には過度の磨耗によって平坦になった磨面を持つもの（S45・47）がある。

石材は、角閃石安山岩、無斑晶安山岩等である。

磨石・敲石IV（S50～53）

4点出土した。片面に凹みの認められるもの（S51・52）、両面に凹みの認められるもの（S

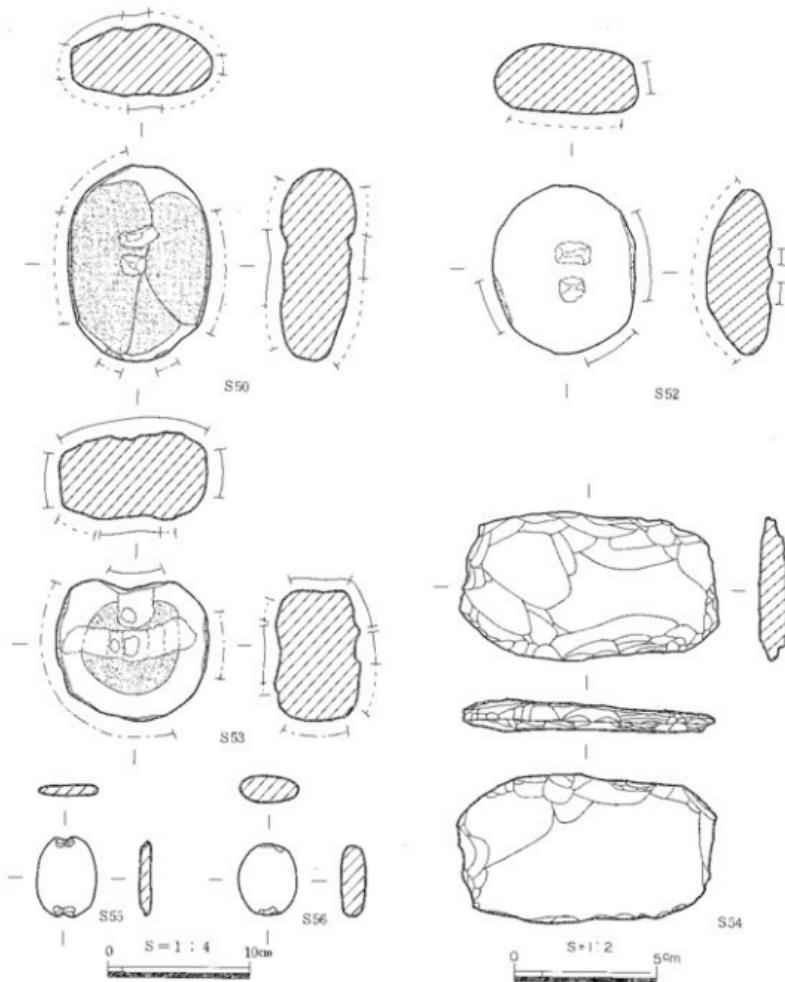


図19 A区出土石核石器・礫実測図②

50・53) があり、これらの中には過度の磨耗によって平坦になった磨面を持つもの (S 50・51・52)、過度の敲打によって平坦になった敲面を持つもの (S 50・52・53) がある。

石材は、花崗閃綠岩、角閃石安山岩などである。

#### ② 石斧

##### 打製石斧 (S 54)

石材は、ガラス質安山岩である。全体に剝離痕が認められること、周縁部に両面調整によって刃部が作り出されているが、刃部と基部の区別がはっきりしないことなどから、剝片石器に属すると判断できるが、ここでは打製石斧として取り扱った。

#### ③ 石錐 (S 55・56)

S 55・56共に疊石錐で、長軸方向の両端に打撃を加え、糸掛けを作り出している。

石材は、角閃石安山岩である。

#### ④ 石皿 (S 57)

扁平な石を利用しておらず、石材は、黒雲母角閃石安山岩である。表面中央部に斜めに伸びる若干の凹みを持つ磨り面が認められる。表面右側には敲打による凹みが認められ、何かを敲く際の台石としても利用されていたことが窺われる。また、石皿

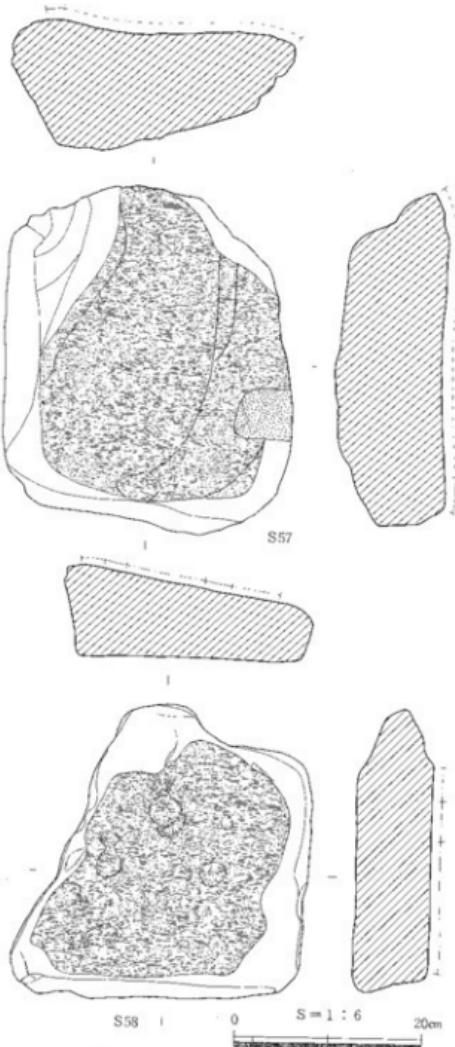


図20 A区出土石器実測図

として製品化する際の加工痕と思われる平坦な磨面が、縞状に認められる。

#### ⑤ 砥石 (S 58)

扁平な石を利用しておらず、石材は、角閃石安山岩である。平坦な砥面には、線条痕が認められる。また、砥面には小さな凹みも認められ、敲く際の台石として、又は石皿としても使

用されていたことが窺われる。

(太田正康)

註 1 ①山中一郎「長原遺跡出土の石器について」『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告書』長原遺跡調査会編1978

②根鈴輝雄「原石・剣片・石器・石錐について」『鳥取県教育文化財団調査報告書17 上福万遺跡』1985

註 2 註 1-②と同じ

また、上福万遺跡では、縄文時代早期後半～前期前半の土器が出土している。本遺跡 A 区出土の土器もほぼそれと同時期のものであり、対比する好資料であろう。

### 第3節 小結

前節で述べた A 区出土の縄文時代遺物について位置づけをして小結とする。

I 類とした押型文土器は、内外面小型横円文を施すものや文様の粗大化がみられ、早期後半(黄島式・高山寺式併行)の時期である。II 類とした縄文土器は、縄文 R L・L R の原体により施文されるものがほとんどで、器厚も厚いものが多い。また、縄文 R 施文のものは胎土中に纖維を含まないが、それ以外は纖維を含むものが多く(挿表 4・5)、II 類の特徴の 1 つとしてあげることができる。III 類としたものには、厚手で胎土中に纖維を含む土器と、外面に突帯をもち内面に条痕調整が施される土器がある。IV 類は本遺跡で最も出土量の多かった土器群である。IV 類の土器では、胎土中に纖維を含むものが僅かにみられる程度である。これらの土器は米子市陰田遺跡・松江市タテチョウ遺跡出土遺物の中に類似するものがある。前期前半の時期に比定できる。V 類土器の中には羽島下層 II 式～北白川下層 I 式の特徴をもつものが含まれる。VI 類中には時期の異なるものが存在する。VI 類①に含まれる各土器は、I 類～V 類のいずれかに伴うものであろうし、VI 類②・③は後～晩期の遺物であろう。

以上、本遺跡出土の縄文土器については、早期後半・早期末～前期前半・後～晩期に大別して捉えられる。石器については共伴する土器より、本遺跡南端 A 区出土のものを縄文時代遺物と考えておらず、本章に記述した。B・C・D 区出土の石器は弥生時代のものを多く含むと考え第 6 章第 2 節に記述した。尚 A 区における各遺物の出土状況等についての細かな検討は第 6 章第 1 節に記述する。

(太田正康)

註 1 岡山県邑久郡黄島貝塚

註 2 和歌山県田辺市高山寺貝塚

註 3 II 類土器の特徴は、鳥根県簸川郡菱根遺跡出土の「縄文地纖維土器」に類似性を求めるようか。

註 4 後者の土器は、米子市陰田遺跡において出土している。『陰田』米子市教育委員会1984・3、この報告の中で第 1 群土器とされているものがそうである。

註 5 『陰田』米子市教育委員会1984・3

註 6 『タテチョウ遺跡発掘調査報告書』・I 島根県教育委員会1979・3

この報告の中で前期 B・C 類とされる土器群である。B 類を「羽島下層式に近い」としている。

註 7 綱谷克彦「北白川下層式土器」『縄文文化の研究 3・縄文土器 I』、雄山閣1982

遺物番号	拂因番号	出発番号	取上番号	口径(cm)	下 法	特 徴	胎 土	色 調	感 成
Po 1	9	4	2 A No1049 No892		外面に押型文(焰円)を施す。	砂粒、長石、金雲母含む。	内外面淡褐色	良好	
Po 2	9	4	2 A No1265 No1397		外面に押型文(焰円)を施す。一部スヌ付着。	石英、長石を含む。	内外面赤褐色	良好	
Po 3	9	4	1 B No1081	尖底部	外面に押型文(焰円)を施す。	石英、長石を多量に含む。鐵錫少量含む。	内外面淡褐色	良好	
Po 4	9	4	1 B No1311		外面に押型文(特殊変形)を施す。	石英、長石を含む。	内外面淡褐色	良好	
Po 5	9	4	2 A No1370		外面に押型文(特殊変形)を施す。	石英、長石を多量に含む。黒雲母少量含む。	内外面淡褐色	良好	
Po 6	9	4	2 A No1332 No1409	復口沿 22.8	外面に縦文(R)、口縁端部に刻みを施す。	石英を多量に含む。黒雲母含む。	内外面淡褐色	良好	
Po 7	9	4	B区SK-60 No937	復口沿 21.3	外面に縦文(R)、口縁端部に刻みを施す。	石英、長石を多量に含む。黒雲母含む。	内外面淡褐色	良好	
Po 8	9	4	2 A No187		外面に縦文(R L)、口縁端部刻み、口縁下に3条の押し引き沈溝を施す。	石英を含む。黒雲母少量含む。鐵錫含む。	内外面淡褐色	良好	
Po 9	9	4	2 A No1146		外面に縦文(R L)を施す。3条以上の押し引き沈溝を施す。	石英を多量に含む。鐵錫含む。	内外面褐色 内外面淡褐色	良好	
Po 10	9	4	1 B No940, 944, 706, 692		外面に縦文(R L)、口縁端部刻み、口縁下に3条の押し引き沈溝を施す。	石英を含む。金・黒雲母含む。鐵錫多量に含む。	内外面淡褐色	良好	
Po 11	9	4	2 A No1019		外面に縦文(R L)を施す。	砂粒、石英を含む。	内外面淡褐色	良好	
Po 12	9	4	2 A No629		外面に縦文(R L)を施す。	石英を含む。	内外面明褐色	良好	
Po 13	9	4	1 A No1056, 922, 1124, 1057, 1125, 1299 2 A No1158, 549, 1233, 1159, 1266, 1403		外面に縦文(R L)を施す。	砂粒、金・黒雲母含む。鐵錫多量に含む。	内外面褐色	良好	
Po 14	9	4	2 A No1234		外面に縦文(R L)を施す。	砂粒、石英を含む。鐵錫含む。	内外面褐色	良好	
Po 15	9	4	2 A No1389		外面に縦文(R L)、口縁端部に刻みを施す。	砂粒、石英を含む。鐵錫多量に含む。	内外面褐色	良好	
Po 16	10	4	2 A No266		外面縦文(R L)、口縁部に押し引き沈溝2条、口縁端部に刻みを施す。	石英を含む。黒雲母、鐵錫を含む。	内外面褐色	良好	
Po 17	10	4	1 A No1283		外面に縦文(R L)、口縁端部に刻みを施す。	砂粒、長石、金雲母含む。鐵錫を多量に含む。	内外面褐色	良好	
Po 18	10	4	2 A No1333 No1409		外面に縦文(R L)を施す。	石英、金雲母含む。鐵錫多量に含む。	内外面淡褐色 内外面褐色	良好	
Po 19	10	4	2 A No1369		外面に縦文(R L)を施す。	石英を含む。鐵錫を多量に含む。	内外面褐色 内外面淡褐色	良好	
Po 20	10	4	2 A No1223		外肥縦文(R L)、内面へラミガキを施す。一部スヌ付着。	石英、長石、金雲母含む。	内外面赤褐色 内外面淡褐色	良好	
Po 21	10	4	2 A No1218		外面に縦文(R L)を施す。一部スヌ付着。	石英、長石を含む。	内外面褐色 内外面淡褐色	良好	
Po 22	10	4	20トレンチ No441		外肥及び口縁内部、口縁端部に縦文(R L)を施す。	石英、長石を含む。金雲母少量含む。	内外面褐色 内外面褐色	良好	
Po 23	10	4	膨張トレンチ No55		外肥縦文(R L)、内面系底地に縦文(R L)を施す。	石英を少量含む。黒雲母含む。	内外面褐色 内外面淡褐色	良好	
Po 24	10	4	2 A No1200 No1229		内外面横びり縫端部に縦文(R L)を施す。	長石を含む。	内外面褐色 内外面褐色	良好	
Po 25	10	4	20トレンチ No462 No464	復底径 7.4	外面に縦文(R L)と沈板を施す。	石英、黒雲母少量含む。鐵錫含む。	内外面褐色 内外面褐色	不良	

拂表 4 下山南通遺跡縄文土器観察表①

遺物番号	補足番号	試験番号	取上番号	I (cm)	手 法	特 徴	施 土	色 調	構 成
Po26	10	4	2 B No1344		3本1単位(幅1cm)の条縞様 3.		石を多量に含む。黒 雲母、鐵錫合む。	内面灰褐色 外面淡青褐色	良好
Po27	10	5	1 B No1092		洞部突起が折り返し口縫につな がる。口縫、突起及び外側は櫛 状工具による割突が施されている		石英、黑雲母少量合む	内面暗褐色 外面褐色	良好
Po28	10	5	1 A No8		折り返し口縫部に櫛状工具によ る削突を施す。内面無		石英を含む。	外面部褐色	不良
Po29	11	5	1 B No664、667、 1075、1072	復1:復 35.8	折り返し口縫及び外側には、柔 軟な櫛状工具による削突を施す。		石英、長石を多量に含む。黒 雲母を少量含む。	内面灰褐色 外面褐色	良好
Po30	11	5	1 B No1071、1072、 1075		折り返し口縫は櫛状工具による 削突、外面は下部に削突によられ る。内面は櫛状工具による削突、外 面には口縫に沿って底地に半 截竹管による利痕を施す。		石英を多量に含む。其 他、鐵錫を少量含む。	内面部褐色	良好
Po31	11	5	1 B No813、815、911、 915		折り返し口縫が削突をなす。口 縫には櫛状工具による削突、外 面には口縫に沿って底地に半 截竹管による利痕を施す。		石英を多量に含む。其 他、鐵錫母を含む。	内面部褐色	良好
Po32	11	5	0 C No884		折り返し口縫及び外側は、柔軟 地に劣性竹管による削突が施さ れている。		砂粒、長石、黑雲母少 量含む。	内面部褐色	良好
Po33	11	5	2 A No580		内外面条縞調整。折り返し口縫 上に条縞をつくる。		石英、長石、黑雲母を 少量含む。	内外面淡褐色	良好
Po34	11	5	1 B No913		外側ナメ調整、内面条縞、折り 返し口縫をつくる。		砂粒、黑雲母を含む。	内外面淡褐色	良好
Po35	11	5	1 B No1073	復1:復 6.4	折り返し口縫ナメ調整。外面部 下半部の内面は条縞を配す。		石英、長石、黑雲母少 量含む。鐵錫合む。	内面部褐色 外面部褐色	良好
Po36	11	5	8 R No762		外面部底地に劣性竹管による削 突を施す。		砂粒、黑雲母少量含む。	内面部褐色 外面部褐色	良好
Po37	11	5	2 B No329		内外面条縞。外曲面帯上に削み を施す。		石英、長石、金雲母含 む。	内外面褐色	良好
Po38	11	5	1 A No19、20、21		口縫は波状をなす。外面部条縞 調整。		石英、黑雲母含む。	内外面褐色	良好
Po39	11	5	S K 01 No796		洞口部。外面部底地。内面底地 部より上位へ下削り。下位ナメ 調整。		石英多量に含む。長石 黑雲母含む。	内面部褐色 外面部褐色	良好
Po40	11	5	2 A No619		内外下条縞。口縫に削み目突 起あり。		石英多量に含む。	内面部褐色 外面部褐色	良好
Po41	11	5	2 A No598 3 A No899		外側は横位に隙間の沈没、被位 位、隙間で底地を施す。内面調整。		砂粒を含む。	内外面褐色	良好
Po42	12	6	2 A No1391		外側に劣性竹管による削突、口 縫部を削みくずす。		石英、長石、黑雲母を 含む。	内面部褐色 外面部褐色	良好
Po43	12	6	2 A No1011 1 B No1190		外側は横位に隙間の沈没、被位 位、隙間に削突を施す。内面調整。		石英を多量に含む。	内外面褐色	良好
Po44	12	6	1 B No706		内外面条縞。外側に不整が付く。 鉛錫を含む。		鉛錫を含む。	内面部褐色 外面部褐色	良好
Po45	12	6	2 A No78、73、77	復1:復 26.6	外側は条縞部にC字彎曲調整を 施す。		石英、黑雲母を含む。	内外面淡褐色	良好
Po46	12	6	2 A No559		C縫外側にからむへD字彎曲 突を2列以上施す。		石英、長石を含む。	内外面褐色	良好
Po47	12	6	2 A No629		外側に左から右へD字彎曲突を 施す。		石英、長石を含む。	内面部褐色 外面部褐色	良好
Po48	12	6	1 B No845、848、849、 1354、1293 1 A No526 2 A No1329、1411 2 B No1383	復1:復 28.2	内外面ナメ調整。口縫部に削 みを施す。口縫下に穿孔がある。		石英を多量に含む。黑 雲母を少量含む。	内外面 淡褐色～ 灰褐色	良好
Po49	12	6	1 B No1291、1292、 1294	復1:復 42.2	内外面ナメ調整。強いナメに1 回ロジカル部を含む。		石英を多量に含む。長石、 金、黑雲母含む。	内外面 淡褐色～ 灰褐色	良好
Po50	13		2 A No1274		内外面ナメ調整。外側に削突あ り。外側の鋸突と対をなす内側 に穿孔の跡跡がある。		石英、黑雲母を含む。	内外面褐色 外面部灰褐色	良好

插表5 下山南通遺跡甕文土器観察表②

遺物番号	博覧番号	同版番号	取上番号	口径(cm)	手 法	特 徴	胎	土	色	調	燒成
Po51	13		1 A No.524		外面部調整。内面角張。	石英、金・黒雲母を含む。	外面褐色 外面黑色	良好			
Po52	13		2 A No.1326		内外面ナメ調整。	金雲母を含む。	内外面褐色	良好			
Po53	13		2 A No.1175		内外面ナメ調整。	長石、黒雲母を含む。	内外面褐色	良好			
Po54	13		2 A No.1019		内外面ナメ調整。口縫内面に斜行状線を施す。	長石を含む。	内外面褐色	良好			
Po55	13		3 A No.348		内外面角張。口縫端部に刻みを施す。	石英を含む。	内外面褐色	良好			
Po56	13		2 A No.1241		内外面ナメ調整。口縫内面に斜状体压痕を施す。	石英、長石、黒雲母を含む。	内外面褐色	良好			
Po57	13		2 A No.70		口縫に単位の大きな刻みを施す。	石英、長石を含む。黒雲母を少量含む。	内外面褐色	良好			
Po58	13		2 A No.1422	尖端部	内外面ナメ調整。	石英を含む。繊維を少量含む。	内外面褐色	良好			
Po59	13		2 B No.1346	尖底部	内外面ナメ調整。	石英、金雲母を含む。	内外面褐色	良好			
Po60	13	6	表深 No.1446	復口縫 39.4	内外面削除調整。一部スス付着。	石英を多量含む。 黒雲母を少量含む。	内外面淡褐色 ~淡黃褐色	良好			
Po61	13	6	2 A No.1242		外面削削。内側ナメ調整。外側スス付着。	石英、長石を含む。黒雲母を少量含む。	外面明褐色	良好			
Po62	13	6	1 I No.200、259、305		内外面に削削を施す。口縫部に円孔あり。	石英、長石、黒雲母含む。	内外面淡褐色 外側褐色	良好			
Po63	14	6	1 I No.305、259	復口縫 39.4	外面削削。一部スス付着。	石英、長石、黒雲母含む。	内外面褐色	良好			
Po64	14		2 A No.1016		内外面削削調整。	石英、黒雲母を含む。 繊維含む。	内外面淡褐色	良好			
Po65	14	6	No.374		折り返し口縫部に刻みを施す。	石英を含む。	内外面淡褐色	良好			
Po66	14	6	S I - 01 No.392	復口縫 15.2	口縫端部外面に刻みを2ヶ所施す。	長石を含む。	内外面褐色	良好			
Po67	14	6	S K - 16 No.498		口縫下外面に刻みを火災痕あり。	長石を含む。	内外面褐色	良好			
Po68	14	6	S K - 64 No.1082	復口縫 25.0	口縫下にヘラ状工具による刻み 日光帯がめぐる。内外面ナメ調整。	石英を含む。	内外面褐色	良好			
Po69	14		1 I No.305	底部付 8.6	底部内外面ナメ調整。	石英、長石、黒雲母含む。	内外面褐色 外側淡褐色	不良			

摺表 6 下山南通遺跡縄文土器觀察表③

No	博覧番号	同版番号	分類	出上位置	取上番号	最大長さ (mm)	最大幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材
S 1	16	6	石 第	A区	1 A	45	(19.0)	14.0	3.0	0.6 黒曜石
S 2	16	6	" "	" "	"	27	23.0	21.0	7.0	2.1 "
S 3	16	6	" "	" "	2 A	1220	18.5	(14.0)	4.0	0.6 "
S 4	16	6	" "	" "	"	284	26.0	(16.5)	3.5	0.8 "
S 5	16	6	" "	" "	"	66	16.0	14.0	3.5	0.5 "
S 6	16	6	" "	" "	"	285	25.4	14.8	5.2	1.5 "
S 7	16	6	" "	" "	"	772	18.5	15.0	3.5	0.6 サヌカイト
S 8	16	6	" "	" "	"	1132	(23.0)	(16.0)	(5.5)	1.8 "
S 9	16	6	" "	" "	"	642	20.0	(17.0)	5.0	1.4 "
S 10	16	6	" "	" "	"	1422	22.0	16.0	4.0	9.9 "
S 11	16	6	" "	" "	1 B	714	(10.0)	(14.0)	4.0	0.5 黑曜石
S 12	16	6	" "	" "	"	427	16.5	19.1	3.0	0.4 "
				3層20トレンチ						
S 13	17	6	" "	" "	"	405	25.0	24.0	5.5	2.1 "
S 14			" "	A区	1 A	1067	12.2	11.5	3.4	0.3 黑曜石
S 15			" "	" "	2 A	281	10.3	13.0	3.2	0.3 "
S 16			" "	" "	"	1254	22.4	16.1	6.3	1.4 "

摺表 7 下山南通遺跡(A区) 刷片石器一覧表①

No.	神園番号	同號番号	分類	出土位置	取上番号	最大長さ (mm)	最大幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材
S17			石斧	A区	2A	1070	21.0	13.0	3.2	0.7 黒曜石
S18			石斧		280	24.2	17.9	5.0	1.6	石
S19			石斧		776	17.0	10.1	2.2	0.3	石
S20			石斧		1230	22.4	16.6	8.7	2.4	石
S21			石斧		537	14.0	12.0	2.5	0.6	石
S22			石斧		139	18.5	15.4	4.6	1.0 ナスカイト	
S23			石斧		603	13.1	12.6	2.7	0.4	石
S24			石斧	1B	322	16.5	16.4	5.3	0.8 黒曜石	
S25			石斧		1191	23.9	15.6	3.7	1.1	石
S26			石斧		830	18.3	8.4	3.3	0.4	石
S27			石斧		842	20.5	13.6	3.8	0.9	石
S28			石斧		424	23.1	16.7	4.2	1.1 チャート	
S29			石斧	A区 幅下中	723	19.3	15.6	2.5	0.5 黒曜石	
S30	17	6	尖頭器	A区	2A	1040	4.4	1.0	1.0	12.0 石
S31	17	6	石頭木製品		1B	699	3.1	(1.9)	0.45	1.33 石
S32	17	6	石核	A区	SK-03	794	2.91	1.94	2.41	15.9 石
S33	17	6	石核		1B	694	5.23	2.86	2.68	28.8 石
S34			石核		2A	861	5.35	4.70	3.15	86.6 石
S35			石核		1151	4.60	3.30	2.25	2.25	28.8 石
S36			石核		866	3.50	3.15	1.99	1.99	19.8 石
S37			石核	幅下中	1283	4.75	3.70	2.42	42.1	石

插表8 下山南通遺跡(A区) 刺片石器一覽表②

No.	神園番号	区域番号	分類	出土位置	取上番号	最大長さ (mm)	最大幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (kg)	石材
S38	18	7	磨石・駆石	I A	994	亮	9.8	9.1	5.2	0.64 角閃石安山岩
S39	18	7	石核	II	2A	565	亮	9.7	8.6	5.5 0.62 黒雲母角閃石花崗閃綠岩
S40			石核		640	亮	8.2	7.2	5.9	0.59 花崗岩
S41			石核	II	1B	320	亮	8.9	7.4	5.3 0.32 黑雲母花崗岩
S42	18	7	石核	II	2B	1382	亮	9.6	8.3	4.7 0.53 角閃石安山岩
S43	18	7	石核	II	2A	539	亮	6.5	4.5	3.1 0.13 鐵物
S44			石核		333	亮	7.6	3.2	2.8	0.10 黑雲母花崗岩
S45	18	7	石核	IV	367	亮	9.8	8.5	5.5	0.71 角閃石安山岩
S46			石核	II	3A	363	不明	9.7	3.4	5.6 0.17 黑雲母安山岩
S47	18	7	石核	3層20トレンチ	398	光沢	12.0	9.1	5.4	0.74 黑雲母角閃石安山岩
S48			石核	II	381	光沢	7.4	8.0	5.2	0.27 角閃石安山岩
S49			石核	II	411	亮	10.3	8.2	6.5	0.57 黑雲母角閃石安山岩
S50	19	7	石核	VI	1A	1338	亮	13.9	10.2	5.2 1.05 黑雲母角閃石安山岩
S51			石核	II	564	亮	11.3	8.9	5.7	0.17 角閃石安山岩
S52	19	7	石核	II	1B	1307	亮	12.0	10.2	4.7 0.65 角閃石安山岩
S53	19	7	石核	3層20トレンチ	420	光沢	10.0	10.9	6.2	0.73 黑雲母角閃石安山岩
S54	19	7	石核	II	1A	1116	亮	9.2	5.2	1.0 0.08 ガラス質安山岩
S55	19	7	石核	II	3A	365	亮	5.7	4.3	0.8 0.03 角閃石安山岩
S56	19	7	石核	II	1B	329	亮	5.1	4.1	1.9 0.03 角閃石安山岩
S57	20	7	石核	II	2A	897	亮	37.2	30.9	13.7 18.7 黑雲母角閃石安山岩
S58	20	7	石核	石核	1447	亮	31.6	31.7	4.0	12.9 角閃石安山岩

插表9 下山南通遺跡(A区) 石核石器・砾石器一覽表

No	分類	出土位置	取扱番号	最大長さ (mm)	最大幅 (mm)	石 材	No	分類	出土位置	取扱番号	最大長さ (mm)	最大幅 (mm)	石 材
H 1	横形剝片	A区 1 A	53	18.6	24.4	黒 磨 石	H 51	横形剝片	A区 2 A	563	11.4	20.2	黒 磨 石
H 2	〃	〃	1205	11.3	22.8	〃	H 52	〃	〃	612	12.1	14.3	〃
H 3	〃	〃	519	5.1	6.2	〃	H 53	〃	〃	1156	16.9	22.5	〃
H 4	〃	〃	26	23.0	44.0	〃	H 54	〃	〃	1032	19.6	32.6	〃
H 5	〃	〃	648	22.5	24.5	〃	H 55	〃	〃	250	7.9	10.9	〃
H 6	〃	〃	1123	12.8	17.7	〃	H 56	〃	〃	91	11.2	17.5	〃
H 7	〃	〃	1058	12.4	42.2	〃	H 57	〃	〃	891	16.8	47.5	〃
H 8	〃	〃	38	11.6	16.5	〃	H 58	〃	〃	67	16.4	22.8	〃
H 9	〃	〃	30	13.5	4.2	〃	H 59	〃	〃	1230	10.5	12.9	〃
H 10	〃	〃	769	14.0	18.5	〃	H 60	〃	〃	1160	9.4	18.8	〃
H 11	〃	〃	1118	16.6	17.0	〃	H 61	〃	〃	614	11.2	19.7	〃
H 12	〃	〃	1067	16.3	18.2	〃	H 62	〃	〃	92	13.2	24.2	〃
H 13	〃	〃	1120	16.8	18.3	〃	H 63	〃	〃	284	13.6	17.8	〃
H 14	〃	〃	1118	11.3	19.4	〃	H 64	〃	〃	1423	10.2	15.1	〃
H 15	〃	〃	1208	28.5	34.3	サヌカイト	H 65	〃	〃	1026	18.3	21.6	〃
H 16	〃	〃	12	23.0	79.8	〃	H 66	〃	〃	154	17.0	18.5	〃
H 17	〃	A区 2 A	1410	7.5	14.4	黒 磨 石	H 67	〃	〃	232	9.8	31.3	〃
H 18	〃	〃	851	17.0	19.8	〃	H 68	〃	〃	889	23.0	35.8	〃
H 19	〃	〃	1387	19.2	42.7	〃	H 69	〃	〃	1070	18.3	22.5	〃
H 20	〃	〃	140	19.0	26.0	〃	H 70	〃	〃	1629	16.1	19.9	〃
H 21	〃	〃	1133	23.7	32.3	〃	H 71	〃	〃	192	29.3	33.2	〃
H 22	〃	〃	1018	14.1	23.5	〃	H 72	〃	〃	789	15.8	18.6	〃
H 23	〃	〃	274	27.8	38.1	〃	H 73	〃	〃	618	9.6	19.6	〃
H 24	〃	〃	1216	17.8	29.6	〃	H 74	〃	〃	156	14.9	21.8	〃
H 25	〃	〃	254	29.1	32.2	〃	H 75	〃	〃	1136	28.7	34.5	〃
H 26	〃	〃	863	14.7	18.0	〃	H 76	〃	〃	172	11.7	25.2	〃
H 27	〃	〃	771	11.2	13.5	〃	H 77	〃	〃	870	11.1	13.4	〃
H 28	〃	〃	1144	11.0	12.1	〃	H 78	〃	〃	158	10.7	14.8	〃
H 29	〃	〃	1165	9.5	16.6	〃	H 79	〃	〃	247	15.3	25.4	〃
H 30	〃	〃	248	39.5	53.8	〃	H 80	〃	〃	65	23.9	34.2	〃
H 31	〃	〃	605	16.7	19.0	〃	H 81	〃	〃	775	15.2	31.8	〃
H 32	〃	〃	96	22.3	24.1	〃	H 82	〃	〃	871	29.2	30.3	〃
H 33	〃	〃	135	19.1	19.8	〃	H 83	〃	〃	1020	19.7	24.3	〃
H 34	〃	〃	80	19.0	33.7	〃	H 84	〃	〃	855	18.7	23.8	〃
H 35	〃	〃	874	13.3	16.9	〃	H 85	〃	〃	1030	21.8	22.8	〃
H 36	〃	〃	604	9.0	12.3	〃	H 86	〃	〃	1385	8.4	31.2	〃
H 37	〃	〃	1033	20.4	25.3	〃	H 87	〃	〃	1021	23.4	32.4	〃
H 38	〃	〃	117	17.5	22.7	〃	H 88	〃	〃	615	16.0	21.2	〃
H 39	〃	〃	122	31.0	36.3	〃	H 89	〃	〃	886	14.7	19.5	〃
H 40	〃	〃	81	9.1	18.5	〃	H 90	〃	〃	847	17.1	18.4	〃
H 41	〃	〃	137	27.1	41.0	〃	H 91	〃	〃	547	11.6	21.0	〃
H 42	〃	〃	1342	11.4	16.3	〃	H 92	〃	〃	611	14.6	20.7	〃
H 43	〃	〃	1097	15.0	20.6	〃	H 93	〃	〃	1164	31.1	34.4	〃
H 44	〃	〃	178	11.7	12.5	〃	H 94	〃	〃	1133	16.7	25.4	〃
H 45	〃	〃	1166	22.8	23.5	〃	H 95	〃	〃	887	17.2	23.4	〃
H 46	〃	〃	1152	17.4	21.4	〃	H 96	〃	〃	1131	20.6	22.3	〃
H 47	〃	〃	1150	15.9	25.8	〃	H 97	〃	〃	1226	17.5	17.9	〃
H 48	〃	〃	1169	11.1	12.8	〃	H 98	〃	〃	1246	10.5	17.5	〃
H 49	〃	〃	1242	15.9	19.1	〃	H 99	〃	AS SK 01	793	13.2	18.5	〃
H 50	〃	〃	544	14.0	28.6	〃	H 100	〃	〃	797	23.6	30.9	〃

播表10 下山南通遺跡（A区）剝片一覽表(①)

No	分類	出土位置	取上番号	最大長さ (mm)	最大幅 (mm)	石材	No	分類	出土位置	取上番号	最大長さ (mm)	最大幅 (mm)	石材	
H101	横形剝片	A区 2A	112	33.6	48.8	青 磁	H151	剝 片	A区 1A	376	16.2	15.7	黒 磁 G	
#102	〃	〃	645	30.5	31.2	〃	#152	〃	〃	270	20.5	18.0	〃	
#103	〃	〃	115	23.9	27.9	〃	#153	〃	〃	35	46.2	27.8	〃	
#104	〃	〃	127	25.9	32.2	〃	#154	〃	〃	1054	29.9	17.6	〃	
#105	〃	〃	1242	15.6	23.7	黄 磁	#155	〃	〃	767	32.8	24.3	〃	
#106	〃	〃	1371	26.2	31.7	サスカイト	#156	〃	〃	28	37.6	27.0	〃	
#107	〃	〃	111	13.8	24.5	〃	#157	〃	〃	1055	36.3	23.7	〃	
#108	〃	〃	1246	12.9	26.3	〃	#158	〃	〃	528	17.4	16.2	〃	
#109	サブレンチ	3A	630	15.2	21.0	〃	#159	〃	〃	31	21.0	13.0	〃	
#110	〃	A区 3A	331	18.5	21.0	黑 墨 石	#160	〃	〃	18	26.0	16.0	〃	
#111	〃	〃	357	18.0	20.4	〃	#161	〃	〃	1289	23.6	20.0	〃	
#112	〃	〃	346	12.0	27.0	〃	#162	〃	〃	25	25.0	22.0	〃	
#113	〃	〃	353	31.5	38.6	〃	#163	〃	〃	503	19.4	12.2	〃	
#114	〃	〃	363	9.5	11.7	〃	#164	〃	〃	34	44.0	25.6	〃	
#115	〃	A区 1B	370	15.0	16.7	〃	#165	〃	〃	530	14.2	11.2	〃	
#116	〃	〃	965	25.0	27.4	〃	#166	〃	〃	504	9.0	5.4	〃	
#117	〃	〃	1090	29.0	39.5	〃	#167	〃	〃	1059	22.5	17.1	〃	
#118	〃	〃	318	20.8	28.5	〃	#168	〃	〃	22	36.5	15.3	〃	
#119	〃	〃	324	15.0	16.2	〃	#169	〃	A区 2A	1130	23.2	17.0	〃	
#120	〃	〃	711	16.0	21.5	〃	#170	〃	〃	1236	17.4	13.0	〃	
#121	〃	〃	751	9.8	13.8	〃	#171	〃	〃	1154	24.6	17.6	〃	
#122	〃	〃	698	17.8	18.6	〃	#172	〃	〃	646	42.0	41.0	〃	
#123	〃	〃	738	18.8	22.3	〃	#173	〃	〃	571	21.3	20.7	〃	
#124	〃	〃	709	12.1	13.0	〃	#174	〃	〃	164	22.6	22.0	〃	
#125	〃	〃	1094	22.4	22.5	〃	#175	〃	〃	1047	20.6	16.6	〃	
#126	〃	〃	969	22.6	26.6	〃	#176	〃	〃	1235	23.5	22.5	〃	
#127	〃	〃	714	16.3	36.2	〃	#177	〃	〃	630	30.2	29.4	〃	
#128	〃	〃	697	19.6	22.0	〃	#178	〃	〃	125	9.8	8.2	〃	
#129	〃	〃	1085	15.7	24.6	〃	#179	〃	〃	368	32.6	22.7	〃	
#130	〃	〃	974	14.7	16.5	〃	#180	〃	〃	1275	18.0	10.5	〃	
#131	〃	〃	736	20.4	26.3	〃	#181	〃	〃	1153	19.6	16.0	〃	
#132	〃	〃	1406	21.4	23.5	〃	#182	〃	〃	788	13.2	8.6	〃	
#133	〃	〃	1181	17.2	18.5	〃	#183	〃	〃	1443	7.9	6.2	〃	
#134	〃	〃	293	17.0	20.0	サスカイト	#184	〃	〃	361	13.6	16.9	〃	
#135	〃	〃	713	22.7	29.5	アノワ	#185	〃	〃	245	15.5	10.0	〃	
#136	〃	A区 2B	718	8.0	11.8	黒 墨 石	#186	〃	〃	588	15.0	14.0	〃	
#137	〃	〃	784	17.0	25.0	〃	#187	〃	〃	589	18.4	13.7	〃	
#138	〃	〃	782	16.0	28.5	〃	#188	〃	〃	1221	25.9	23.4	〃	
#139	〃	〃	1349	17.0	27.7	〃	#189	〃	〃	1220	20.8	18.7	〃	
#140	〃	〃	905	9.6	15.1	〃	#190	〃	〃	869	18.1	10.9	〃	
#141	〃	〃	907	11.1	18.0	〃	#191	〃	〃	1170	20.7	15.1	〃	
#142	〃	〃	1404	12.1	20.8	〃	#192	〃	〃	249	19.1	17.8	〃	
#143	〃	A区 6B	759	17.0	21.6	〃	#193	〃	〃	163	22.3	19.6	〃	
#144	〃	〃	29トレンチ	119	29.3	31.7	〃	#194	〃	〃	1226	17.2	12.0	〃
#145	〃	表 掘	1445	18.5	19.5	〃	#195	〃	〃	1424	17.1	15.1	〃	
#146	〃	掘下中	473	18.7	27.8	〃	#196	〃	〃	1142	17.2	17.0	〃	
#147	〃	〃	473	28.7	35.3	〃	#197	〃	〃	97	33.5	29.0	〃	
#148	〃	〃	29	18.1	30.1	〃	#198	〃	〃	1147	46.2	29.8	〃	
#149	〃	〃	723	19.2	32.9	サスカイト	#199	〃	〃	641	11.5	10.9	〃	
#150	〃	表 掘	1283	18.2	22.8	サスカイト	#200	〃	〃	1006	15.5	12.4	〃	

摺表11 下山南遺跡(A区)剝片一覧表②

No	分類	出土位置	出土番号	最大長さ (mm)	最大幅 (mm)	石材	No	分類	出土位置	出土番号	最大長さ (mm)	最大幅 (mm)	石材
H201	削片	A区 2 A	773	14.4	12.4	黒曜石	H244	削片	A区 3 A	352	43.0	18.0	黒曜石
#202	"	" "	904	25.4	14.9	"	#245	"	A区 1 B	808	25.7	23.5	鉄石英
#203	"	" "	391	18.6	15.2	"	#246	"	" "	319	32.0	26.2	ジャスパー
#204	"	" "	541	39.2	31.2	"	#247	"	" "	843	13.3	12.2	黒曜石
#205	"	" "	244	21.5	21.4	"	#248	"	" "	1677	41.0	35.5	"
#206	"	" "	1412	31.8	24.0	"	#249	"	" "	744	27.3	24.6	"
#207	"	" "	1378	15.6	14.2	"	#250	"	" "	735	10.6	7.6	"
#208	"	" "	229	26.9	21.7	"	#251	"	" "	708	17.2	9.3	"
#209	"	" "	1168	17.4	15.1	"	#252	"	" "	312	26.8	15.3	"
#210	"	" "	239	18.4	14.3	"	#253	"	" "	652	15.5	13.1	"
#211	"	" "	1261	16.2	14.7	"	#254	"	" "	831	12.0	7.0	"
#212	"	" "	236	21.0	12.3	"	#255	"	" "	690	25.0	16.5	"
#213	"	" "	1215	15.9	10.2	"	#256	"	" "	1180	22.4	17.5	"
#214	"	" "	86	29.8	21.2	"	#257	"	" "	695	26.3	18.0	サスカイト
#215	"	" "	872	19.2	14.4	"	#258	"	" "	957	36.9	27.7	黒曜石
#216	"	" "	1256	17.4	13.8	"	#259	"	" "	704	30.2	29.2	"
#217	"	" "	1031	24.5	16.0	"	#260	"	" "	1088	24.0	18.5	"
#218	"	" "	1246	17.8	15.2	"	#261	"	" "	1179	20.0	15.8	"
#219	"	" "	201	29.7	11.4	"	#262	"	" "	708	28.0	15.4	サスカイト
#220	"	" "	1131	14.1	11.0	"	#263	"	" "	846	19.3	17.2	鉄石英
#221	"	" "	100	22.8	17.0	"	#264	"	A区 2 B	906	15.4	15.0	黒曜石
#222	"	" "	534	15.0	12.5	"	#265	"	" "	1363	17.1	15.0	"
#223	"	" "	1401	49.0	38.3	"	#266	"	" "	326	20.4	20.1	"
#224	"	" "	599	33.4	20.6	"	#267	"	A区 20トレンチ	412	21.5	21.4	"
#225	"	" "	1027	22.5	13.4	"	#268	"	" "	380	27.1	18.8	"
#226	"	" "	1039	29.5	20.3	"	#269	"	A区 横下中	1200	26.7	16.6	"
#227	"	" "	1036	25.1	24.7	"	#270	"	" "	723	33.4	28.4	"
#228	"	" "	1359	22.2	15.2	"	#271	"	" "	473	38.2	36.2	ジャスパー
#229	"	" "	1230	16.4	14.2	"	#272	"	" "	473	32.2	33.1	黒曜石
#230	"	" "	606	43.4	33.6	"	#273	"	A区 0 B	980	30.0	28.0	"
#231	"	" "	597	23.4	21.3	"	#274	"	" "	982	15.0	15.0	"
#232	"	サブトレ	630	21.0	17.3	"	#275	"	A区表	1446	40.2	23.0	"
#233	"	S K -01	801	19.3	18.8	"	#276	刃	A区 1 B	847	56.1	15.2	"
#234	"	A区 2 A	118	20.5	15.1	珪岩	#277	刃刃状 薄片	" 2 A	641	35.1	16.2	ジャスパー
#235	"	" "	538	26.0	25.9	鉄石英	#278	圓 石	" "	890	26.2	8.5	黒曜石
#236	"	" "	590	16.0	15.5	アブライド	#279	"	" "	1068	38.0	17.6	"
#237	"	" "	641	20.4	12.1	サスカイト	#280	"	" "	1355	25.8	8.7	"
#238	"	" "	1069	24.9	18.4	珪岩	#281	"	" "	1157	30.6	13.6	"
#239	"	" "	231	32.8	25.0	サスカイト	#282	"	" 1 B	945	26.5	11.0	"
#240	"	" "	271	39.0	38.7	珪岩	#283	"	" "	322	17.6	7.7	"
#241	"	" "	1241	28.7	21.3	珪岩	#284	"	" 2 B	785	19.6	8.0	"
#242	"	A区 3 A	345	19.0	17.0	黒曜石	#285	"	20トレンチ	424	26.5	11.8	"
#243	"	" "	350	40.7	24.4	"	#286	"	" "	427	23.7	9.0	"

検表12 下山南通遺跡（A区）削片一覧表③

## 第4章 弥生時代の遺構と遺物

下山南通遺跡ではA区で弥生土器、B・C・D区で遺構と遺物を検出した。A区の遺物は全て上方からの流入と考えられる。B・C・D区は北東から南西へ降る地傾斜を有し、小さな稜線（平坦部）と小自然河川の流れる谷部からなる地形のうねりがみられる。遺構はB区北側の稜線を境にして、2つの遺構群がみとめられた。北部遺構群はB区北西隅、C・D区に広がり、C区中央の自然河川を挟んで北側の平坦面と、南側の傾斜面に立地している。南部遺構群はB区東側から南西へ向けて、緩い傾斜をもつ平坦地に立地している。

### 第1節 堅穴住居跡（S I）

堅穴住居跡は、やや異形のものと從来「段状遺構」と称されているものも含めて北部遺構群で9基、南部遺構群で6基の計15基を確認した。中期中葉～後期後半の時代幅の中におさまるものと考えられる。

#### S I -01

位 置 6R、6Sグリッドに渡り、その北側に位置する。南部遺構群の東端にあたり、西下がりの緩傾斜地（尾根部）に立地する。周辺には、S I -08、SK-42がある。床面標高は、224.20mを測る。西側光明を失っている。

形 態 平面形は円形と推定される。残存する床面は長径5.50m、短径3.40mを測り、推定床面積約28m<sup>2</sup>となる。最大残存壁高は東側で19.1cmを測る。

側 溝 幅20cm、深さ8cmの溝がめぐり、断面形はU字形を呈する。

柱 穴 主柱穴はP 1・P 2の2本で、主柱穴間距離は225cmである。規模はP 1より、(51×50-51.9) (68×66.48×36-36.2) cmを測る。両主柱穴とも柱痕は認められなかつたが、P 2では土壘断面において柱痕様の分層が確認できるが、その規模からして柱抜き取り痕と推定できる。その他、P 3・P 4のピットを2基確認し、規模はP 3より、(28×26-12.7) (34×34-18.5) cmを測る。

中央ピット 中央ピットP 5は、主柱穴間中央やや西よりに位置し、規模は(132×76-25.5) cmを測る。

土 層 埋土は、黒色粘質土（②・⑤・⑥）、黄褐色粘質土（①・③・④）に大別でき、主柱穴は前者の住居内及び側溝・中央ピットは、後者の埋土からなっている。土壘断面より、住居全体が埋まった後、主柱穴が埋まっていた様子が観察される。また厚さ7cm位の焼土が床面上及び中央ピット内に散在していたが、床面に接する状態では検出しなかった。また焼上面は検出しなかった。

遺 物 遊1、底部1、紡錘車1、砥石1を図化した。

時 期 遺物より弥生時代中期中葉と考えられる。

特筆事項 住居内に土壘様のピットP 5、6を確認した。その埋土が本住居内の埋土と類似しており、その埋土に住居内に散在する焼土と同様の焼土を伴うこと、側溝を攢乱していないことから、居住期に同時存在していたと判断した。

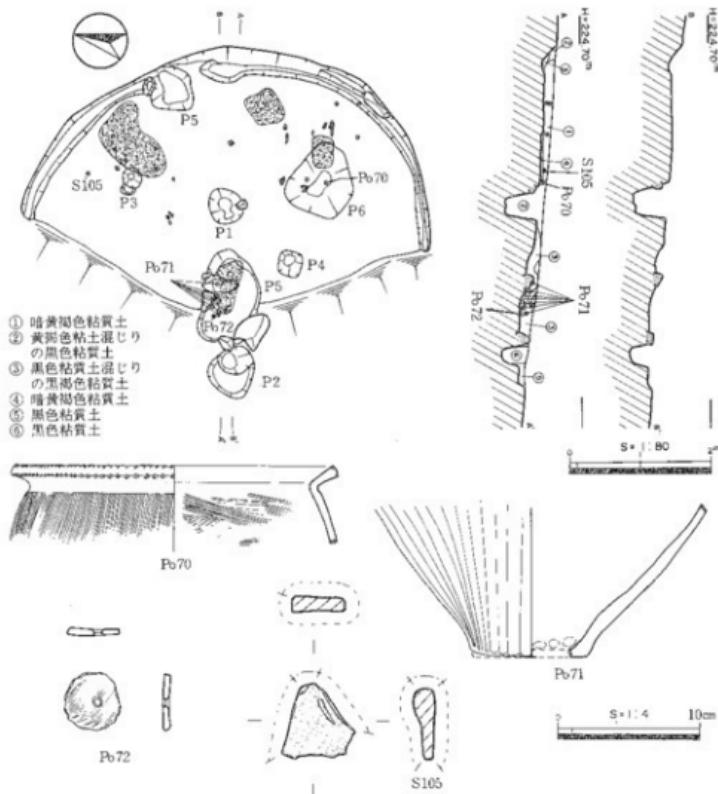


図21 S I - 01遺構遺物図

### S I - 02

**位置** 90グリッドの北部東側に位置する。南部遺構群のほぼ中央にあたり、東下がりの緩傾斜地（尾根部）に立地する。周辺には、SK - 08・31、09、10、11、12、30がある。床面標高は、221.74mを測る。西側の床面を失っている。

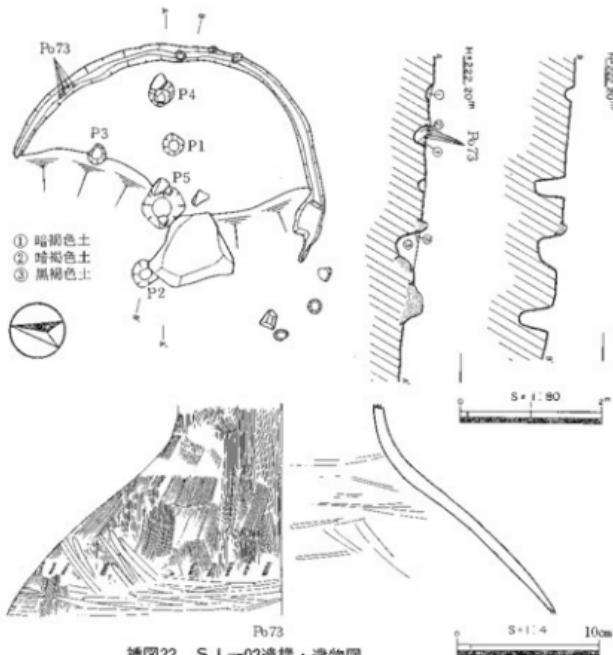
**形態** 平面形は円形と推定される。残存する床面は長径4.10m、短径2.40mを測り、推定床面積約14m<sup>2</sup>となる。また最大残存壁高は北東側で6.1cmを測る。

**側溝** 幅20cm、深さ3.7cmの溝がめぐり、断面形は梯形を呈する。

**柱穴** 主柱穴はP 1、P 2の2本で、主柱穴間距離は1.88mである。規模はP 1より、(31×28-48.8) (38×37-44.1) cmを測る。両主柱穴とも柱痕は認められなかった。その他、P 3・P 4のビット2基を検出し、規模はP 3より (28×26-11.6) (37×33-24.9)

cmである。

- 中央ピット 中央ピットP5は、主柱穴間の中央に位置し、規模は(62×60-31.6)cmを測る。  
土層 ③-②-①層の順序で埋まっていたと考えられる。また焼土面は検出しなかった。  
遺物 瓦1を図化した。  
時期 遺物より弥生時代中期と考えられる。



捕図22 S I - 02遺構・遺物図

### S I - 03

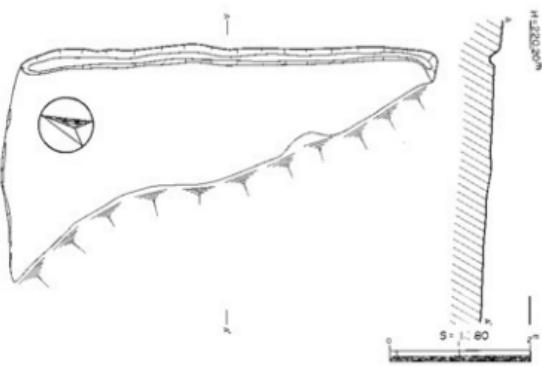
- 位置 10Oグリッドの南側に位置する。南部遺構群の中央南端にあたり、南西下がりの緩傾斜地(尾根部)に立地する。周辺には、SK-43、56、63、66がある。
- 形態 残存状況より、平面形は方形と推定される。残存する床面は一辺5.90mを測り、残存床面積9.19m<sup>2</sup>である。また、最大残存壁高は北東側で14.4cmを測る。
- 側溝 幅15cm、深さ3.0cmの溝がめぐり、断面形は梯形を呈する。
- 柱穴 検出しなかった。
- 中央ピット 検出しなかった。
- 土層 茶褐色土-層である。また焼土面は検出しなかった。
- 遺物 検出しなかった。
- 時期 周辺遺構の遺物より、弥生時代中期と推測する。

特筆事項 S I - 03は円形の平面プランを持たず、柱穴等も検出されていない為、通常の堅穴住居跡とは異っている。側溝等の存在からここでは住居跡として扱った。

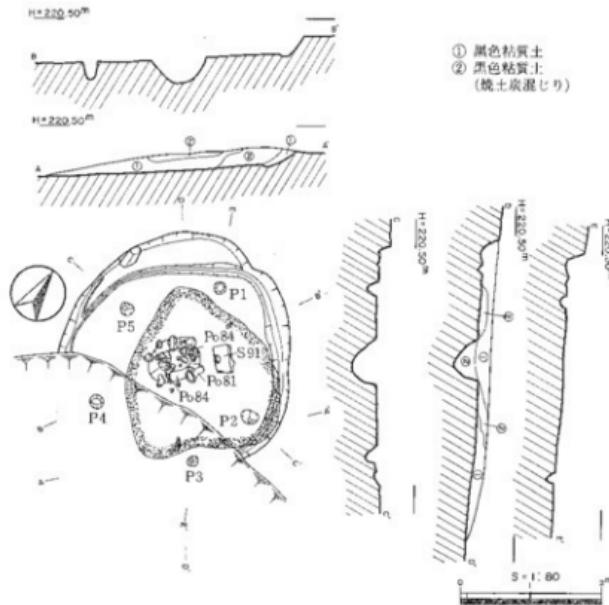
#### S I - 04

位 置 6 Mグリッドの東側に位置する。南部遺構群の中央北端にあたり、平坦面に位置する遺構群と離れて、南下がりの緩傾斜地（谷部）に立地する。周辺には、S K-75、76、77がある。床面標高は、220.00mを測る。南側 $\frac{1}{4}$ の床面を失っている。

形 態 側溝の残存状況より、平面形は隅丸方形と推定されるが、北側の床面の突出により



插図23 S I - 03遺構図



插図24 S I - 04遺構図

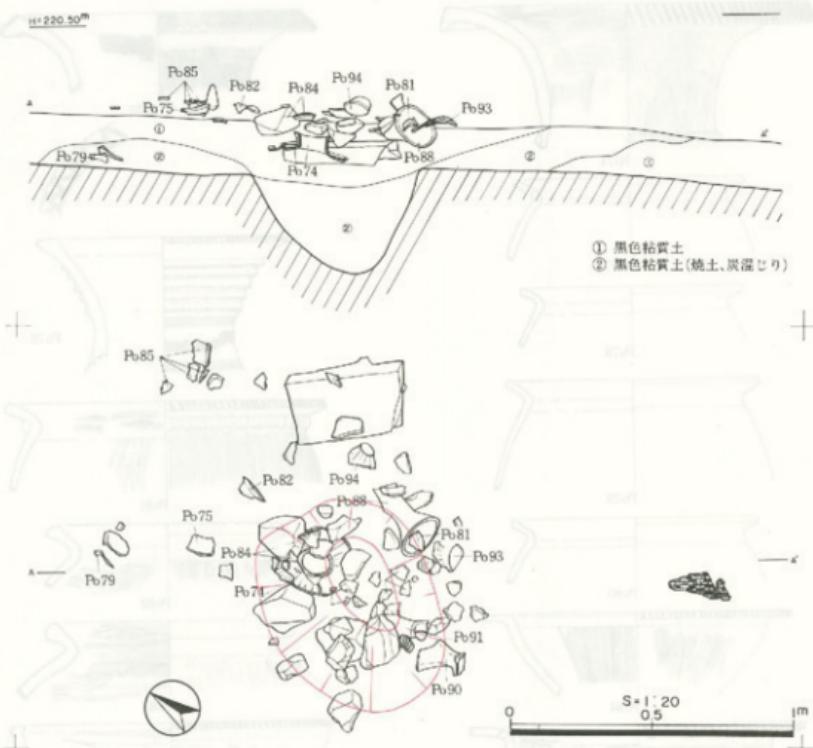


図25 S I - 04遺物出土状況図

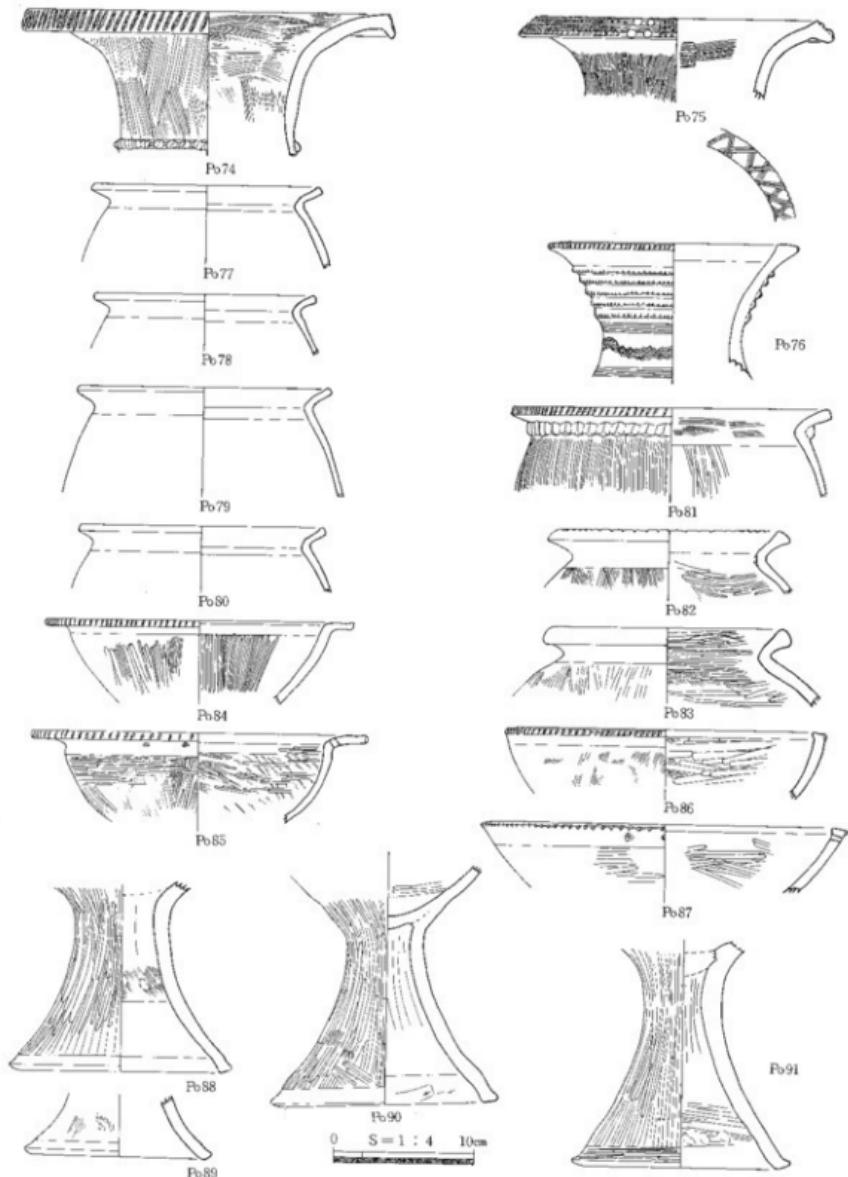
全体としては不整な形をしている。残存する床面（北側の部分を含む）は、長辺2.90mを測り、推定床面積7.3m<sup>2</sup>となる。また最大残存壁高は北側で28.8cmを測る。

**側溝** 幅20cm、深さ4.6cmの溝がめぐり、西側で二肢に分かれている。断面形はU字形を呈する。

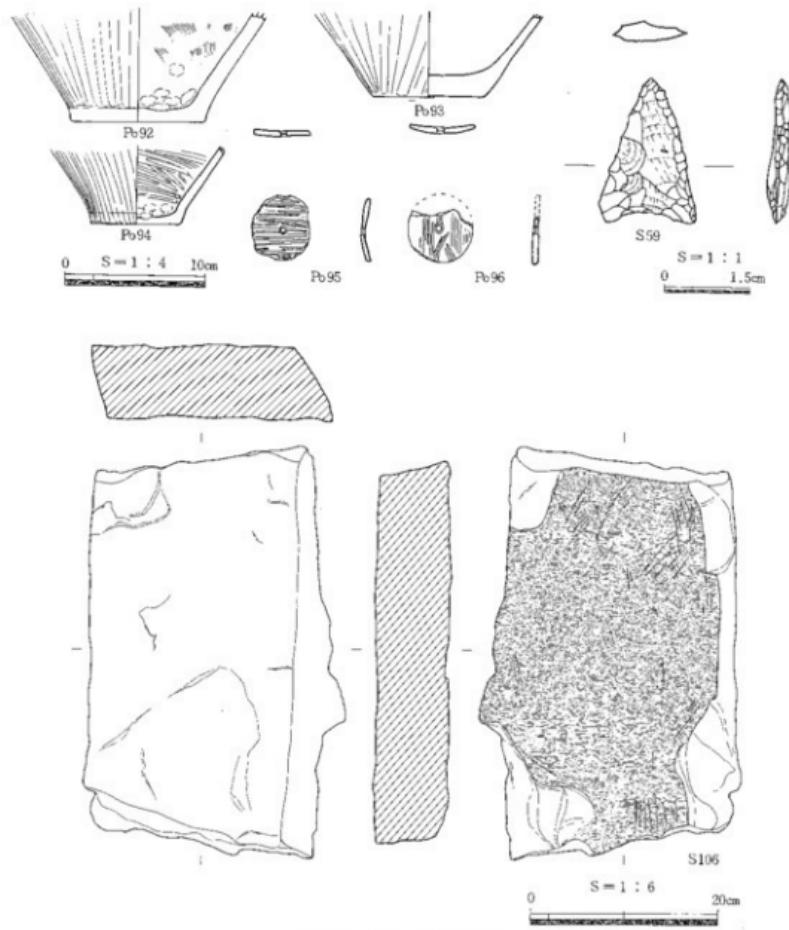
**柱穴** P 1～P 5のピット5基を確認し、その規模はP 1より、(17×17-8.9) (25×20-14.7) (28×23-21.9) (21×20-14.1) (21×18-14.1) cmである。南部遺構群中の他の堅穴住居跡の主柱穴の規模と比較すると、かなり貧弱なものであるため、P 1～P 5のピットは恒常的な居住の為の住居構造に伴う構造柱穴（＝主柱穴）とは異なるものであろう。

**中央ピット** 中央ピットP 6は、住居のほぼ中央にあり、規模は(80×60-37.3) cmを測る。

**土層** 住居跡のほぼ全域を覆うように分布する。焼土、炭混じりの黒色粘質土層（②層、部分的には焼土層を形成する）は、床面に密着してその上位10～15cmの厚さで堆積し



插図26 S i -04遺物図①



擇図27 S I-04遺物図②

ており、砥石（S106）の上面とほぼ同じ高さを有する。また、よくしまっており、叩きしめられた床面の如き様相を呈する。また焼上面は検出しなかった。

**遺 物** 壺5、甕5、高坏8、底部3、紡錘車2、石鎌1、砥石1を図化した。尚、Po92は内面に赤色顔料が付着している。

**出土状況** 中央ピット周辺に遺物が集中し、また挙大の礫が集石状を呈する。遺物及び礫は重なり合って混在しており、自然堆積によるとは考えにくく、何らかの人为的行為による所産と考えられる。遺物は弥生時代中期中葉に属し若干の時期差をもつ。

**時 期** 遺物が若干の時期幅を持って混在する為時期は判定しにくいが、②層に弥生中期中葉の甕が出土している事からこの遺構は中期中葉に使用されていたものと思われる。

**特筆事項** 明確な主柱穴が認められること、焼土が広く分布し叩きしめられていることから定住を意識した住居とは考えにくく、遺物が一箇所に集中して存在する（放棄の際の投げ込み、又は意図的な積み上げによるものと考えられる）こと、他の住居跡と比べて高环が多い事、また、赤色顔料の付着した底部片が出土した事などから、祭祀に関係する遺構と考えられる。

#### S I -05

**位置** 8M・8N・9M・9Nグリッドに渡り位置する。南部遺構群の中央やや西寄りにあたり、南西下がりの緩傾斜地（尾根部）に立地する。住居内にSK-68があり、周辺にはSK-62・72、67、69、70がある。床面標高は219.4mを測る。

**形態** 内側のS I -05 a（破線部分）と外側のS I -05 b・c（実線部分）の2回の建て替えが想定できる。S I -05 aは7本柱、S I -05 b・cは8本柱構造であり、竪穴の平面形は円形と推定されるが、側溝等を検出しなかったため明確にはできなかった。床面の範囲は不明確だが、主柱に接する円を描き、その規模を測ると内側より（径約5.76m・床面積約26.0m<sup>2</sup>）、（径約6.50m・床面積約33.0m<sup>2</sup>）（径約6.50m・床面積約34.0m<sup>2</sup>）という拡張がみられる。

**側溝** 検出しなかった。

**柱穴** 主柱穴はS I -05 aよりP 1～P 7の7本、P 8・9・3・10～14の8本、P 8・9・3・10～12・15・16の8本で、主柱穴間距離はP 1より186・228・254・232・228・276・220、P 8より186・265・216・200・245・250・260・195、P 12より235・287・220cmである。またS I -05 bはS I -05 aとP 3を共有し、S I -05 cはS I -05 bとP 8・P 9・P 3・P 10・P 11・P 12を共有する。主柱穴の規模はP 1より（28×26-38.7）（30×29-47.9）（29×28-47.0）（45×43-27.3）（31×30-20.6）（28×27-71.3）（32×30-29.9）（45×30-35.0）（29×28-44.7）（33×32-49.5）（80×75-20.6）（37×34-20.4）（33×25-12.4）（28×27-36.8）（32×28-32.5）（26×25-36.1）cmを測る。また各主柱穴とも柱痕は認められなかった。中央ピットの両端にピットP 17・18を検出した。規模は（60×50-34.9）（36×34-29.7）cmを測る。いずれも柱痕は認められなかった。

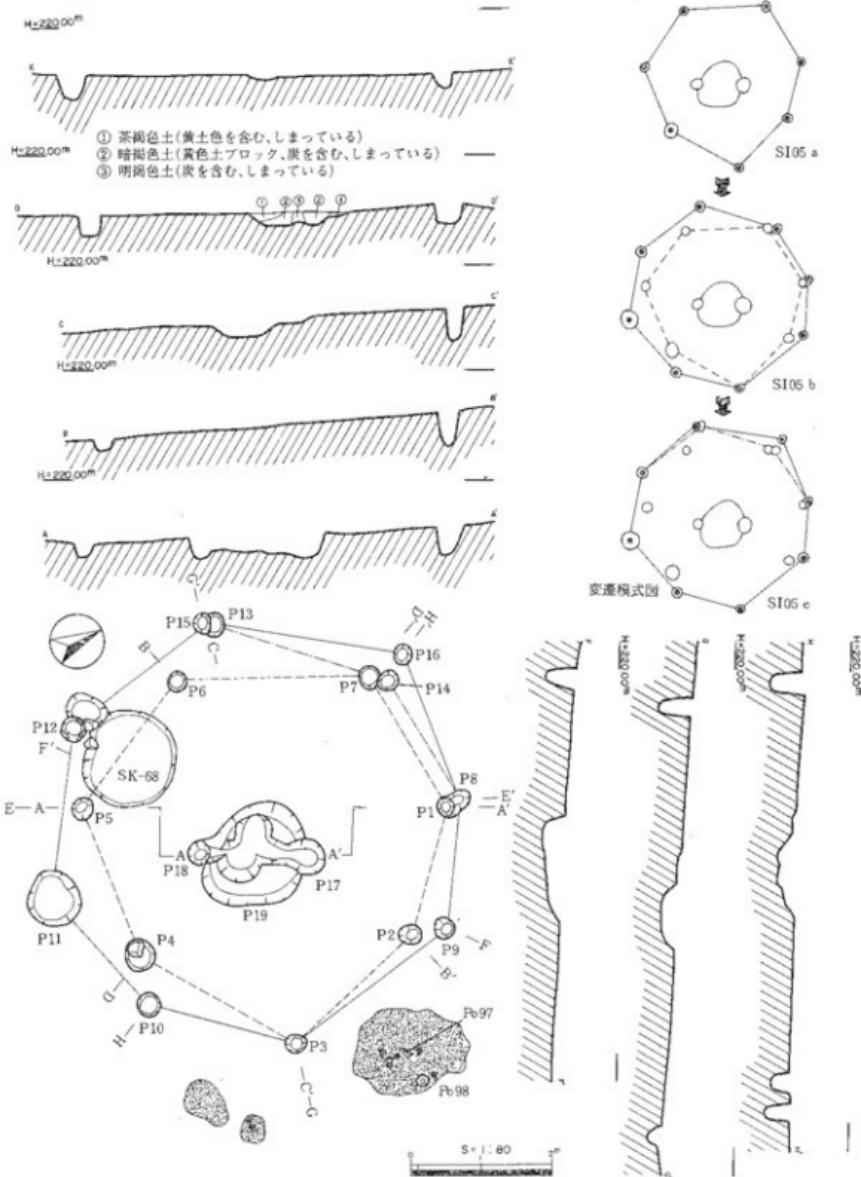
**中央ピット** 中央ピットP 19は、住居のほぼ中央に位置すると考えられる。二段掘りになっており、規模は（160×140・102×60-34.9）cmを測る。

**土層** 各主柱穴とも埋土は黒色粘質土層である。また中央ピット内の埋土は、炭を含んでいる。

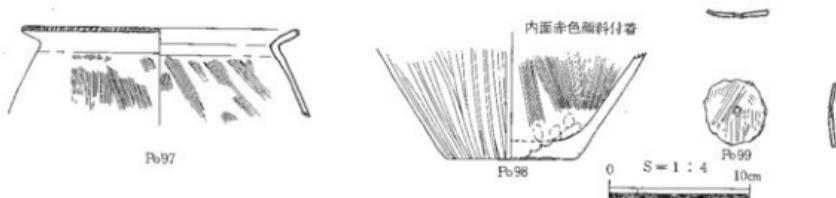
**遺物** 検出していない。

**時期** 周辺遺構の遺物より、弥生時代中期中葉と推測される。

**特筆事項** 住居の東側に隣接して、焼土及び甕1、底部1（赤色顔料付着）、紡錘車1を検出したが、位置的には住居内に含まれることが想定され、住居床面の範囲がここまで広がる可能性は高い（径約8.40m、面積約55.4m<sup>2</sup>）。またSK-68も住居内施設と考えられ



插図28 SI-05遺構図



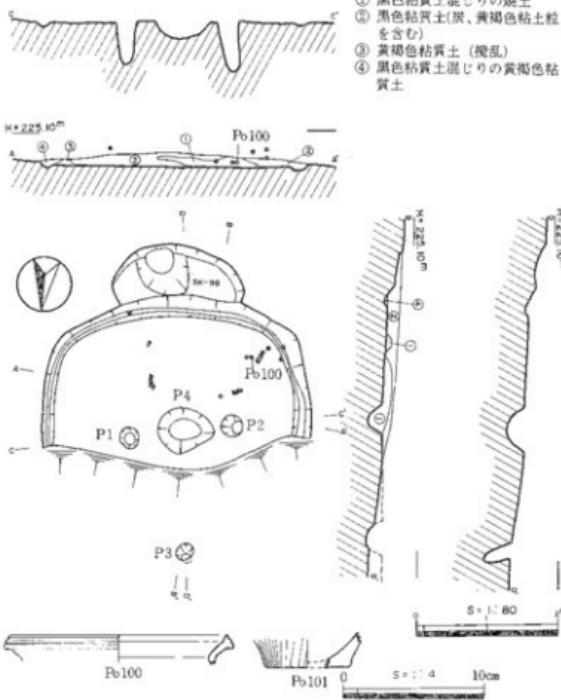
挿図29 S I - 05周辺出土遺物図

るが、詳細は不明である。S I - 05は多主柱構造で、南部遺構群の他の堅穴住居と比べると規模も大きく、北部遺構群のS I - 10同様やや突出した存在である。

#### S I - 06

- 位 置** 0 K、0 Lグリッドに渡り、その南端に位置する。北部遺構群の東端にあたり、北下がりの緩傾斜地に立地する。新旧関係は不明だが、SK-98と切り合い関係にあり周辺には、SK-95、96、97がある。床面標高は、224.70mを測る。
- 形 態** 平面形は隅丸方形と推定される。残存する床面は、長辺3.40mを測り、推定床面積約11.5m<sup>2</sup>となる。北方向に若干傾斜する。また最大残存壁高は東側で13.5cmを測る。
- 側 溝** 幅16cm、深さ3.7cmの溝がめぐり、断面形はU字形を呈する。
- 柱 穴** 主柱穴はP 1～P 3の3本で、宅柱穴間はP 1より、150～200～186cmである。規模はP 1より、(28×27-59.7) (31×28-67.4) (26×22-36.3) cmを測る。各主柱穴とも柱痕は認められなかった。また床面に対して、P 1は垂直、P 2は東方向に約10°、P 3は南方向に約20°の傾きを有し、住居構造が地傾斜に支配されていたことが頗推できる。
- 中央ピット** 中央ピットP 4は、主柱穴3本を結ぶ三角形の中心より南方へずれ、規模は(80×66-24.6) cmを測る。
- 土 層** 残存する床面の大部分は、やや堅固な黄色粘土(地山)を地盤とし、残存床面の一部及び北半分がこれの黒ボク化した軟弱な土層(地山)を地盤としている。全体に叩きしめられており、この傾向は後者の部分に顕著に認められたが、この部分に黄色粘土を覆いかぶせさらに叩きしめるという作業は行なわれていない。
- 埋土は、焼土、炭、黄褐色粘土粒(細隙)の多少及び色、粘性などで擾乱層(③)を除いて3層に分層した。平面的には焼土を多量に含む層(①)は、住居の中央やや南東側に広く分布する。また各主柱穴の埋土は②層よりなり、中央ピットは①層となる。また焼土面は検出しなかった。
- 遺 物** 瓢1、底部1を図化した。
- 時 期** 遺物より、弥生時代中期後葉と考えられる。

H=225.10m



挿図30 SI-06遺構・遺物図

## SI-07

位 置 1 J グリッドの中央西寄りに位置する。北部遺構群の東側にあたり、北東下がりの緩傾斜地（谷部）に立地する。周辺に SK-90～93がある。床面標高は、223.27mを測る。

形 態 残存状態から隅丸方形か長方形と推測されるが、明確でない。残存する床面は一辺3.10mで、最大残存壁高は南側で14.8cmを測る。

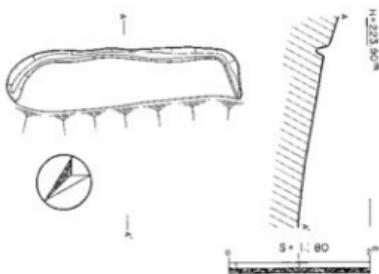
倒 溝 幅10cm、深さ2.8cmの溝がめぐり、断面形状は梯形を呈する。

柱 穴 検出しなかった。

中央ピット 検出しなかった。

土 層 埋土は黒色粘質土である。また焼土面は検出しなかった。

遺 物 弥生土器片を検出したが図化できなかつた。



挿図31 SI-07遺構図

時 期 周辺遺構の出土遺物から弥生時代中期後葉と推測する。

S I -08

位 置 6 S グリッドの中央南端に位置する。南部遺構群の東端にあたり、南西下がりの緩傾斜地（尾根部）に立地する。周辺には、S I -01がある。床面標高は、224.32mを測る。

形 態 平面形は隅丸長方形である。床面は、長辺3.26m、短辺1.95m、面積5.71m<sup>2</sup>を測る。また、最大残存壁高は東側で28.9cmを測る。

側 溝 幅40cm、深さ4.3cmの溝がめぐり、断面形はU字形を呈する。

柱 穴 検出しなかった。

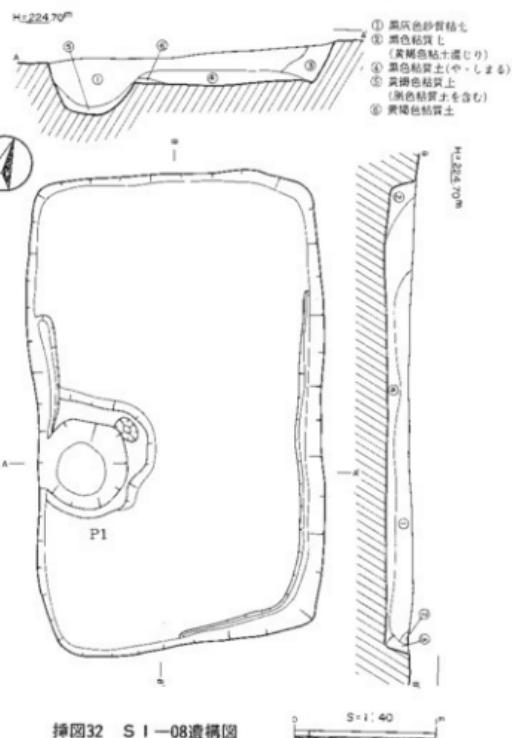
中央ピット 住居の西側端に位置する。規模は(61×60-15)cmで、幅21cm、高さ6.2cmの土堤が周囲にめぐる。

土 層 床面は、黄色粘土層（地山）を地盤としており、顕著な叩きしめが行なわれている。また土堤を構成する⑥層は、地山を叩きしめたものと考えられ、かなり堅固である。焼土及び焼土面は全く検出せず、中央ピット内の埋土にも焼土・炭などは含まれていなかった。

遺 物 検出しなかった。

時 期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

特筆事項 S I -08は長方形の平面プランをとり、規模がやや小さいこと、柱穴がみられないことから当初は土堤と考えた。後に一部側溝がめぐり、位置がずれるが中央ピットに相当するP 1が存在することから、竪穴住居跡として扱った。普遍的な竪穴住居とは性格を異なるものと考えられる。



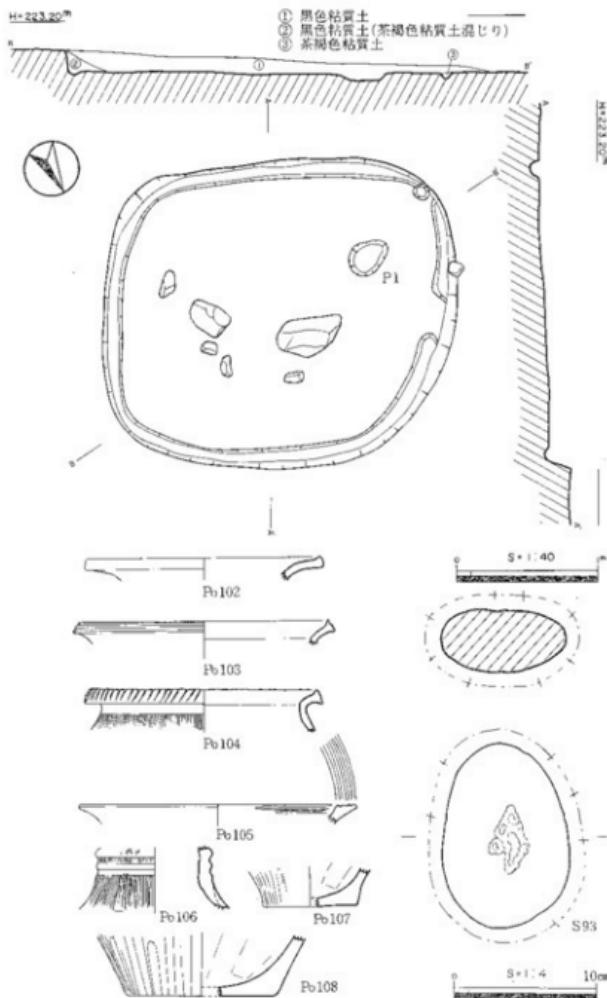
挿図32 S I -08遺構図

## S I -09

位 置 O I グリッド北部にあり、S B-13の北西側に位置する。北部遺構群北東部の緩傾斜地に立地する。

形 態 平面形は隅丸長方形である。床面は長辺2.2m、短边1.92m、面積3.78m<sup>2</sup>で、最大残存壁高は北側で18.4cmを測る。床面に食い込む跡が表出している。

側 溝 幅12~14cm、深さ1cmの溝が壁際にめぐり、断面形はU字形を呈する。西側の1箇



挿図33 S I -09遺構・遺物図

所で途切れるが、ほぼ全周する。

柱穴 柱穴は確認できなかったが、住居跡南西部で性格不明のP1を検出した。規模は(23×22-4.8)cmである。

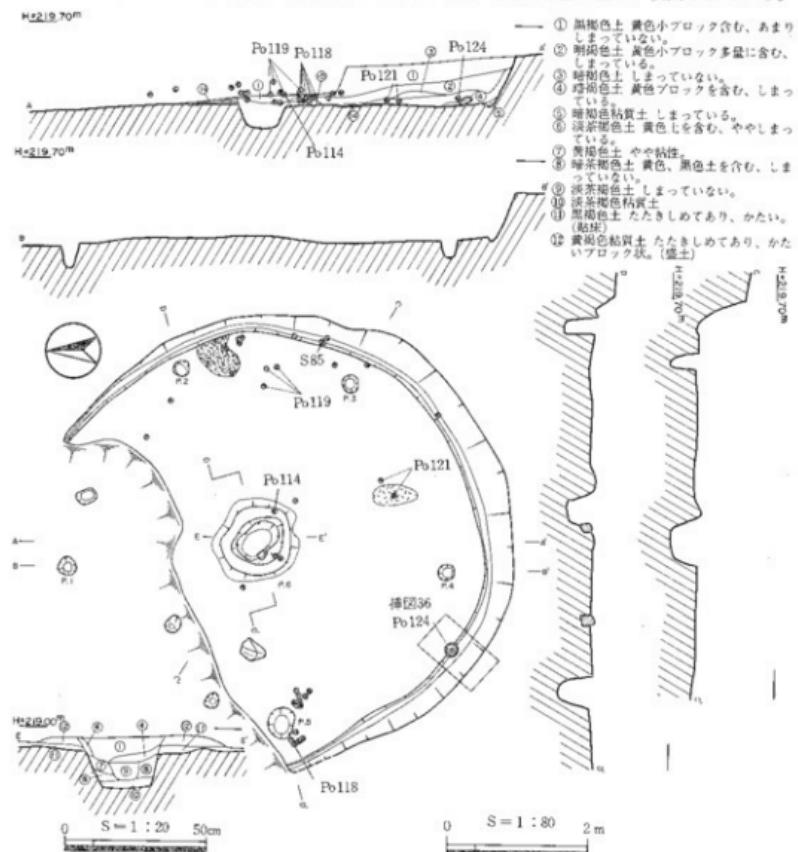
土層 床面は、やや堅固な茶褐色粘質土を地盤とする。埋土はP1のそれも含め3層に分層される。

遺物 壺1、甕2、高壙2、底部2、磨石・敲石1を図化した。

時期 遺物より弥生時代中期後葉と考えられる。

#### S I - 10

位置 5Cグリッドの南東隅に位置する。北部遺構群の南側で、北西下がりの緩傾斜地に立地する。S I - 14と切り合い関係にあり、周辺には約5m離れてS I - 12、S I - 15、S B - 06が存在し、南東側にはSK - 118~121の4基の土塗が検出されている。



挿図34 S I - 10造構図

床面標高は218.63mを測る。

- 形 態 試掘トレンチにより南側の $\frac{1}{2}$ の壁体・床面を失っているが、残存部分と主柱穴からみて、一辺約3mの隅丸五角形の平面プランを探るものと考えられる。残存する床面は東西径5.86mで、面積23.28m<sup>2</sup>を測る。復原すれば約30m前後の床面積があったものと推定される。最大残存壁高は南側で67.5cmを測る。
- 側溝 壁際に幅17cm、深さ4cmの断面U字状の溝が巡るが全周するかどうかは確認できない。
- 柱穴 主柱穴はP1～P5の5本で、主柱穴間距離はP1から329～245～304～321～377cmを測る。P1とP5の間隔が他に比べて広く、地傾斜と併せて、P1、P5間が、入口の可能性がある。各柱穴の規模はP1(26×26-36.4) P2(23×23-44.7) P3(24×22-36.2) P4(22×21-25.4) P5(44×38-45.3) cmとなる。各柱穴とも十分な深さをもつしっかりしたピットであるが、柱痕は検出されなかった。主柱穴以

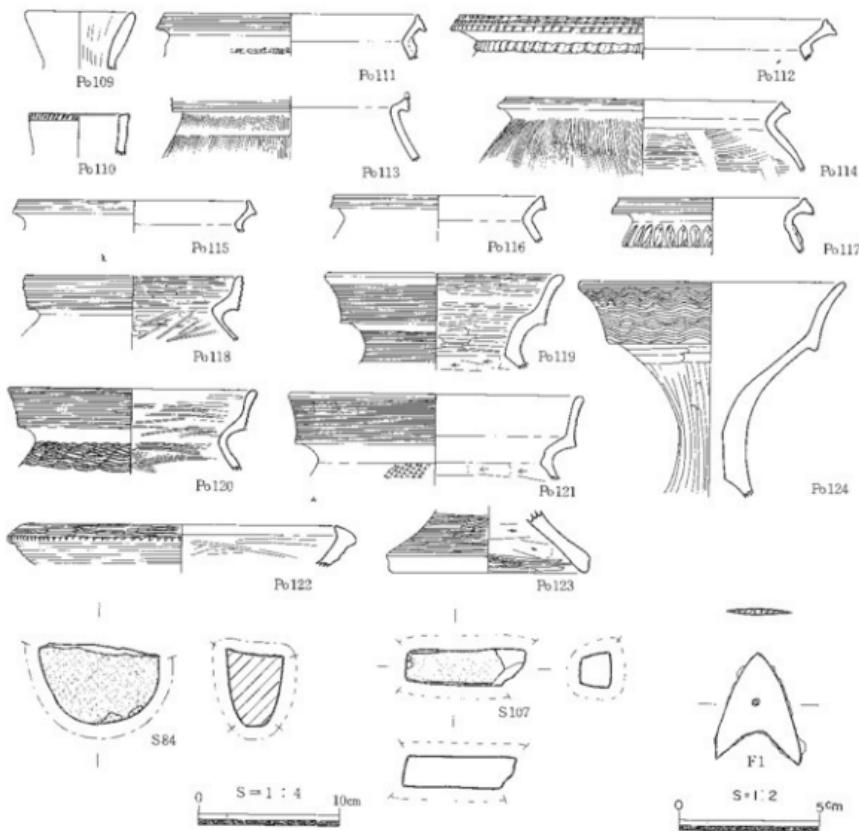


図35 S I-10遺物図

外に3基のピットが存在するが、性格は不明である。<sup>H22.8.80n</sup>

中央ピット 中央ピットP6は住居跡のほぼ中央に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は63×41-30cmを測る。上縁周囲を幅30cm、高さ10cmの盛土による土堤が巡っている。

土層 床面は全体によくしまっており、低位の北側には黒褐色土をたたきしめて貼床を施している。中央ピットの土堤はこの上に黄褐色粘質土をつき固めて造られていた。埋土は褐色系の土が、地傾斜に沿って南側に厚く、北側に薄く堆積しており、西側壁際で炭化物混じりの焼土のひろがりを確認している。中央ピットは底面に淡茶褐色粘質土が堆積し、中央部に柱痕状のしまりのない淡茶褐色土層がみとめられた。焼土・炭化物・灰等は検出されていない。この他に南側で63×30mの楕円形を呈す焼土面を検出した。

遺物 遺物は中央ピット脇で床面に密着して凹基腹挿式単孔の鉄錐F1が検出され、南側では側溝上に脚台部を欠損した器台P0124が口縁を下にして置かれていた。その他埋土中から土器片を多く検出しており、甕10、高杯、器台、小型壺2、磨石・敲石1、砥石1を同化した。

時期 出土土器には弥生時代中期後葉～後期後半まで幅があるが、床面直上遺物と、軽穴平面プランからみて弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

特筆事項 S I-10は規模も大きく、構造もしっかりしている。加えて、鉄製品も出土しており、下山南道遺跡の堅穴住居の中では突出した存在である。

#### S I-11

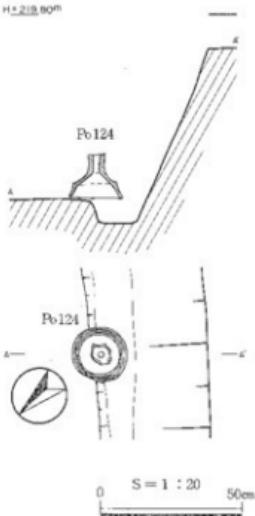
位置 4Eグリッド南東隅に位置する。北部遺構群の西側にあたり、北西向きの緩傾斜地に立地する。新旧関係は不明だがSK-116と切り合い関係にあり、SK-116がS I-11を切っている可能性が強い。また遺構内には平安時代（9世紀代）の遺構と考えられるSB-07が存在する。床面標高は219.30mを測る。

形態 平面形は隅丸方形と推定される。残存する床面は一辺5.1mを測り、推定床面積約26.0m<sup>2</sup>となる。北西の一辺は傾斜のため削平されている。また最大残存壁高は、東側で50.4cmを測る。

側溝 幅12cm、深さ5.3cmの溝がめぐり、断面形はU字形を呈する。

柱穴 主柱穴はP1～P4の4本で、主柱穴間距離はP1より292-295-314-288cmである。規模はP1より(33×30-49.9)(32×30-55.9)(31×26-51.9)(42×38-52)cmを測る。各主柱穴とも柱底は認められなかった。

中央ピット 中央ピットP5は住居跡のほぼ中央に位置し、規模は(96×81-32)cmで、中央ビ



插図36 S I-10遺物出土状況図

H=220.20m

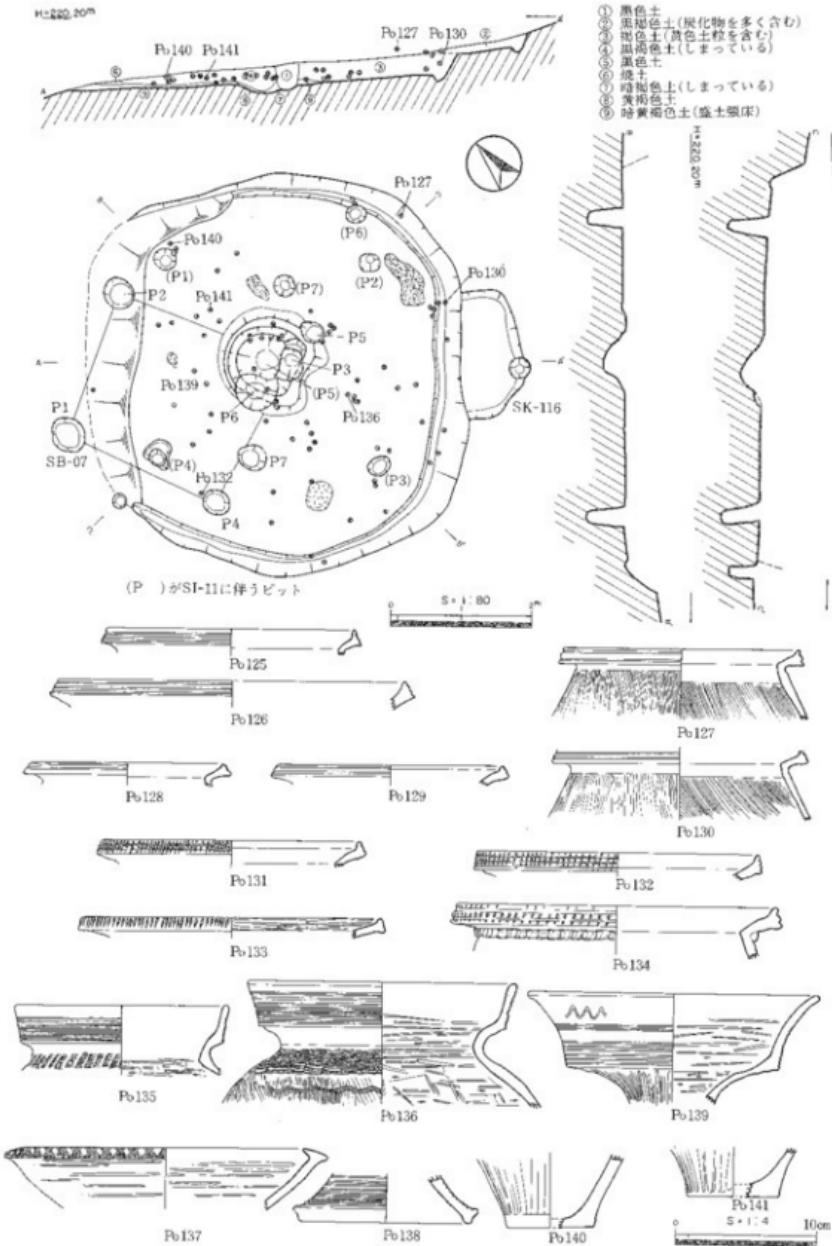


図37 SI-11遺構・遺物図

ットのまわりに幅43cm、高さ29cmの土堤が巡る。後の時代のS B-07、及び同時期のピットによって切られている。

- 土 層 北西下がり緩傾斜を掘り込んだ住居跡で、その傾斜を平らにするための貼床⑨層が北西側半分程に施されている。暗黄褐色の叩きしめられた粘質土層である。③④⑤層が堆積した後、平安時代のS B-07のピットに切られている。焼土面を1ヶ所、焼土を数ヶ所確認した。
- 遺 物 床面直上から埋土上面にかけて広範囲に散在的に分布しており、甕12、高环2、器台1を回収した。
- 時 期 出土した土器片は、弥生中期中葉～後期後半にかけての時期にあたる。床面に出土した器台片などが後期後半にあたる事、また住居跡の形態が隅丸方形と考えられ、中期においては円形を呈するものが多い事などから、このS I-11は弥生後期後半の住居跡と考えられる。

#### S I-12

- 位 置 6Dグリッドの北東隅に位置する。北部遺構群の西南端にあたり、北下がりの緩傾斜地に立地する。周辺にはSK-118～121・S I-10がある。床面標高は219.64mを測る。
- 形 態 平面形は円形で、床面は長径3.94m、短径3.64m、面積10.96m<sup>2</sup>となる。また、最大残存壁高は南東側で52.2cmを測る。
- 側 溝 幅15cm、深さ6.3cmのしっかりした溝が、その南側を若干切ってめぐり、断面形はU字形を呈する。側溝が切れる南側は、入口という可能性も考えられよう。
- 柱 穴 主柱穴はP 1～P 3の3本で、主柱穴間距離は、P 1より310～258～314cmである。規模はP 1より、(33×31-54) (34×26-42.6) (40×32-61.7) cmを測り、各主柱穴とも柱痕は認められなかった。また中央ピットすぐ北側にしっかりした補助柱穴と思われる規模(14×14-30.5) cmのP 5を検出している。
- 中央ピット 中央ピットP 4は主柱穴3本を結ぶ三角形の中心に位置し、規模は(74×48-31.1) cmを測る。中央ピットのまわりには、黄色土を叩きしめた土堤がその南側半分程度残存している。
- 土 層 床面はやや堅固な黄色粘土(地山)を地盤としている。叩きしめられた痕跡、貼床は見られない。埋土は、黄色小粒土の多少及び色、粘性などによって5層に分層した。各主柱穴の埋土は明茶褐色土一層、中央ピットは、しまりのない淡黄色土からなる。焼土面を中央や東側に、焼土を南西側にそれぞれ1ヶ所確認した。
- 遺 物 埋土から床面にかけて弥生土器片が出土したが、埋土中より出土した甕5、底部2を回収した。
- 時 期 出土した遺物は弥生時代中期～後期まで幅があるが、周辺遺構の時期と併せて考えると、弥生時代後期後半と推定される。

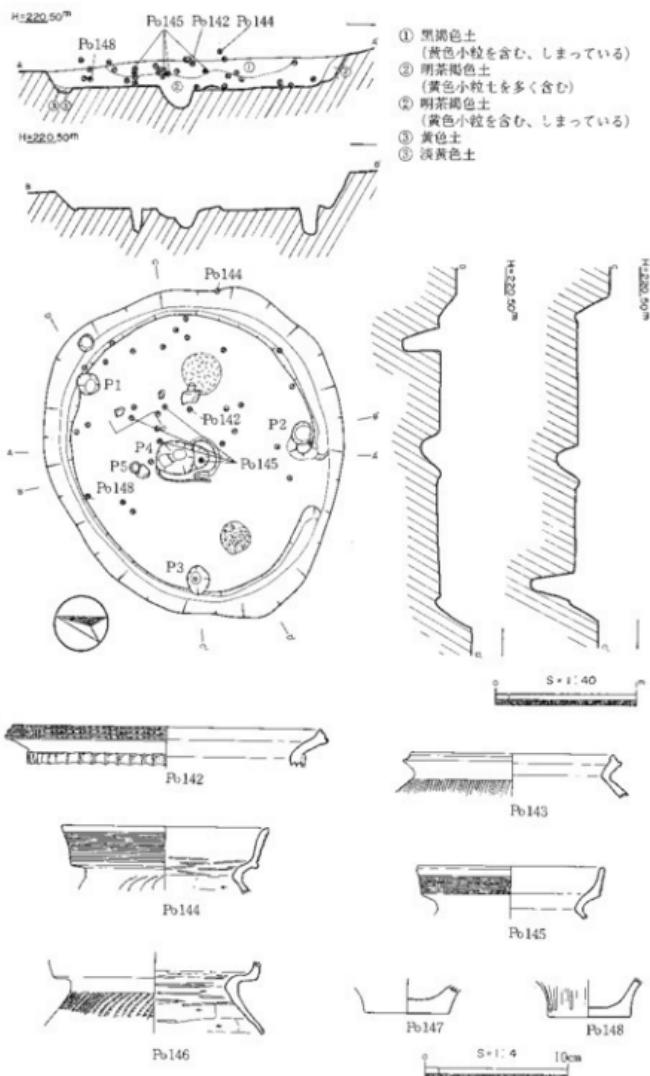


図38 S I - 12構造・遺物図

特筆事項 3本の主柱穴が、側溝に密着して掘り込まれている。この事は側溝が雨よけの溝でない事の根拠となろう。

### S I - 13

- 位 置** 2 H グリッドの北東側に位置する。北部遺構群の東側にあたり、北西下がりの緩傾斜地（尾根斜面）に立地する。周辺には、SK-87、88、89、90などがある。床面標高は、222.02mを測る。
- 形 態** 平面形は、円形と推測されるが明確でない。床面は南側の一部を残し大半が流失している。また、最大残存壁高は東側で8.50cmを測る。
- 側 溝** 幅15cm、深さ4.0cmの溝がめぐり、断面形はU字形を呈する。
- 柱 穴** ピットP1～3を検出した。規模はP1より、(32×25-39.9) (23×22-27.3) (22×20-10.5) を測る。また各柱穴とも柱痕は検出しなかった。
- P1-P2間距離は126cmを測り、S I-06 (P1-P2、155cm) から類推すると、P1・2を逆三角形の底辺におく、3主柱住居であった可能性が考えられる。
- 中央ピット** P3が中央ピットである可能性が考えられるが、明確でない。
- 土 層** 埋土は黒色粘質土層である。
- 遺 物** 無頸壺P○149を検出した。
- 時 期** 出土遺物及び周辺遺構の遺物から判断すると、弥生時代中期後葉と推測される。

### S I - 14

- 位 置** 6 C グリッドの北側に位置する。北部遺構群の西側南端にあたり、北西下がりの緩傾斜地（尾根斜面）に立地する。S I-10によって北東側を切られ、周辺にはS I-15、SB-06、SK-122がある。床面の標高は、219.15mを測る。
- 形 態** 平面形は隅丸方形と推定される。残存する床面は、-辺4.30mを測り、平面形を方形とした場合推定床面積18.5m<sup>2</sup>となる。また、最大残存壁高は東側で19.5cmを測る。
- 側 溝** 検出しなかつた。
- 柱 穴** 穴柱穴は検出しなかったが、ピットP1を1基確認した。規模は(21×18.5-16.9)cmを測

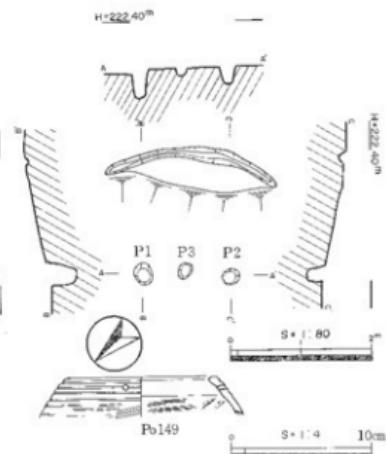


図39 S I-13遺構・遺物図

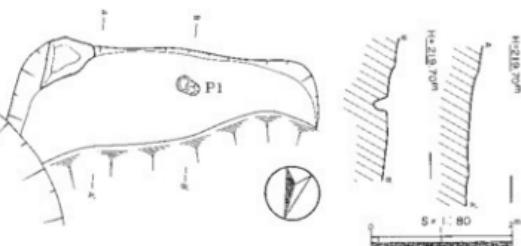


図40 S I-14遺構図

る。

中央ピット 検出しなかった。

土 壤 黒色粘質土一層である。焼土・焼上面とともに検出しなかった。

遺 物 弥生時代中期と思われる土器片を検出したが、図化できなかった。

時 期 S I-10（後期前半）に切られていることと、出土遺物から判断すると弥生時代中期と推測される。

特筆事項 S I-14は側溝・柱穴を持たず、通常の竪穴住居跡とは異なり從来「段状遺構」と呼ばれているものである。

#### S I-15

位 置 6Bグリッドのほぼ中央に位置する。北部遺構群の西側南寄りにあたり、北下がりの緩傾斜地（尾根斜面）に立地する。S B-06と切り合い関係にあり、周辺にはS I-14、S K-122がある。床面標高は、219.18mを測る。

形 性 半面形は隅丸方形と推定される。残存する床面は、長辺6.44mを測り、北側は殆ど流失している。また、最大残存壁高は、南側で24.0cmを測る。

側 溝 検出しなかった。

柱 穴 検出しなかった。

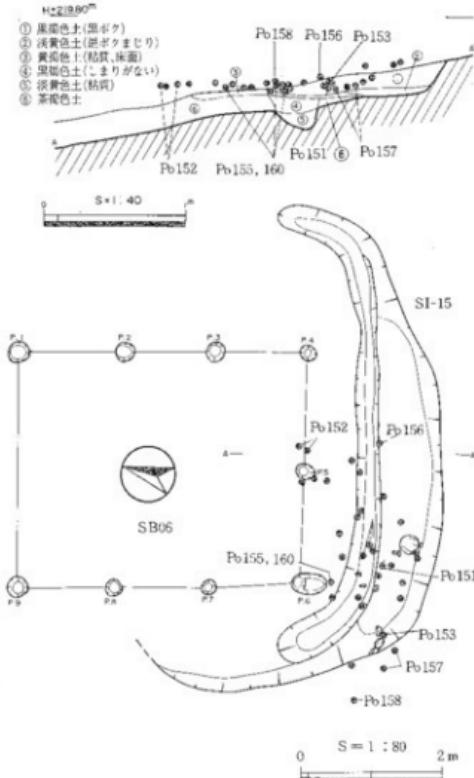
中央ピット 検出しなかった。

土 壈 ②・③層は地山系の粘土層（厚さ6cm位）で、叩きしめられており、住居の床面を構成している。平・断面に示された溝は②・③層に覆われており、遺物は①層に集中する。

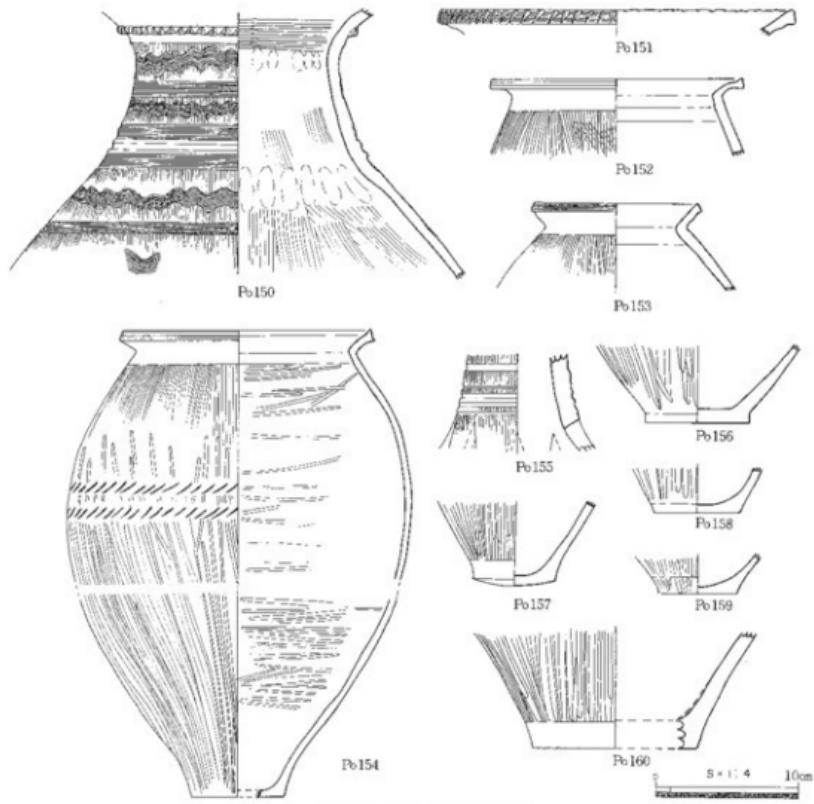
遺 物 壺1、甕4、高壺1、底部5、磁石1を図化した。

時 期 遺物より弥生時代中期後葉と考える。

特筆事項 平・断面に示された溝（幅45cm、深さ23cm）は、明らかに住居床面の下位にあり、住居以前の遺構である。住



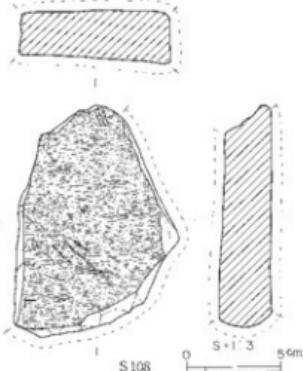
插図41 S I-15遺構図



挿図42 S I - 15遺物図①

居の側溝にしては、本遺跡内のものと比較すると、圧倒的に規模が大きく、側溝とは考えにくい。切り合ひ関係にあるSB - 06に伴う施設の可能性も考えられるが、明確なことはいえず、その性格は不明である。S I - 15は、隣接するS I - 14と同様に側溝・柱穴がみとめられず、従来「段状遺構」と称されていたものであろう。ここで貼床が検出されたことより居住という機能を推定するのが妥当と考えられる。

(中原 齊、浅川美佐子、松本琢己)



挿図43 S I - 15遺物図②

## 第2節 掘立柱建物

掘立柱建物はB区で5棟、C区で7棟、D区で2棟、計14棟を検出した。そのうち弥生時代の遺物を検出したもの3棟、平安時代のもの1棟、遺物による時代判定のできないもの10棟を確認した。弥生時代のもののうち、1棟は束柱をもつ総柱の建物である。

### S B-01

位 置 7R、8Rグリッドにわたって位置する。南部遺構群の東端にあたり、南西下がりの緩傾斜面に立地し、柱穴ラインの内側にSK-01、周辺にはSI-01、SK-03、14、42、52などがある。標高223m前後を測る。

形 態 梁間2間(2.88m)桁行5間(7.86m)の長棟建物である。但し、北側のP1、P13間の柱穴は検出しておらず、北側梁間は1間となる。柱穴間距離はP1から1.46・1.63・1.44・1.93・1.40・1.31・1.56・1.26・1.98・1.54・1.47・1.60・2.88mで、主軸はN-24°Wである。

柱 穴 各柱穴の規模はP1(26×24-29) P2(41×36-47) P3(39×30-15) P4(24×20-45) P5(21×19-38) P6(24×19-30) P7(21×19-14) P8(26×25-18) P9(26×25-47) P10(30×26-14) P11(26×24-15) P12(26×23-18) P13(29×23-21)cmである。各柱穴とも柱痕は認められなかった。

土 層 各柱穴とも埋土は黒色粘質土一層である。

遺 物 検出しなかった。

時 期 不明である。

H=224.00m

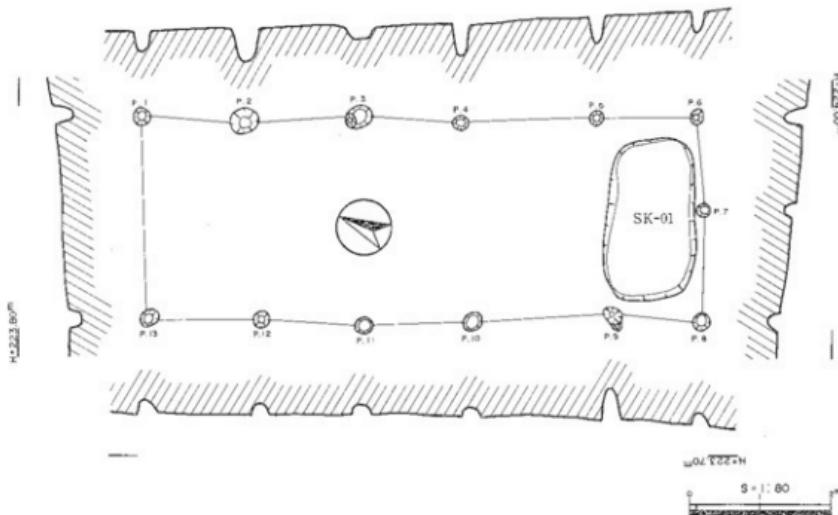


図44 S B-01遺構図

## S B-02

- 位 置 11M、11Nグリッドにわたって位置する。南部遺構群の北端やや西寄りにあたり、南西下がりの緩傾斜面に立地し、周辺には、S K-57、66、74、85がある。標高217m前後を測る。
- 形 態 梁間2間(2.84m) 衍行5間(7.29m)の長棟建物である。柱穴間距離はP 1から1.22・1.43・1.62・1.60・1.37・1.34・1.43・1.46・1.60・1.48・1.58・1.15・1.40・1.40mで、主軸はN-80°-Wである。
- 柱 穴 各柱穴の規模はP 1(32×26-24) P 2(22×19-20) P 3(26×22-24) P 4(22×21-20) P 5(30×26-26) P 6(27×26-21) P 7(21×19-18) P 8(30×26-20) P 9(26×22-11) P 10(28×25-15) P 11(29×24-15) P 12(27×24-20) P 13(26×23-15) P 14(25×22-32) cmである。各柱穴とも柱痕は認められなかつた。
- 土 層 各柱穴とも埋土は黒色粘質土一層である。
- 遺 物 検出しなかった。
- 時 期 不明である。

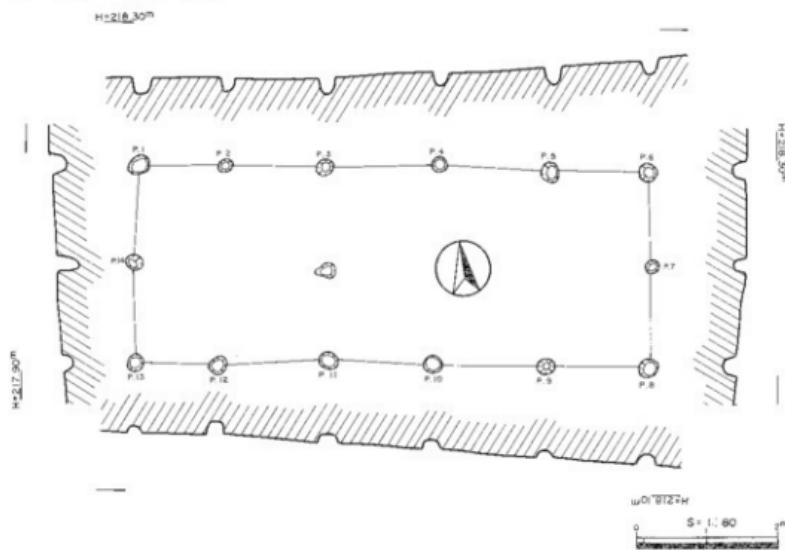


図45 S B-02遺構図

## S B-03

- 位 置 9Lグリッド北隅に位置する。南部遺構群のやや南西側にあたり、南西下がりの緩傾斜面に立地し、周辺には、S K-71、78、79、80がある。標高217m前後を測る。
- 形 態 梁間1間(2.38m) 衍行2間(3.08m)の建物である。柱穴間距離はP 1から2.38・

1.53・1.50・2.21・1.49・1.50mで、  
主軸はN-32°-Wである。

柱穴 各柱穴の規模はP 1 (18×17-28)  
P 2 (38×23-23) P 3 (24×21-  
20) P 4 (21×20-29) P 5 (25×  
23-32) P 6 (24×22-19) cmであ  
る。各柱穴とも柱痕は認められなか  
った。

土層 各柱穴とも埋土は黒色粘質土一層  
である。

遺物 検出しなかった。  
時期 不明である。

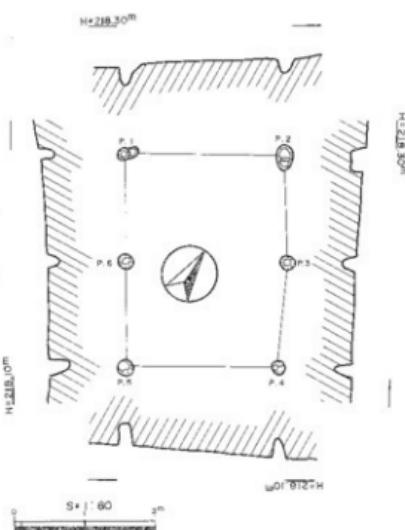


図46 SB-03遺構図

#### SB-04

位置 8Pグリッドの北東隅に位  
置する。南部遺構群の中央や  
や東寄りにあたり、西下がり  
の緩傾斜面に立地し、周辺に  
は、SK-02、06、22、49、  
52がある。標高221m前後を測  
る。

形態 梁間1間(2.81m)桁行2  
間(3.81m)の建物である。  
柱穴間距離はP 1から2.62・  
1.68・1.69・2.81・1.67・1.  
40mで、主軸はN-7°-Wで  
ある。

柱穴 各柱穴の規模はP 1 (27×  
23-23) P 2 (34×26-32)  
P 3 (34×31-24) P 4 (36×  
32-23) P 5 (23×22-23)  
P 6 (25×23-16) cmである。

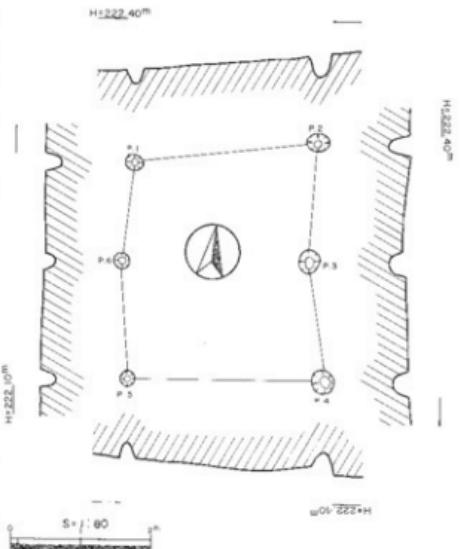


図47 SB-04遺構図

各柱穴とも柱痕は認められなかった。

土 層 各柱穴とも埋土は黒色粘質土一層である。

遺 物 検出しなかった。

時 期 不明である。

#### S B-05

位 置 10K、10Lグリッドにわたって位置する。南部遺構群のほぼ南西側にあたり、南西下がりの緩傾斜面に立地し、周辺には、SK-45、51、52、83、84がある。標高216m前後を測る。

形 態 梁間1間(2.56m)桁行3間(5.60m)の建物である。柱穴間距離はP1から1.33・1.98・1.75・2.53・2.50・1.76・1.29・2.43mで、主軸はN-66°-Eである。

柱 穴 各柱穴の規模はP1(18×17-37) P2(26×24-50) P3(24×22-49) P4(25×23-61) P5(24×21-35) P6(25×22-22) P7(23×20-35) P8(22×20-27)cmである。各柱穴とも柱痕は認められなかった。

土 層 各柱穴とも埋土は黒色粘質土一層である。

遺 物 検出しなかった。

時 期 不明である。

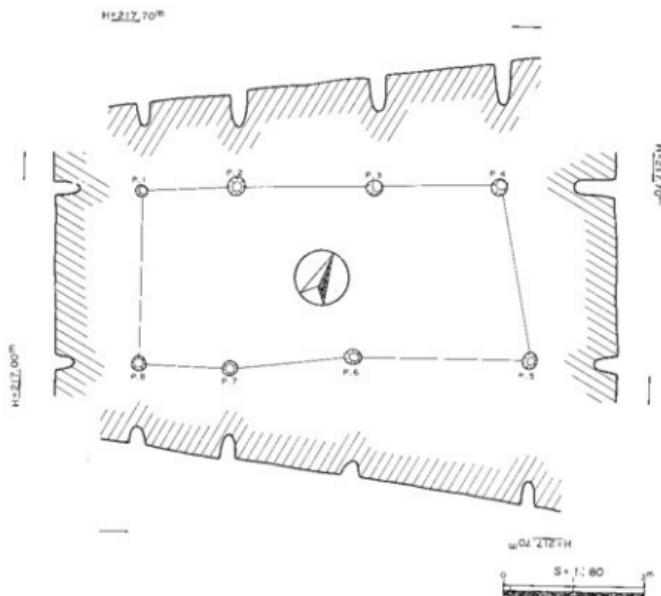


図48 SB-05遺構図

### SB-06

- 位 置 6Bグリッドのほぼ北東に位置する。北部遺構群や西側にあたり、北下がりの緩傾斜面に立地し、SI-15と重複している。標高218m前後を測る。
- 形 態 梁間2間(3.30m)桁行4間(4.13m)の建物である。但し、北側のP1・P9間は柱穴がみつからず、梁間1間となる。柱穴間距離はP1から1.51・1.30・1.32・1.67・1.56・1.27・1.32・1.38・3.32mで、主軸はN-16°-Wである。
- 柱 穴 各柱穴の規模はP1(31×30-29) P2(28×27-41) P3(29×26-45) P4(25×22-32) P5(28×21-36) P6(28×20-52) P7(23×22-30) P8(25×22-30) P9(31×30-29)cmである。各柱穴とも柱痕は認められなかった。
- 土 層 各柱穴とも埋土は黒色粘質土一層である。
- 遺 物 検出しなかった。
- 時 期 SI-15(弥生時代中期後葉)下位より検出の溝との関連性から、弥生時代中期後

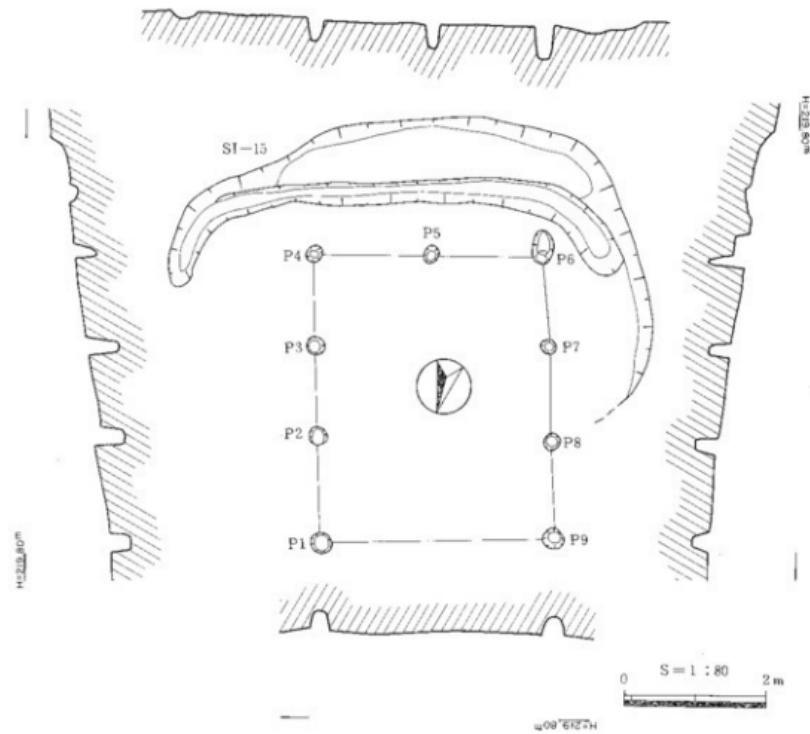


図49 SB-06遺構図

葉以前と考える。

特筆事項 S I-15の項で述べた様に、S I-15（弥生時代中期後葉）の下位より検出された溝は、その残存状況より（本建物を囲うように南側に巡る）本建物に伴う遺構である可能性が高いといえる。従って本建物は、弥生時代中期後葉よりも古い時期に比定される。

### S B-08

位置 3 G グリッド中央やや西寄りに位置する。北部遺構群のほぼ北東にあたる。

形態 傾斜により西側を失っているが、本来は桁行3間の掘立建物であったと推定される。柱穴間距離はP 1から1.47・1.55・1.94mである。主軸はN-29°-Wである。

柱穴 各柱穴の規模はP 1 (31×22-50) P 2 (32×26-42) P 3 (30×26-44) P 4 (33×22-45) cmである。各柱穴とも柱痕は認められなかった。

土層 各柱穴とも埋土は黒色粘質土一層である。

遺物 検出しなかった。

時期 不明である。

H=22.20m

P 1

P 2

P 3

P 4

W=22.20m

S=1:80

插図50 S B-08遺構図

### S B-09

位置 3 C グリッド西側に位置する。北部遺構群のほぼ北西にあたり、南下がりの緩傾斜面に立地する。周辺に S K-111, 112, 113がある。標高218m前後を測る。

形態 梁間1間(2.66m) 桁行2間(4.74m) の建物である。

柱穴間距離はP 1から2.66・  
2.36・2.28・2.81・2.24・2.

23mで、主軸はN-33°-Wで



写真2 掘立柱建物

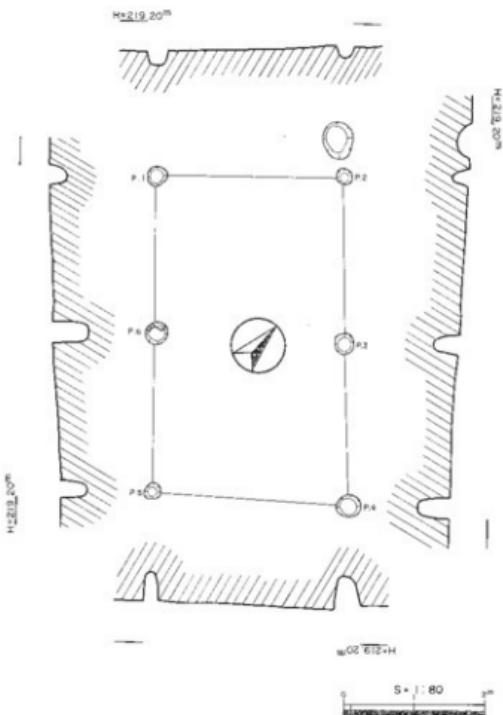


図51 SB-09遺構図

ある。

**柱穴** 各柱穴の規模は P 1 (26×24-29) P 2 (41×36-47) P 3 (39×30-15) P 4 (24×20-45) P 5 (21×19-38) P 6 (24×19-30) P 7 (21×19-14) P 8 (26×25-18) P 9 (26×25-47) P 10 (30×26-14) P 11 (26×24-15) P 12 (26×23-18) P 13 (29×23-21) cmである。各柱穴とも柱痕は認められなかった。

**土層** 各柱穴とも埋土は黒色粘質土一層である。

**遺物** 検出しなかった。

**時期** 不明である。

#### SB-10

**位置** 3 D グリッドの中央に位置する。北部遺構群の北側やや西寄りにあたり、北下がりの緩傾斜面に立地する。周辺に SK-114がある。標高218m前後を測る。

**形態** 梁間1間(2.32m)桁行2間(3.08m)の建物である。柱穴間距離は P 1 から 2.32・1.36・1.41・2.18・1.44・1.62mで、主軸は N -48°-E である。

**柱穴** 各柱穴の規模は P 1 (32×19-55) P 2 (29×25-34) P 3 (40×37-31) P 4 (29×

27-21) P 5 (35×29-21)

P 6 (31×29-20) cmである。  
各柱穴とも柱痕は認められなかつた。

土層 各柱穴とも埋土は黒色粘質土一層である。

遺物 検出しなかつた。

時期 不明である。

### S B-11

位置 2 E グリッド東端、やや南寄りに位置する。北部遺構群のほぼ北端にあたり、南西下がりの緩傾斜面に立地する。  
標高219m前後を測る。

形態 梁間1間(2.03m)桁行2間(3.19m)の建物である。  
柱穴間距離はP 1から1.94・1.29・  
1.65・2.03・1.79・1.44mで、主軸はN-37°-Eである。

柱穴 各柱穴の規模はP 1 (25×24-  
24) P 2 (26×24-14) P 3 (24×  
22-26) P 4 (29×25-36) P 5  
(25×21-31) P 6 (25×24-33)  
cmである。各柱穴とも柱痕は認められなかつた。

土層 各柱穴とも埋土は黒色粘質土一層である。

遺物 P 1より弥生土器(小片)を検出したが、固化できなかつた。

時期 出土遺物より弥生時代中期と考えられる。

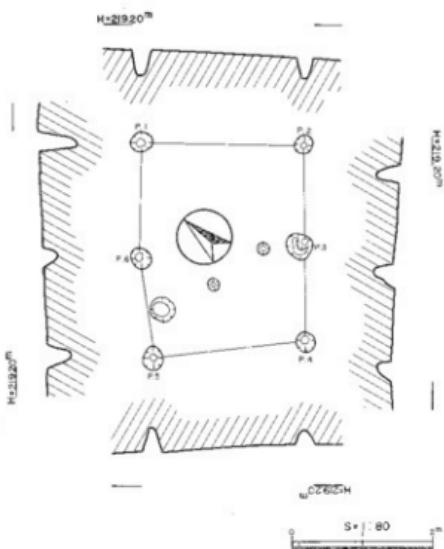


図52 S B-10遺構図

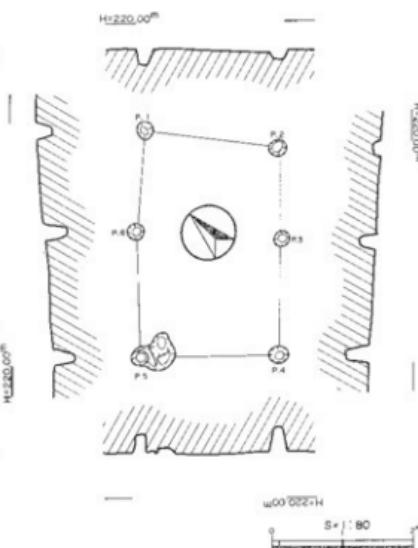


図53 S B-11遺構図

### S B-12

位 置 2 F グリッドのほぼ中央に位置する。北部遺構群のほぼ北端にあたり、南西下がりの緩傾斜面に立地する。S K-105と切り合い関係にあり、一部自然河川により削られている。標高219m前後を測る。

形 態 梁間2間(3.36m)桁行2間(2.82m)の純柱建物である。柱穴間距離はP 1から――・  
――・1.36・1.96・――  
――・1.49・1.60・  
(P 4-9) 1.53・(P  
8-9) 1.37mで、主軸はN-9°-Eである。

柱 穴 各柱穴の規模はP 1  
(37×36-38) P 3  
(66×52-39) P 4  
(37×30-34) P 5  
(39×30-39) P 6 (39×36-30) P 7 (31×30-35) P 8 (41×33-36) P 9 (38×  
33-24) cmである。各柱穴とも柱痕は認められなかった。

土 層 各柱穴とも埋土は黒色粘質土一層である。

遺 物 P 8検出の甕1を図化したが、P 7・P 9検出の弥生土器(小片)は図化できなかつた。

時 期 出土遺物より弥生時代中期と考えられる。

### S B-13

位 置 1 J グリッドややの北西に位置する。北部遺構群の北東端にあたり、南下がり緩傾斜面に立地する。標高224m前後を測る。

形 態 梁間1間(2.38m)桁行1間(2.24m)の建物である。柱穴間距離はP 1から2.35・  
2.24・2.38・2.20mで、主軸はN-25°-Wである。

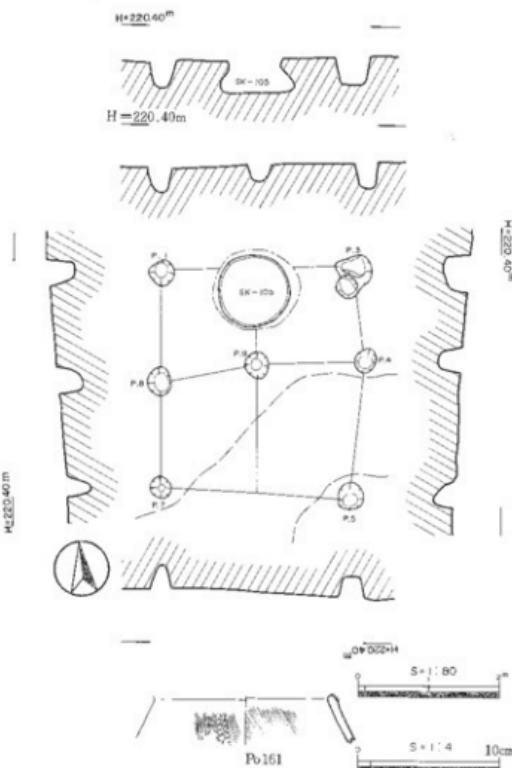


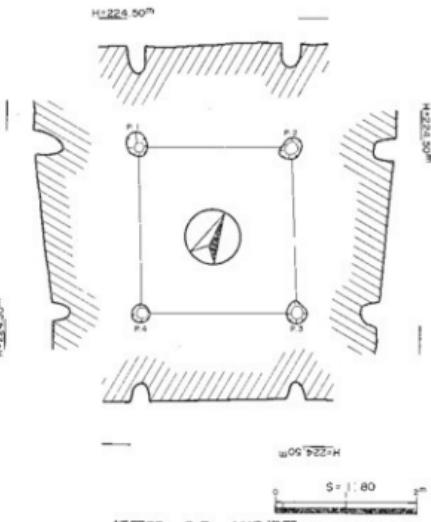
図54 S B-12遺構・遺物図

**柱穴** 各柱穴の規模はP1(36×29-41) P2(36×26-36) P3(33×30-26) P4(27×26-28) cmである。各柱穴とも柱痕は認められなかった。

**土層** 各柱穴とも埋土は黒色粘質土一層である。

**遺物** P2より弥生土器(小片)を検出したが、図化できなかった。

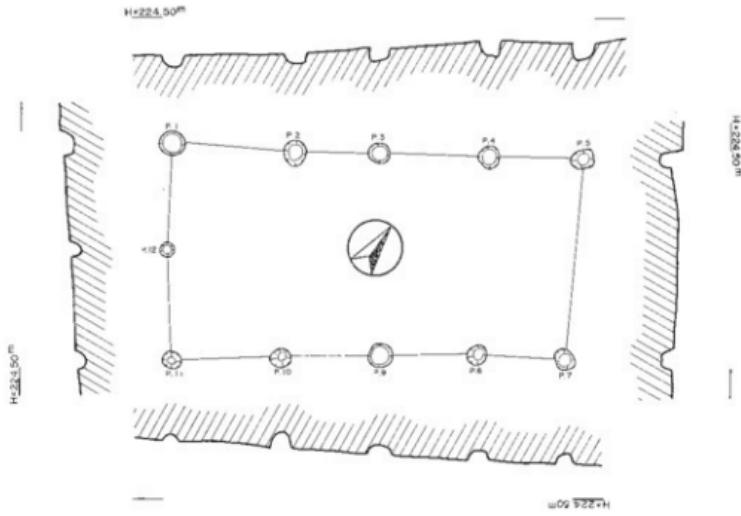
**時期** 出土遺物より弥生時代中期と考えられる。



挿図55 SB-13遺構図

#### SB-14

**位置** 1K、2Kグリッドにわたって位置する。北部遺構群の北東端にあたり、南西下がりの緩傾斜面に立地する。標高224m前後を測る。



挿図56 SB-14遺構図

形 態 梁間 2 間 (3.10m) 衍行 4 間 (5.86m) の建物である。ただし、西側の P 5、7 間の柱穴はみつからず、梁間 1 間となる。柱穴間距離は P 1 から 1.74・1.19・1.56・1.33・2.86・1.23・1.40・1.37・1.58・1.57・1.51m で、主軸は N-14°-E である。

柱 穴 各柱穴の規模は P 1 (38×34-18) P 2 (37×26-18) P 3 (30×28-20) P 4 (32×29-24) P 5 (34×27-26) P 7 (32×26-18) P 8 (30×28-15) P 9 (35×33-14) P 10 (31×27-24) P 11 (27×25-13) P 12 (21×20-16) cm である。各柱穴とも柱度は認められなかった。

土 層 各柱穴とも埋土は黒色粘質土一層である。

遺 物 検出しなかった。

時 期 不明である。

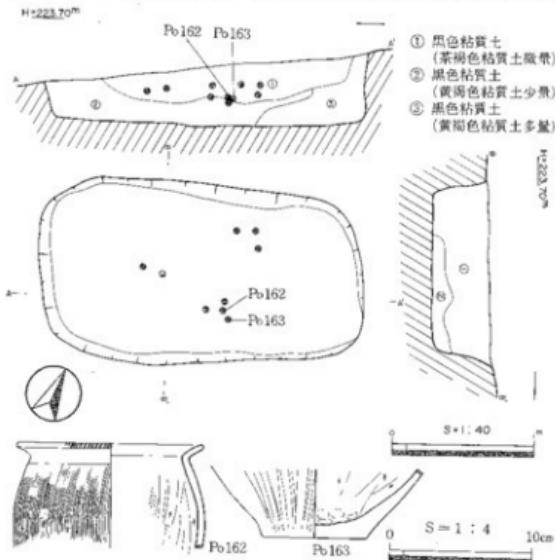
(西原徳善)

### 第3節 土壌

弥生時代に属する遺構総数150基のうち、土壌は約8割の121基を数える。単純に計算すれば堅穴住居、掘立柱建物1棟につき6~7基が存在することになる。土壌の分布は、時期不明の土壌も含めて中期中葉の南部遺構群に84基、中期後葉の北部遺構群に37基である。後期後半の堅穴住居跡 (S I-10~12) の時期に相当する土壌は検出されなかった。土壌は平面形が、隅丸長方形、円形、椭円形等があり、規模は最も大きいもので2m前後を測るものがある。土壌の性格は断面袋状を呈するものが貯蔵穴と考えられるが、性格不明の土壌が多い。

#### SK-01

位 置 8 R グリッドの北側に位置する。南部遺構群の東側にあたり、西下がりの緩傾斜面



插図57 SK-01遺構・遺物図

(谷部)に立地する。S B-01の柱穴ラインの内側にあたり、周辺にはS K-03、05、52、54などがある。壙底の標高は223.00mを測る。

- 形態 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は北東壁で袋状を呈する、底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径228cm、短径132cm、床面で長径216cm、短径110cm、深さ47cmを測る。長軸方向はN-65°-Eで、壁の最小傾斜角は87°である。
- 土層 ②、③層は黒色粘質土系の上層であり、土壤の北東側で袋状を呈することを考え合わせると、壁の崩壊による埋土であろう。
- 遺物 壺1、底部1を図化した。
- 性格 不明である。
- 時期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。

#### S K-02

- 位置 9 P グリッドの北端やや東寄りに位置する。南部遺構群の南東にあたり、西下がりの緩傾斜面に立地する。周辺に S B-04、S K-10~13などがある。壙底の標高は221.48mを測る。

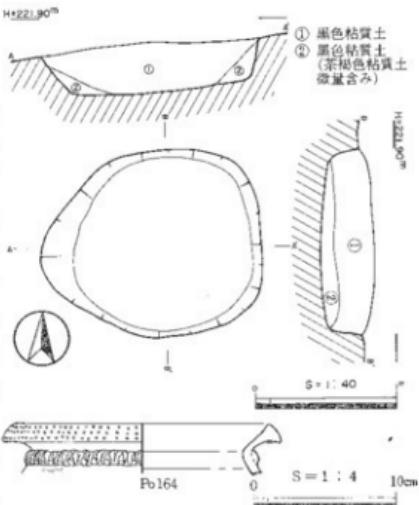
- 形態 平面形は不整円形、底面形は円形を呈し、断面形は壁が最小傾斜角100°とやや外傾気味である。底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径154cm、短径131cm、底面で長径125cm、短径123cm、深さ38cmを測る。

- 土層 ②層は壁の崩壊による埋土と思われ、袋状土壤であった可能性が考えられる。

- 遺物 壺1を図化した。
- 性格 貯蔵穴と思われる。
- 時期 出土遺物より弥生時代中期と考える。

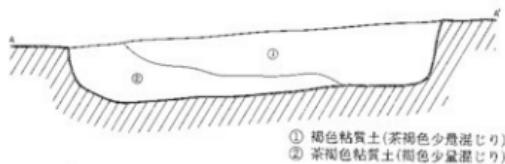
#### S K-03

- 位置 8 Q グリッドの北側に位置する。南部遺構群の南東にあたり、南西下がりの緩傾斜面に立地する。周辺には S K-05、52などがある。壙底の標高は222.32mを測る。
- 形態 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は壁の最小傾斜角度が93°とほぼ直立し、底面はほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径132cm、短径105cm、底面で長径121cm、短径91cm、深さ23cmを測る。長軸方向はN-75°-Eである。

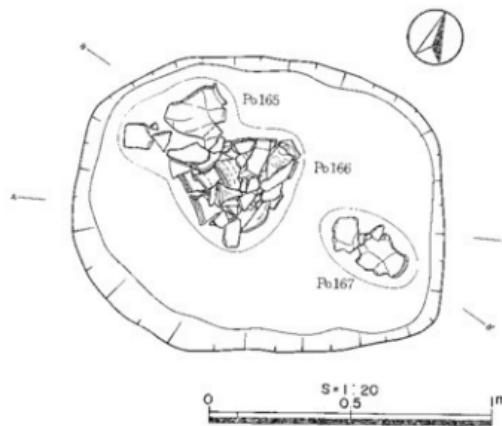
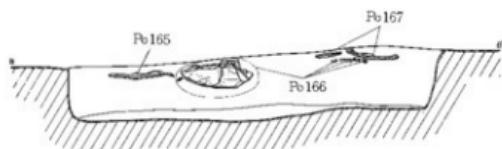


插図58 SK-02遺構・遺物図

H=222.80m



H=222.80m



插図59 SK-03遺構図

土層 埋土は褐色粘質土、茶褐色粘質土の2層である。

遺物 壺1、甕1、底部1を固化した。

性格 不明である。

時期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。

#### SK-04

位置 10Mグリッドの北西部に位置する。南部遺構群南西側にあたり、南西に下がる緩傾斜面に立地している。このあたりは石の鎧頭が多く、遺構は少なかったが、西3mにSK-46がある。壙底の標高は218.2mを測る。

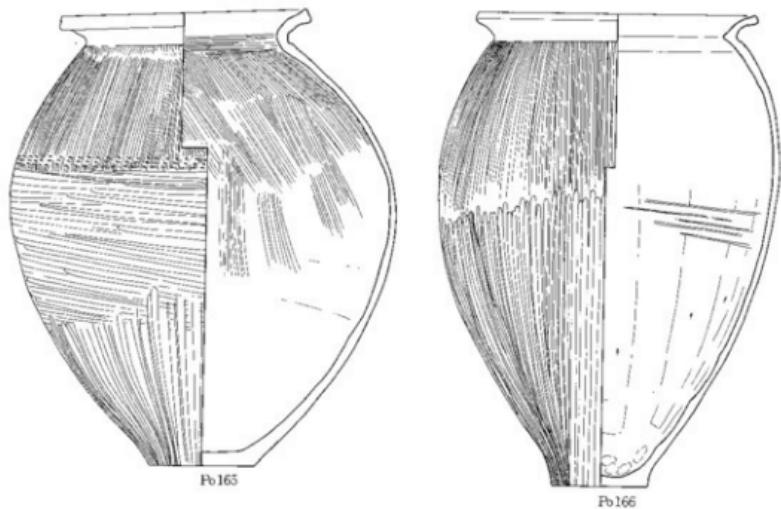


図60 SK-03遺物図  
S = 1 : 4 10cm

Pb167

図60 SK-03遺物図

**形 態** 平面形は検出面で長径79cm、短径70cmの不整円形で、断面は逆梯形を呈す。底面は長径37cm、短径27cmの梢円形で、非常に小さくなっている。深さは37cmを測る。壁の最小傾斜角は120°である。

**土 層** 地山に掘り込まれており、埋土は黒色土系の2層である。

**遺 物** 検出しなかった。

**性 格** 不明であるが、規模、形態とも普遍的な型の土壤とは異っている。

**時 期** 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

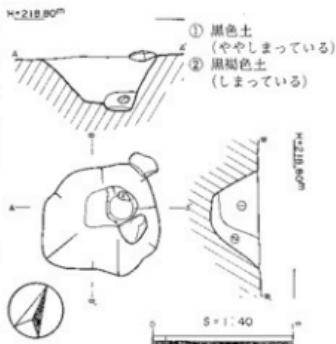
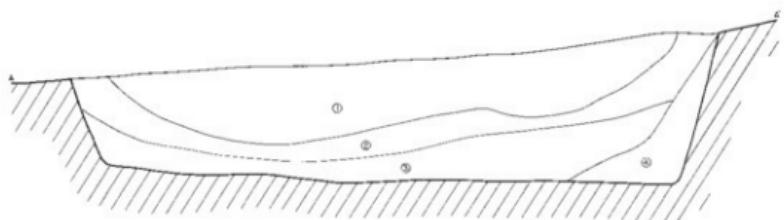


図61 SK-04遺構図  
S = 1 : 40

H:222.50m



H:222.50m

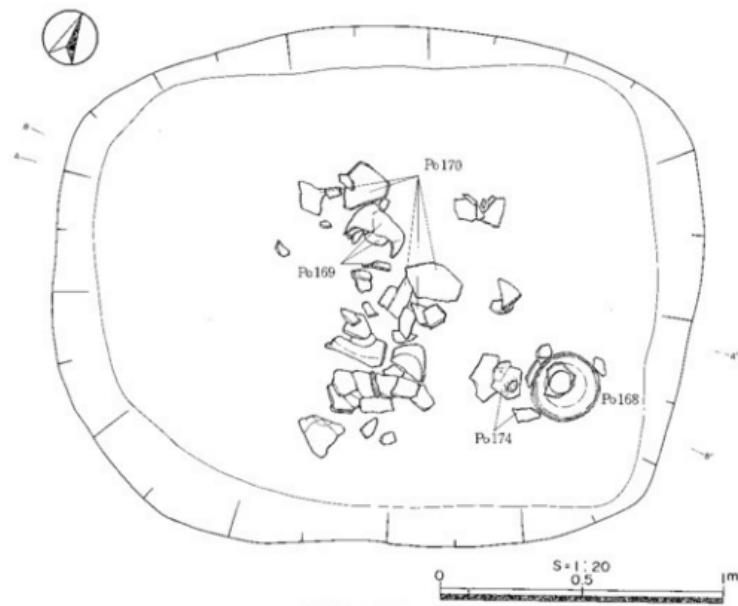
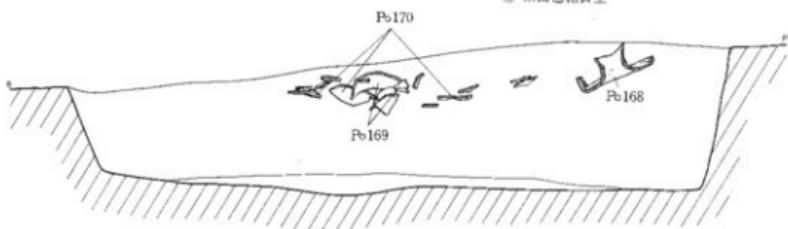


図62 SK-05造構図

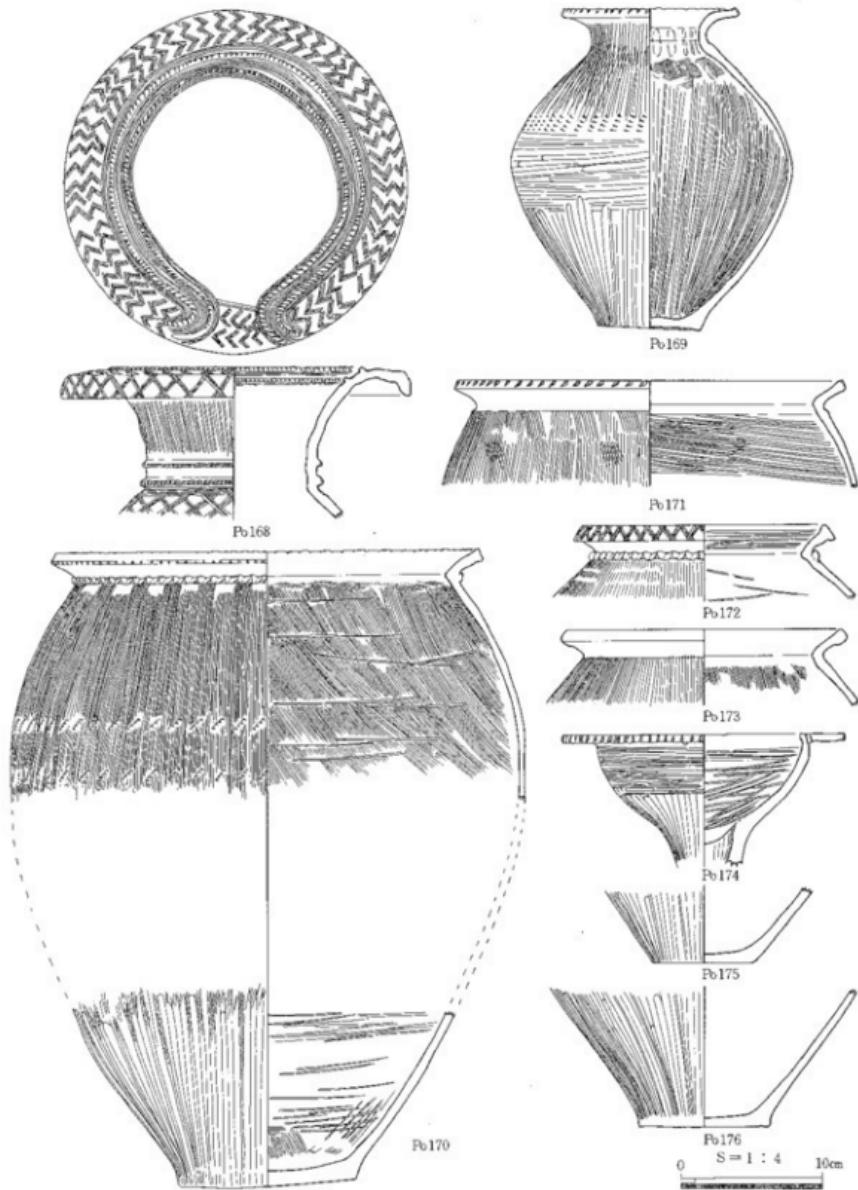


插圖63 SK—05遺物圖

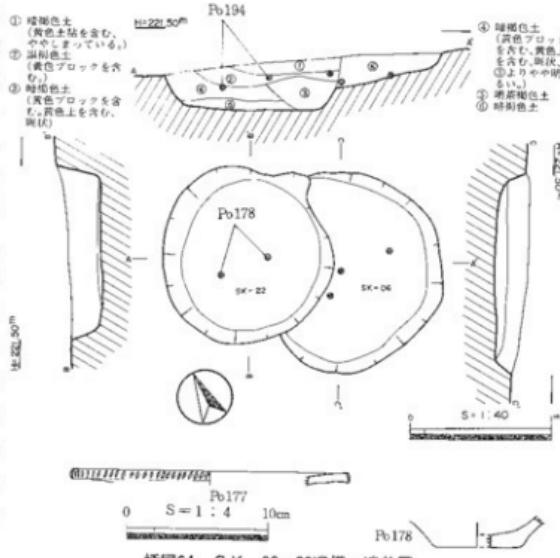
## SK-05

- 位 置 8 Q グリッドのほぼ北西側に位置する。南部遺構群のほぼ南東にあたり、西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺に S B-04、S K-03、52などがある。墳底の標高は221.78mを測る。
- 形 態 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は壁が最小傾斜角103°と明瞭に外傾する。底面はほぼ平坦な土壇である。規模は、検出面で長径228cm、短径184cm、底面で長径200cm、短径156cm、深さ54cmを測る。長軸方向はN-68°-Eである。
- 土 層 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、④～①層の順で埋まっていた様子が伺われる。
- 遺 物 壺2、甕4、高坏1、底部2を同化した。遺物は、①層中に集中しており、Po168は、口縁を下にして出土した。
- 性 格 不明である。
- 時 期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。

## SK-06・22

- 位 置 8 P グリッドの北西隅に位置する。南部遺構群のほぼ中央にあたり、西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。SK-07に隣接し、周辺にはS B-04、S K-49、53がある。SK-06をSK-22が切っており、墳底の標高は、SK-06で221.09m、SK-22で220.92mを測る。
- 形 態 SK-06・22は平面形、底面形共に円形で、断面形は明瞭に壁が外傾する。底面のほぼ平坦な土壇である。SK-06の規模は、検出面で径140cm、底面で径127cm、深さ25cmを測る。SK-22の規模は、検出面で径124cm、底面で径107cm、深さ35cmを測る。壁の最小傾斜角はSK-06で120°、SK-22で100°を測る。

- 土 層 SK-06・22共に黄色粘土（地山）に掘り込まれており、SK-06の埋土は黒褐色土一層である。SK-22はSK-06の埋土を明瞭に切ってお



挿図64 SK-06・22遺構・遺物図

り、埋土は①～⑤層である。

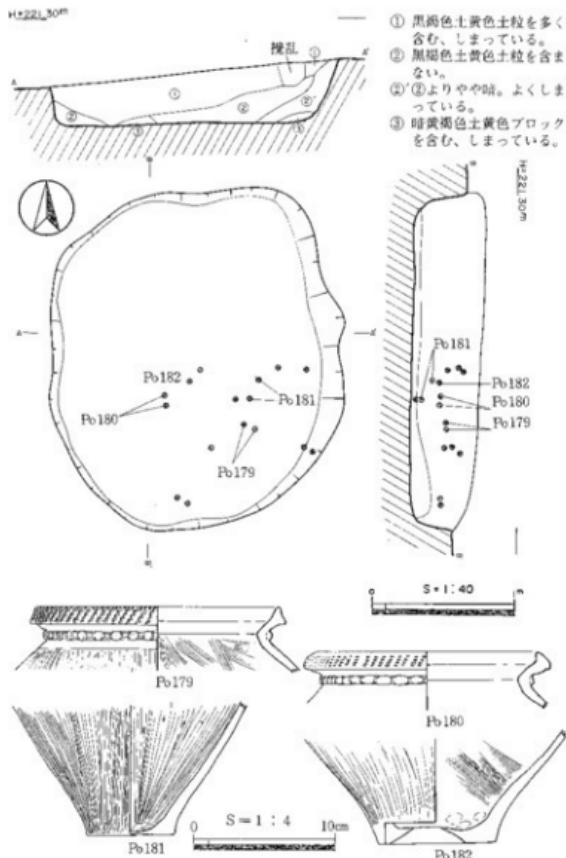
遺 物 SK-06より弥生時代中期と思われる土器片が出土しており、SK-22より甕1、一括遺物で所属不明の底部1を図化した。

性 格 貯蔵穴の可能性が強い。

時 期 SK-22は、出土遺物より弥生時代中期中葉と考えられ、SK-06はこれ以前であろうと推測する。

### SK-07

位 置 80グリッドの北東隅に位置する。南部遺構群のほぼ中央にあたり、西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。SK-06・22と隣接し、周辺にはSK-53がある。墳底の標高は220.55mを測る。



擲図65 SK-07構造・遺物図

**形 態** 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は明瞭に壁が外傾する。底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径238cm、短径203cm、底面で長径225cm、短径182cm、深さ50cmを測る。長軸方向はN-10°-Wで、壁の最小傾斜角は100°である。

**土 層** 黄色粘土(地山)に掘り込まれており、③～①の順で埋まっていた様子が伺われる。

**遺 物** 壺2、底部2を同化した。

**性 格** 不明である。

**時 期** 出土遺物より弥生時代中期と考える。

SK-08・31

**位 置** 90グリッドのほぼ中央北端に位置する。南部遺構群のほぼ中央にあたり、西下がりの緩傾斜面(尾根部)に立地する。S I-02と隣接し、周辺にはSK-09がある。SK-31をSK-08が切っており、壇底の標高はSK-08で219.80m、SK-31で219.72mを測る。

**形 態** SK-31は残存状況が悪いため、平面形、底面形共に不明であるが、断面形は明瞭に壁が外傾する土壤である。SK-08は平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は明瞭に壁が直立する。底面のほぼ平坦な土壤である。SK-31の残存規模は、検出面で長径155cm、短径55cm、底面で長径140cm、短径47cm、深さ43cmを測る。SK-08の規模は、検出面で長径191cm、短径176cm、底面で長径165cm、短径160cm、深さ60cmを測

H=220.50m

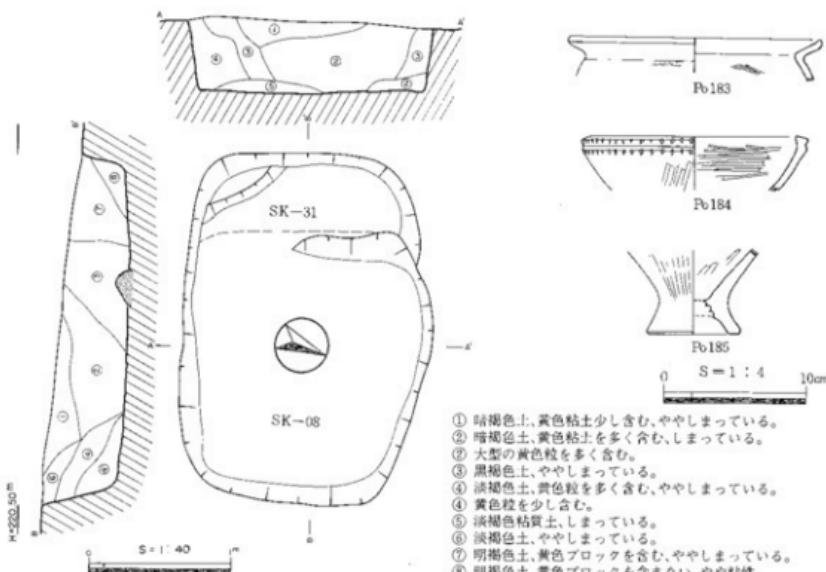
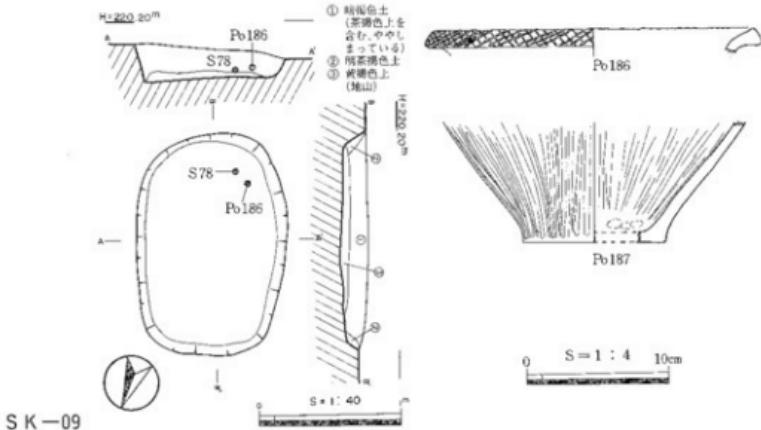


図66 SK-08・31遺構・遺物図

る。壁の最小傾斜角はSK-31で98°、SK-08で100°である。

- 土層 SK-08・31共に黄色粘土(地山)に掘り込まれており、SK-31の埋土は⑦・⑧層である。SK-08はSK-31の埋土を明瞭に切っており、埋土は①～⑥層である。
- 遺物 SK-08で甕1、鉢1、底部1を図化した。
- 性格 不明である。
- 時期 SK-08は出土遺物より弥生時代中期中葉と考えられ、SK-31はこれ以前であろうと推測する。

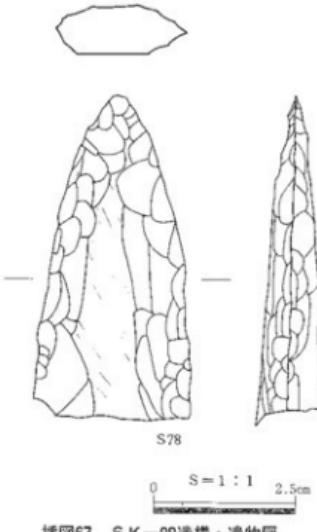


- 位置 80グリッドの南西隅に位置する。南部遺構群のほぼ中央にあたり、南西下がりの緩傾斜面に立地する。南東側にSK-08・31が接しており、4m離れてSI-02がある。壇底の標高は219.7mを測る。

- 形態 平面形は隅丸長方形で断面形は逆梯形を呈す。底面はほぼ平坦である。規模は検出面で長径157cm、短径106cm、底面が長径144cm、短径92cm、深さ28cmの浅い土壙である。長軸方向はN-19°-Wで、壁の最小傾斜角は120°である。

- 土層 黄色粘質土(地山)に掘り込まれており、埋土は壁崩壊土の②層を除けば、①暗褐色土一層である。

- 遺物 埋土中より、甕1、底部1、石槍1を検出して図化した。



挿図67 SK-09遺構・遺物図

性 格 不明である。

時 期 出土遺物より弥生時代中期と考える。

#### S K-10

位 置 9 P グリッドの北西側西寄りに位置する。南部遺構群のほぼ南側にあたり、西下がりの緩傾斜面に立地する。南側に S K-11、西側に S K-12が接し、周辺に S I-02、S K-02、13、30などがある。墳底の標高は220.76mを測る。

形 態 平面形、底面形共に橢円形で、断面形は壁が最小傾斜角89°と袋状を呈し、底面はほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径140cm、短径65cm、底面で長径132cm、短径58cm、深さ27cmを測る。長軸方向はN-10°-Wとほぼ南北にとる。

土 層 黄色粘土（地山）に掘り込まれ、①、⑤の黒色土系と、②～④層の黄色土系の埋土からなる。

遺 物 検出しなかった。

性 格 不明である。

時 期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

#### S K-11

位 置 9 P グリッドの南西側南寄りに位置する。南部遺構群のほぼ南側にあたり、南西下がりの緩傾斜面に立地する。周辺には S I-02、S K-13・15・30、北西側に S K-10・12などがある。墳底の標高は220.86mを測る。

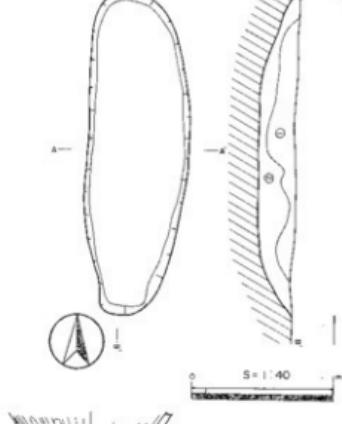
形 態 平面形、底面形共に橢円形を呈し、断面形は壁が最小傾斜角90°と直立する、底面はほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径232cm、短径72cm、底面で長径216cm、短径65cm、深さ33cmを測る。長軸方向は南北をとる。

土 層 地山に掘り込まれておらず、埋土は黒色土系の2層である。

遺 物 底部1を固化した。

性 格 不明である。

時 期 出土遺物より弥生時代中期と考える。



### SK-12

位 置 9 P グリッドのほぼ西隅に位置する。南部遺構群の中央やや南側にあたり、西下がりの緩傾斜面に立地する。SK-10と隣接し、周辺に S I-02、SK-02、11、30などがある。壇底の標高は220.76mを測る。

形 態 平面形、底面形共に橢円形を呈し、断面形は壁が最小傾斜角114°と明瞭に外傾する。底面のほぼ平坦な土壌である。規模は、検出面で長径125cm、短径68cm、底面で長径106cm、短径65cm、深さ15cmを測る。長軸方向はN-8°-Wとほぼ南北をとる。

土 層 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、埋土は黒色土系である。

遺 物 検出しなかった。

性 格 不明である。

時 期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

### SK-13

位 置 10 P グリッドの北東やや北寄りに位置する。南部遺構群の南東にあたり、南西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。壇底の標高は221.54mを測る。

形 態 平面形、底面形共に橢丸長方形で、断面形は壁が最小傾斜角108°と明瞭に外傾する。底面のほぼ平坦な土壌である。規模は、検出面で長径106cm、短径40cm、底面で長径96cm、短径26cm、深さ22cmを測る。長軸方向はN-44°-Wである。

土 层 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、埋土は黒褐色土一層である。

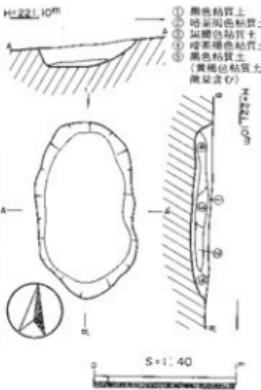
遺 物 検出しなかった。

性 格 不明である。

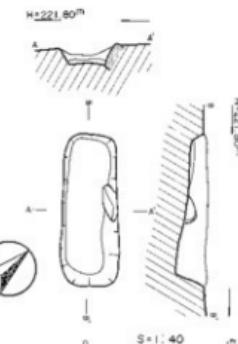
時 期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

### SK-14

位 置 7 Q グリッドの北東端に位置する。南部遺構群の東側にあたり、南西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。周辺には S B-01、SK-42がある。壇底の標高は222.80mを測る。



插図70 SK-12遺構図



插図71 SK-13遺構図



插図72 SK-14遺構図

形 態 平面形、底面形共に不明である。断面形は壁の立ち上がりが不明瞭な皿状を呈する。  
残存規模は、検出面で長径100cm、短径50cm、底面で長径50cm、短径40cm、深さ26cmを測る。

土 層 埋土は黒褐色土一層である。

遺 物 検出しなかった。

性 格 不明である。

時 期 周辺遺構遺物より弥生時代中期と推測する。

### SK-15

位 置 10Pグリッドの北西側に位置する。南部遺構群のほぼ南側にあたり、南西下がりの緩傾斜面(尾根部)に立地する。周辺にSK-13、30などがある。壙底の標高は220.40mを測る。

形 態 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は壁の最小傾斜角が94°とほぼ直立する。底面がほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径150cm、短径105cm、底面で長径135cm、短径91cm、深さ57cmを測る。長軸方向はN-14°-Eである。

土 層 ⑦層は壁の崩壊による埋土と考えられ、袋状土壤であった可能性がある。

遺 物 高坏1を固化した。

性 格 不明である。

時 期 出土遺物より弥生時代中期と考える。

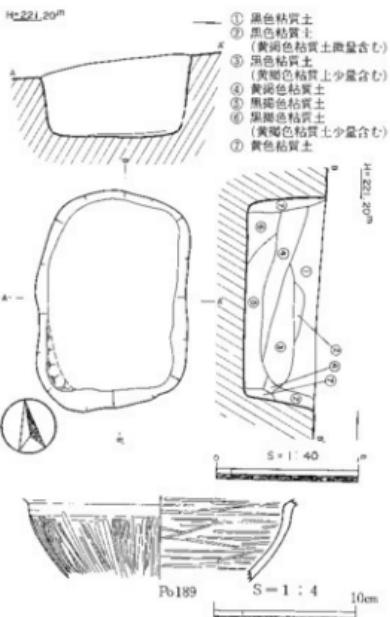


図73 SK-15遺構・遺物図

### SK-16

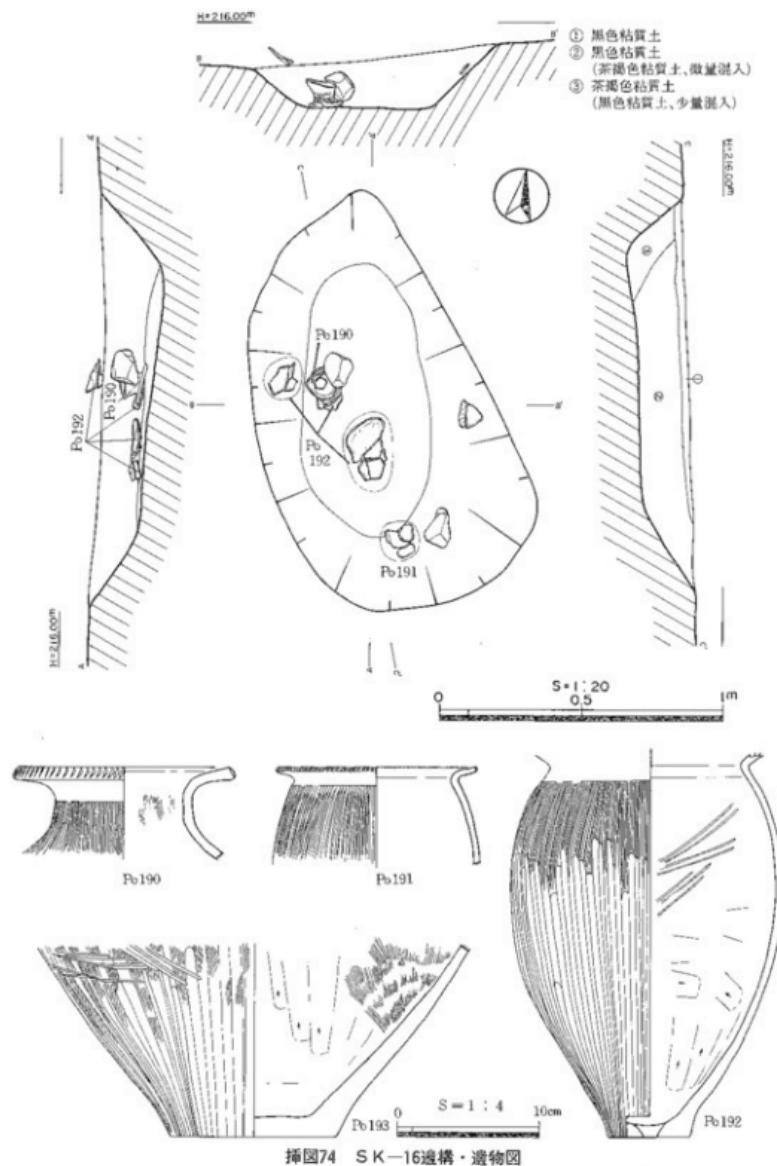
位 置 12Kグリッドのほぼ中央に位置する。南部遺構群の南西にあたり、南西下がりの緩傾斜面(尾根部)に立地する。壙底の標高は215.71mを測る。

形 態 平面形は不整楕円形、底面形は楕円形を呈し、断面形は壁が明瞭に外傾する。底面はほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径146cm、短径86cm、底面で長径97cm、短径45cm、深さ33cmを測り、非常に小さくなっている。壁の最小傾斜角は136°を測り、長軸方向はN-13°-Eである。

土 層 黒色粘質土系の2層と茶褐色粘質土1層である。

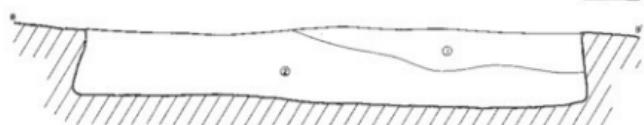
遺 物 壺1、壺2、底部1を固化した。Po190は、口縁を下にして出土した。

性 格 不明である。  
時 期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。

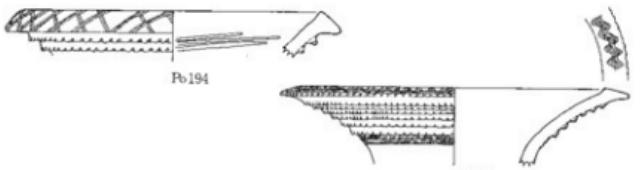
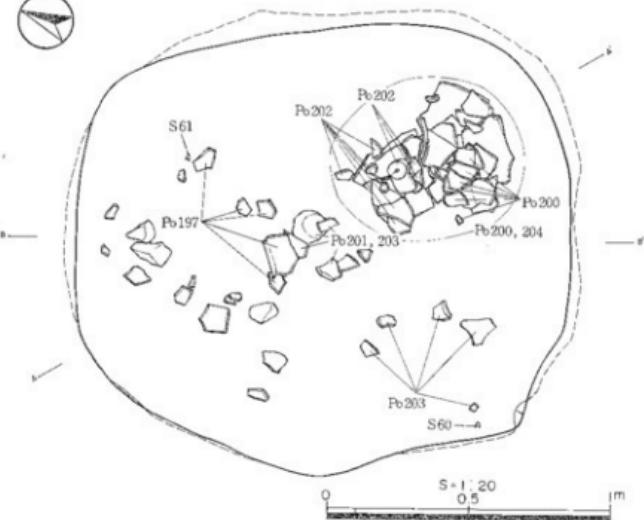
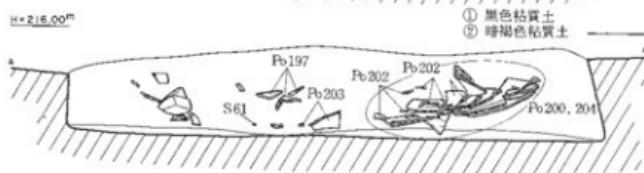


挿図74 S K-16遺構・遺物図

H = 216.00m



H = 216.00m



插図75 SK-17遺構・遺物図①

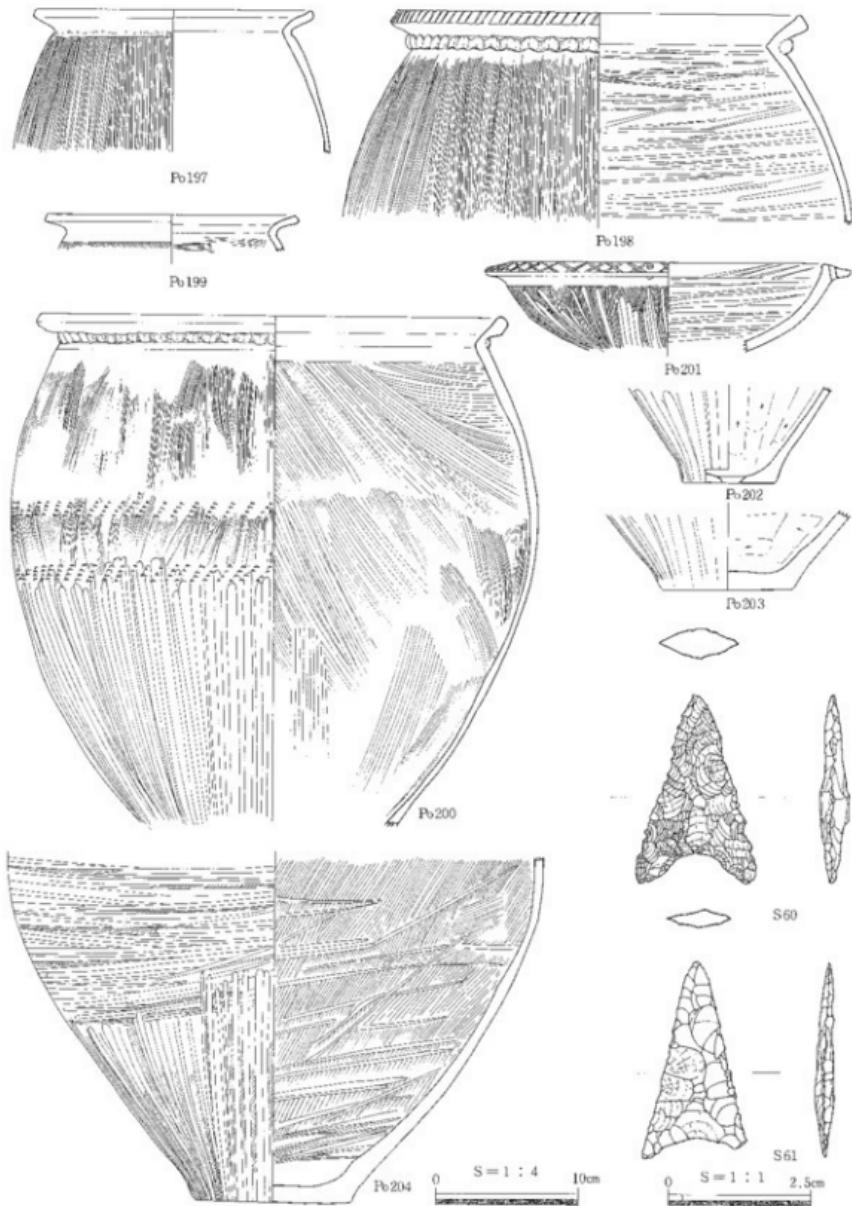


插圖76 SK-17遺物圖②

### SK-17

位 置 10Kグリッド南隅に位置する。南部遺構群の南西にあたり、南下がりの緩傾斜面に立地する。SK-44に隣接し、周辺にSK-16・73・85などがある。墳底の標高は215.64mを測る。

形 態 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は袋状を呈する。底面がほぼ平坦な土壌である。規模は、検出面で長径184cm、短径175cm、底面で長径181cm、短径160cm、深さ33cmを測る。壁の最小傾斜角は77°を測り、長軸方向はN-20°-Wである。

土 層 黒色粘質土、暗褐色粘質土の2層である。

遺 物 壺3、甕4、高杯1、底部3、石鏃2を図化した。Po216、218、220は、土壤南東側に多数の破片として集中的に出土しており、断面で見ると重なり合っている。

性 格 形態より貯蔵穴と考える。

時 期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。

### SK-18

位 置 5Sグリッドのほぼ中央に位置する。南部遺構群の東側北寄りにあたり、西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。SK-19に隣接し、周辺には、SI-01、SK-20、21、23、28がある。墳底の標高は224.32mを測る。

形 態 平面形、底面形共に円形で、断面形は東側及び南側で袋状を呈する。底面のほぼ平坦な土壌である。規模は、検出面で長径87cm、短径83cm、底面で長径81cm、短径77cm、深さ30cmを測る。壁の最小傾斜角は81°である。

土 層 東側からの流れ込みで、②→①層の頭に埋まつていった様子が伺がわれる。

遺 物 弥生土器片を検出したが図化できなかった。

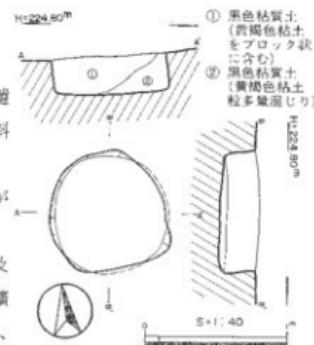
性 格 形態より貯蔵穴と考える。

時 期 出土遺物及び周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

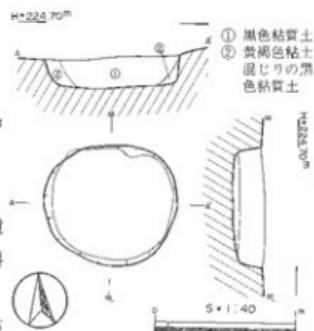
### SK-19

位 置 5Sグリッドのほぼ中央に位置する。南部遺構群の東側北寄りにあたり、西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。SK-18に隣接し、周辺には、SI-01、SK-20、21、23、28がある。墳底の標高は224.24mを測る。

形 態 平面形、底面形共に円形で、断面形は明瞭に



插図77 SK-18遺構図



插図78 SK-19遺構図

壁が直立する。底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径93cm、短径84cm、底面で長径84cm、短径78cm、深さ25cmを測る。壁の最小傾斜角は98°と、ほぼ垂直である。

土層	②層は壁の崩壊による埋土と推測でき、袋状土壤であった可能性が考えられる。
遺物	検出しなかった。
性格	埋土より貯蔵穴の可能性がある。
時期	周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

### S K-20

位置 5 S のグリッドの西側北寄りに位置する。南部遺構群の東側北寄りにあたり、西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。SK-21に隣接し、周辺にはSK-18、19、23、24、25、26がある。墳底の標高は223.86mを測る。

形態 平面形、底面形共に円形で、断面形は東側で若干袋状を呈す。底面が南東側に傾斜する土壤である。規模は、検出面で長径95cm、短径87cm、底面で長径86cm、短径77cm、深さ37cmを測る。壁の最小傾斜角は88°である。

土層 ④～①の順で埋まっていった様子が伺われる。

遺物 弥生土器片を検出したが固化できなかった。

性格 形態より貯蔵穴と思われる。

時期 出土遺物より弥生時代中期と考える。

### S K-21

位置 5 S グリッドの西側北寄りに位置する。南部遺構群の東側北寄りにあたり、西下がりの緩傾斜地（尾根部）に立地する。SK-20に隣接し、周辺にはSK-20、23、24、25、26がある。墳底の標高は223.72mを測る。

形態 平面形、底面形共に円形で、断面形は明瞭に壁が直立する。底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径105cm、短径101cm、底面で長径94cm、短径88cm、深さ38cmを測る。壁の最小傾斜角は90°である。

土層 ③～①の順で、四方より埋まっていった様子が伺われる。

遺物 検出しなかった。

性格 不明である。



插図79 SK-20遺構図



插図80 SK-21遺構図

時 期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

S K-23

位 置 5 R グリッドの西端に位置する。南部遺構群の東側北寄りにあたり、北西下がりの緩傾斜地（尾根部）に立地する。S K-28に接し、周辺には、S K-19、20、21、24、25がある。壙底の標高は223.68mを測る。

形 態 平面形、底面形共に円形で、断面形は明瞭に壁が直立する。底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径93cm、短径88cm、底面で長径87cm、短径83cm、深さ31cmを測る。壁の最小傾斜角は90°である。

土 層 地山に掘り込まれており、埋土は黒色土系である。

遺 物 弥生土器片を検出したが、固化できなかつた。

性 格 形態より貯蔵穴と思われる。

時 期 出土遺物より弥生時代中期と考える。

S K-24

位 置 5 R グリッドのほぼ中央に位置する。南部遺構群の東側北寄りにあたり、北西下がりの緩傾斜地（尾根部）に立地する。周辺には、S K-21、23、25、28、29がある。壙底の標高は223.52mを測る。

形 態 平面形、底面形共に円形で、断面形は明瞭に壁が直立する。底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径85cm、短径83cm、底面で長径77cm、短径76cm、深さ24cmを測る。壁の最小傾斜角は96°と、ほぼ垂直である。

地 層 地山に掘り込まれており、埋土は①～③層の黒色土系と、④層の黄褐色土系である。

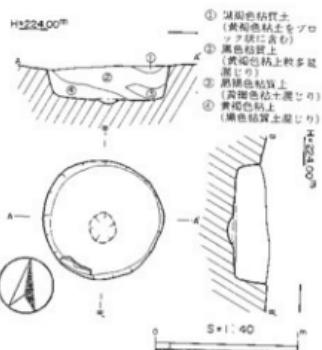
遺 物 検出しなかつた。

性 格 不明である。

時 期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。



挿図81 SK-23遺構図



挿図82 SK-24遺構図

### SK-25

位置 5 R グリッドの北側に位置する。南部遺構群の東側北寄りにあたり、北西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。周辺には、SK-21、23、24、26、27、32がある。壙底の標高は223.38mを測る。

形態 平面形、底面形共に円形で、断面形は明瞭に壁が直立する、底面のほぼ平坦な土壙である。規模は、検出面で長径87cm、短径85cm、底面で長径83cm、短径79cm、深さ31cmを測る。壁の最小傾斜角は90°である。

土層 地山に掘り込まれており、埋土は黒色土系である。

遺物 検出しなかった。

性格 貯蔵穴の可能性がある。

時期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

### SK-26

位置 5 R グリッドの北東端に位置する。南部遺構群の東側北寄りにあたり、北西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。周辺には、SK-21、25、32、33がある。壙底の標高は223.36mを測る。

形態 平面形、底面形共に円形で、断面形は南東側で袋状を呈する。底面のほぼ平坦な土壙である。規模は、検出面で長径114cm、短径110cm、底面で長径107cm、短径106cm、深さ30cmを測る。壁の最小傾斜角は84°である。

土層 ②層は、壁の崩壊による埋土である可能性が考えられる。

遺物 検出しなかった。

性格 形態及び土層より貯蔵穴と考える。

時期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。



図83 SK-25遺構図

### SK-27

位置 5 R グリッドの北西端に位置する。南部遺構群の東側北寄りにあたり、北西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺には、SK-32、35などがある。壙底の標高は222.90mを測る。

形態 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は明瞭に壁が直立する。底面のほぼ平坦な土壙である。規模は、検出面で長径129cm、短径100cm、底面で長径122cm、短径94cm、

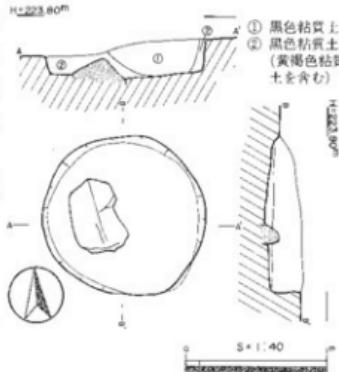


図84 SK-26遺構図

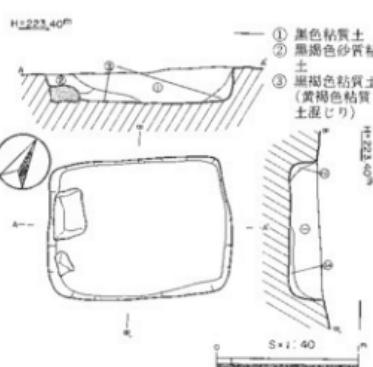
深さ27cmを測る。長軸方向はN -60° -Eで、壁の最小傾斜角は90°である。

**土層** ③層は、壁の崩壊による埋土である可能性が考えられる。

**遺物** 弥生土器片を検出したが図化できなかった。

**性格** 埋土より貯蔵穴と考えられる。

**時期** 出土遺物及び周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。



挿図85 SK-27遺構図

### SK-28

**位置** 5 Rグリッドの東端に位置する。南部遺構群の東側北寄りにあたり、西下がりの緩傾斜面(尾根部)に立地する。周辺には、S I-01、SK-23などがある。墳底の標高は223.86mを測る。

**形態** 平面形、底面形共に楕円形で、断面形は明瞭に壁が外傾し、床面が中央で凹む土壤である。規模は、検出面で長径78cm、短径68cm、底面で長径68cm、短径57cm、深さ24cmを測る。壁の最小傾斜角は100°である。

**土層** 地山に掘り込まれており、埋土は①～③層の黄褐色土系である。

**遺物** 検出しなかった。

**性格** 貯蔵穴の可能性がある。

**時期** 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。



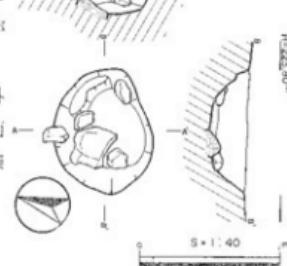
挿図86 SK-28遺構図

### SK-29

**位置** 5 Rグリッドのほぼ中央に位置する。南部遺構群の東側北寄りにあたり、北西下がりの緩傾斜面(尾根部)に立地する。周辺には、SK-23、24、27、28、35などがある。墳底の標高は223.30mを測る。

**形態** 平面形、底面形共に楕円形で、断面形は明瞭に壁が外傾する。底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径87cm、短径70cm、底面で長径57cm、短径37cm、深さ29cmを測る。壁の最小傾斜角は98°である。

**土層** 黄褐色土系の埋土一層である。



挿図87 SK-29遺構図

遺物 検出しなかった。  
性格 貯藏穴の可能性がある。  
時期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

### SK-30

位置 9 O グリッドの南東隅に位置する。南部遺構群のほぼ中央南側にあたり、西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。周辺には、S I-02、SK-10、11、12、15、43がある。壇底の標高は220.53mを測る。

形態 西側半分を掘り過ぎているが、平面形、底面形共に橢円形を呈すると考える。断面形は明瞭に壁が外傾し、底面はほぼ平坦である。規模は、検出面で長径113cm、短径80cm、底面で長径89cm、残存短径28cm、深さ15cmを測る。長軸方向はN-4°-Wで、壁の最小傾斜角は130°である。

土層 埋土は①、②層共に黄褐色土系である。  
遺物 検出しなかった。  
性格 不明である。  
時期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

### SK-32

位置 4 R グリッドの南東隅に位置する。南部遺構群の東側北端にあたり、北西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺には、SK-25、26、27、33がある。壇底の標高は222.80mを測る。

形態 平面形、底面形共にほぼ円形で、断面形は明瞭に壁が外傾する、底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径130cm、短径112cm、底面で長径112cm、径97cm、深さ33cmを測る。壁の最小傾斜角は104°である。

土層 地山に掘り込まれており、②、①の順で埋まっていた様子が伺われる。  
遺物 弥生土器片を検出したが、固化できなかった。  
性格 貯藏穴の可能性がある。  
時期 出土遺物より弥生時代中期と考える。

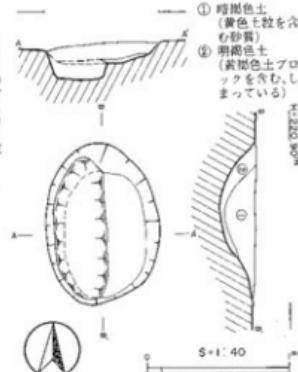


図88 SK-30遺構図

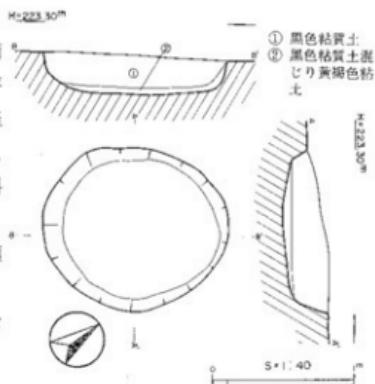


図89 SK-32遺構図

### SK-33

**位置** 4 R グリッドのほぼ中央に位置する。南部遺構群の東側北端にあたり、北西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺には、SK-26、32などがある。墳底の標高は222.96mを測る。

**形態** 平面形、底面形共にほぼ円形で、断面形は明瞭に壁が外傾する、底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径104cm、短径94cm、底面で長径96cm、短径85cm、深さ24cmを測る。壁の最小傾斜角は100°である。

**土層** ②層は壁の崩壊による埋土と考えられ、袋状を呈していた可能性がある。

**遺物** 土器片を検出したが、図化できなかった。

**性格** 埋土より貯蔵穴と考えられる。

**時期** 出土遺物より弥生時代中期と考える。

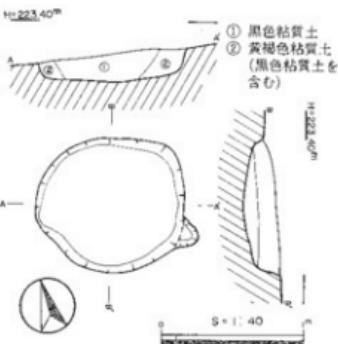


図90 SK-33遺構図

### SK-34

**位置** 4 S グリッドの中央北側に位置する。南部遺構群の東側北端にあたり、北西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺には、遺構が見あたらないが、南西方向に離れた位置にSK-18~21、23~29、32、33がある。墳底の標高は223.90mを測る。

**形態** 平面形は橢円形、底面形は隅丸長方形で、断面形は壁の立ち上がりが不明瞭な皿状を呈する、底面の不規則な土壤である。規模は、検出面で長径105cm、短径94cm、底面で長径89cm、短径78cm、深さ27cmを測る。

**土層** ①、②層共に黄褐色土系であったため、土壤の掘り方が不明瞭であった。

**遺物** 検出しなかった。

**性格** 不明である。

**時期** 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。



図91 SK-34遺構図

**位置** 5 Q グリッドの北東隅に位置する。南部遺構群の東側北寄りにあたり、北西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺には、SK-27、29などがある。墳底の標高は223.17mを測る。

**形態** 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は明瞭に壁が直立する、底面のほぼ平坦

な土壤である。規模は、検出面で長径141cm、短径122cm、底面で長径131cm、短径108cm、深さ30cmを測る。長軸方向はN—65°—Eで、壁の最小傾斜角は98°と、ほぼ垂直である。

- 土層** 地山に掘り込まれており、ほとんど黒色土系の土層で埋まっている。
- 遺物** 弥生土器片を検出したが、図化できなかった。
- 性格** 貯蔵穴の可能性がある。
- 時期** 出土遺物及び周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。



図92 SK-35遺構図

### SK-36

- 位置** 5Rグリッドの北西隅に位置する。南部遺構群の東側北端にあたり、北西下がりの緩傾斜面(谷部)に立地する。周辺にはSK-35があり、東方に離れてSK-18~21、23~29、32~34がある。壇底の標高は221.86mを測る。
- 形態** 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は袋状を呈する、底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径156cm、短径113cm、底面で長径167cm、短径110cm、深さ44cmを測る。長軸方向はN-87°-Wで、壁の最小傾斜角は62°である。
- 土層** 地山に掘り込まれており、埋土は①～④の黒色土系である。
- 遺物** 検出しなかった。
- 性格** 形態より貯蔵穴の可能性がある。
- 時期** 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

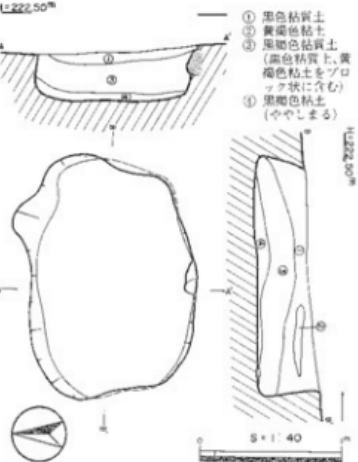


図93 SK-36遺構図

### S K-37

位 置 6 Q グリッドの北西隅に位置する。南部遺構群のほぼ中央北寄りにあたり、西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。S K-38と隣接し、周辺には S K-39~41などがある。墳底の標高は222.20mを測る。

形 態 平面形、底面形共に不整梢円形で、断面形は北東側で一部袋状を呈する、底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径159cm、短径98cm、底面で長径135cm、短径97cm、深さ37cmを測る。長軸方向はN-20°-Wで、壁の最小傾斜角は78°である。

土 層 ②層は壁の崩壊による埋土と考えられる。

遺 物 壺 2 を固化した。

性 格 形態及び土層より貯蔵穴の可能性がある。

時 期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。

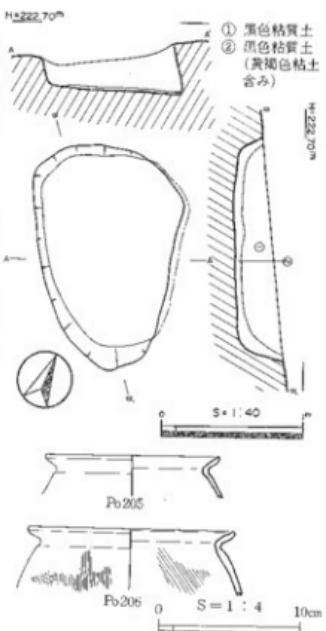


図94 SK-37遺構・遺物図

### S K-38

位 置 6 P グリッドの北東隅に位置する。南部遺構群のほぼ中央北寄りにあたり、西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。S K-37と隣接し、周辺には、S K-39~41などがある。墳底の標高は222.17mを測る。

形 態 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は明瞭に壁が外傾する、底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径166cm、短径124cm、底面で長径148cm、短径110cm、深さ32cmを測る。長軸方向はN-43°-Wで、壁の最小傾斜角は102°である。

土 層 地山に掘り込まれており、埋土は①②層共に黄褐色土系である。

遺 物 壺 1 、壺 1 、石斧 1 を固化した。Po223は、土壤の北西隅、墳底より10cm上位の位置に破片として集中的に出土している。同一個体の破片が口縁の下位に位置すること、流れ込みにしては破片数が多いこと、またその破片が一ヶ所に集中することなどから、完形壺が口縁を下にした

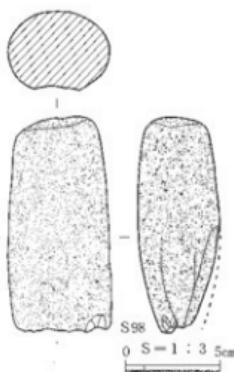


図95 SK-38遺物図①

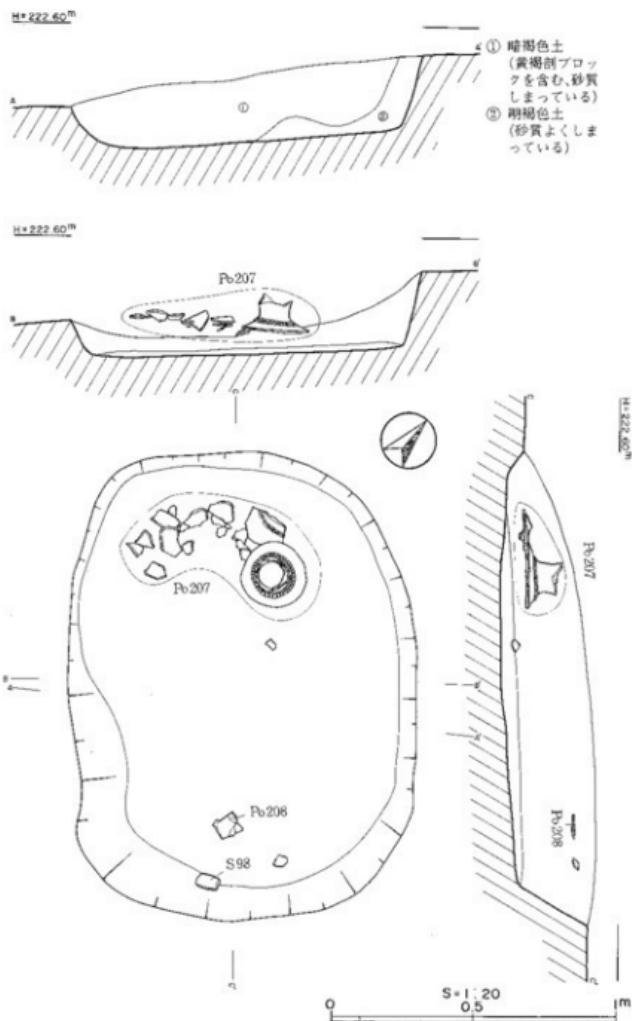
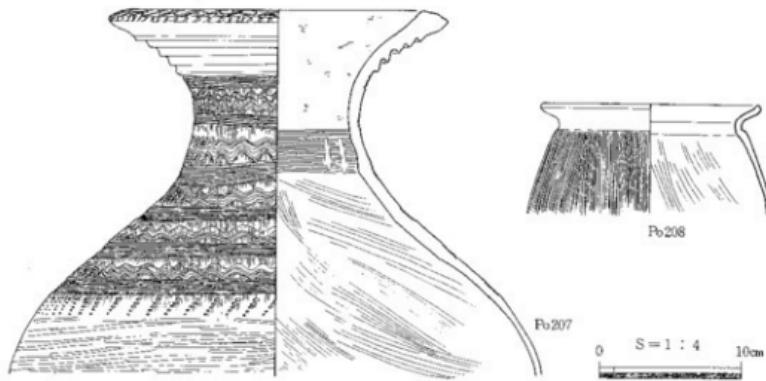


図96 SK-38遺構図

状態で置かれていたものが自然に壊れたものでなく、人為的にあらかじめ壊されたものが意図的に置かれたものである可能性が高いといえる。

性 格 不明である。

時 期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。



挿図97 SK-38遺物図②

S K-39

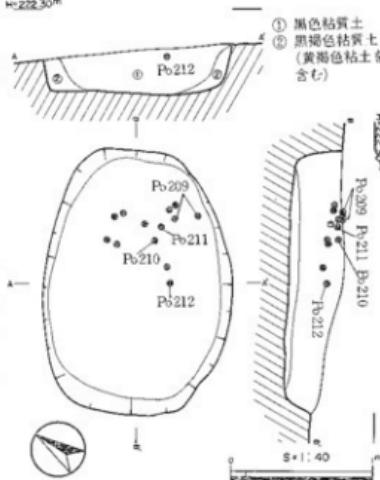
位 置 6Pグリッドのほぼ中央に位置す H:222.30m

る。南部遺構群のほぼ中央北寄りにあたり、西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。SK-40と隣接し、周囲にはSK-37、38、40、41、47、51がある。壇底の標高は221.66mを測る。

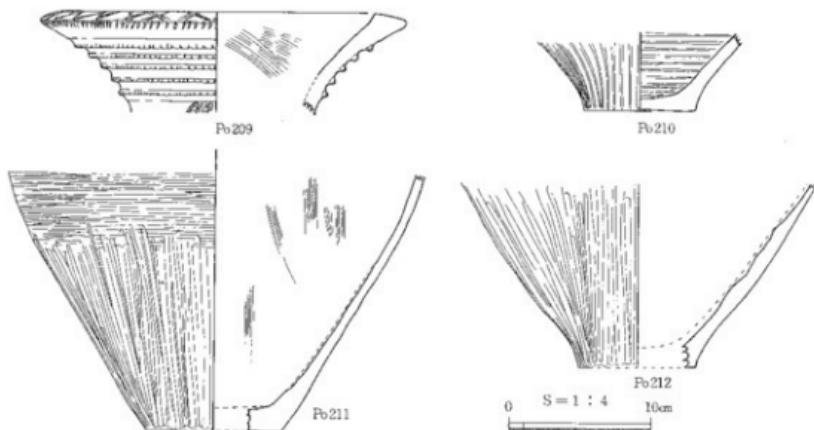
形 態 平面形、底面形共に圓丸長方形で、断面形は壁が明瞭に外傾する。底面のほぼ平坦な土壙である。規模は検出面で長径185cm、短径134cm、底面で長径170cm、短径121cm、深さ40cmを測る。長軸方向はN-60°Wで、壁の最小傾斜角は100°である。

上 層 ②層は壁の崩壊による埋土と考えられ、袋状土壙であった可能性がある。

遺 物 壺1、底部3を図化した。遺物は壇底より25~35cm上位の位置に集中している。  
性 格 土層より貯蔵穴の可能性がある。  
時 期 出土遺物より弥生時代中期と考える。



挿図98 SK-39遺構図



挿図99 SK-39遺物図

#### SK-40

**位 置** 6Pグリッドの中央西寄りに位置する。南部遺構群のほぼ中央北寄りにあたり、西下がりの緩傾斜面(尾根部)に立地する。SK-39と隣接し、周辺にはSK-47、50、51、集石-01がある。壇底の標高は221.55mを測る。

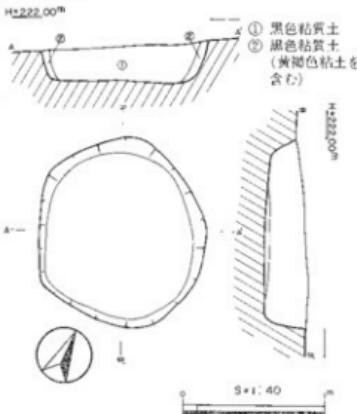
**形 態** 平面形、底面形共にほぼ円形で、断面形は明瞭に壁が外傾する、底面のはば平坦な土壤である。規模は検出面で長径133cm、短径119cm、底面で長径117cm、短径104cm、深さ30cmを測る。壁の最小傾斜角は100°である。

**土 層** ②層は壁の崩壊による埋土と考えられ、袋状土壤であった可能性がある。

**遺 物** 弥生土器片を検出したが、図化できなかった。

**性 格** 土層より貯蔵穴の可能性がある。

**時 期** 出土遺物及び周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。



挿図100 SK-40遺構図

#### SK-41

**位 置** 6Oグリッドの西端に位置する。南部遺構群のほぼ中央北寄りにあたり、西下がりの緩傾斜面(尾根部)に立地する。周辺にはSK-37~39、47がある。壇底の標高は222.05mを測る。

形 態 北方を擾乱によって切られているが、平面形、底面形共に不整梢円形を呈し、断面形は明瞭に壁が外傾する。底面のほぼ平坦な土壤である。規模は検出面で残存長径120cm、短径110cm、底面で残存長径112cm、短径95cm、深さ26cmを測る。壁の最小傾斜角は102°である。

土 肴 塚土は黒色粘土質土一層である。

遺 物 弥生土器片を検出したが、図化できなかつた。

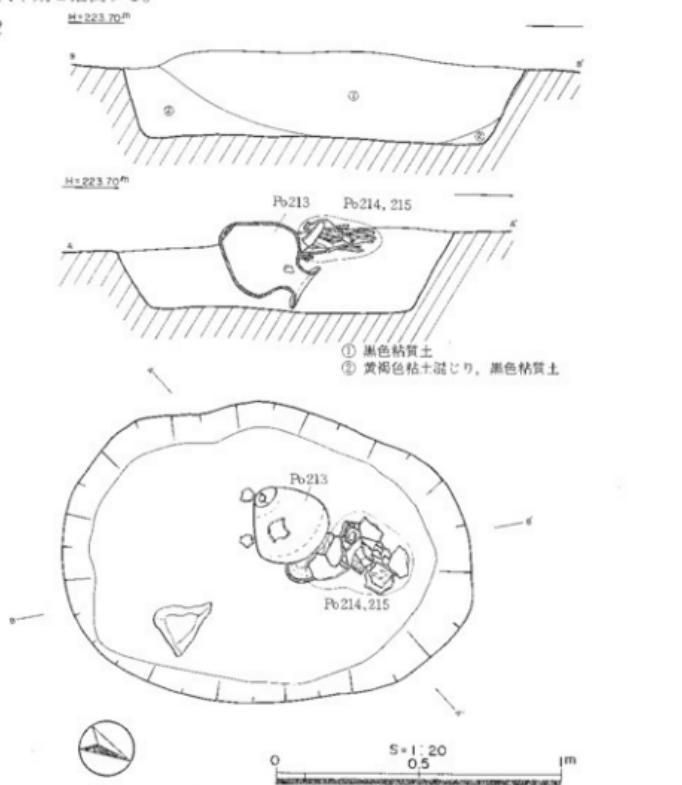
性 格 不明である。

時 期 出土遺物及び周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

S K—42

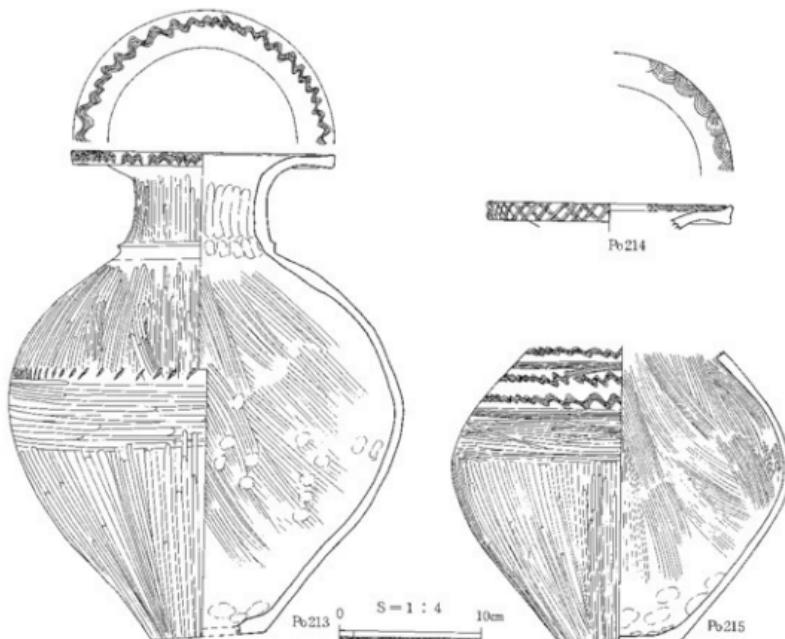


挿図101 SK—41遺構図



挿図102 SK—42遺構図

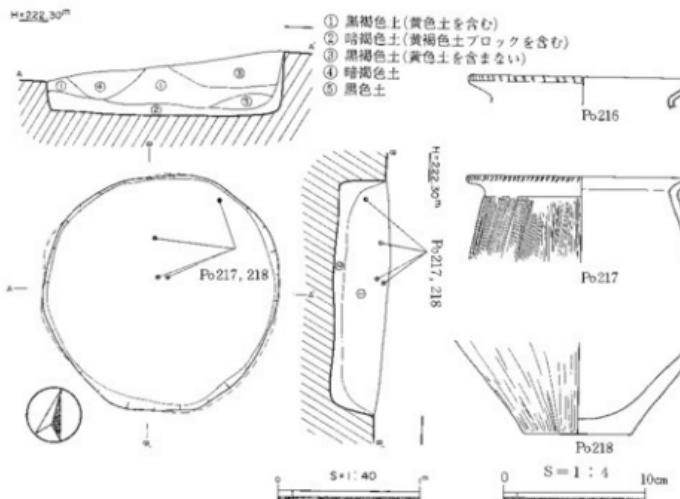
- 位 置 6 R グリッドの中央南隅に位置する。南部遺構群の東側中央にあたり、南西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。周辺には S I-01、08、S B-01、S K-14がある。墳底の標高は223.27mを測る。
- 形 態 平面形、底面形共に橢円形で、断面形は明瞭に壁が外傾する。底面のほぼ平坦な土壇である。規模は検出面で長径142cm、短径121cm、底面で長径123cm、短径91cm、深さ31cmを測る。長軸方向はN-25°-Wで、壁の最小傾斜角は108°である。
- 土 層 ②層は壁の崩壊による埋土と考えられ、袋状土壇であった可能性がある。
- 遺 物 壺3を図化した。Po213はN-22°-Eの方向に、底部に対して35°の傾きをもって、口縁部を下、底部を上にした状態で出土した。底部に孔があけてあり、壺本来の用途をなさないことから、何らかの祭祀的目的で置かれたものと考えられる。
- 性 格 不明である。
- 時 期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。



插図103 SK-42遺物図

### SK-43

- 位 置 10 O グリッドの中央北寄りに位置する。南部遺構群の中央南寄りにあたり、南西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。墳底の標高は221.65mを測る。



挿図104 SK-43遺構・遺物図

形態 平面形、底面形共に円形で、断面形は袋状を呈する、底面がほぼ平坦な土壙である。

規模は、検出面で径163cm、底面で径171cm、深さ48cmを測る。壁の最小傾斜角は84°である。

土層 ②層は壁の崩壊による埋土と考えられる。

遺物 豪2、底部1を固化した。

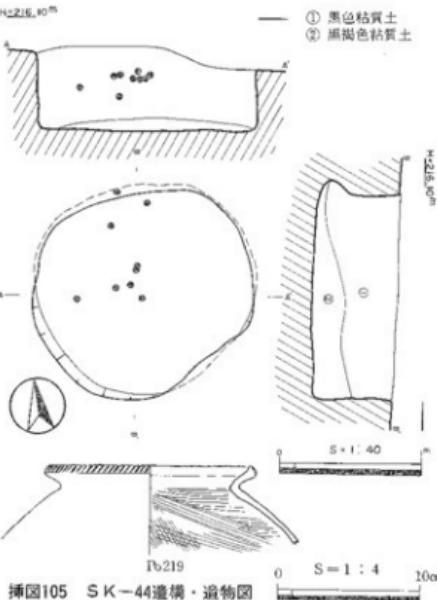
性格 形態より貯蔵穴と考える。

時期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。

#### SK-44

位置 11Kグリッドの南側に位置する。南部遺構群のほぼ南西にあたり、西下がりの緩傾斜面に立地する。SK-17と隣接し、周辺にSK-16、73、85などがある。墳底の標高は215.28mを測る。

形態 平面形、底面形共に円形であり、断面形は北側で袋状を呈する、底面のほぼ平坦な土



挿図105 SK-44遺構・遺物図

壇である。規模は、検出面で長径155cm、短径148cm、底面（ふくらんだ部分）で長径154cm、短径150cm、深さ60cmを測る。壁の最小傾斜角は85°である。

土層 黄色土層に掘り込まれ、②→①の順に埋土していった様子が伺われる。

遺物 壺1を図化した。

性格 形態より貯蔵穴の可能性がある。

時期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。

#### SK-45

位置 10Lグリッドのほぼ中央北寄りに位置する。南部遺構群の西側ほぼ中央にあたり、南西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。周辺にはSB-05、SK-46、74、79、81、82がある。壇底の標高は217.64mを測る。

形態 平面形、底面形共に不整円形で、断面形は明瞭に壁が直立する、底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径127cm、短径124cm、底面で長径122cm、短径112cm、深さ30cmを測る。径10~35cm位の安山岩系の亜角~亜円礫が土壤内に落ち込んでおり、集石状を呈し、この上位には図化していないが、径60cm位の亜円礫がのっていた。壁の最小傾斜角は92°とほぼ垂直である。  
 $H=218.20m$

土層 埋土は黒褐色土一層である。埋土中

には炭化物や焼土は含まれておらず、また礫も赤変していないことから、集石状を呈する礫は、炉として使用されたものではなく、放棄の際に意図的に投げ込まれたと考える。

遺物 壺1、壙1、高壙1、底部2を図化した。

性格 不明である。

時期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。

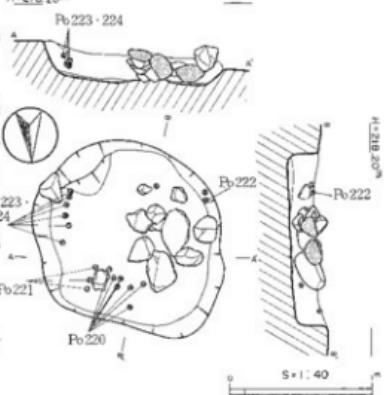


図106 SK-45遺構図

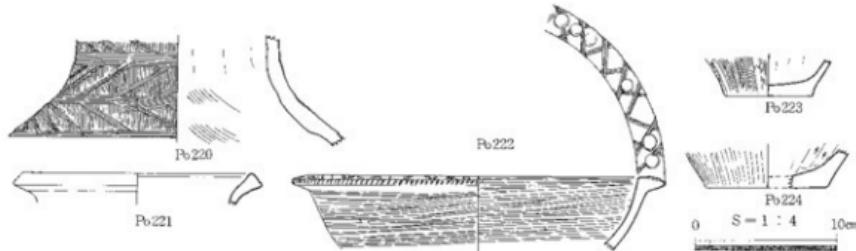


図107 SK-45遺物図

### S K - 46

位 置 10 L グリッドの北東端に位置する。南部遺構群の西側ほぼ中央にあたり、西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。周辺には S K - 04、45、74、79がある。壙底の標高は 218.15m を測る。

形 態 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は明瞭に壁が外傾する、底面のはば平坦な土壙である。規模は、検出面で長径 156cm、短径 119cm、底面で長径 148cm、短径 108cm、深さ 18cm を測る。長軸方向は南北にとり、壁の最小傾斜角は 120° である。

土 層 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、埋土は黒褐色土一層である。

遺 物 弥生土器片を検出したが、図化できなかった。  
性 格 不明である。

時 期 出土遺物及び周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

### S K - 47

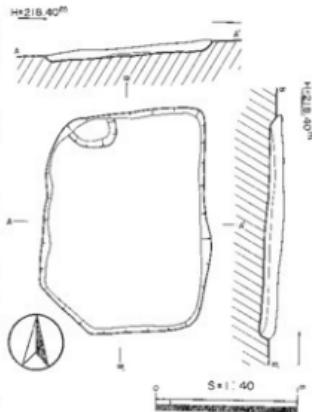
位 置 6 P グリッドの東南端に位置する。南部遺構群の中央北寄りにあたり、南西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。壙底の標高は 221.95m を測る。

形 態 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は明瞭に壁が直立する、底面がほぼ平坦な土壙である。規模は、検出面で長径 214cm、短径 138cm、底面で長径 202cm、短径 130cm、深さ 28cm を測る。長軸方向は N - 25° - W で、壁の最小傾斜角は 98° と、ほぼ垂直である。

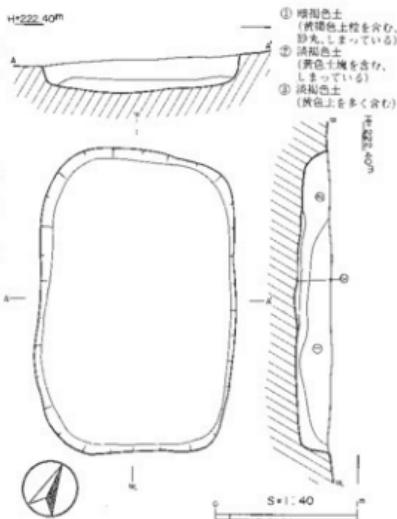
土 層 ②層は壁の崩壊による埋土と考えられ、袋状土壙であった可能性がある。

遺 物 麟 1 を図化した。  
性 格 不明である。

時 期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期中葉と考える。



挿図108 SK-46遺構図



挿図109 SK-47遺構・遺物図

### S K-48

位 置 7 P グリッドのほぼ中央北寄りに位置する。南部遺構群の中央北寄りにあたり、南西下がりの緩傾斜面(尾根部)に立地する。周辺には S K-47、49~51、64がある。壙底の標高は221.42mを測る。

形 態 平面形、底面形共にほぼ隅丸長方形で、断面形は明瞭に壁が外傾する、底面のほぼ平坦な土壙である。規模は、検出面で長径190cm、短径110cm、底面で長径175cm、短径97cm、深さ42cmを測る。長軸方向はN-54°-Eで、壁の最小傾斜角は100°である。

土 層 黄褐色粘土(地山)に掘り込まれており、①～③層の黒色土系と④、⑤層の黄褐色土系の埋土である。④、⑤層は壁の崩壊による埋土と考えられ、袋状土壙であった可能性がある。

遺 物 鏟 1 を図化した。

性 格 土層より貯蔵穴の可能性がある。

時 期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。

### S K-49

位 置 7 P グリッドの南東隅に位置する。南部遺構群のほぼ中央にあたり、南西下がりの緩傾斜面(尾根部)に立地する。周辺には S B-04、S K-05、06、22、48、52などがある。壙底の標高は221.55mを測る。

形 態 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は明瞭に壁が直立する。底面のほぼ平坦な土壙である。規模は、検出面で長径131cm、短径85cm、底面で長径128cm、短径82cm、深さ18cmを測る。長軸方向はN-35°-Wで、壁の最小傾斜角は96°とほぼ垂直である。

土 層 黄褐色粘土(地山)に掘り込まれており、埋土は黒褐色土一層である。

遺 物 紡錘車 1 を図化した。

性 格 不明である。

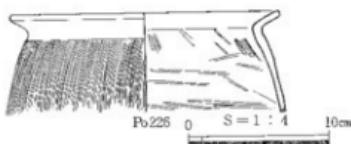
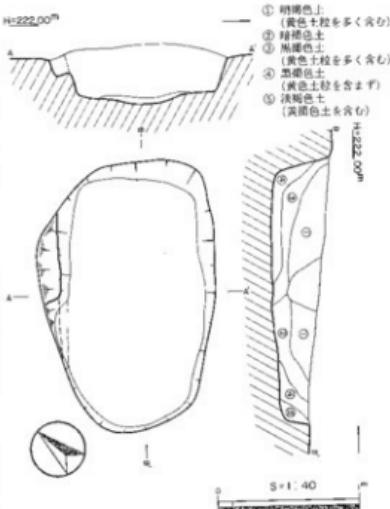


図110 S K-48遺構・遺物図

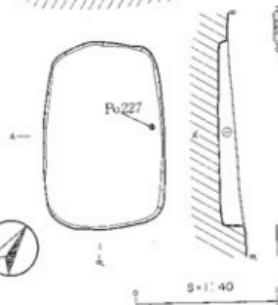


図111 S K-49遺構・遺物図

時 期 出土遺物及び周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

### S K - 50

位 置 7 P グリッドの北西隅に位置する。南部遺構群の中央北寄りにあたり、西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。S K - 51 と隣接し、周辺には S K - 48・64、集石 - 01 がある。墳底の標高は 221.32m を測る。

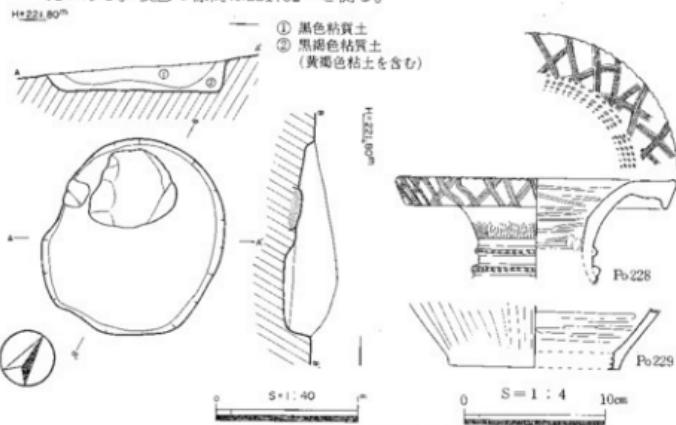


図 112 SK-50 遺構・遺物図

形 態 平面形、底面形共に梢円形で、断面形は明瞭に壁が外傾する、底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径 140cm、短径 120cm、底面で長径 132cm、短径 116cm、深さ 30cm を測る。長軸方向は N - 7° - W° で、壁の最小傾斜角は 100° である。

土 層 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、②→①層の順で埋まっていた様子が伺われる。

遺 物 壺 1、底部 1 を図化した。

性 格 不明である。

時 期 出土遺物より弥生時代中期と考える。

### S K - 51

位 置 6 P グリッドの南西隅に位置する。南部遺構群の中央北寄りにあたり、南西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。S K - 50 と隣接し、周辺には、S K - 39、40、47、48、64、集石 - 01 がある。墳底の標高は 221.40m を測る。

形 態 平面形、底面形共に不整梢円形で、断面形は明瞭に壁が外傾する。底面のほぼ平坦な土壤である。

規 模 是 検出面で長径 83cm、短径 70cm、底面で長径 72cm、短径 65cm、深さ 10cm を測る。長軸方向は



図 113 SK-51 遺構図

N-64°-E、壁の最小傾斜角は100°である。

- 土層 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、②、①層の順で埋まっていた様子が伺われる。  
遺物 検出しなかった。  
性格 不明である。  
時期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

### SK-52

- 位置 8Qグリッドの中央西隅に位置する。南部遺構群のほぼ中央にあたり、西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。SB-04、SK-05と隣接し、周辺にはSK-03などがある。壇底の標高は221.80mを測る。
- 形態 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は東側で若干袋状を呈する、底面の平坦な土壇である。規模は、検出面で長径138cm、短径84cm、底面で長径127cm、短径77cm、深さ26cmを測る。長軸方向はN-10°-Wで、壁の最小傾斜角は80°である。
- 土層 ②層は壁の崩壊による埋土と考えられる。
- 遺物 壁1、底部2を瓦化した。
- 性格 不明である。
- 時期 出土遺物より弥生時代中期と考える。

図114 SK-52遺構図

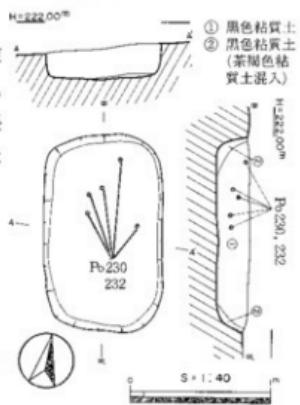


図115 SK-52遺物図

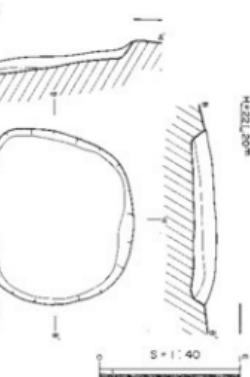


### SK-53

- 位置 7Oグリッドの南東隅に位置する。南部遺構群のほぼ中央にあたり、南西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。周辺にはSK-06、07、22がある。壇底の標高は220.86mを測る。

- 形態 平面形、底面形共に不整円形で、断面形は明瞭に壁が外傾する。底面のほぼ平坦な土壇である。規模は、検出面で長径122cm、短径108cm、底面で長径113cm、短径100cm、深さ18cmを測る。長軸方向はN-42°-Wで、壁の最小傾斜角は120°である。

図116 SK-53遺構図



土層 地山に掘り込まれており、埋土は黒褐色土一層である。  
 遺物 弥生土器片を検出したが、固化できなかった。  
 性格 不明である。  
 時期 出土遺物及び周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

#### S K-54

位置 9 S グリッドの北西端に位置する。南部遺構群の東側南端にあたり、南西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。周辺には遺構は見あたらないが、北西方向に離れた位置に S B-01がある。壙底の標高は223.22mを測る。

形態 平面形、底面形共に楕円形で、断面形は明瞭に壁が直立する、底面のほぼ平坦な土壙である。規模は検出面で長径136cm、短径105cm、底面で長径124cm、短径94cm、深さ27cmを測る。長軸方向はN-50°-Eで、壁の最小傾斜角は96°と、ほぼ垂直である。

土層 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、④→①層の順で埋まっていった様子が伺われる。

遺物 弥生土器片を検出したが、固化できなかった。

性格 不明である。

時期 出土遺物より弥生時代中期と考える。



挿図117 SK-54遺構図

#### S K-55

位置 12K グリッドの東南、やや南寄りに位置する。南部遺構群の南西端にあたり、南下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。周辺に SK-16, 61などがある。壙底の標高は215.84mを測る。

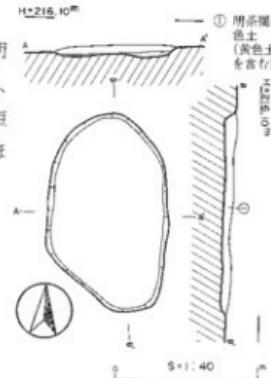
形態 平面形、底面形共に楕円形を呈し、断面形は壁が明瞭に外傾する、底面はほぼ平坦な土壙である。規模は、検出面で長径140cm、短径85cm、底面で長径135cm、短径79cm、深さ8cmを測る。長軸方向はN-8°-Wとほぼ南北にとり、壁の最小傾斜角は124°を測る。

土層 明茶褐色土一層である。

遺物 弥生土器片を検出したが、固化できなかった。

性格 不明である。

時期 出土遺物より弥生時代中期と考える。



挿図118 SK-55遺構図

### S K - 56

位 置 11Nグリッドのほぼ中央北端に位置する。南部遺構群のほぼ中央南側にあたり、南西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。S K - 63と隣接し、周辺には S I - 03、S B - 02、S K - 66がある。壇底の標高は218.90mで、標高は218.28mを測る。

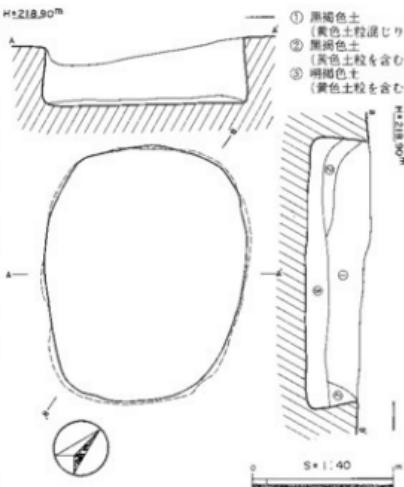
形 態 平面形、底面形共に隅丸長方形、断面形は袋状を呈し、底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径180cm、短径140cm、底面で長径182cm、短径143cm、深さ45cmを測る。長軸方向はN - 40° - Wで、壁の最小傾斜角は80°である。

土 層 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、③→①層の間に埋まっていった様子が伺われる。

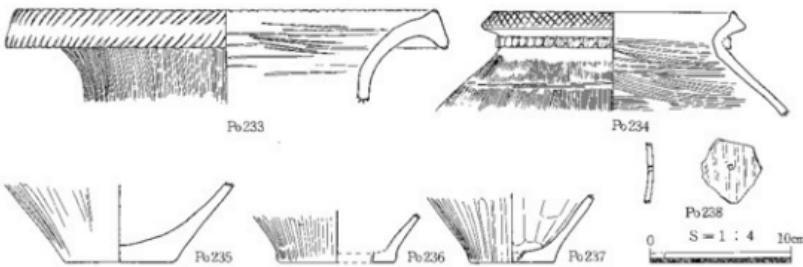
遺 物 壺1、甕1、底部3を固化した。

性 格 形態より貯蔵穴と考える。

時 期 出土遺物より弥生時代中期と考える。



插図119 SK-56遺構図

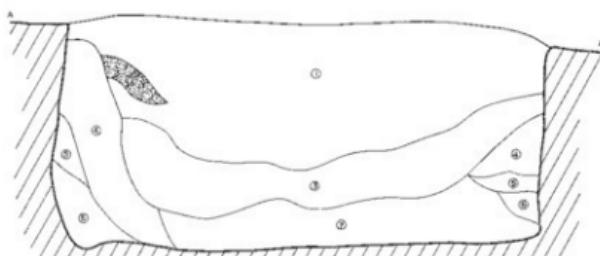


插図120 SK-56遺物図

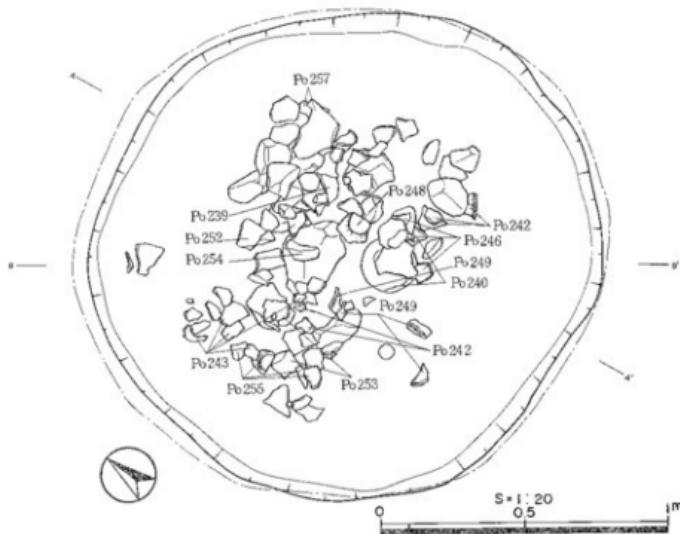
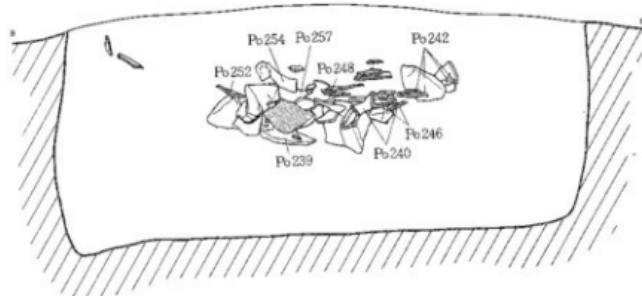
### S K - 57

位 置 10Mグリッドの南東側に位置する。南部遺構群やや南西にあたり、南西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺に、S B - 02、S K - 04、58~60、74などがある。壇底の標高は217.46mを測る。

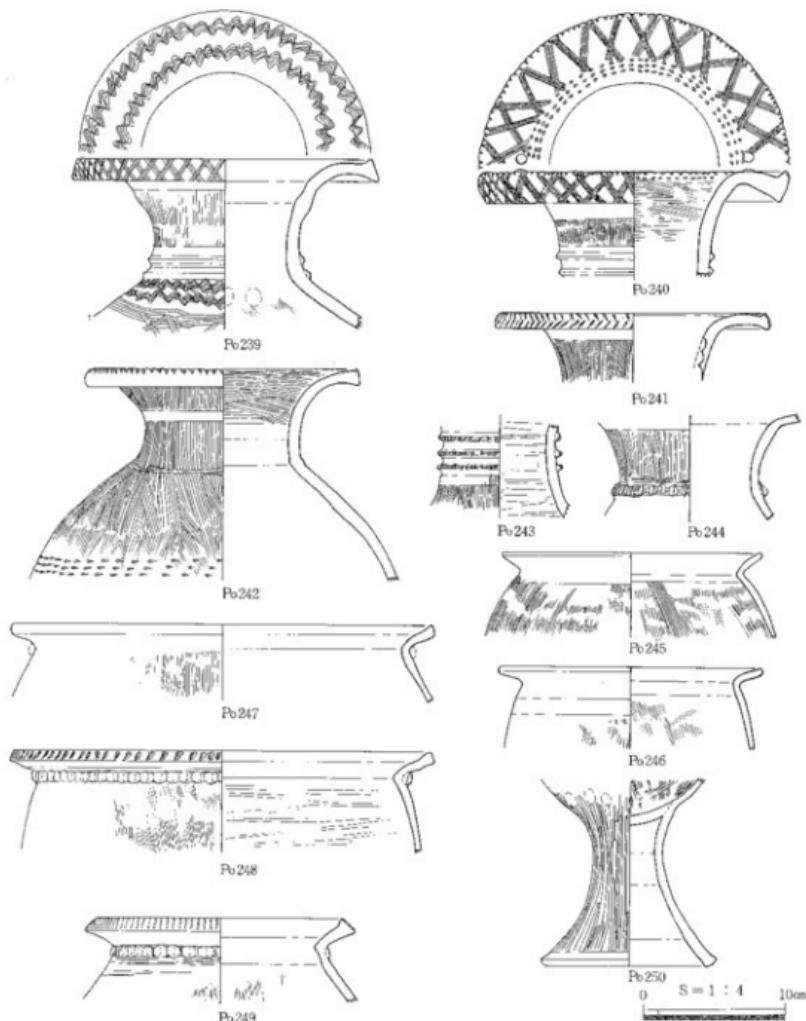
形 態 平面形、底面形共に円形で、断面形は袋状を呈する、底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径178cm、短径170cm、底面で、長径190cm、短径170cm、深さ81cmを測る。壁の南東側で袋状を呈し、その最小傾斜角は82°である。



- ① 黒褐色土  
 ② 明褐色燒土(黒色土を含む)  
 ③ 明褐色土(黄色土粒を多く含む)  
 ④ 晴褐色土  
 ⑤ 黒褐色土  
 ⑥ 喜茶褐色土  
 ⑦ 明褐色土  
 (黄色土ブロックを少し含む、かたくしまっている)

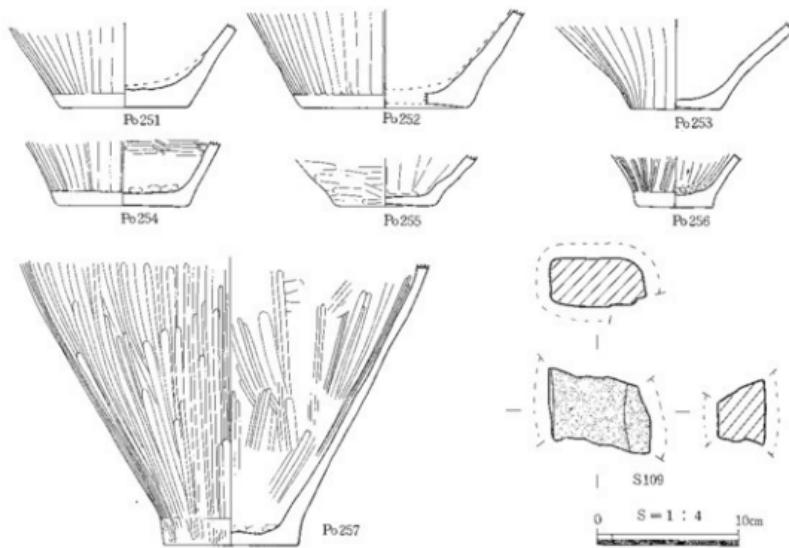


挿図121 SK-57遺構図



插図122 SK-57遺物図①

- 土層** 焼土を含み(②層)、④～⑦層は壁の崩壊した埋土と考える。
- 遺物** 垚6、壺5、高杯(脚部片)1、底部片7を同化した。遺物は①層中に含まれており、壙底より上位70～130cmの幅に集中する。
- 性格** 形態及び土層より貯蔵穴と考える。
- 時期** 遺物より弥生時代中期中葉と考える。



図SK-57 遺物図②

### SK-58

**位 置** 10Nグリッドの北西隅に位置する。南部遺構群の西側にあたり、南西下がりの緩傾斜面(尾根部)に立地する。SK-60(縄文時代早期末)を明瞭に切り、SK-59と隣接する。壇底の標高は218.46mを測る。

**形 態** 平面形、底面形共に隅丸方形で、断面形は明瞭に壁が外傾する、底面のほぼ平坦な土壇である。規模は、検出面で長径137cm、短径90cm、底面で長径117cm、短径78cm、深さ41cmを測る。長軸方向はN-12°-Wで、壁の最小傾斜角は109°である。

**土 層** 黄色粘土(地山)に掘り込まれており、④→①層の順に埋まっていった様子が伺われる。

**遺 物** 壺1を出土した。

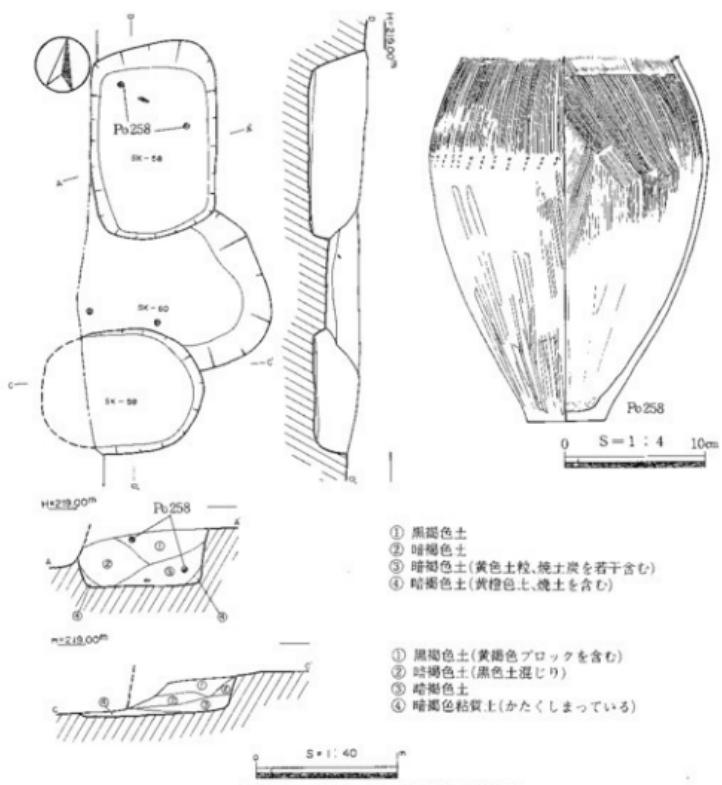
**性 格** 不明である。

**時 期** 出土遺物より弥生時代中期と考える。

### SK-59

**位 置** 10Nグリッドの北西隅に位置する。南部遺構群の西側にあたり、南西下がりの緩傾斜面(尾根部)に立地する。SK-60(縄文時代早期末)を明瞭に切り、SK-58と隣接する。壇底の標高は218.47mを測る。

**形 態** 西側部分を第8トレンチによって破壊されているが、平面形、底面形共に梢円形を呈すると推定する。断面形は明瞭に壁が直立する。底面のほぼ平坦な土壇である。規模は、検出面で残存長径82cm、短径87cm、底面で残存長径78cm、短径75cm、深さ32cm



插図124 SK-58・59遺構・遺物図

を測る。長軸方向はN-75°-Eで、壁の最小傾斜角は97°と、ほぼ垂直である。

**土 層** 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、④→①の順に埋まっていった様子が伺われる。

**遺 物** 弥生土器片を検出したが、固化できなかった。

**性 格** 不明である。

**時 期** 出土遺物より弥生時代中期と考える。

#### SK-61

**位 置** 12Lグリッド南西に位置する。南部遺構群南西にあたり、南下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。周辺にはSK-16、17、44、55、73などがある。壇底の標高は215.60mを測る。

**形 態** 平面形、底面形は不整橢円形をなし、断面形は西側で若干擾乱されているが、断面は明瞭に外傾する。規模は、検出面で長径106cm、短径82cm、底面で長径75cm、短径50

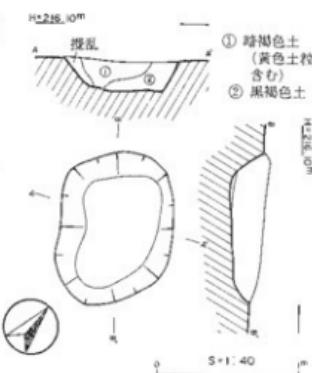
cm、深さ20cmを測る。壁の最小傾斜角120°を測る。長軸方向はN-40°-Eである。

土層 一部に擾乱を受けるが、地山（黄色粘土）に掘り込まれ、褐色土系の2層である。

遺物 弥生土器片を検出したが、図化できなかつた。

性格 不明である。

時期 出土遺物より弥生時代中期と考える。



插図125 SK-61遺構図

### SK-62・72

位置 8Mグリッドの南西隅に位置する。南部遺構群の西側にあたり、西下がりの緩傾斜地に立地する。周辺にはSK-69・70・71などがある。SK-62とSK-72は切り合ひ関係にあり、壇底の標高はSK-62が218.12m、SK-72が218.22mを測る。

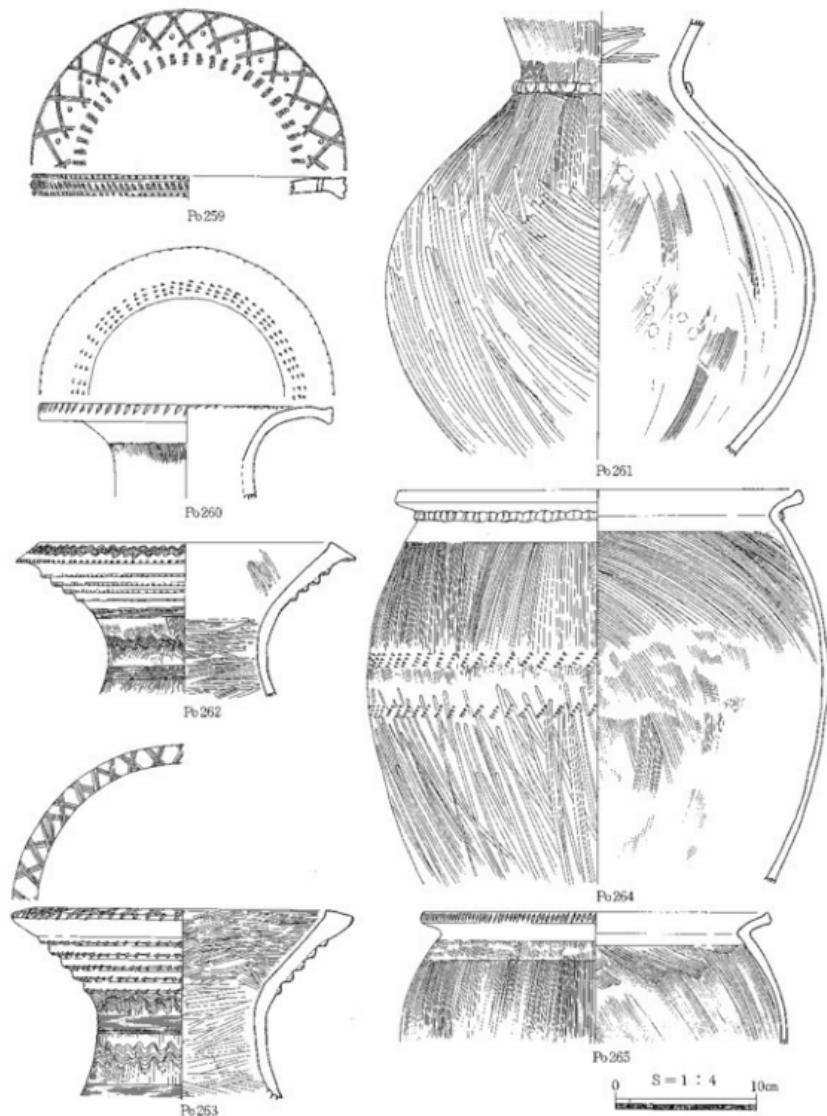
形態 SK-62は平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は壁の最小傾斜角が112°と外傾する土壤である。長軸方向は、南北をとる。規模は検出面で長径230cm、短径184cm、底面で長径169cm、短径148cm、深さ36cmを測る。また、SK-72はSK-62の後に掘り込まれたものと考えられ、平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は壁の最小傾斜角が111°と外傾する土壤である。長軸方向は東西をとり、規模は、検出面で長径148cm、短径142cm、底面で長径148cm、短径122cm、深さ52cmを測る。

土層 SK-62の埋土は黒褐色土系の①～④層で、その後にSK-72が掘り込まれ、⑤～⑩層が埋まっていた様子が伺われる。しかし、SK-62の⑤～⑩層は、黄褐色土系・黒褐色系の土層が交互に埋まっている。他の遺構の埋まり方とは違っている点で、自然堆積とは考えにくい。また、SK-72がSK-62のほぼ中央にすっぽりはめ込まれた様な切り合ひ関係を示す事など、単に別々の土壤であると言いつ切れない部分もある。したがってこれらが一つの遺構であり、⑤～⑩層までの土層が人為的なものである可能性が高い。

遺物 壺5、甕4、高壺2、底部片2、紡錘車1、砥石2を図化した。これらの土器は位置的にSK-72の遺物と考えられ、土壤のほぼ中央から投げ込まれた様な状態で出土した。床面からは出土しておらず、そのほとんどは埋土中央から上面にかけてある。また土器にまじって直径10～40cm程の石が土器と一緒に投げ込まれた様な状態で検出された。

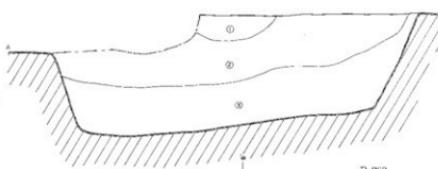
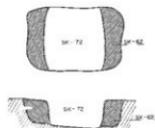
性格 SK-62の土層の様相からこれらが单一の土壤であるという可能性が高い。土壤墓と推測される。

時 期 出土遺物より弥生中期中葉と考えられる。

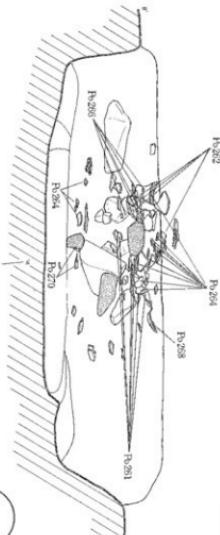
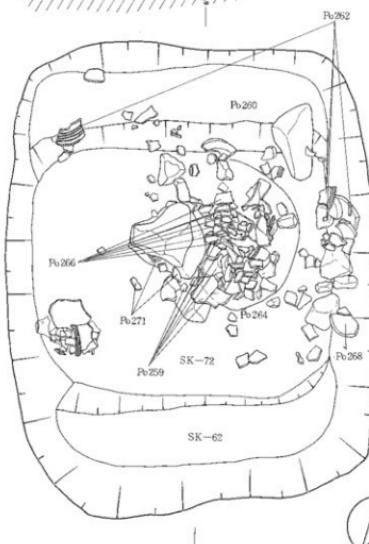
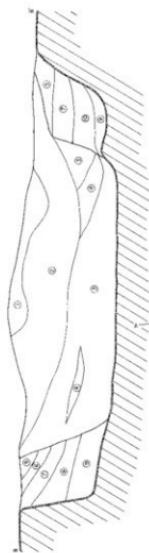


挿図127 SK-62-72遺物図①

H219.00m

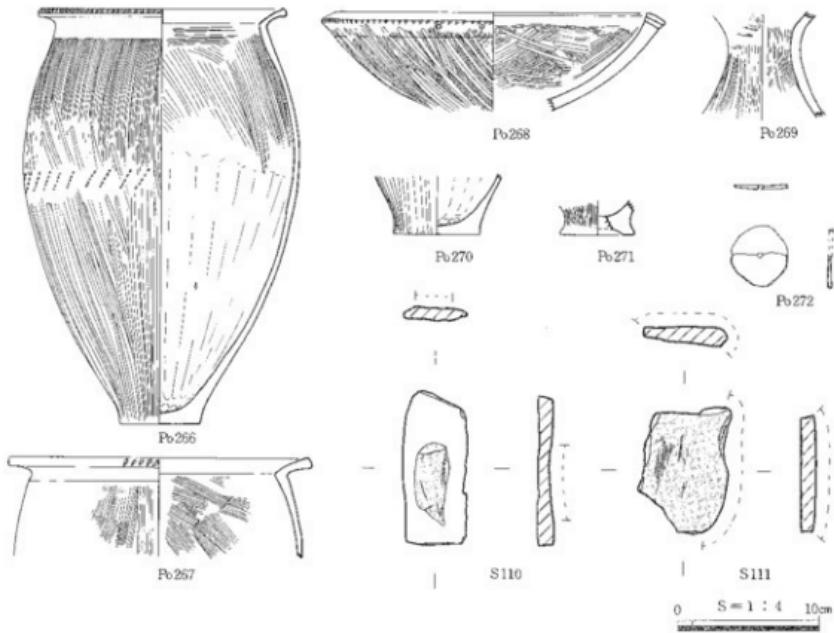


- ① 深褐色土  
（黄色土粒を多く含む、ややしまっている）
- ② 淡褐色土  
（黄色土粒をわずかに含む、ややしまっている）
- ③ 黄褐色土  
（黄色土粒を多く含む、ややしまっている）
- ④ 黄褐色土  
（黄色土粒を多く含む、ややしまっている）
- ⑤ 明褐色土（黄）  
（黄色土粒を多く含む、ややしまっている）
- ⑥ 明褐色土  
（黄色土粒を多く含む、ややしまっている）
- ⑦ 細褐色土  
（ややしまりなし、ハサハサ）
- ⑧ 黄褐色土  
（黄色土粒ブロックを塊中に含む、ややしまっている）
- ⑨ 黄褐色土  
（アロマタ灰、ややしまっている）
- ⑩ 粉茶褐色土  
（明褐色土、ブロックと黄褐色土ブロックを含む、ややしまっている）
- ⑪ 粉茶褐色土  
（黄色土ブロックを非常に多く含む）



0 5 10 20 m

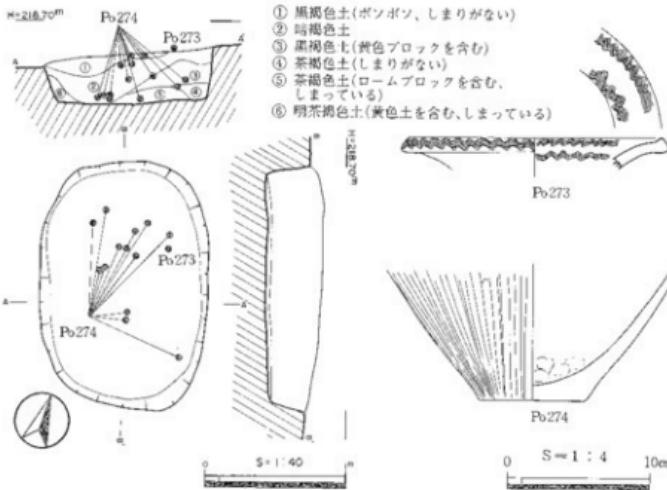
図126 SK-62・72遺構図



挿図128 SK-62・72遺物図②

SK-63

位 置 11Nグリッドの中央北端に位置する。南部遺構群のはば中央南寄りにあたり、南西下がりの緩傾斜面(尾根部)に立地する。SK-56と隣接し、周辺にはSB-02、S



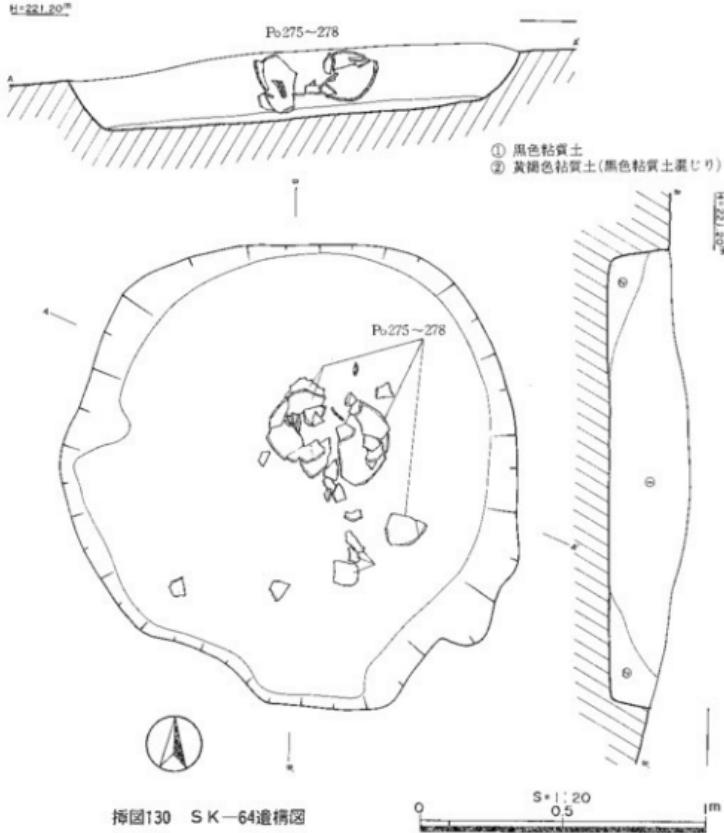
挿図129 SK-63遺構・遺物図

K-57、66がある。壙底の標高は218.10mを測る。

- 形態 平面形、底面形共に隅丸長方形。断面形は明瞭に壁が直立する。底面の平坦な土壙である。規模は、検出面で長径173cm、短径118cm、底面で長径162cm、短径107cm、深さ40cmを測る。長軸方向はN-15°-Wで、壁の最小傾斜角は93°と、ほぼ垂直である。
- 土層 ④～⑥層は壁の崩壊による埋土と考えられ、袋状土壙であった可能性がある。
- 遺物 壺1、底部1を固化した。
- 性格 土層より貯蔵穴の可能性がある。
- 時期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。

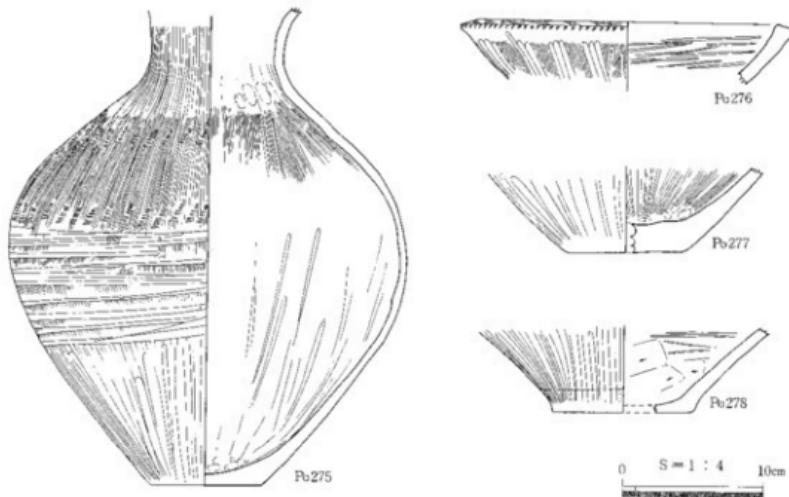
#### SK-64

- 位置 70グリッドの北東隅に位置する。南部遺構群の中央北寄りにあたり、西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。周辺にはSK-50、51、集石-01がある。壙底の標



高は220.83mを測る。

- 形態 平面形、底面形共にほぼ円形で、断面形は明瞭に壁が直立する、底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径162cm、短径159cm、底面で長径147cm、短径137cm、深さ29cmを測る。壁の最小傾斜角は97°と、ほぼ垂直である。
- 土層 ②層は壁の崩壊による埋土と考えられ、袋状土壤であった可能性がある。
- 遺物 壽1、高坏1、底部2を図化した。Po275は土壤内ではN-70°-Wの方向に、底面に対して若干西傾斜で、口縁部を東側に向けて横たわった状態で出土した。この状況より、口縁部を上に向けて置かれていたものが、埋まっていく過程（南東方向からの流れ込み）で、自然に倒れたものと考えられる。
- 性格 土層より貯藏穴の可能性がある。
- 時期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。

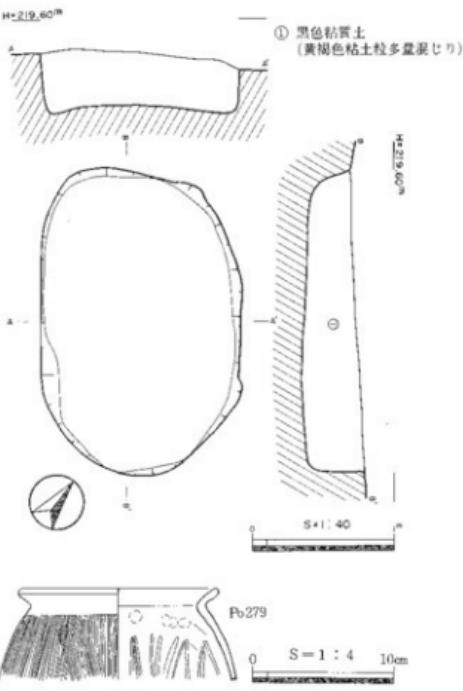


插図131 SK-64遺物図

### SK-65

- 位置 7 Nグリッドの南西隅に位置する。南部遺構群の西側北寄りにあたり、西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺には遺構は見あたらないが、北方にS I-04、南方にS I-05などがある。壇底の標高は218.95mを測る。
- 形態 平面形、底面形共に梢円形で、断面形は明瞭に壁が直立する。底面がほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径214cm、短径141cm、底面で長径210cm、短径134cm、深さ44cmを測る。長軸方向はN-40°-Wで、壁の最小傾斜角は90°である。
- 土層 埋土は黒色粘質土一層である。
- 遺物 壽1を図化した。

性 格 不明である。  
時 期 出土遺物より弥生時代中期中葉  
と考える。

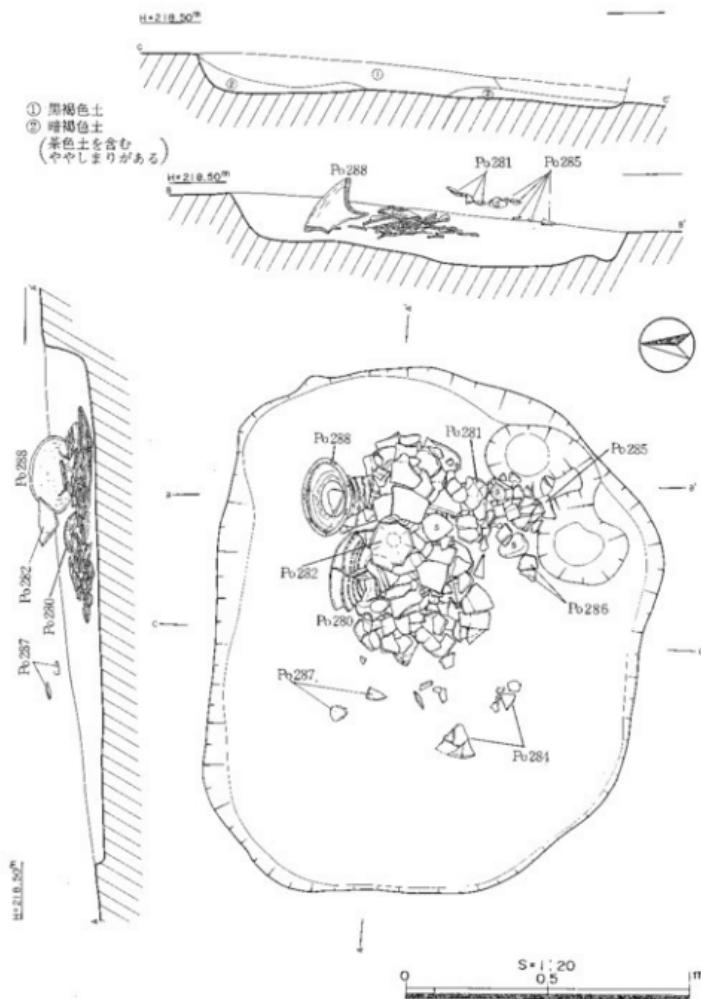


SK-66

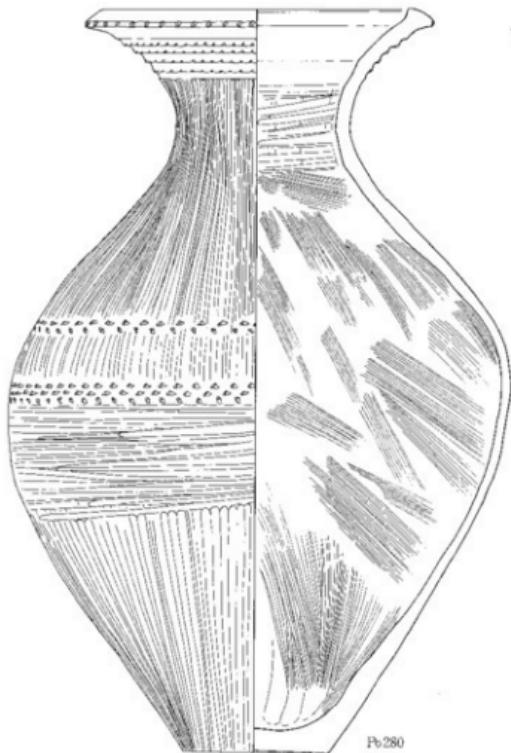
- 位 置 11グリッド中央やや北寄りに位置しており南3mでA区テラスに降る斜面となる。南部遺構群南端にあたり、南西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地している。周辺には西3mでS B-02、北2mにS K-56、63、北東8mにはS I-03がある。壇底の標高は218.29mを測る。
- 形 態 平面形、底面形はやや不整な隅丸方形を呈する。断面形は壁が外傾しており、壁の最小傾斜角は110°を測る。底面はほぼ平坦であるが、若干の凹凸を持っている。規模は、換出面で長径186cm、短径150cm、底面で長径178cm、短径140cm、深さ18cmを測る、浅い土壤である。長軸方向はほぼ東西にとる。壇底南東隅にピット状の落ち込みが2ヶ所みとめられ、規模は(32×24-10)と(32×25-12)cmを測る。
- 土 層 褐色土系の2層からなる。
- 遺 物 壺2、甕1、高壺3、底部2が出土している。出土状況を観察すると、器高56~57cmを測る大型の広口壺Po280、288が斜めにつぶされた形で並んでおり、本体は立て据えられていたものが土圧により押しつぶされた印象を受ける。さらに床面から10~20cm浮いて甕Po281、高壺Po284~287の4個体、底部2個体が小円錐も併い出土している。Po282の据え置いたような底部の出土状況と高壺が脚部ばかりであることが注目される。

性 格 遺物の出土状況等をみると、土壤そのものが、土圧と削平により大きな変形を受けているようであるが、華麗に飾った大型壺と高环等の出土からみて、祭祀的な色彩が強く感じられる。

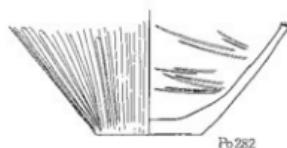
時 期 本土壤の出土土器は、良好な一括資料としてセット関係を示すものであるが、壺などから弥生時代中期中葉と考えられる。



挿図133 SK-66遺構図



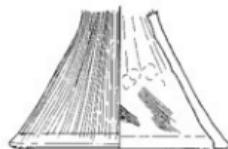
Pb280



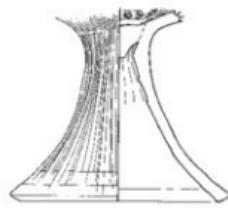
Pb282



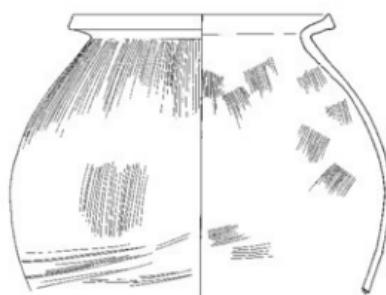
Pb283



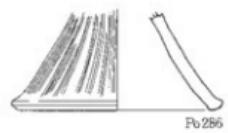
Pb284



Pb285



Pb281



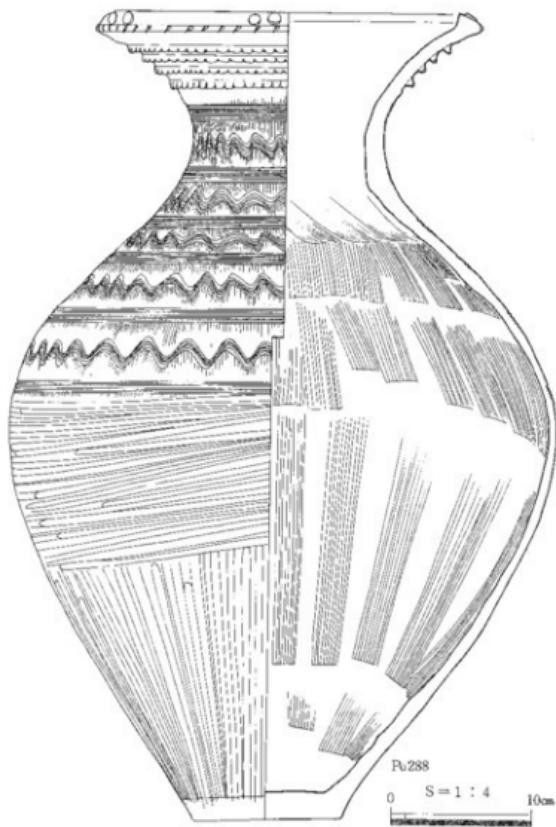
Pb286



Pb287

0 S = 1 : 4 10cm

插図134 SK-66遺物図①

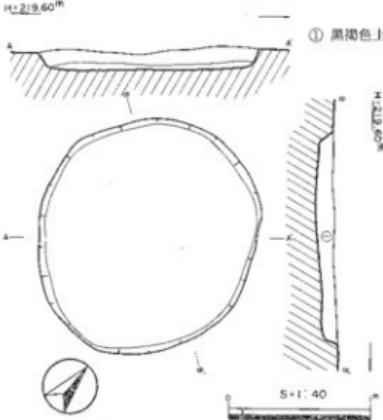


挿図135 SK-66遺物図②

### SK-67

位 置 9Nグリッドの中央北寄りに位置する。南部遺構群の西側ほぼ中央にあたり、南西下がりの緩傾斜面(尾根部)に立地する。S I-05と隣接し、周辺にはSK-68がある。墳底の標高は219.20mを測る。

形 態 平面形、底面形共に円形で、断面形は明瞭に壁が外傾する。底面がほぼ平坦な土壌である。規模は、検出面で長径158cm、短径154cm、底面で長径157cm、短径150cm、深さ16cmを測る。壁の最小



挿図136 SK-67遺構図

傾斜角は110°である。

- 土層 埋土は黒褐色土一層である。  
遺物 検出しなかった。  
性格 不明である。  
時期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

#### SK-68

- 位置 9Mグリッドの北東隅に位置する。  
南部遺構群の西側ほぼ中央にあたり、  
南西下がりの緩傾斜面（尾根部）に  
立地する。SI-05の中にあり、周  
辺にはSK-67、70などがある。壇  
底の標高は220.93mを測る。
- 形態 平面形、底面形共に円形で、断面  
形は明瞭に壁が外傾する。底面はほ  
ぼ平坦な土壤である。規模は、検出  
面で長径135cm、短径134cm、底面で  
長径125cm、短径123cm、深さ15cmを測る。壁の最小傾斜角は126°である。
- 土層 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、①、⑤、④、②、③の順で埋まっていた  
と考えられる。SI-05内と考えられる焼土が東側に分布することから、④層もこれ  
に準ずるものと考えられ、土壤の時期はSI-05と同時、あるいはそれ以前と推測さ  
れる。
- 遺物 検出しなかった。
- 性格 不明である。
- 時期 SI-05との関係より弥生時代中期中葉と推測する。

#### SK-69

- 位置 8Mグリッドのほぼ中央に位置する。南部遺構群の西側ほぼ中央にあたり、南西下  
がりの緩傾斜地（谷部）に立地する。周辺には、SI-05、SK-65、72、92、80がある。壇底の標高は218.20mを測る。
- 形態 平面形、底面形共に円形で、断面形は検出面〔暗褐色土（地山）〕より深さ23cmの位  
置ですばまた後、袋状を呈する、底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面〔黄  
色粘土（地山）、すばまた部分〕で長径126cm、短径125cm、底面（ふくらんだ部分）  
で長径139cm、短径135cm、深さ（暗褐色土より）72cmを測る。壁の最小傾斜角は70°で  
ある。
- 土層 西側において黄色粘土（地山）層上位の暗褐色土（地山）よりの掘り方を確認した  
埋土は、①～③層の黒色土系と、④、⑥層の黄褐色土系の土層からなる。

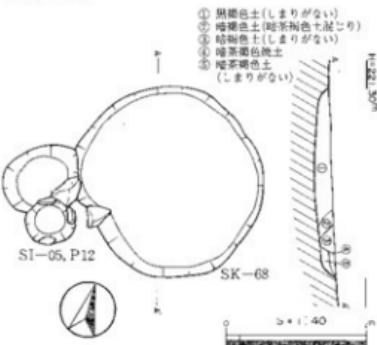


図137 SK-68遺構図

遺 物 瓢 I を同化した。

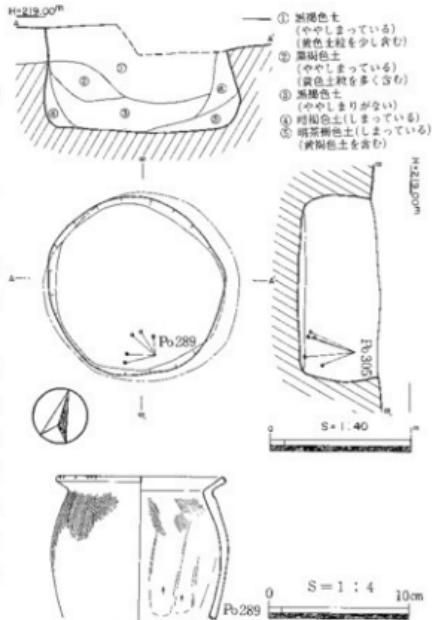
性 格 形態より貯蔵穴と考える。

時 期 出土遺物より弥生時代中期中葉  
と考える。

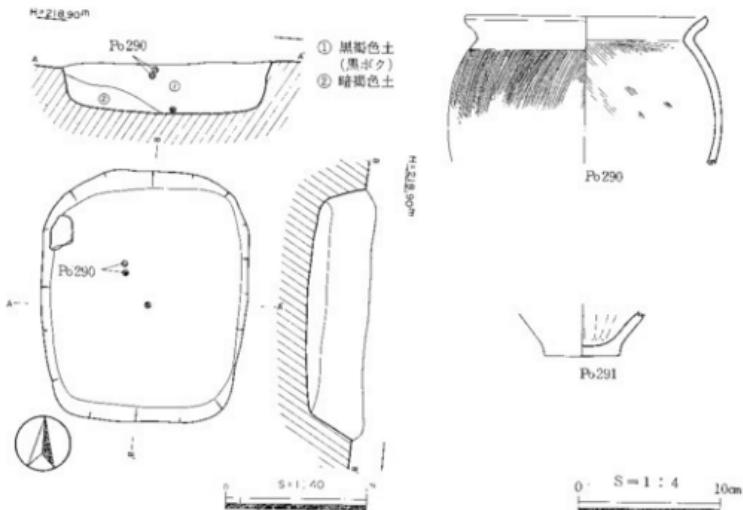
### SK-70

位 置 9 M グリッドの北西隅に位置す  
る。南部遺構群の西側にあたり、  
西下がりの尾根部に立地する。周  
辺には、SK-71、72がある。壇  
底の標高は、218.27mを測る。

形 態 平面形、底面形共に隅丸長方形  
で断面は逆梯形を呈す。底面はほ  
ぼ平坦な土壤である。規模は検出  
面で長径178cm、短径146cm、底面  
が長径155cm、短径135cm、深さ61  
cmを測る。長軸方向はほぼ南北を  
取り、壁の最小傾斜角は100°であ  
る。



挿図138 SK-69遺構・遺物図



挿図139 SK-70遺構・遺物図

土層 塙土は黒褐色土、暗褐色土の二層である。  
 遺物 壈1、底部1を固化した。  
 性格 不明である。  
 時期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。

### SK-71

位置 9Mライン上のやや北寄りに位置する。南部遺構群の西側にあたり、西下がりの緩傾斜面に立地する。周辺にはSK-68、71、72、SI-05があり、墳底の標高は、218.24mを測る。  
 形態 平面形、底面形共に円形に近い橢円形で、底面のほぼ平坦な土壤である。断面形は、壁の最小傾斜角が135°と外側する。規模は、検出面で長径96cm、短径86cm、底面で長径78cm、短径68cm、深さ10cmを測る。長軸方向はN-17°Wである。

土層 黒褐色土一層である。  
 遺物 壈1を固化した。  
 性格 不明である。  
 時期 出土遺物より弥生時代中期中葉と推測される。

### SK-73

位置 11Jグリッドの南西隅に位置しており、南7mは崖、西6mは盛土工区との境界となる。南部遺構群の南西側にあたり、南西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。周辺には西3mにSK-17、44、東3mにSK-85などがある。墳底の標高は216.04mを測る。  
 形態 平面形、底面形共に小判形に近い隅丸長方形で、断面形はほぼ直立し、壁の最小傾斜角93°を測る。底面はほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径184cm、短径108cm、底面で長径176cm、短径105m、深さ33cmを測る。長軸方向はN-41°Wである。  
 土層 黒色土系の4層よりなる。  
 遺物 壈1、高坏2、底部3、砥石3が出土しており、高坏の坏部Po294、底部Po296および磁石S113が①層の上位より出土した。高坏Po294とPo295は同一個体と考えられる。  
 性格 不明である。  
 時期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考えられる。

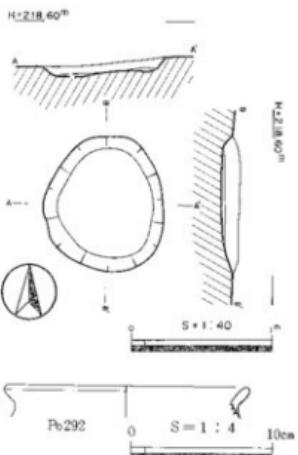
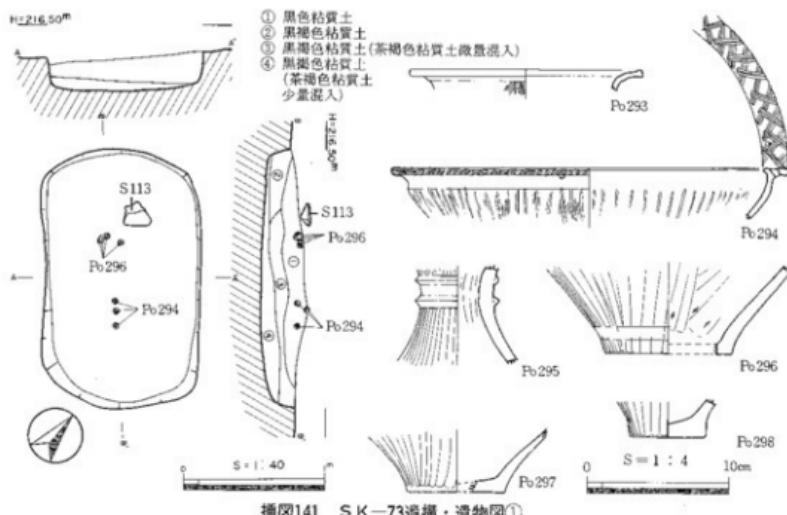
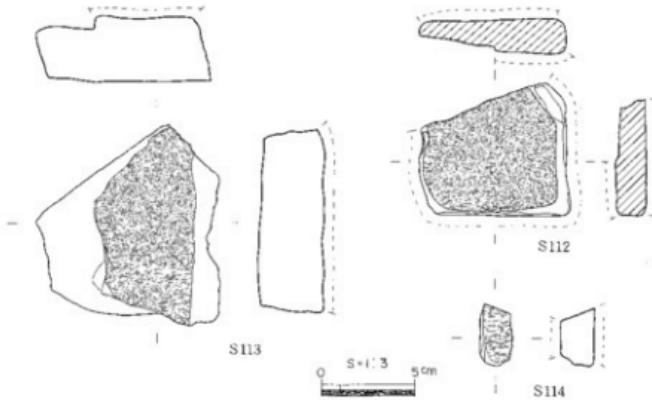


図140 SK-71遺構・遺物図



挿図141 SK-73遺構・遺物図①



挿図142 SK-73遺物図②

#### SK-74

**位 置** 10Mグリッドの南西隅に位置する。南部遺構群は西側ほぼ中央にあたり、南西下がりの緩傾斜面(尾根部)に立地する。周辺にはSK-40、45、46、57がある。壙底の標高は217.80mを測る。

**形 態** 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は明瞭に壁が外傾する。底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径169cm、短径114cm、底面で長径160cm、短径107cm、深さ13cmを測る。長軸方向はN-30°-Wで、壁の最小傾斜角は120°である。

土層 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、埋土は黒褐色土一層である。

遺物 検出しなかった。

性格 不明である。

時期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と考える。

#### SK-75

位置 6Mグリッドのほぼ中央に位置する。南部遺構群の西側北方にあたり、南下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺には、S I-04、SK-76、77があり、小さなまとまりを形成する。壇底の標高は219.65mを測る。

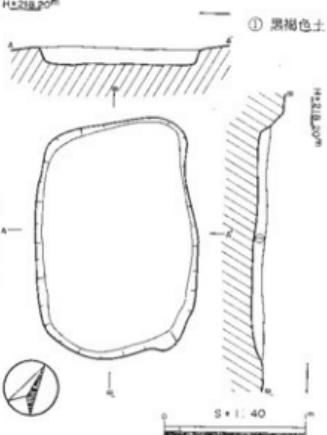
形態 平面形、底面形共に円形で、断面形は明瞭に壁が外傾する、底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径96cm、短径91cm、底面で長径81cm、短径69cm、深さ27cmを測る。壁の最小傾斜角は108°である。

土層 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、③→②層の順に埋まっていた様子が伺われる。

遺物 弥生土器片を検出したが、図化できなかつた。

性格 不明である。

時期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考えられる。



挿図143 SK-74遺構図



挿図144 SK-75遺構図

#### SK-76

位置 6Mグリッドのほぼ中央東寄りに位置する。南部遺構群の西側北方にあたり、南下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺にはS I-04、SK-75、77があり、小さなまとまりを形成する。壇底の標高は220.00mを測る。

形態 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は明瞭に壁が外傾する、底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径139cm、短径81cm、底面で長径124cm、短径71cm、深さ18cmを測る。長軸方向はN-40°-Wで、壁の最小傾斜角は100°である。

土層 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、埋土は黒色粘質土一層である。

遺物 弥生土器片を検出したが、図化できなかった。

性 格 不明である。  
時 期 出土遺物より弥生時代中期と考える。

### S K-77

位 置 6 M グリッドのほぼ中央西寄りに位置する。南部遺構群の西側北方にあたり、南下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺には S I-04、S K-75、76があり、小さなまとまりを形成する。壇底の標高は 220.20m を測る。

形 態 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は明瞭に壁が外傾する、底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径 167cm、短径 134cm、底面で長径 154cm、短径 121cm、深さ 30cm を測る。長軸方向は N-40°-E で、壁の最小傾斜角は 106° である。

土 層 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、埋土は黒色粘質土一層である。

遺 物 瓦 1 を同化した。  
性 格 不明である。

時 期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。



図 145 SK-76 遺構

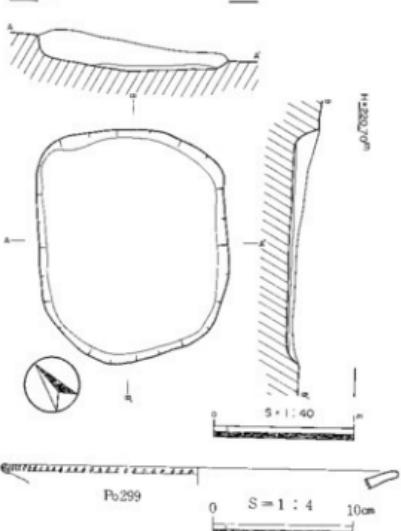


図 146 SK-77 遺構・遺物

### S K-78

位 置 8 L グリッドの南東端に位置する。東部遺構群の西側北寄りにあたり、南西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺には S B-03、S K-62・72、70、71、80、92 がある。壇底の標高は 217.92m を測る。

形 態 平面形、底面形共に円形で、断面形は明瞭に壁が直立する、底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径 103cm、短径 98cm、底面で長径 98cm、短径 92cm、深さ 27cm を測る。壁の最小傾斜角は 90° である。

土 層 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、埋土は黒色粘質土一層である。

遺物 底部 1 を固化した。  
性格 不明である。  
時期 出土遺物より弥生時代中期と考える。

### S K-79

位置 9 L グリッドの南東隅に位置する。南部遺構群の西側ほぼ中央にあたり、西下がりの緩傾斜（尾根部）に立地する。S K-46と隣接し、周辺に S K-45がある。壇底の標高は217.83mを測る。

形態 平面形、底面形共に梢円形で、断面形は明瞭に壁が直立する。底面のはぼ平坦な土壤であるが、東側高さ7cm程度の段を持つ。規模は、横出面で長径136cm、短径109cm、底面で長径121cm、短径104cm、深さ36cmを測る。長軸方向は東西をとり、壁の最小傾斜角は95°である。

土層 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、埋土は黒褐色土一層である。

遺物 壺 1 、甕 1 、脚部 1 を固化した。

性格 不明である。

時期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期中葉と考える。

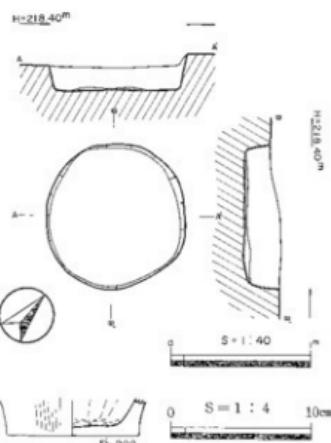


図147 SK-78遺構・遺物図

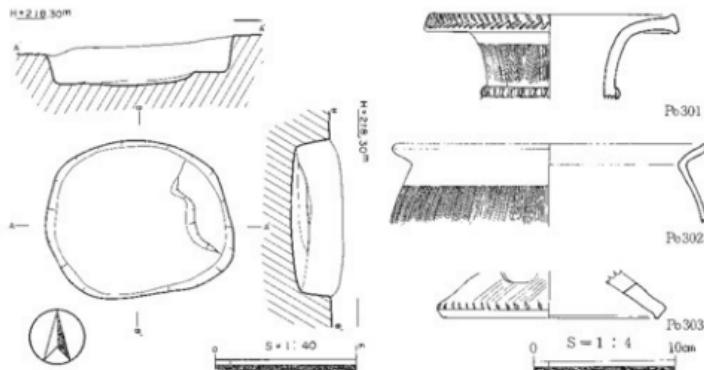


図148 SK-79遺構・遺物図

### S K-80

位置 8 L グリッドの東側に位置する。南部遺構群の西側北端にあたり、南東下がりの緩傾斜地（谷部）に立地する。周辺には、S B-03、S K-62・72、78がある。壇底の標高は217.96mを測る。

**形態** 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は土壙東側で袋状を呈す、底面のほぼ平坦な土壙である。規模は、検出面で長径239cm、短径136cm、底面で長径224cm、短径127cm、深さ34cmを測る。長軸方向はN-32°-Wで、壁の最小傾斜角は88°とほぼ垂直である。

**土層** ②層は、地山（暗茶褐色粘土）系の土層であり、土壙東側で袋状を呈することと考え合わせると、壁の崩壊による埋土であろうと推定される。

**遺物** 弥生土器片を検出したが、図化できなかった。

**性格** 不明である。

**時期** 出土遺物より弥生時代中期と考える。

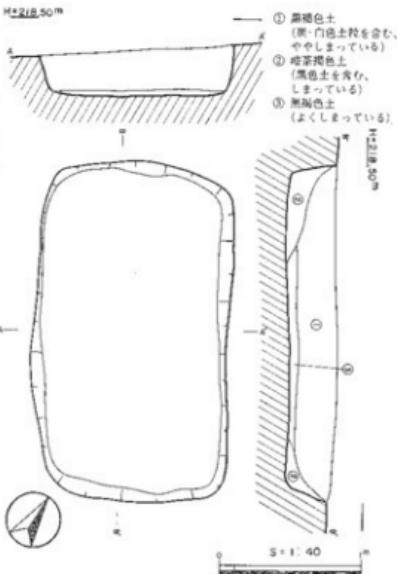


図149 SK-80遺構図

### SK-81

**位置** 10Lグリッドの北西隅に位置する。南部遺構群の西端にあたり、南西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。SK-82と隣接し、周辺にはSB-05、SK-45などがある。壙底の標高は216.92mを測る。

**形態** 平面形、底面形共に梢円形で、断面形は南側で袋状を呈する。底面のほぼ平坦な土壙である。規模は、検出面で長径176cm、短径153cm、底面で長径178cm、短径154cm、深さ50cmを測る。長軸方向はN-33°-Wで、壁の最小傾斜角は70°である。

**土層** 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、埋土は①～③の黒色土系と、④～⑥の黄色土系である。

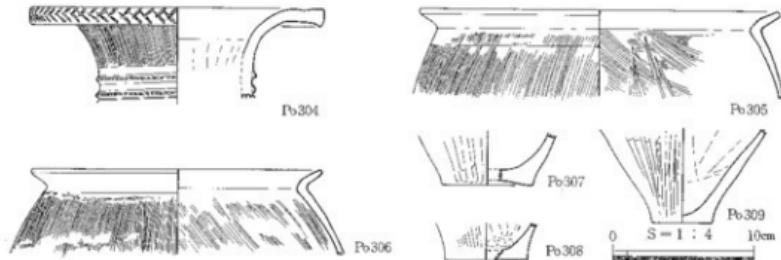
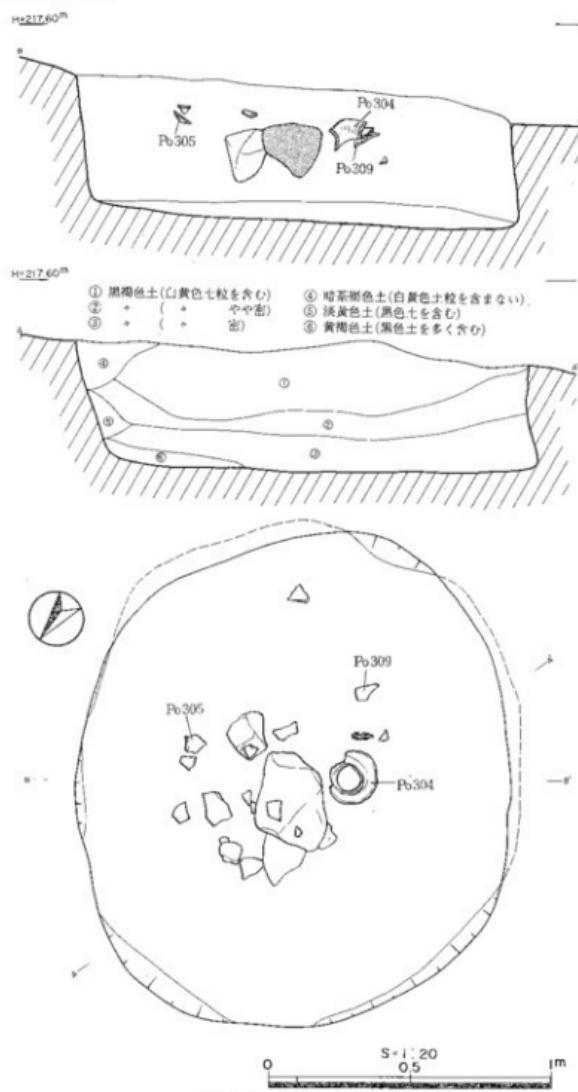


図150 SK-81遺物

遺物　壺1、甕2、底部3を固化した。遺物は土壌中央部に集中しており、土器片の他径10~40cm位の亜角~亜円錐が落ち込んでいる。Po315は口縁を下に向か、若干傾いた状態で出土した。



挿図151 SK-81遺構図

性 格 形態より貯蔵穴と考える。

時 期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。

### S K-82

位 置 10Kグリッドの南東隅に位置する。南部遺構群の西端にあたり、南西下がりの緩傾斜面(尾根部)に立地する。SK-81と隣接し、周辺にはSB-05、SK-45などがある。墳底の標高は216.90mを測る。

形 態 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は東側で袋状を呈する。底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径202cm、短径164cm、底面で長径200cm、短径155cm、深さ38cmを測る。長軸  $H:217.40m$

方向はN-72°-Eで、壁の  
最小傾斜角は80°である。

土 層 黄色粘土(地山)に掘り  
込まれており、①・③の黒  
色土系と、②・④の黄色土  
系の埋土からなる。

遺 物 壺1、甕3、底部1を回  
化した。

性 格 不明である。

時 期 出土遺物より弥生時代中  
期中葉と考える。

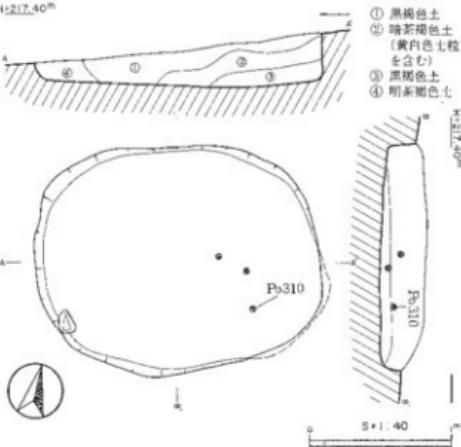


図152 SK-82遺構図

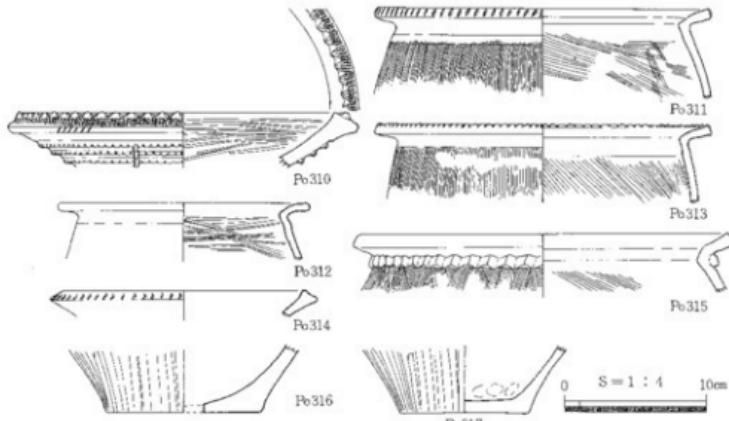


図153 SK-82遺物図

### S K-83

位 置 10Lグリッドの南西端に位置する。南部遺構群の西端にあたり、南西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。S B-05、S K-84と隣接する。壙底の標高は216.46mを測る。

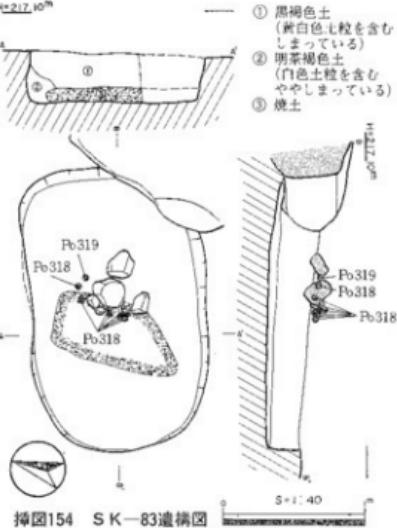
形 態 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は北側で袋状を呈する。底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径 $10.21\pm 0.07$ m、200cm、短径122cm、底面で長径190cm、短径120cm、深さ37cmを測る。長軸方向はN-73°-Eで、壁の最小傾斜角は70°である。

土 層 ②層は壁の崩壊による埋土と考えられる。③層の焼土（厚さ10cm）は底面に密着しており、②・①に覆われていることから、意図的に壙底に敷かれた可能性が考えられる。

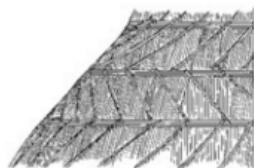
遺 物 壺1、甕1を図化した。遺物は①層中に含まれており、壙底より上位35cm付近に集中する。

性 格 不明である。

時 期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。



插図154 S K-83遺構図

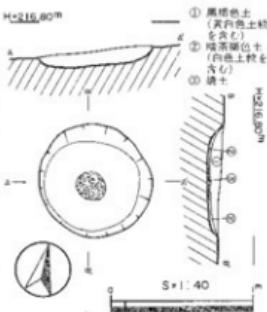


插図155 S K-83遺物図

### S K-84

位 置 10Kグリッドの南東端に位置する。南部遺構群の西端にあたり、南西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。S B-05、S K-83と隣接する。壙底の標高は216.47mを測る。

形 態 平面形、底面形共に円形で、断面形は明瞭に壁が外傾する。底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で径80cm、底面で長径67cm、短径63cm、深さ11cmを測る。壁の最小傾斜角は112°である。



插図156 S K-84遺構図

土層 ②層は壁の崩壊による埋土と考えられ、袋状土壌の可能性がある。③層の焼土（厚さ2cm）は、底面に密着しており、②・①層に覆われていることから、意図的に壙底に敷かれた可能性が考えられる。  
 遺物 検出しなかった。  
 性格 不明である。  
 時期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

### SK-85

位置 11Lグリッド南側や東寄りに位置する。南部遺構群の南西にあたり、南西下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。周辺にはSK-17、44、73などがある。壙底の標高は216.62mを測る。

形態 平面形、底面形共に不整円形を呈し、断面形は明瞭に壁が外傾する。底面のほぼ平坦な土壌である。規模は、検出面で長径104cm、短径86cm、底面で長径95cm、短径86cm、深さ14cmを測る。壁の最小傾斜角は111°である。

土層 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、埋土は黒色土系である。

遺物 壺1、甕1を同化した。

性格 不明である。

時期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。



図157 SK-85遺構・遺物図

### SK-86

位置 2Cライン上に位置する。北部遺構群のほぼ中央にあたり、南西下がりの緩傾斜面に立地する。周辺にはやや離れてSK-87、88、SI-13がある。壙底の標高は220、86mを測る。

形態 平面形、底面形共に隅丸長方形である。規模は、検出面で長径116cm、短径69cm、底面で長径92cm、短径55cm、深さ10cmを測る。底面のほぼ平坦な土壌である。また壁の最小傾斜角

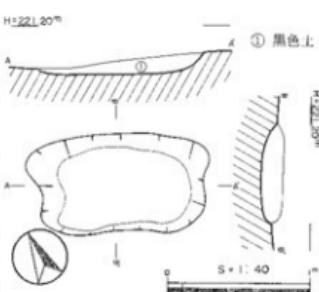


図158 SK-86遺構図

は122°を測るが、上部を大きく削平されていると考えられ明確な土壙の形態・規模は不明である。長軸方向はN-67°-Wである。

上	層	黒褐色土一層である。
遺	物	検出しなかった。
性	格	不明である。
時	期	周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

### SK-87

位置 1Cグリッドの南東側に位置する。北部遺構群の東側にあたり、北西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺には、SI-13、SK-88、89、90がある。壙底の標高は221.28mを測る。

形態 平面形、底面形共に円形で、断面形は明瞭に壁が外傾する。底面のほぼ平坦な土壙である。規模は、検出面で長径80cm、短径76cm、底面で長径43cm、短径41cm、深さ26cmを測る。壁の最小傾斜角は115°である。

土	層	埋土は黒褐色粘質土一層である。
遺	物	検出しなかった。
性	格	不明である。
時	期	周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

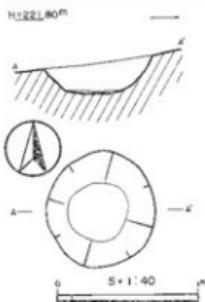


図159 SK-87遺構図

### SK-88

位置 2Hグリッドの北東端に位置する。北部遺構群の東側にあたり、北西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺には、SI-13、SK-87、89、90がある。壙底の標高は221.56mを測る。

形態 平面形、底面形共に梢円形で、断面形は明瞭に壁が外傾する。底面のほぼ平坦な土壙である。規模は、検出面で長径86cm、短径67cm、底面で長径78cm、短径61cm、深さ12cmを測る。長軸方向は南北をとり、壁の最小傾斜角は、106°である。

土	層	埋土は黒褐色粘質土一層である。
遺	物	弥生土器片を検出したが、図化できなかった。
性	格	不明である。
時	期	出土遺物及び周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

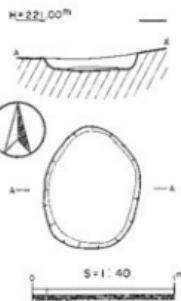


図160 SK-88遺構図

### SK-89

位置 1Iグリッドの南西端に位置する。北部遺構群の東側にあたり、北西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺には、SI-13、SK-87、88、90がある。壙底の標高は221.65mを測る。

**形 態** 平面形、底面形共に橢円形で、断面形は明瞭に壁が外傾する、底面が北西方向に傾斜する土壤である。規模は、検出面で長径72cm、短径64cm、底面で長径65cm、短径59cm、深さ14cmを測る。長軸方向はN-60°-Wで、壁の最小傾斜角は、118°である。

**土 層** 埋土は、黒褐色粘質土一層である。

**遺 物** 弥生土器片を検出したが、固化できなかった。

**性 格** 不明である。

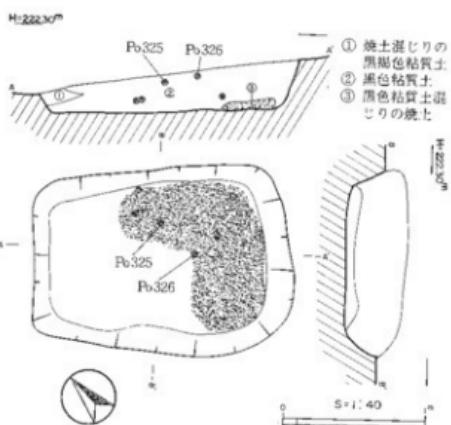
**時 期** 出土遺物及び周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

### S K - 90

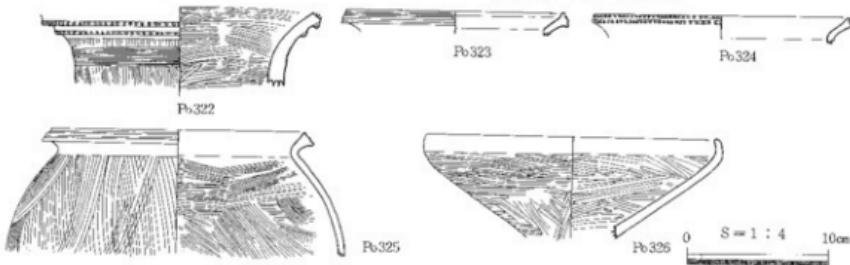
**位 置** 1 I グリッドの中央南端に位置する。北部遺構群の東側にあたり、北西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺には S I - 07、13、S K - 87、88、92~94があり、S K - 89、91に隣接する。壇底の標高は221.70mを測る。

**形 態** 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は明瞭に壁が外傾する。底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径182cm、短径128cm、底面で長径154cm、短径103cm、深さ42cmを測る。長軸方向はN-50°-Wで、壁の最小傾斜角は110°である。

**土 層** ③層の焼土（厚さ6~10cm）は、土壤のほぼ東側半分に分布し、固く叩きしめられており、意図的に壇底に敷かれた可能性が高い。



挿図161 SK-89遺構図



挿図162 SK-90遺構図

遺物　壺1、甕3、高坏1を図化した。  
性格　不明である。  
時期　出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

### SK-91

位置　1 I グリッドのほぼ中央に位置する。北部遺構群の東側にあたり、北西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。SK-90、93に隣接し、周辺にはS I-07、13、SK-87、88、89、92、94がある。壇底  $H=222.40m$  の標高は221.80mを測る。

形態　平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は明瞭に壁は直立する。底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径154cm、短径124cm、底面で長径144cm、短径107cm、深さ45cmを測る。長軸方向はN-E $50^{\circ}$ -Wで、壁の最小傾斜角は97°と、ほぼ垂直である。

土層　埋土は黒色粘質土一層である。

遺物　壺1を図化した。

性格　不明である。

時期　出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

### SK-92

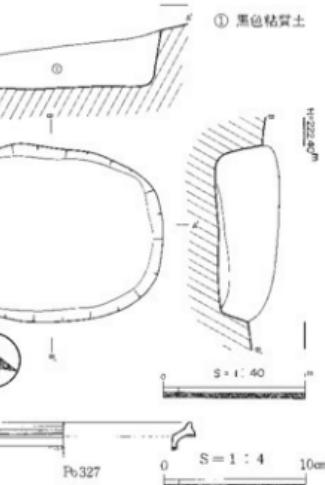


図164 SK-91遺構・遺物図

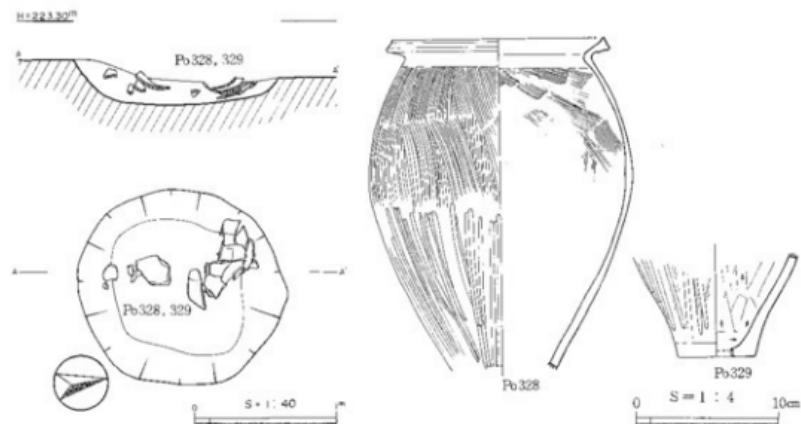


図165 SK-92遺構・遺物図

位 置 1 I グリッドの南東に位置する。北部遺構群の東側にあたり、北西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。S I-07に隣接し、周辺には、SK-90、91、93がある。墳底の標高は222.72mを測る。

形 態 平面形は円形、底面形は不整円形で、断面形は明瞭に壁が外傾する。床面のほぼ平坦な土壌である。規模は、検出面で長径145cm、短径136cm、底面で長径93cm、短径90cm、深さ31cmを測る。壁の最小傾斜角は120°である。

土 層 埋土は黒色粘質土一層である。

遺 物 墓1、底部1を固化した。土器は、多数の胸部片が内面を上に、底面、壁面に接して積み重なるように出土しており、意図的に置かれた可能性が高い。

性 格 不明である。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

### SK-93

位 置 1 I グリッドの中央東寄りに位置する。北部遺構群の東側にあたり、北西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺には、S I-07、SK-90、91、92、94がある。墳底の標高は221.60mを測る。<sup>H=222.60m</sup>

形 態 平面形、底面形共に円形で、断面形は検出面より深さ20cmの位置ですぼまつた後、三角フラスコ状を呈す、底面のほぼ平坦な土壌である。規模は、検出面で長径116cm、短径110cm、底面で径141cm、深さ82cmを測る。また、くびれ部は径103cmを測り、壁の最小傾斜角は48°である。

土 層 黄色粘質土（地山）を床面とし、⑥→①層の順序で北東方向からの流れ込みで埋まっていった様子が伺がわれる。また、⑤層及び④、⑥層中の

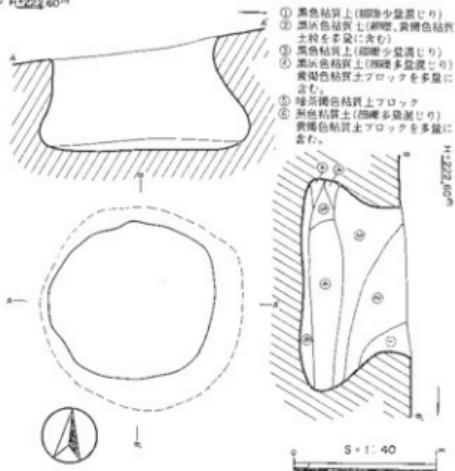


図166 SK-93遺構図

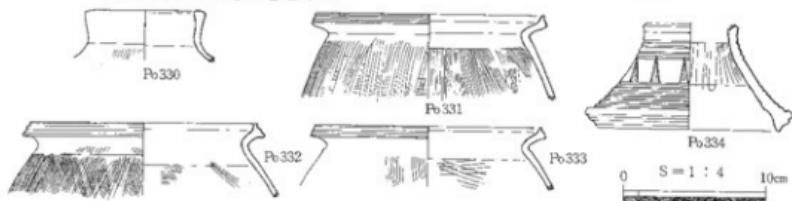


図167 SK-93遺物図

黄褐色粘土のブロックは、壁の崩壊部分であろうと考えられる。

遺物 直口壺1、甕3、高杯1を固化した。  
性格 形態及び土層より貯蔵穴と考える。  
時期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

#### S K - 94

位置 1 I グリッドの中央北端に位置する。北部遺構群の東側にあたり、南西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。自然河川によって北側の大部分を切られており、周辺には S K - 90、91、93がある。壙底の標高は221.74mと測る。  
形態 残存状況より、平面形、底面形共に隅丸長方形を呈すると推測する。断面形は明瞭に壁が外傾する。底面のほぼ平坦な土壤である。残存規模は、検出面で長径100cm、短径160cm、底面で長径85cm、短径145cm、深さ25cmを測る。壁の最小傾斜角は110°である。  
土層 ①～⑦層のうち、土壤の埋土は⑥層のみで、残りは自然河川の埋土である。  
遺物 高杯1、底部2を固化した。  
性格 不明である。  
時期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

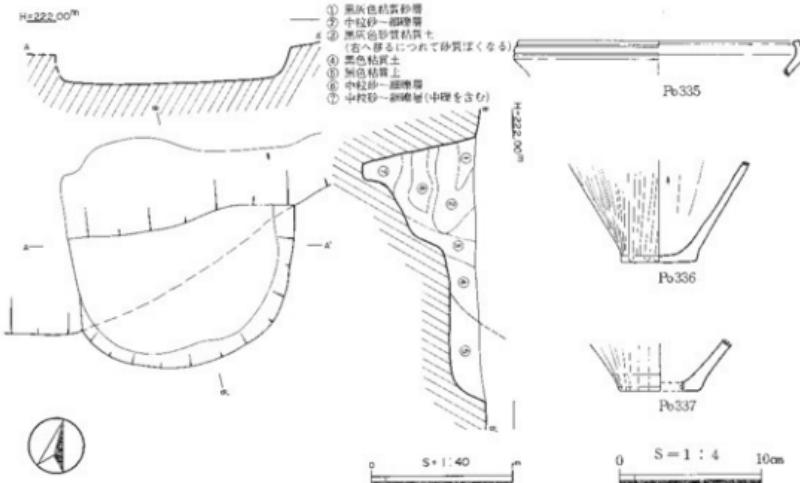


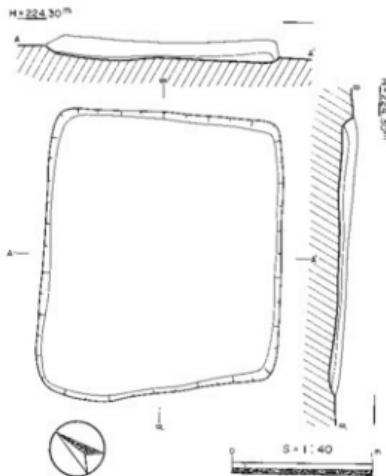
図168 SK-94遺構・遺物図

#### S K - 95

位置 1 L グリッドの南西隅に位置する。北部遺構群の東端にあたり、南西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺には S I - 06、S K - 96、現在の水路を挟んで S B - 14、S K - 99がある。壙底の標高は224.05mと測る。  
形態 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は明瞭に壁が外傾する、底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径200cm、短径169cm、底面で長径189cm、短径159

cm、深さ16cmを測る。長軸方向はN--55°Eで、壁の最小傾斜角は125°である。

**土層** 黄色粘土(地山)に掘り込まれており、埋土は黒色粘質土一層である。  
**遺物** 検出しなかった。  
**性格** 不明である。  
**時期** 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。



插図169 SK-95遺構図

**位置** 0Kグリッドのほぼ中央に位置する。北部遺構群の東端にあたり、西下がりの緩傾斜面(谷部)に立地する。周辺にはSI-06、SK-95がある。墳底の標高は223.15mを測る。

**形態** 平面形、底面形共に円形、断面形は袋状を呈する。底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径80cm、短径77cm、底面で長径103cm、短径96cm、深さ68cmを測る。壁の最小傾斜角は73°である。

**土層** 茶褐色粘土(地山)より掘り込まれており、埋土は黒色粘質土一層である。

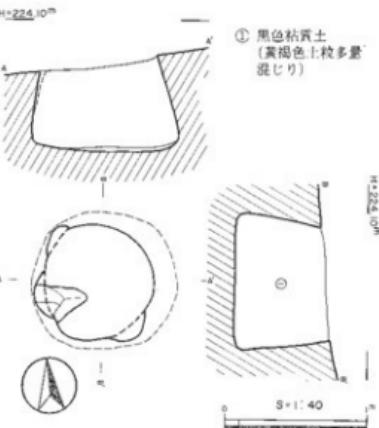
**遺物** 弥生土器片を検出したが、固化できなかった。

**性格** 形態より貯蔵穴と考える。

**時期** 出土遺物より弥生時代中期と考える。

### SK-97

**位置** 1Lグリッドの北端に位置する。北部遺構群の東端にあたり、北下がりの緩傾斜面(尾根部)に立地する。周辺にはSI-04、SK-98がある。墳底の標高は224.30mを測る。



插図170 SK-96遺構図

形 態 平面形、底面形共に不整円形で、断面形は明瞭に壁が外傾する。底面のほぼ平坦な土壇である。規模は、検出面で長径201cm、短径194cm、底面で長径130cm、短径116cm、深さ47cmを測る。径10~50cm位の安山岩系の亜角~亜円礫が土壇内に落ち込んでおり、集石状を呈する。壁の最小傾斜角は110°である。

土 層 埋土は黒色粘質土一層である。埋土中には炭化物又は焼土は含まれておらず、礫も赤変していないことから、集石状を呈する礫は炉として使用されたものではなく、放棄の際に意図的に投げ込まれたと考える。

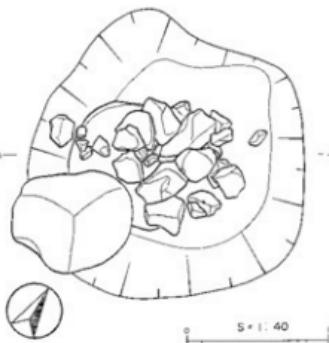
遺 物 壺1、底部1を固化した。

性 格 不明である。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。



挿図171 S K-97遺構・遺物図



① 黒色粘質土  
(炭・黄褐色  
粘土粒を含む)

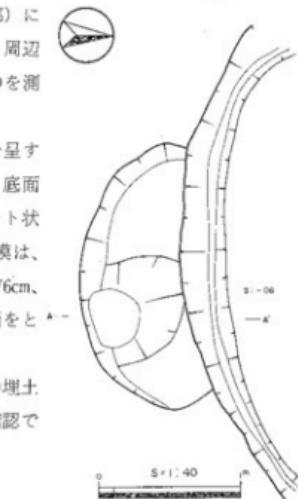


### S K-98

位 置 1Lグリッドの北西端に位置する。北部遺構群の東端にあり、北下がりの緩傾斜面（尾根部）に立地する。S I-06と切り合い関係にあり、周辺にはS K-97がある。壙底の標高は224.70mを測る。

形 態 残存状況より、平面形、底面形に梢円形を呈すると推測する。断面形は明瞭に壁が外傾し、底面のほぼ平坦な土壇であるが、土壇南側にピット状落ち込み(70×63~15cm)を有する。残存規模は、検出面で長径187cm、短径74cm、底面で長径176cm、短径53cm、深さ10cmを測る。長軸方向は東西をとり、壁の最小傾斜角は130°である。

土 層 埋土は黒色粘質土一層であり、S I-06の埋土として類似していたため、切り合い関係は確認できなかった。



挿図172 S K-98遺構図

遺物 検出しなかった。

性格 不明である。

時期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

#### SK-99

位置 1Kグリッドの北西隅に位置する。現在の水路によって隔てられているが、北部遺構群の東端にあたり、南西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺にはSK-14がある。壙底の標高は223.33mを測る。 $H=223.33m$

形態 平面形、底面形共に円形で、断面形は袋状を呈する底面のほぼ平坦な土壙である。規模は、検出面で長径91cm、短径86cm、底面で長径110cm、短径105cm、深さ51cmを測る。壁の最小傾斜角は60°である。

土層 ②・③層は壁の崩壊による埋土と考えられる。

遺物 弥生土器片を検出したが、固化できなかつた。

性格 形態及び土層より貯蔵穴と考える。

時期 出土遺物及び周辺遺構の遺物より弥生

時代中期と推測する。

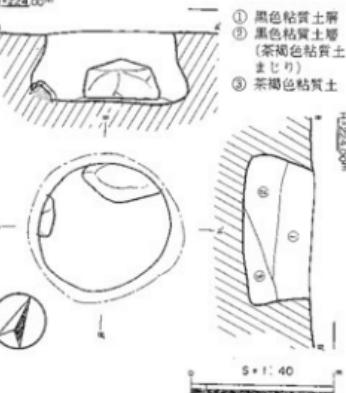


図173 SK-99遺構図

#### SK-100

位置 2Lグリッドのほぼ中央に位置する。現在の水路によって隔てられてはいるが、北部遺構群の東端にあたり、南西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。SK-101と隣接し、周辺にはSK-102がある。壙底の標高は224.21mを測る。

形態 平面形、底面形共に円形で、断面形は袋状を呈する、底面のほぼ平坦な土壙である。規模は、検出面で長径67cm、短径66cm、底面で長径75cm、短径72cm、深さ64cmを測る。壁の最小傾斜角は80°である。

土層 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、④→①の順で埋まっていた様子が伺われる。

遺物 弥生土器片を検出したが、固化できなかつた。

性格 形態より貯蔵穴と考える。



図174 SK-100遺構図

時 期 出土遺物及び周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

### SK-101

位 置 2 L グリッドのほぼ中央に位置する。現在の水路によって隔てられているが、北部遺構群の東端にあたり、南西下がりの緩傾斜面(谷部)に立地する。SK-100と隣接し、周辺にはSK-102がある。墳底の標高は224.04mを測る。

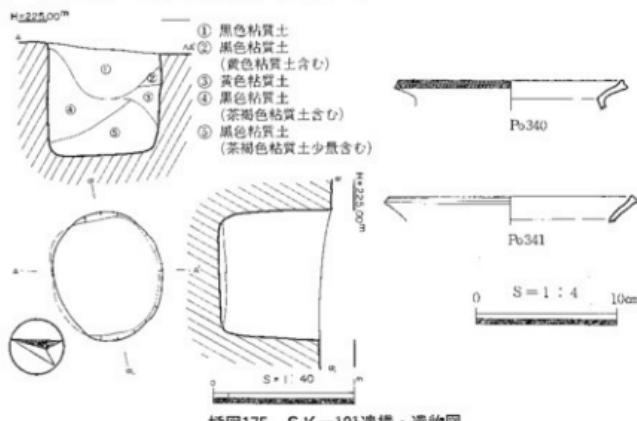
形 態 平面形、底面形共に楕円形で、断面形は北側で袋状を呈する、底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径91cm、短径78cm、底面で長径83cm、短径76cm、深さ80cmを測る。長軸方向はN-65°-Eで、壁の最小傾斜角は87°である。

土 層 ②～⑤層は壁の崩壊による埋土と考えられる。

遺 物 壺2を図化した。

性 格 形態及び埋土より貯蔵穴の可能性がある。

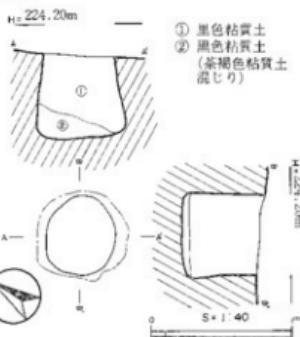
時 期 出土遺物より弥生時代中期と推測する。



### SK-102

位 置 2 L グリッドの南西側に位置する。現在の水路によって隔てられているが、北部遺構群の東端にあたり、南西下がりの緩傾斜面(谷部)に立地する。周辺にはSK-100、101がある。墳底の標高は223.44mを測る。

形 態 平面形、底面形共にほぼ円形で、断面形は袋状を呈する、底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径56cm、短径49cm、底面で長径65cm、短径61cm、深さ60cmを測る。壁の最小傾斜角は78°である。



土層 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、②、①の順で埋まっていた様子が伺われる。  
 遺物 弥生土器片を検出したが、図化できなかった。  
 性格 形態より貯蔵穴と考える。  
 時期 出土遺物及び周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。

#### SK-103

位置 1Bグリッドの北西隅に位置する現在の水路によって隔てられているが、北部遺構群の北西端にあたり、南西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。SK-104に隣接する。壇底の標高は220.65mを測る。

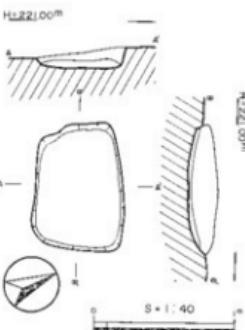
形態 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は明瞭に壁が外傾する、底面のほぼ平坦な土壙である。規模は、検出面で長径88cm、短径62cm、底面で長径83cm、短径57cm、深さ20cmを測る。長軸方向はN-65°-Wで、壁の最小傾斜角は101°である。

土層 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、埋土は黒褐色土一層である。

遺物 検出しなかった。

性格 不明である。

時期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。



挿図177 SK-103遺構図

#### SK-104

位置 1Bグリッドの北西隅に位置する。現在の水路によって隔てられているが、北部遺構群の北西端にあたり、南西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。SK-103に隣接する。壇底の標高は220.54mを測る。

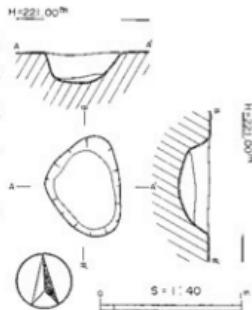
形態 平面形、底面形共に不整形で、断面形は壁の立ち上がりが不明瞭な皿状を呈する、底面が土壙中央に向かって凹む土壙である。規模は、検出面で長径65cm、短径53cm、底面で長径55cm、短径42cm、深さ22cmを測る。壁の最小傾斜角は測定できない。

土層 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、埋土は黒褐色土一層である。

遺物 検出しなかった。

性格 不明であった。

時期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と推測する。



挿図178 SK-104遺構図

#### SK-105

位置 2Fグリッドの中央やや北寄りに位置する。北部遺構群のほぼ中央にあたり、南西下がりの緩傾斜地（谷部）に立地する。SB-12を切っており、周辺にはSB-11が

ある。壙底の標高は219.20mを測る。<sup>H=220.20m</sup>

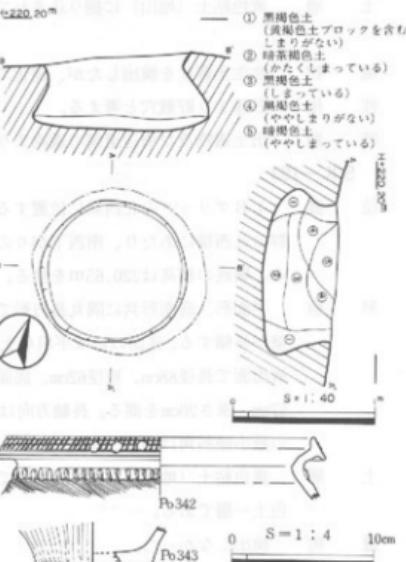
**形 態** 平面形、底面形共に円形で、断面形は、検出面より深さ10cmの位置ですぼまつた後三角フラスコ状を呈す、底面のはば平坦な土壙である。規模は、検出面で長径130cm、短径100cm、底面で長径122cm、短径118cm、深さ54cmを測る。また、くびれ部は長径98cm、短径96cmを測る。壁の最小傾斜角は62°である。

**土 層** 地山（黄色粘質土）を床面とし①→⑤層の順序で埋まっていった様子が伺われる。

**遺 物** 壺1、底部1を図化した。

**性 格** 形態より貯蔵穴と考える。

**時 期** 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。



挿図179 SK-105遺構・遺物図

### SK-106

**位 置** 2Dグリッドの西端に位置する。北部遺構群の西側北寄りにあたり、南下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。周辺には多数のピットが検出されており、南1.5mにSK-07がある。壙底の標高は218.91mを測る。

**形 態** 平面形、底面形共に隅丸長方形で、断面形は明瞭に壁が外傾する逆梯形を呈し、底面はほぼ平坦である。規模は、検出面で長径216cm、短径140cm、底面で長径203cm、短径130cm、深さ22cmを測る。長軸方向はほぼ東西にとり、壁の最小傾斜角は110°である。

**土 層** 黄色粘土（地山）に掘り込まれており、②→①の順で埋まっていった様子が伺われる。

**遺 物** 壺6、高壺1、石斧1が出土地した。遺物は、ほぼ土壤東側半分に集中しており、底面に密着した状態で出土した。

土器片は重なり合って出土しており、壺P0344~346の3

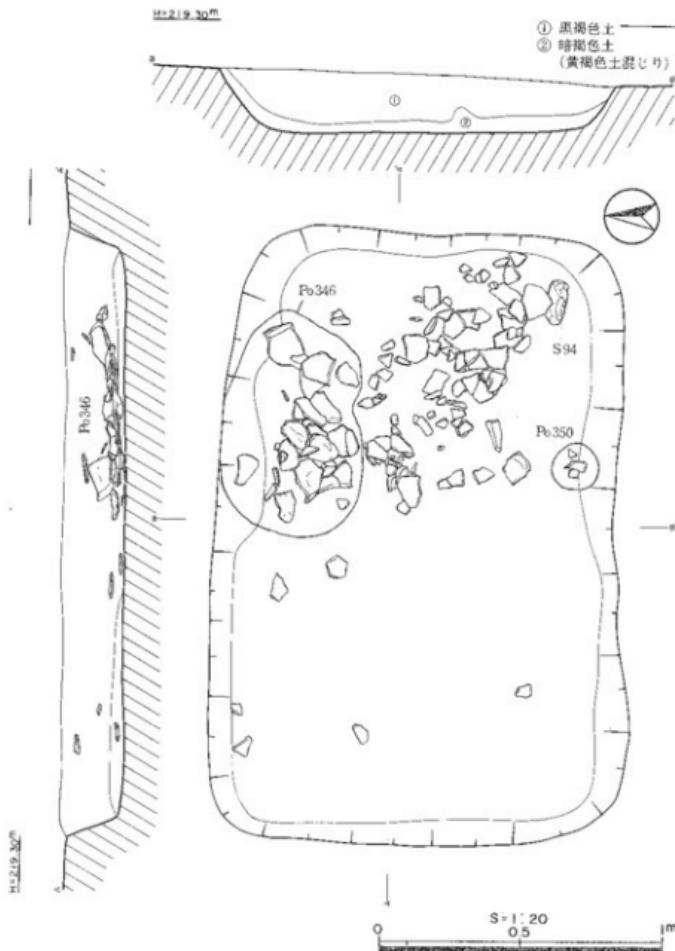
個体はほぼ完形になる一括資料である。S94は本来磨製石



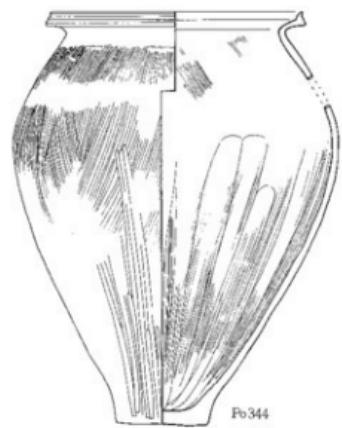
写真3 調査風景

斧で敲石の類の転用したものと考えられる。

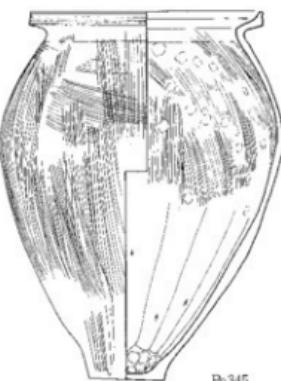
- 性 格 断面形、平面形は所謂「袋状貯蔵穴」とは異っているが遺物の出土状況からみて貯蔵穴の可能性が強い。
- 時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。



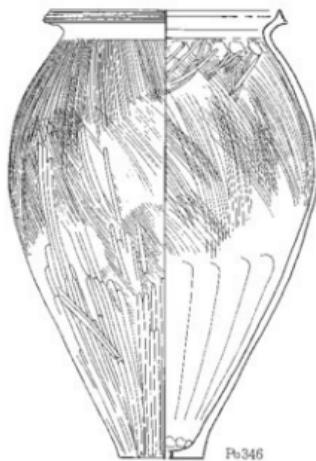
擡図180 SK-106遺構図



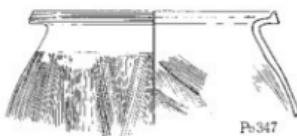
Po344



Po345



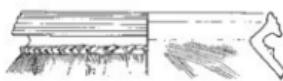
Po346



Po347



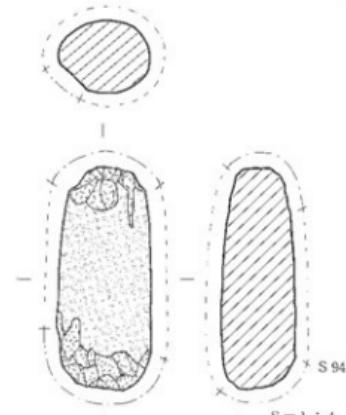
Po348



Po349



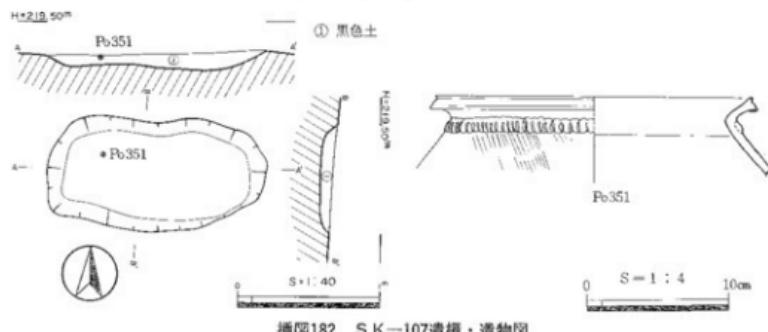
Po350



擇図181 SK-106遺物図

## S K - 107

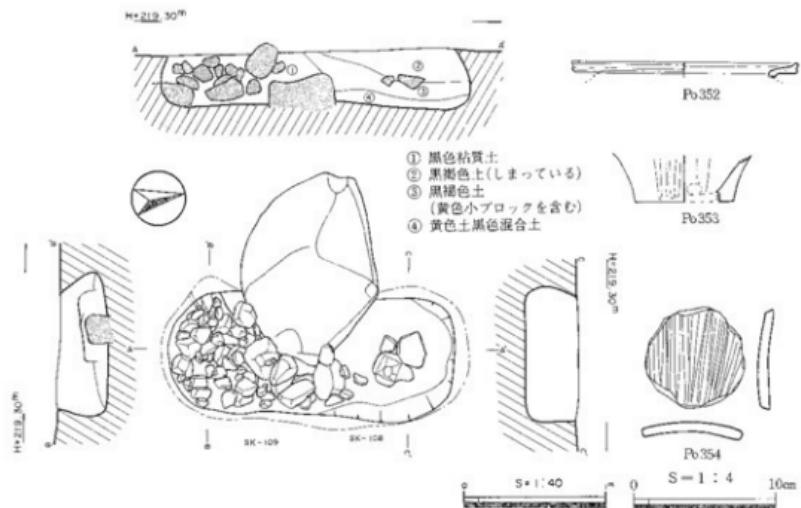
- 位 置 2 D ライン上のほぼ中央に位置する。北部遺構群の北西側にあたり、南下がりの緩傾斜面に立地する。周辺には、S K - 106、112、114などがある。壙底の標高は、219.16mを測る。
- 形 態 平面形、底面形共に橢円形で、断面形は、壁の最小傾斜角が129°と外傾する土壙である。規模は、検出面で長径156cm、短径77cm、底面で長径132cm、短径60cm、深さ12cmを測る。長軸方向は東西をとる。
- 土 層 黒褐色土一層である。
- 遺 物 遷1を図化した。
- 性 格 不明である。
- 時 期 出土遺物より弥生時代中期と考える。



挿図182 S K - 107遺構・遺物図

## S K - 108・109

- 位 置 2 B グリッドの南側中央に位置する。北部遺構群に属し、調査区西端近くの平坦面に立地する。周辺に遺構は殆どみられないが、南西11mにS K - 110、南東8mにS K - 111がある。壙底の標高は両方とも218.70mを測る。
- 形 態 平面形は検出面では不整形であるが、個別の底面は円形を呈する。この2土壙は西側の大石が互いの壁の一部となっており、その東側では同じレベルで複合している。断面形は共に袋状を呈し、S K - 108の最小傾斜角は57°、S K - 109は52°を測る。底面はほぼ平坦である。規模はS K - 108が検出面で径75cm、底面で径95cm、深さ38cm、S K - 109が検出面で径84cm、底面径90cm、深さ36cmを測る小型のものである。
- 土 層 黄色粘質土(地山)に掘り込まれており、S K - 108の埋土状況は底面近くに壁の崩壊土④が堆積し上層は流入土の自然堆積を示している。S K - 109は壙内一杯に拳大から人頭大の塊石を詰め込んで、隙間に黒色粘質土が流入している。
- 遺 物 S K - 108の埋土中からは弥生土器甕、底部片が出土しており、S K - 109には紡錘車木製品Po354が石の隙間から出土したのみである。
- 性 格 いずれも袋状を呈する形態から貯藏穴と考えられるが、S K - 108の使用時には明ら



挿図183 SK-108・109遺構・遺物図

かにSK-109は塊石を詰めて埋め戻されていたと考えられる。

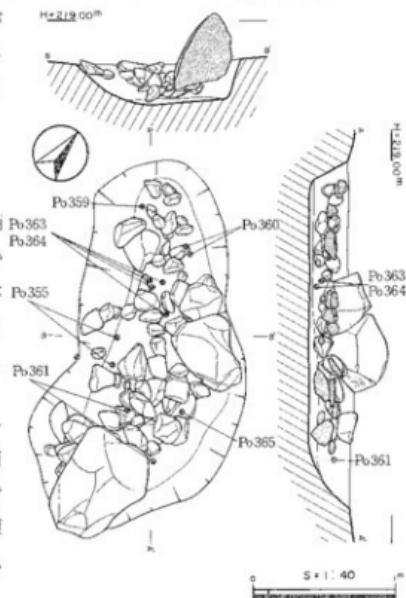
時 期 SK-108出土の土器片からみると弥生時代中期と考えられる。遺構の在り方からしてSK-109はSK-108に先行するがSK-108はSK-109を意識して作られており連続的な放棄、使用が想定される。

#### SK-110

位 置 3Aグリッドの南東隅に位置する。

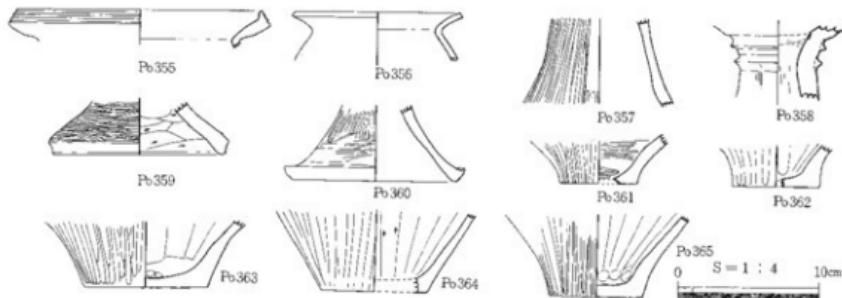
北部遺構群に属し、調査を行なった西端にあたり、ほぼ平坦面に立地している。周辺には石が多く露頭し、遺構は殆どみられなかつたが、北東11mにSK-108・109がある。壇底の標高は218.40mを測る。

形 態 平面形は不整形であるが主軸をN-E-Wにとる細長い土壤である。断面形は逆梯形を呈し、底面はほぼ平坦である。規模は、検出面で長径247cm、短径118cm、底面は長径222cm、短径90cm、深さ32cmを測る。



挿図184 SK-110遺構図

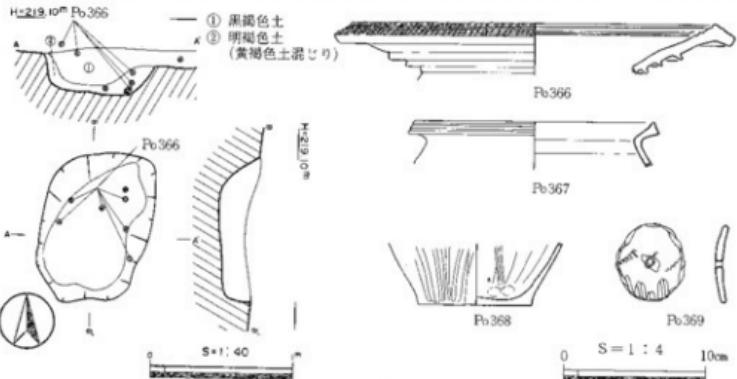
- 土層** 黄色粘質土(地山)に掘り込まれており、埋土は黒褐色系土層である。
- 集石** 床面よりやや浮いて拳大から人頭大の塊石が、積まれた状態で検出された。南側と東側に径50cm~80cmくらいの大型の石が置かれており、それを利用する形で土壤中央には環状の小石列がみられる。
- 遺物** 埋土中の石と混じって、弥生土器が片断で出土しており甕2、高壺筒部2、脚部2、底部5を図化した。
- 性格** 不明である。
- 時期** 埋土中の遺物からみると弥生時代中期後葉と推測される。



挿図185 SK-110遺物図

### SK-111

- 位置** 3Cグリッドの中央やや北西側に位置する。北部遺構群の北西側にあたり、南下がありの緩傾斜地に立地する。周辺にはSK-112、SB-09がある。墳底の標高は、218.56mを測る。
- 形態** 平面形、底面形共に梢円形に近い不整形を呈する。断面形は、壁の最小傾斜角が108°と、外傾する土壤である。規模は、検出面で長径102cm、短径76cm、底面で長径80cm、



挿図186 SK-111遺構・遺物図

短径56cm、深さ24cmを測る。

土層 黒褐色土、暗褐色土の2層である。

遺物 壺1、甕1、底部1、紡錘車1を同化した。

性格 不明である。

時期 墓土中の遺物より弥生時代中期後葉と考える。

#### SK-112

位置 3Cグリッドの北東側に位置する。北部遺構群の北西側にあたり南下がりの緩傾斜地に立地する。周辺には、SK-111、113、SB-09がある。墳底の標高は、218.69mを測る。

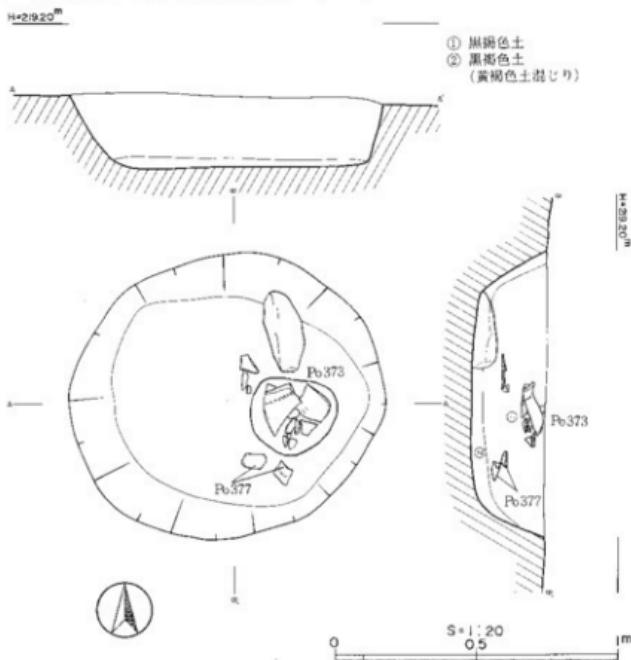
形態 平面形、底面形共にほぼ円形で断面形は、壁の最小傾斜角が $106^{\circ}$ と外傾する、底面がほぼ平坦な土壙である。規模は、検出面で長径112cm、短径101cm、底面で長径90cm、短径73cm、深さ27cmを測る。

土層 墓土は黒褐色土で、黄褐色土混じりの②層は壁の崩壊土と思われる。

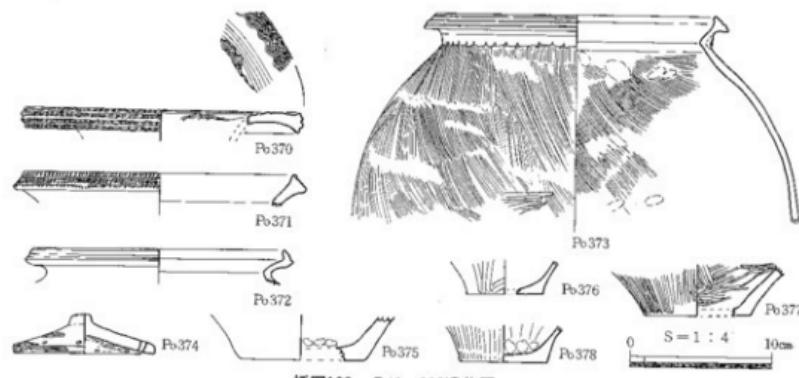
遺物 壺1、甕3、蓋1、底部片4を同化した。

性格 不明である。

時期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。



插図187 SK-112遺構図



插図188 SK-112遺物図

### SK-113

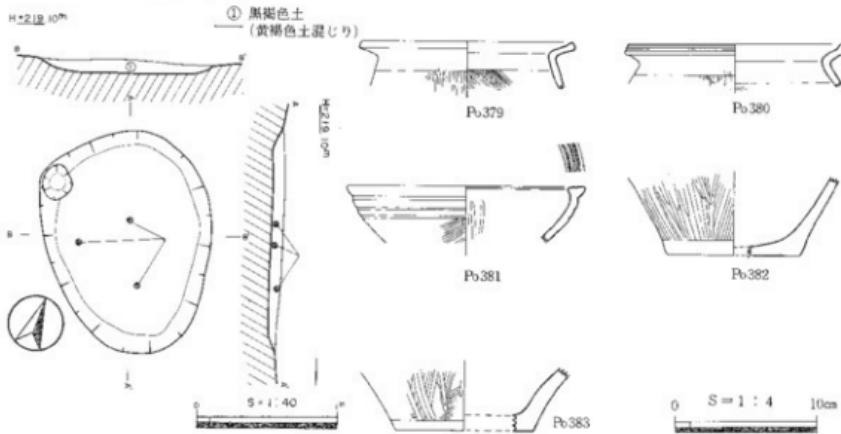
位 置 3 C グリッドの北東隅に位置し、僅かに南下がりの緩傾斜面に立地している。北部遺構群に属し、北西 1m に SK-112がある。SK-113の周辺は、ピットが多数検出され、南西側に接して、SB-09も存在している。壙底の標高は、218.8mを測る。

形 態 平面形は卵形に近い橢円形を呈し、断面形は浅い皿状となり、底面はほぼ平坦である。規模は検出面で長径156cm、短径119cm、底面が長径134cm、短径102cm、深さ10cmを測る浅い土壙である。北西隅に (22×20-15) cm のピットがみられるが、土壙に伴うものではないであろう。

土 層 黄褐色土混じりの黒褐色土一層の堆積がみられた。

遺 物 床面近くの埋土中より弥生土器を検出し、甕2、坏部1、底部片2を図化した。

性 格 不明である。



插図189 SK-113構造・遺物図

時 期 出土遺物から弥生時代中期後葉と考える。

#### S K-114

位 置 2Dグリッドの南西隅に位置する。北部遺構群の北西側にあたり、南下がりの緩傾斜地に立地する。周辺には、SK-107、112、113、SB-10などがある。墳底の標高は、218.87mを測る。

形 態 平面形、底面形共に梢円形で、土壌の西側隅に底面で長径20cm、短径18cm、深さ16cm程のピットを検出した。断面形は、壁の最小傾斜角が129°と外傾する。規模は検出面で長径167cm、短径100cm、底面で長径157cm、短径85cm、深さ8cmを測る。長軸方向はN-57°-Eである。

土 層 黒褐色土（擾乱土）と暗褐色粘質土の2層である。

遺 物 弥生土器片を検出したが図化できなかった。

性 格 不明である。

時 期 出土遺物より弥生時代中期と推測される。

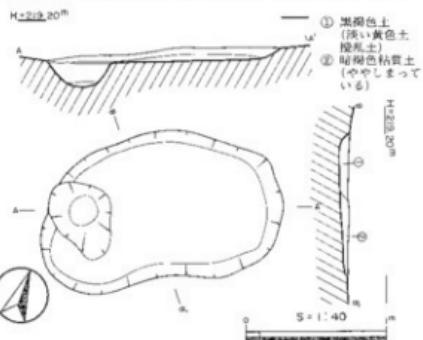


図190 SK-114遺構図

#### S K-115

位 置 4Fグリッドの中央や西寄りに位置する。北部遺構群の中央部にあたり、北西下がりの緩傾斜地に立地する。周辺には、SK-115、SI-11がある。墳底の標高は219.47mを測る。

形 態 底面形は楕丸形、平面形は不整形を呈す、底面がほぼ平坦な土壙である。断面形は壁の最小傾斜角が95°と直立形を呈する。規模は、検出面で長径103cm、短径76cm、底面で長径75cm、短径59cm、深さ58cmを測り、長軸方向はN-30°-Wである。

土 層 地山に掘り込まれ、③④②①という順に埋まっていた様子が伺われる。

遺 物 壁1、底部片1、砥石1、石鐵1を図化した。

性 格 不明である。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

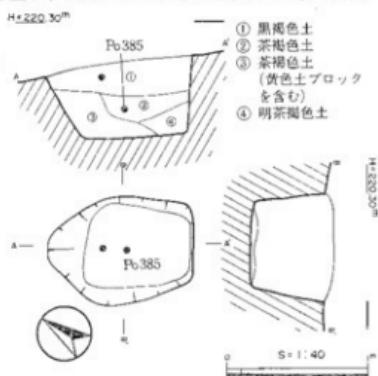
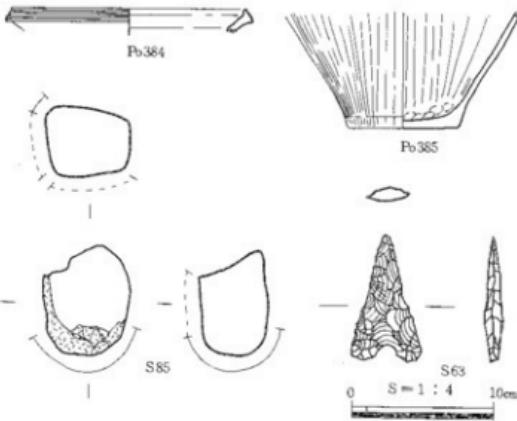


図191 SK-115遺構図



SK-116

挿図192 SK-115遺物図

**位 置** 4Eグリッドの南東隅に位置する。北部遺構群のほぼ中央にあたり、北西下がりの傾斜面に立地する。北西側でS I-11と切り合っているが、土層断面では前後関係は確認できなかった。周辺にはS B-07、SK-115、117がある。墳底の標高は219.7mを測る。

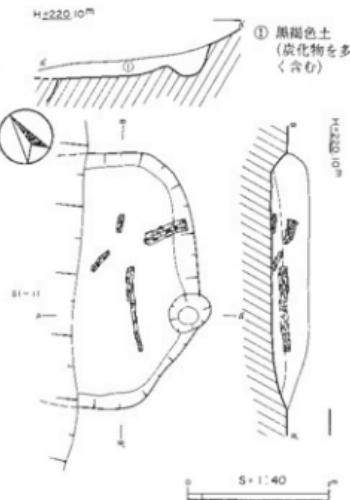
**形 態** 西側でS I-11と切り合っているため、平面形は不明であるが、隅丸方形か長方形と考えられる。断面形は皿状を呈し、底面はやや凹凸がある。規模は検出面で南北180cm、底面で南北160cm、深さ20cmの浅い土壇である。東壁中央付近に(29×25-22)cmのピットがある。

**土 層** 炭化物を多く含む黒褐色土一層である。

**遺 物** 弥生土器、土師器細片が出土しているが炭化できなかった。

**性 格** 底面に炭化材が多く検出されており、火を用いた痕跡がある。切り合い関係は明らかでないが、S I-11と時期差があることから、S B-07及び製鉄遺構に関連する施設の可能性が強い。

**時 期** 平安時代前期と推測される。



挿図193 SK-116遺構図

### SK-117

位 置 5 E グリッドの北西隅に位置する。北部遺構群の西側にあたり、北西下がりの緩傾斜地に立地する。周辺には S I-11、S B-07、S K-116がある。壇底の標高は219.24mを測る。

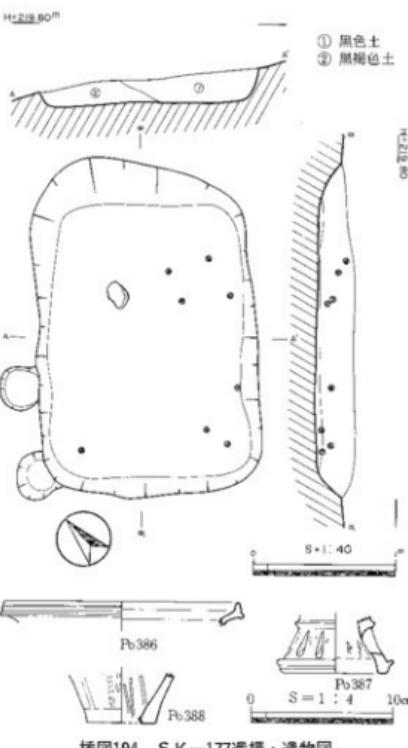
形 態 平面形、断面形共に隅丸方形で、断面形は壁の最小傾斜角が110°とやや外傾する。底面のほぼ平坦な土壤である。規模は、検出面で長径237cm、短径154cm、底面で長径193cm、短径138cm、深さ20cmを測る。土壤の北西侧肩部に2つのピットを検出したがこの土壤に付属するものとは思われない。長軸方向はN-42°-Eである。

土 層 黒色土系の2層である。

遺 物 壺1、高坏脚部片1、底部1を図化した。

性 格 不明である。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。



挿図194 SK-117遺構・遺物図

### SK-118

位 置 5 D グリッド中央南寄りに位置する。北部遺構群の西側南寄りにあたり、北西下がりの緩傾斜斜面(谷部)に立地する。SK-119に隣接し、周辺には、S I-10、12、SK-120、121がある。壇底の標高は219.14mを測る。

形 態 平面形、底面形共に円形で、断面形は明瞭に壁が外傾する、底面が中央で若干凹む土壤である。規模は、検出面で長径78cm、短径70cm、底面で長径59cm、短径52cm、深さ18cmを測る。壁の最小傾斜角は、117°である。

土 層 埋土は黒褐色粘質土一層である。

遺 物 検出しなかった。

性 格 不明である。

時 期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と考える。

### SK-119

位 置 5 D グリッドの中央南寄りに位置する。北部遺構群の西側南寄りにあたり、北西下

がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。SK-118に隣接し、周辺には、SI-10、12、SK-120、121がある。壇底の標高は219.06mを測る。

**形態** 平面形、底面形共に円形で、断面形は明瞭に壁が外傾する、底面がほぼ平坦な土壇である。規模は、検出面で長径73cm、短径68cm、底面で径50cm、深さ20cmを測る。壁の最小傾斜角は、110°である。

**土層** 埋土は黒褐色粘質土一層である。

**遺物** 検出しなかった。

**性格** 不明である。

**時期** 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と考える。

#### SK-120

**位置** 6Dグリッドの中央北端に

位置する。北部遺構群の西側南寄りにあたり、北西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。SK-121に隣接し、周辺には、SI-10、12、SK-118、119がある。壇底の標高は219.40mを測る。

**形態** 平面形、底面形共に隅丸方形で、断面形は明瞭に壁が外傾する、底面がほぼ平坦な土壇である。規模は、検出面で長径85cm、短径66cm、底面で長径71cm、短径55cm、深さ16cmを測る。長軸方向はN-65°-Eで、壁の最小傾斜角は110°である。

**土層** 埋土は黒褐色粘質土一層である。

**遺物** 検出しなかった。

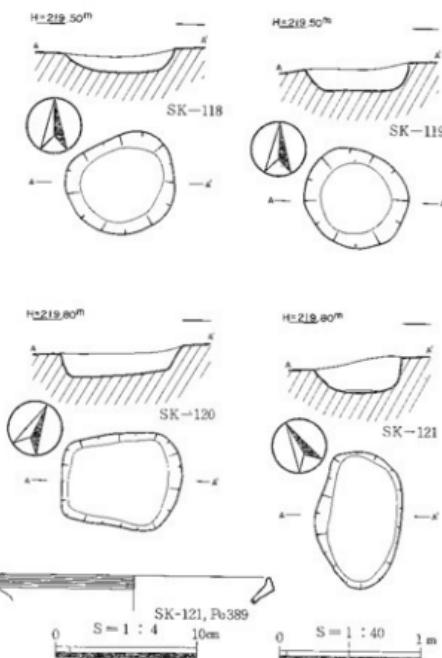
**性格** 不明である。

**時期** 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と考える。

#### SK-121

**位置** 6Dグリッドの中央北端に位置する。北部遺構群の西側南寄りにあたり、北西下がりの緩傾斜面（谷部）に立地する。SK-120に隣接し、周辺には、SI-10、12、SK-118、119がある。壇底の標高は219.30mを測る。

**形態** 平面形、底面形共に横円形で、断面形は明瞭に壁が直立する、底面がほぼ平坦な土壇である。規模は、検出面で長径96cm、短径60cm、底面で長径88cm、短径46cm、深さ



插図195 SK-118.119.120.121遺構図

25cmを測る。長軸方向はN-35°-Eで、壁の最小傾斜角は97°と、ほぼ垂直である。

土層 埋土は黒褐色粘質土一層である。

遺物 検出しなかった。

性格 不明である。

時期 周辺遺構の遺物より弥生時代中期と考える。

### S K-122

位置 6C、7Cグリッドにまたがって位置する。北部遺構群の南端にあたり、北西下が

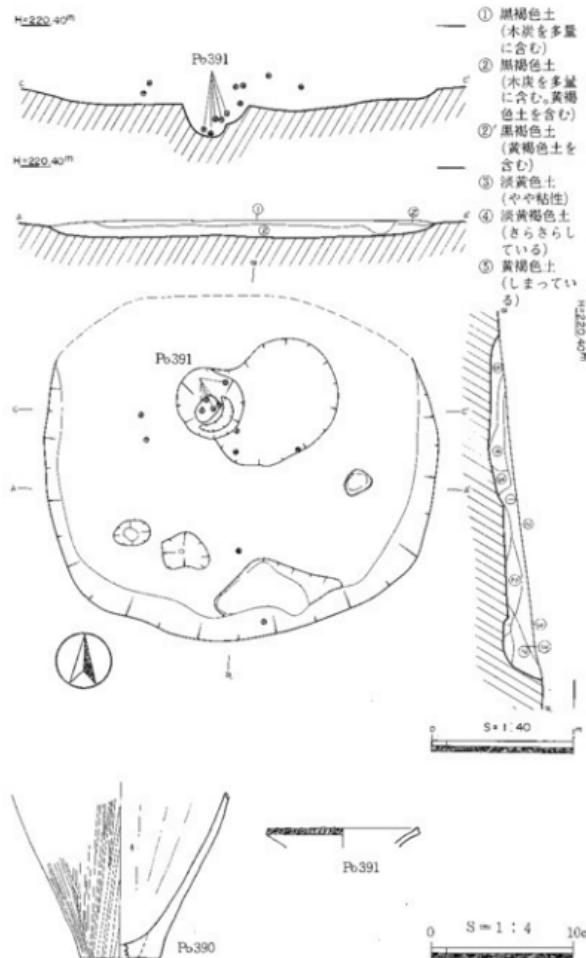


図196 SK-122遺構遺物図

りの緩傾斜地に立地する。周辺には、やや離れて S I-14、15、S B-06がある。壇底の標高は219.92mを測る。

- 形態 遺構の北側が削平されているため明確ではないが、平面形、底面形共に円形を呈すると考えられる。断面形は壁の最小傾斜角が115°と外傾する土壤である。規模は、検出面で長径275cm、短径245cm、底面で長径254cm、短径245cm、深さ23cmを測る。
- 土層 埋土は黒褐色土、淡黄色土を基本とするが、①層の黒褐色土中には木炭を多量に含む。またその下層の②～⑤層は、全体的にバサバサとしまりのない土である。
- 遺物 壺1、底部片1を國化した。
- 性格 不明である。
- 時期 出土遺物より弥生時代中期と考える。
- 特筆事項 土壤のほぼ中央に底面で長径20cm、短径13cm、深さ20cm程のピットを検出しておらず、その中から土器片を出土した。

### S K-123

位置 7 C グリッドの南端に位置する。北部遺構群の西側南端にあたり、尾根部に立地する。北方に S K-122がある。壇底の標高は、220.16mを測る。

形態 土壌西側で2段、東側で3段掘りとなっており、平面形は橢円形、底面形は不整形を呈するが、西側壇底面の安定性を考えると、東側半分は掘り過ぎと思われ。底面形も橢円形であろうと想定される。従って、断面形は壁の立ち上がりが不明瞭な皿状を呈す、底面のほぼ平坦な土壤であろう。想定される規模は、検出面で長径166cm、短径98cm、底面で長径100cm、短径67cm、深さ36cmである。長軸方向はN-77°-Eで、壁の最小傾斜角は測定できなかった。

土層 ②層は、地山（黄褐色粘土）系の土層と類似しているため、掘り過ぎの原因となった。



- ① 黒褐色土  
(黄、白粒砂  
混じり)  
② 黑褐色土  
(茶褐色土  
混じり、黄  
白砂混じり)

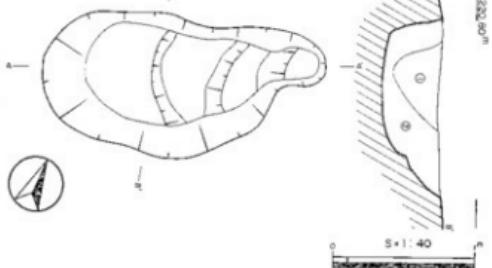
遺物 検出しなかった。

性格 周辺に明瞭な遺構が存在しないこと、北部遺構群において全く異なる立地を示すこと、埋土が地山系であることなどから、自然遺構である可能性が高い。

時期 不明である。

(中原 齊、西原徳善、浅川美佐子、松本琢己)

挿図197 SK-123遺構図



#### 第4節 その他の遺構

##### 集石—01

位置 60グリッドの南東側に位置する。南部遺構群の中央北端にあたり、西下がりの緩傾斜地（谷部）に立地する。周辺には、SK-40、50、51、64などがある。標高は、220.90mを測る。  
H=220.90m

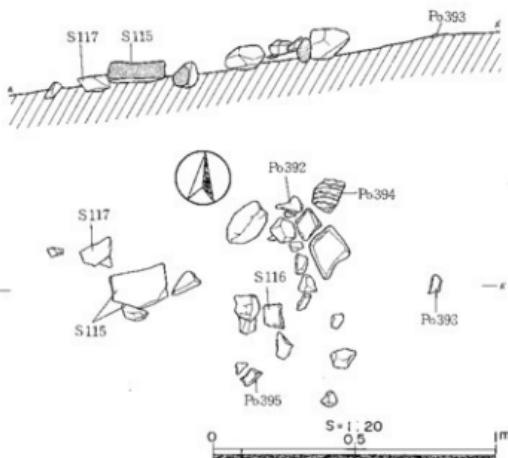
形態 遺構検出時の擾乱によって破壊を受けており、残存する状態は悪いが、平面形は梢円状を呈し、規模は長径150cm、短径90cm程度の広がりを持つと推定される。径5~15cmの亜角～亜円礫からなり、種類は安山岩系である。本遺跡内では尾根に沿って礫群が存在するがこれとの絡がりはないこと、周辺に自然堆積によって集石状を呈する礫の密集が見られないこと、土器、砥石などの遺物を伴うこと、などから集石遺構であると判断した。

土層 検出面は黒色ローム質粘質土（黒ボク）内であり、周辺遺構の検出面よりは10~15cm上位にある。平、断面とも土壤の掘り方は認められなかった。

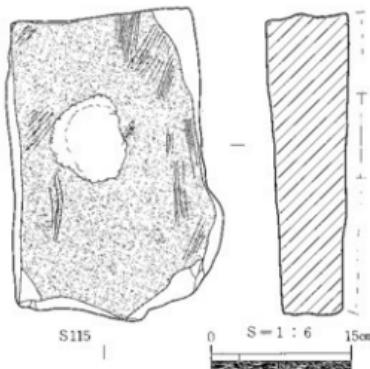
遺物 壺4、砥石3を図化した。S-115は2つに壊されており、砥面が上を向いた状態で検出した。

時期 遺物より弥生時代中期中葉と考える。

特筆事項 遺構検出面は、当時の生活面を示すと推定できるが、土壤底面が地山まで達せず黒色ローム質粘質

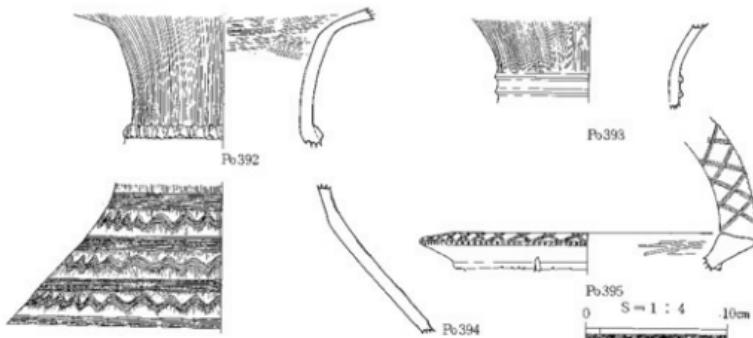


插図198 集石-01遺構図



插図199 集石-01石器図

土(黒ボク)内で止まったため、土壤が検出できなかった可能性があるため、明言はできないが、少なくとも検出面を含めこれより上位に生活面があったといえる。

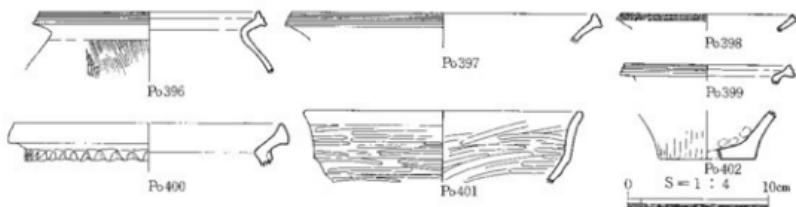


挿図200 石群-01遺物図

#### Pit群

Pit群 明瞭な遺構及び風倒木痕の他に数ヶ所でPit群を検出した。南部遺構群においては7RグリッドのSB-01東側、8P、11Kグリッドにみられたが、掘立柱建物等を確認することはできなかった。北部遺構群においては、全域にわたって多数のPitが検出されている。特にSB-09~12の掘立柱建物周辺には密度高く集中しており、掘立柱建物の重複が想定される。また、3Aグリッドにおいて柱穴列が確認できたが、平坦面にもかかわらず、対応する列のPit群が検出されなかった為、掘立柱建物とはしなかった。

出土遺物 少量ではあるが、Pit内から土器片が出土しており、甕5、高坏1、底部1を図化した。甕は口縁端部が内傾して、上下に拡張する。外面には凹線、刻み目を施し、頸部に指頭圧痕突起を貼付けしており、弥生時代中期後葉に属するものである。高坏Po401は内外面へラミガキしており後期後半のものである。(中原 齊、松本琢己)



挿図201 C区Pit出土土器実測図

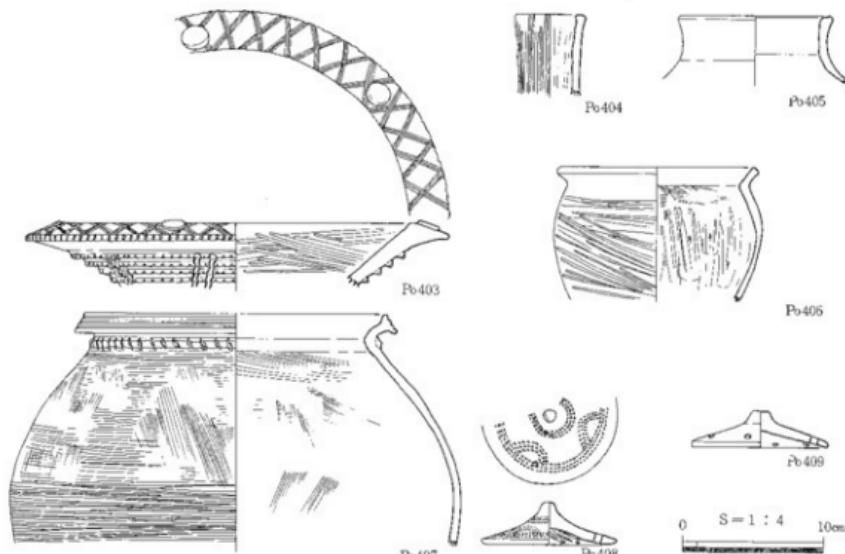
## 第5節 遺構外遺物（挿図202～207、図版62～64）

### 1. 土器

調査範囲の全域から多数の遺構外遺物を検出している。第1章第2節、「調査の経過と方法」で述べた如く、遺構確認面が、遺構面より20～30cm低い為、その間の遺構に伴う遺物も含まれる可能性が高い。

**南部遺構群** 南部遺構群では、10Nグリッドで土器窓を検出した。径6mの範囲に、土器片が折り重なって出土しており、複原できた個体も多い。壺は口縁が大きく外反する壺A類（P o 410）、口縁が外傾して開き、上面に平坦部を持つB類（P o 414、P o 415、P o 416）であり、P o 418は口縁を欠くが、壺A類の小型壺であろう。P o 417は大きく外反する壺口縁で内面には横円区画と雷文様の記号文がみられる。甕は頭部に指頭圧痕突帯をもつもの（P o 425）・ともないもの（P o 421）がある。これらは中期中葉の土器群である。この他に、南部遺構群東側出土の壺4、甕4、高杯2を図化している。壺P o 413は口縁に1cmの間隔を持つ穿孔がみられる。甕P o 423は南部遺構群で出土した唯一の後期に属する土器である。南部遺構群の北側にある旧自然河川は、黒褐色系埋土中から多量の土器片を出土した。壺3、甕2、蓋2を図化した。P o 404は長頸の小型壺、P o 405は短頸壺と思われる。P o 408は外面に刺突による円弧文を施した蓋である。土器は全体にローリングを受けた痕跡はなく時期は中期中葉～後葉の幅を

**自然河川**



挿図202 B区自然河川出土土器実測図

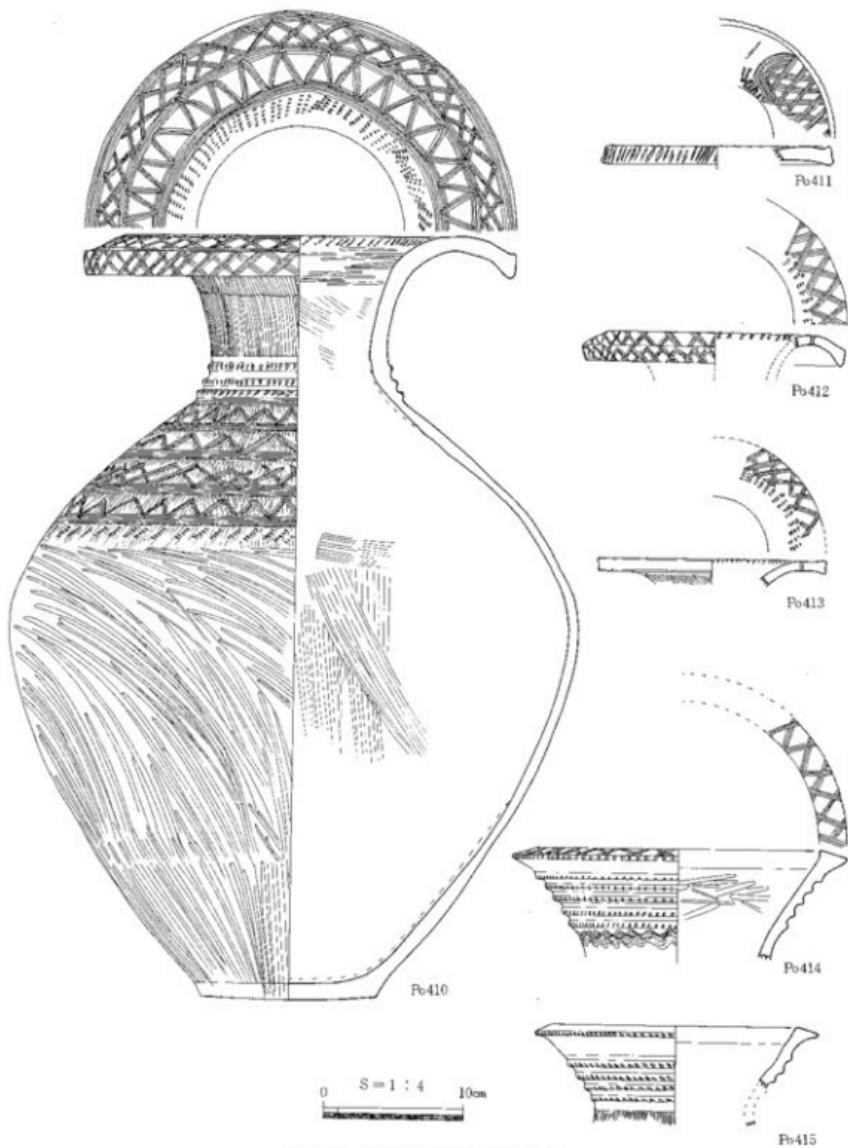
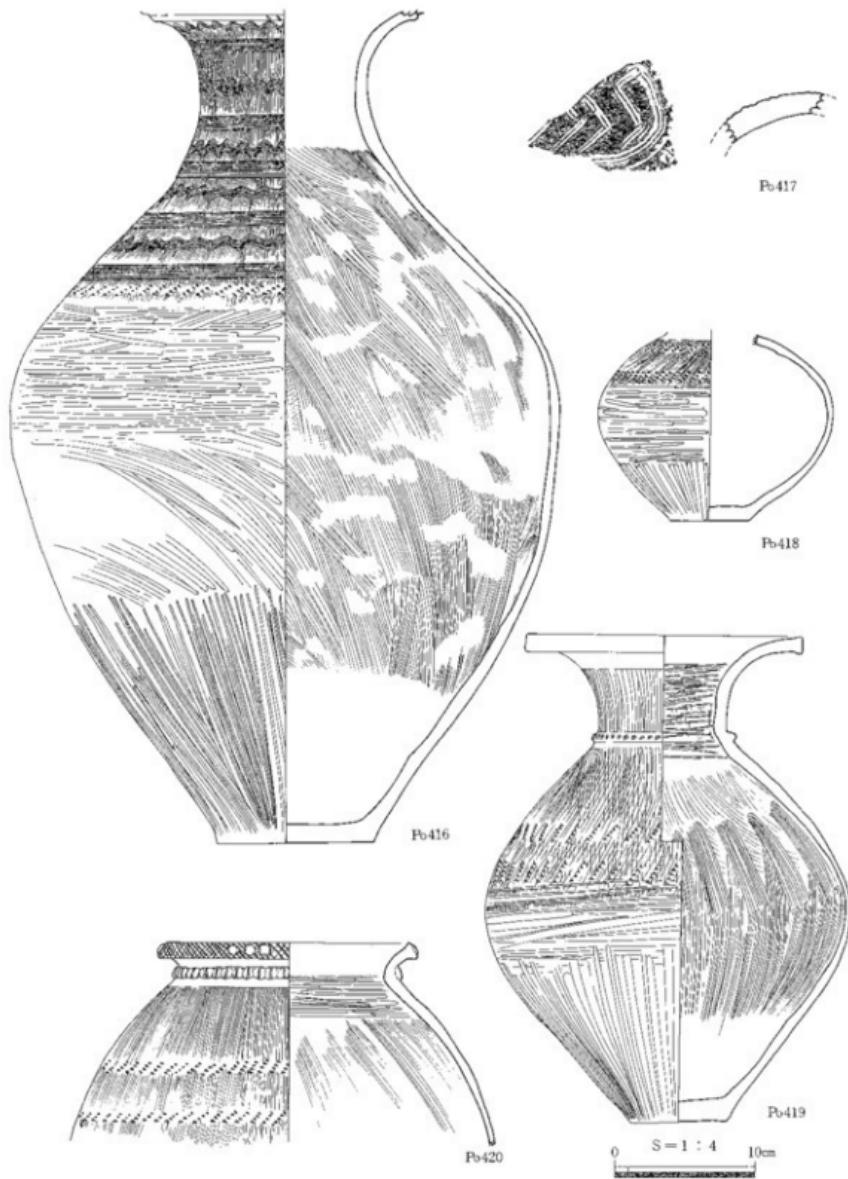


插图203 南部遗构群遗构外遗物图①

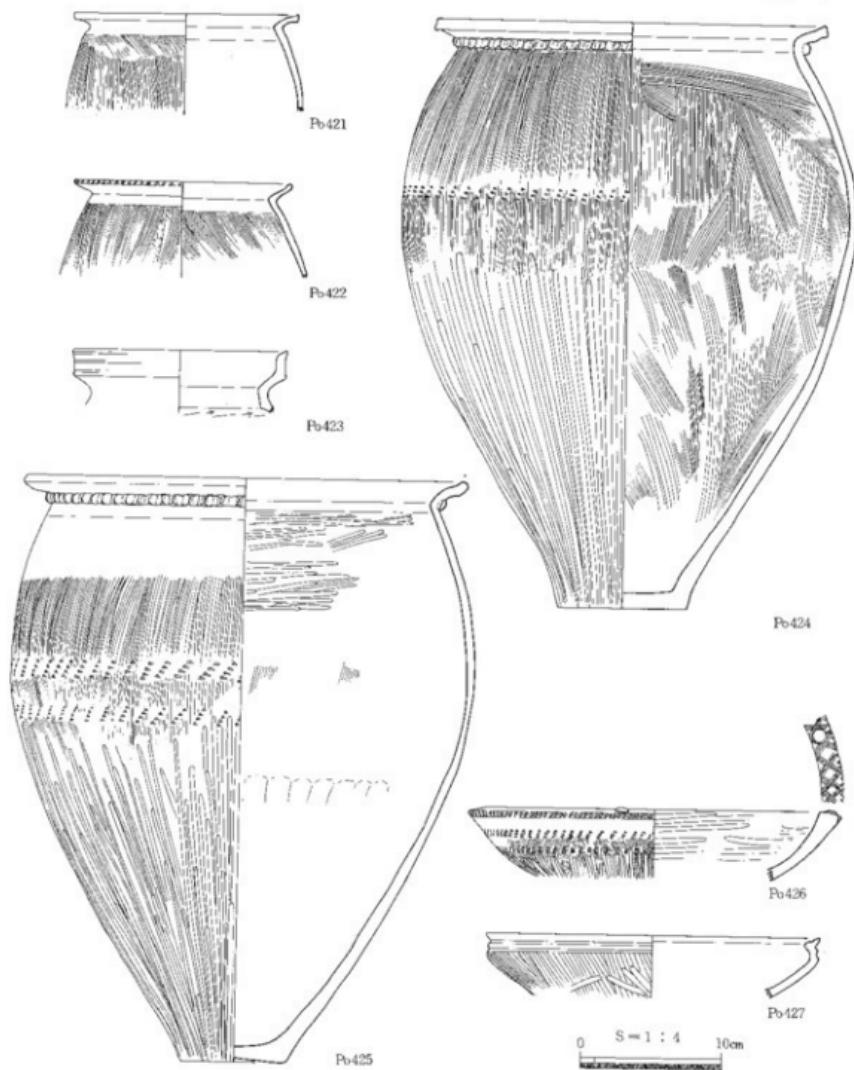


插図204 南部遺構群遺構外遺物図②

もっている。

北部遺構群 1F、4E～4F、1I～1J、0Lグリッドでやや小規模な土器溜を検出した。

壺は口縁が大きく外反するA類が殆どで、P0431は無頭壺、P0433はA-1類の小



挿図205 南部遺構群遺構外遺物図③

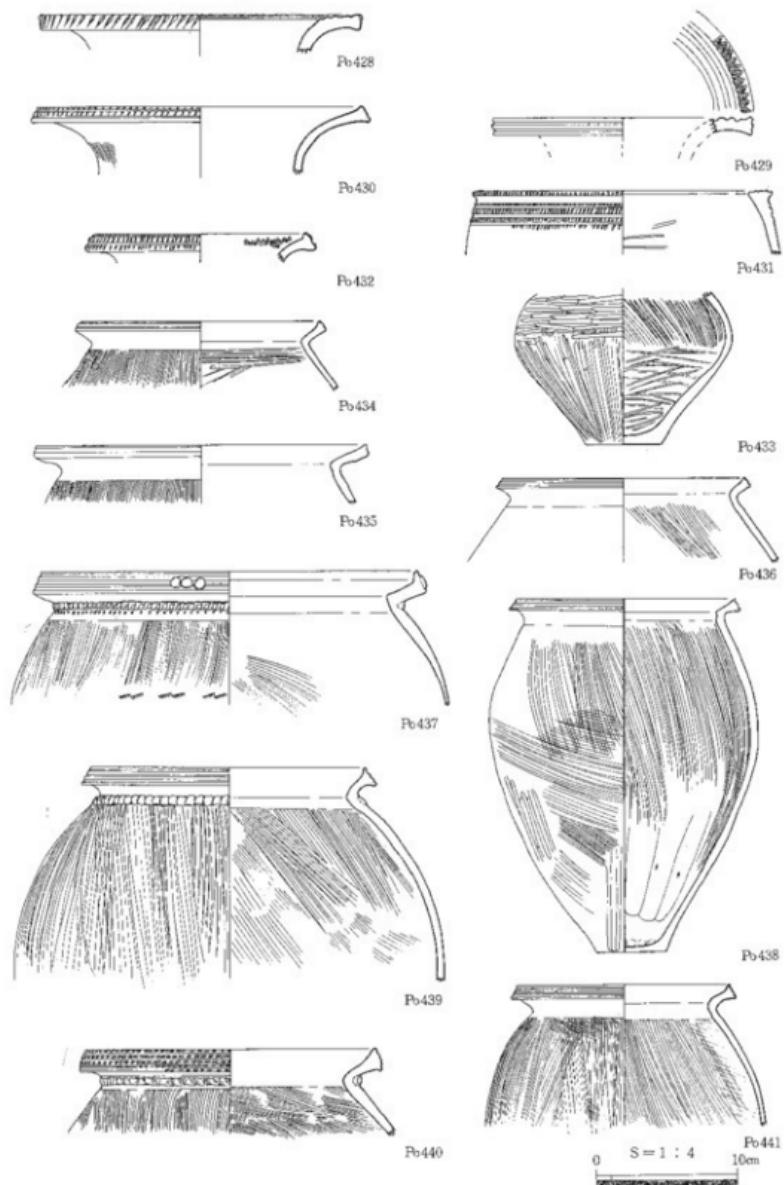
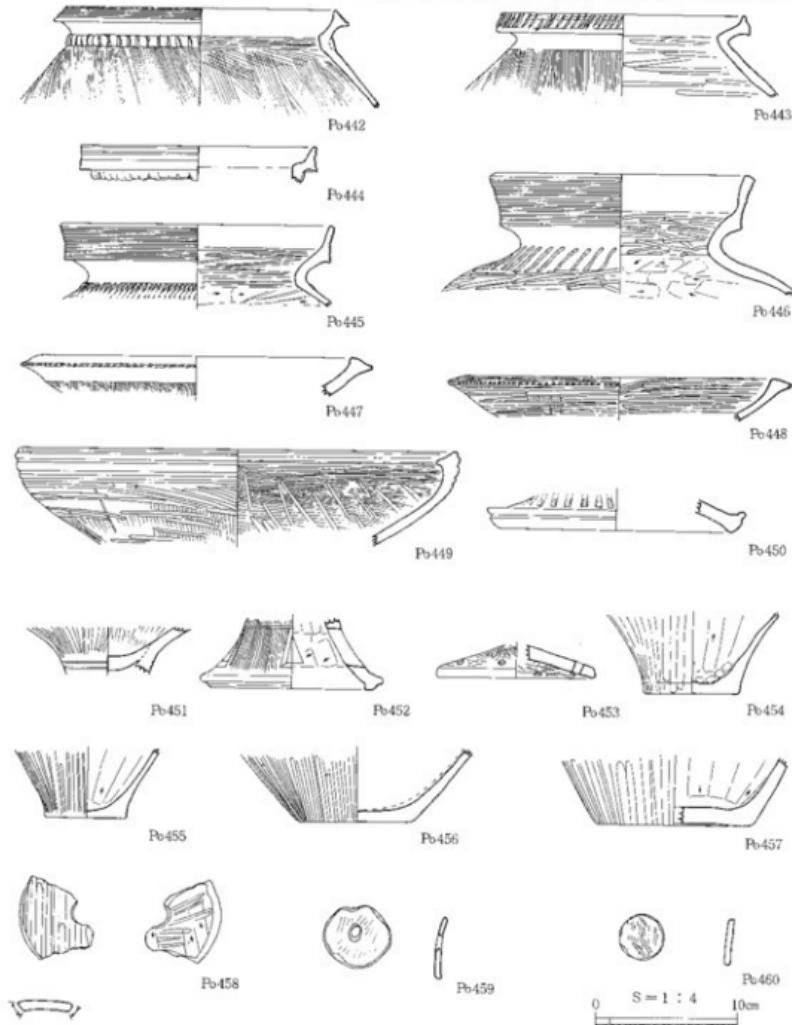


插圖206 北部道構群遺擱外遺物圖①

型窓と考えられる。窓はくりあげ口縁B、C類、複合口縁がみられ、口縁の形態、施文にはバラエティーがある。高窓は口縁が強く内湾する皿状の窓部で、脚部には透し孔を施す。窓部底面は円盤充填による。蓋には2個一対の穿孔を施している。他に弥生土器片軸用の筋錐車及び未製品が出土しており、Pb458、Pb459、Pb460は周縁部を擦り切って調整している。時期的には中期後葉と後期後半の2時期が認められる。



挿図207 北部遺構群遺構外遺物図②

自然河川 北部遺構群中央の旧自然河川は、SB-12、SK-94の弥生時代遺構を切っており、時代は降るが江戸時代末期の近世陶器（第5章第2節）とローリングを受けた弥生土器片を出土している。底部P-045を図化した。  
 (中原 齊)

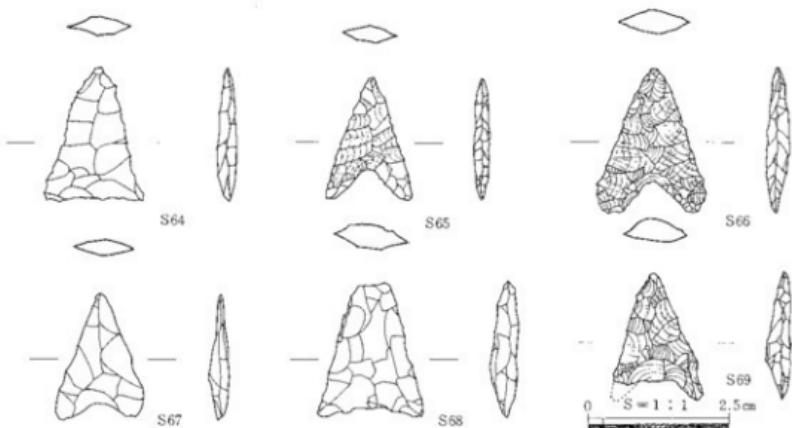
## 2. 石器 [挿図208~212、挿図13、図版65、66]

石器の分類については、第3章2節bを参照されたい。遺構外石器として、剝片石剝片石器 器15点(S 65~77、79、80)、石核石器、疎石器28点(S 81~83、86~92、95~97、99~104、118~126)を検出した。剝片石器の内訳は、石鏃13点、削器1点、石匙1点である。疎石器 石核石器、疎石器の内訳は、磨石・敲石II 3点、磨石・敲石III 6点、磨石・敲石IV 1点である。打製石斧3点、磨製石斧4点、環状石斧1点、石皿1点、砥石8点、石庖丁1点である。南部遺構群 北部遺構群 である。南部遺構群(弥生時代中期後葉、後期後半)に属する石器の調数を挿表13に示す。その総数は、南部遺構群で16点、北部遺構群で26点と、北部遺構群の方が若干多いが、これに遺構内出土の石器を加えると、南部遺構群で33点、北部遺構群で34点とほぼ同数になり、両者の間に、時期的変化はあっても生活様式はあまり変化しなかったであろうと考える。  
 (松本琢己)

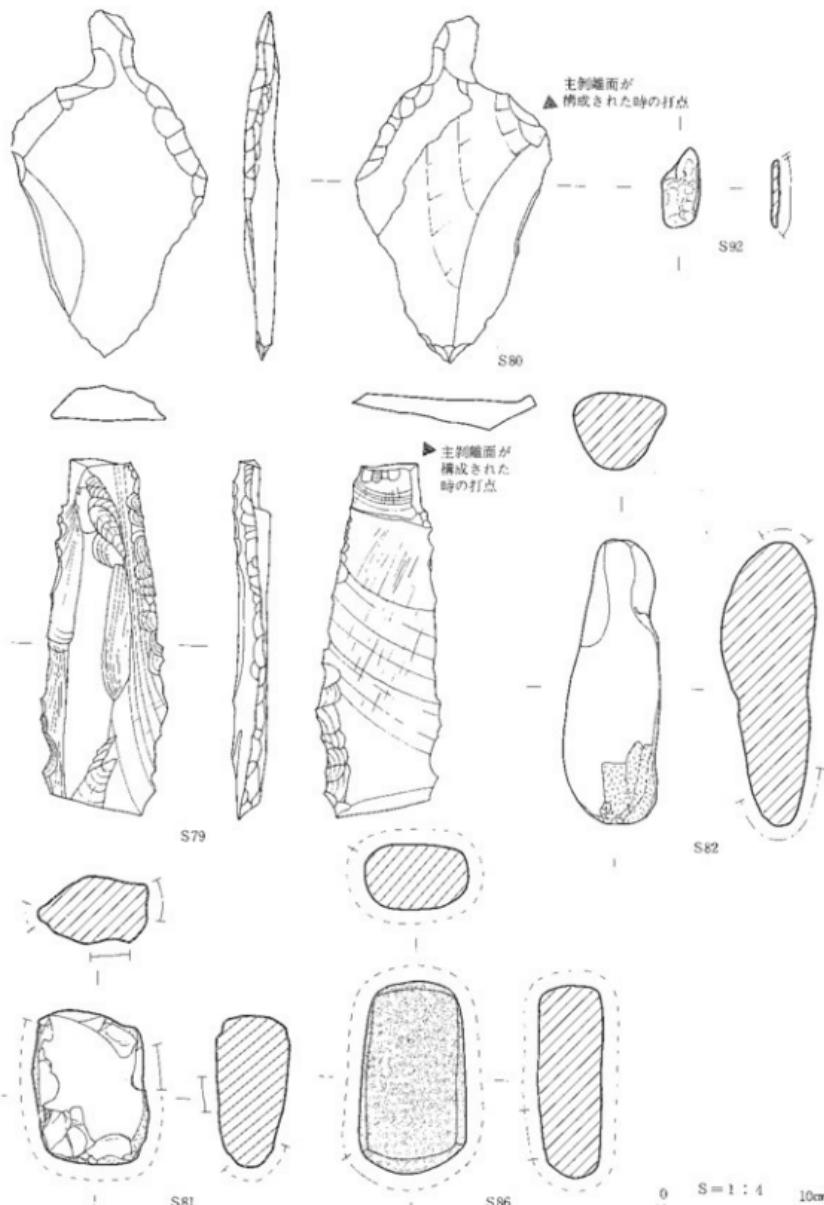
	剝片石器		石核石器・疎石器				計	
	右鏃	その他	磨石・敲石	打製石斧	磨製石斧	環状石斧		
南部遺構群	4 (8)	1 (2)	5	1	1 (2)	0	0	3 (14)
北部遺構群	9 (11)	1	5 (8)	2 (3)	3	1	1	4 (6)
計	13 (19)	2 (3)	10 (13)	3 (4)	4 (5)	1	1	7 (20)
								16 (33)
								26 (34)
								42 (67)

〔注〕遺構出土の個数を記入して置く

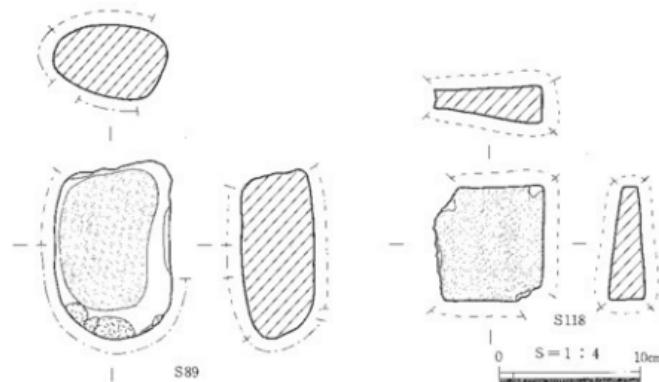
挿表13 遺構群別石器個数表



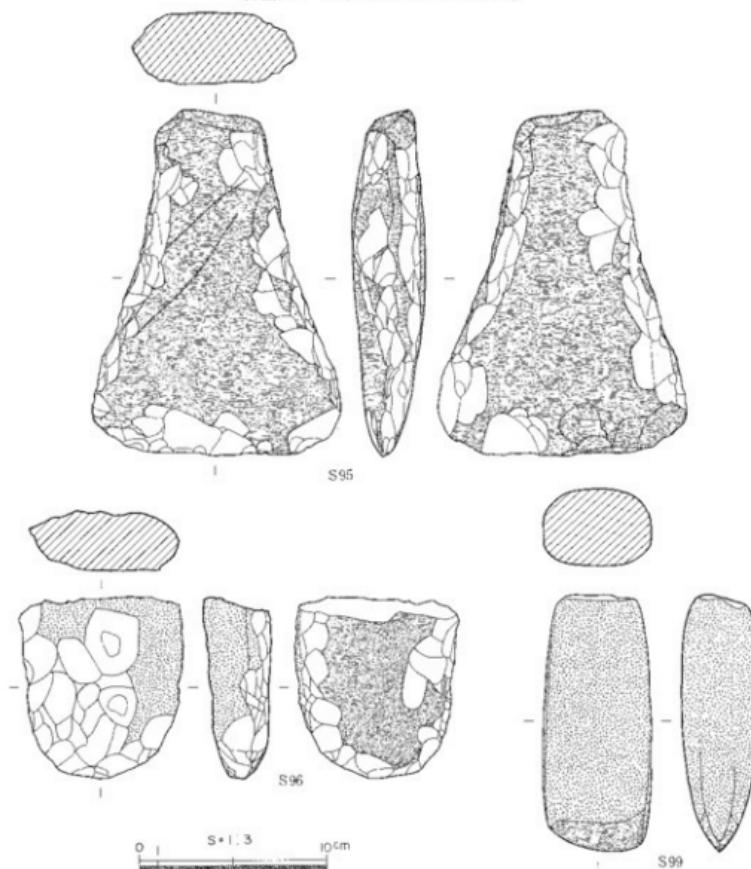
挿図208 北部・南部遺構群出土石器①



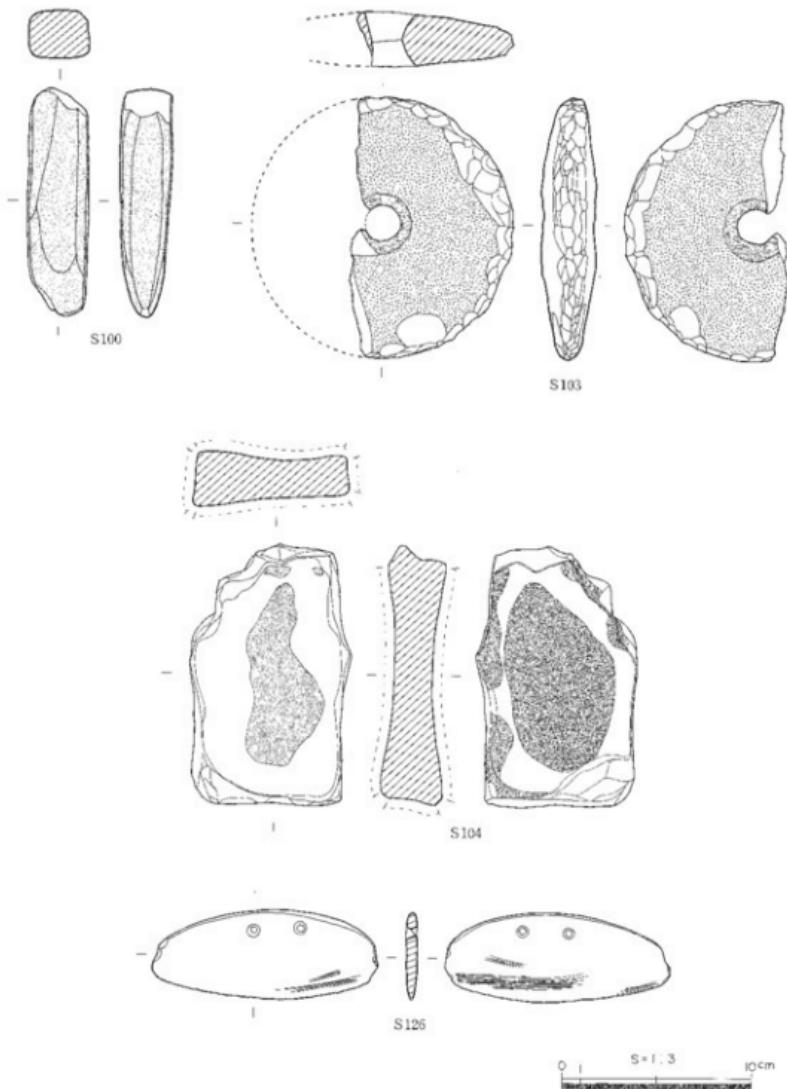
插図209 北部・南部遺構群出土石器②



插図210 北部・南部遺構出土石器③



插図211 北部・南部遺構群出土石器④



插図212 北部・南部遺構群出土石器⑤

## S I - 01

遺物番号 組合番号 同族番号	収上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po70 21 54	S Y B 区 S I - 01 No.975	甌	復口径 23.0	腹部から「く」の字状に膨く口 部。口縁上下端間に刻み目。 底。口縁上下端間に刻み目。	外腹ヨコナデ。内腹ヨコ ナデ。頸部・肩部粗いハケメ。	胎土 焼成 色調 1.5mm程の石英を含む。 良好 内外面淡褐色
Po71 21	S Y B 区 S I - 01 No.952	甌	復口径 8.0	平底。	外腹ヘラミガキ。底五ナデ。内 面ナデ。底面指頭圧痕。	胎土 焼成 色調 石英、長石を含む。 良好 内外面淡褐色 黒斑あり
Po72 21 62	S Y B 区 S I - 01 No.953	効鍵車	孔径 4.0	乳生土廢物部片転用の効鍵車。	外腹ハケメ。	胎土 焼成 色調 石英、長石を含む。 良好 内外面淡褐色

## S I - 02

遺物番号 組合番号 同族番号	収上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po73 22 54	S Y B 区 S I - 02 No.953	甌		球形になる脚部の上半部。肩部 外腹横状工具による圧痕。	外腹ナゲ。内腹不整ヘラミガキ。	胎土 焼成 色調 石英、長石を含む。 良好 内外面淡褐色

## S I - 04

遺物番号 組合番号 同族番号	収上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po74 26 54	S Y B 区 S I - 04 No.1205	甌	口径 2.6	大きき外反する口縁部。口縁部 部はく重する。外腹に横状工具 による圧痕。頸部に貼付指頭圧 痕突起。	外腹ヨコナデ。内腹粗いハケメ ナデ。	胎土 焼成 色調 石英を多量含む。 やや不良。 内外面淡褐色 口縁部スス付着
Po75 26 54	S Y B 区 S I - 04 No.1050	甌	復口径 2.0	大きき外反する1縫口。口縁部 はくや既成され凹縫、刻み目、 円形凹窓を施す。	口縫外腹ヨコナデ。頸部タハ 内腹リコナデ。	胎土 焼成 色調 石英を含む。 良好 内腹淡褐色。外腹褐色。
Po76 26 54	S Y B 区 S I - 04 No.991	甌	復口径 14.0	口縫部片。頸部からゆるやかに 外縫へと傾き、口縫部はく重す。 3条の単位とする鉛格子文。刻 み目を施す。頸部には刻み目突 起。数名の縫隔す行縫。縫隔突出 状文がみられる。	外腹ヨコナデ。タハハケメ。内 面ナデ。口縫部ヨコナデ。	胎土 焼成 色調 石英、長石を含む。 良好 内腹淡褐色。外腹明褐色。 付着スス付着
Po77 26 54	S Y B 区 S I - 04 No.991	甌	復口径 15.0	頸部は「く」の字状に屈曲し、 底部に縫をもつ。	口縫部内外腹ヨコナデ。体部外 面タハナゲ。	胎土 焼成 色調 鉛粒を多量に含む やや不良。 内腹淡褐色。外腹黄褐色。
Po78 26 54	S Y B 区 S I - 04 No.991	甌	復口径 15.4	頸部は「く」の字状に屈曲し、 底部は丸く突ましがれる。	口縫部内外腹ヨコナデ。体部外 面ハケ後ナゲ。	胎土 焼成 色調 鉛粒を含む 良好 内腹淡褐色。外腹黑褐色。
Po79 26 54	S Y B 区 S I - 04 No.1203	甌	復口径 17.6	頸部は「く」の字状に屈曲し、 底部は丸く突ましがれる。	口縫部内外腹ヨコナデ。体部外 面ナゲ。	胎土 焼成 色調 砂粒を含む。 良好 内腹淡褐色。外腹茶褐色。
Po80 26 54	S Y B 区 S I - 04 No.991	甌	復口径 17.0	頸部は「く」の字状に屈曲し、 底部は丸く突ましがれる。	口縫部内外腹ヨコナデ。体部外 面タハナゲ。	胎土 焼成 色調 石英、長石を含む。 良好 内腹赤褐色。 黒斑あり。
Po81 26 54	S Y B 区 S I - 04 No.1033	甌	開口径 22.4	底部は「く」の字状に屈曲し、 底部は丸く突ましがれる。外腹には ヘラマガキによる刻み目。底部 には刻み目突起がある。	外腹部タハハケ一部ナデ。内 面ヨコナデ。底部ナゲ後ハマガキ。 ナゲ後ヘラミガキ。	胎土 焼成 色調 砂粒を含む。 良好 内腹淡茶褐色。 外腹褐色。
Po82 26 54	S Y B 区 S I - 04 No.1046	甌	復口径 15.6	底部は「く」の字状に屈曲し、 底部は丸く突ましがれる。上縫には 刻み目を施す。	口縫部内外腹ヨコナデ。頸部外 面タハナゲ。内腹ヨコナデハケメ 後ヘラミガキ。	胎土 焼成 色調 石英、長石を多量含む 良好 内腹淡褐色。 部スス付着
Po83 26 54	S Y B 区 S I - 04 No.991	甌	復口径 17.6	口縫部片。頸部は「く」の字状 に屈曲し、底部は丸く突ましがれる。 工具による刻み目を施す。	口縫部内外腹ヨコナデ。頸部タハ ハケ後ナゲ。内腹ヨコナデハケメ 後ヘラミガキ。	胎土 焼成 色調 石英、長石を含む 良好 内腹淡褐色。 黒斑あり。
Po84 26 54	S Y B 区 S I - 04 No.1042	高環	復口径 21.6	楕円の外部。口縫部は圓曲し、 水平にのびる。底部にはヘラ状 工具による刻み目を施す。	口縫部内外腹ヨコナデ。环部外 面タハナゲ後ヘラミガキ。内 面ヨコナデハラミガキ。	胎土 焼成 色調 砂粒を含む。 良好 内腹淡褐色。 外腹褐褐色。

掲表14 下山南通遺跡竪穴住居跡弥生土器観察表①

## S I - 04

遺物番号 地図番号 図版番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態	手法	備考
Po85 26 54	S Y B 区 S I - 04 No1052	高环	腹口径 23.4	輪状の环部。口神部は周曲し、水平にのり。端部にはヘラフ工員による刻み目。口神部に2ヶ所の穿孔がある。	口神部内外側ヨコナダ。环部外側ハケメ後ヘラミガキ。	粘土 石英、長石を含む 良好 内面赤褐色。外側暗茶褐色。
Po86 26 54	S Y B 区 S I - 04 No713 S I - 04 No987	高环	腹口径 21.0	輪状の环部。口神部は平坦面をもち、ヘラ状工具による刻み目を施す。	口神部内外側ヨコナダ。外側ハケメ後ヨコナダ。内面ハケメ後ヘラミガキ。	粘土 良好 色調微 内面赤褐色。外側褐色。
Po87 26 54	S Y B 区 S I - 04 No997	高环	腹口径 23.8	輪状の环部。端部はやや試張して平坦面をもち、刻み目がめぐる。	口神部内外側ヨコナダ。体部ヘラミガキ。	粘土 良好 内面赤褐色。外側褐色。
Po88 26 54	S Y B 区 S I - 04 No1129	高环	脚径14.0	「ハ」の字状に聞く脚部。端部に平坦面をもつ。	外面タテハケ後ヘラミガキ。内面ナダメハケ後ナダ。コビオサリ、しほり目。下位ナダ。脚部内外側ヨコナダ。	砂粒、石英を含む 良好 内面赤褐色。外側褐色。
Po89 26 54	S Y B 区 S I - 04 No991	高环	腹脚径 12.3	「ハ」の字状に聞く脚部。端部に平坦面をもつ。	外脚ナダハケ後ナダ。内面脚端部ヨコナダ。	砂粒を含む 良好 内面赤褐色。 黑斑あり。
Po90 26 54	S Y B 区 S I - 04 No1028	高环	腹脚径 16.1	輪状の受部。円盤充満。「ハ」の字状に聞く脚部。端部に平坦面をもつ。	环部内外側ヘラミガキ。脚部内面ヘラミガキ。内面ナダ。下位ナダ。脚部底ヨコナダ。	微砂粒を含む 良好 内面明茶褐色。外側淡褐色。
Po91 26 54	S Y B 区 S I - 04 No1202	高环	脚径13.4	「ハ」の字状に聞く脚部。端部に平坦面をもつ。円盤充満。	外面タテハケ後タテヘラミガキ。脚部ヨコナダ後ヘラミガキ。内面ナダ。下位ナダ。脚部底ヨコナダ。	石英、長石を含む 良好 内面赤褐色。 黑斑あり。
Po92 27	S Y B 区 S I - 05 No986	底部	底底径 9.0	平底。	外側ヘラミガキ。内面ナダハケ。底面オサナ後ナダ。	砂粒、長石を含む 良好 内面淡茶褐色。外側明褐色。 内面赤褐色付着。外側 黒斑あり。
Po93 27	S Y B 区 S I - 04 No1029	底部	底底径 7.9	平底。	外側ヘラミガキ後ナダ。底面ナダ。内面ナダ。	砂粒、長石を含む 良好 内面赤褐色。
Po94 27	S Y B × S I - 04 No1032	底部	底径 6.3	平底。	外側ヘラミガキ。底面ナダ。内面ヘラミガキ。底面スピオサナ。	大粒の石英、長石を含む 良好 内面淡茶褐色。 底部に黒斑。
Po95 27 62	S Y B 区 S I - 04 No998	纺锤車	径 孔径0.38	先生上部脚部軸用の纺锤車。	外側ヘラミガキ。内面ナダ。	微細な長石を含む。 良好 内面黒褐色。外側赤褐色。
Po96 27 62	S Y B 区 S I - 04 No991	纺锤車	径 孔径0.45	先生上部脚部軸用の纺锤車。周縁部をつけて整形する。	外側ヘラミガキ後ナダ。内面ヘラミガキ。	大粒の石英、長石を含む。 良好 内面赤褐色。外側深褐色。

## S I - 05

遺物番号 地図番号 図版番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態	手法	備考
Po97 29 54	S Y B 区 S I - 05 No1055	环	腹口径 19.3	輪部「く」の字状に壓曲する。環部:1ヘラ状工具による刻み目。	口神部内外側ヨコナダ。内面ハケメ後ナダ。脚部外側タテハケ後ナダ。	粘土 石英、長石を含む。 良好 内面赤褐色。
Po98 29	S Y B × S I - 05 No1068	底部	腹口径 9.3	平底。	脚部外側ヘラミガキ。底面ナダ。内面ハケメ後ナダ。内面オサナナダ。	砂粒、石英を含む。 良好 外側紫褐色。内面淡黃褐色。 黒斑あり。
Po99 29 62	S Y B 区 S I - 05 No1110	纺锤車	径 孔径 4.6 0.4	先生上部脚部軸用の纺锤車。	外側ナダヘラミガキ。後ナダ。内面ハケメ。	砂粒を含む 良好 内面淡褐色。外側黒褐色。 黒斑あり。

挿表15 下山南通遺跡竪穴住居焼成土器観察表②

## S I - 06

遺物番号 標印番号 同版番号	取上番号	器種	法 番 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po109 35 54	S Y B 区 S I - 06 No1263	甕	復口徑 15.5	口縁部は下に膨張するくりあげ口様。端部外壁は2条の凹線を施す。	内外面ヨコナゲ。	胎土 燒成 色調 石英、長石を含む。 良好 内外面淡褐色。
Po101 30	S Y B 区 S I - 06 No1270	底部	復底径 6.0	平底。	外底部へラミガキ。底面ナゲ。 内面ヨサエナゲ。	胎土 燒成 色調 石英、長石を含む。 良好 内外面淡褐色。 外底黒褐色。

## S I - 09

遺物番号 標印番号 同版番号	取上番号	器種	法 番 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po102 33	S Y D 区 S I - 01 No23	甕	復口徑 16.7	大きく外反する口縁で頸部やや肥厚し丸い。	内外面ヨコナゲ。	胎土 燒成 色調 石英を少量含む 良好 内外面淡褐色。
Po103 33	S Y D 区 S I - 01 No6	甕	復口徑 17.8	U縁端部を下に膨張するくりあげ口様。外壁に2条の凹線を施す。肩部は溝い。	内外面ヨコナゲ。	胎土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内外面淡褐色。
Po104 33	S Y D 区 S I - 01 No28	甕	復口徑 16.1	頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は上方に膨張するくりあげ口様。外壁に上庄底面を施す。	口頭部内外面ヨコナゲ。体部外壁タハケ。内面ヨコナゲ。	胎土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内外面淡褐色。
Po105 33	S Y D 区 S I - 01 No23	高杯	復口徑 17.1	環状。端面に3条の凹線を施す。	内外面ヨコナゲ。	胎土 燒成 色調 石英を含む 良好 内外面淡褐色。
Po106 33	S Y D 区 S I - 01 No23	高杯		點付突変を施し、腹部に向けて横く脚部。浮ききれない三角形透けられ。肩部は溝い。	外腹タハケ。内面不明。	胎土 燒成 色調 石英を含む 良好 内外面淡褐色。
Po107 33	S Y D 区 S I - 01 No23	底部	復底径 6.7	平底。	外底へラミガキ。内面ヘラケズり後ナゲ。	胎土 燒成 色調 石英を含む。 良好 内面茶褐色。外周明褐色。
Po108 33	S Y D 区 S I - 01 No12	底部	復底径 10.2	平底。	外底へラミガキ。内面ナゲ。	胎土 燒成 色調 砂粒を含む。 良好 内外面淡灰褐色。

## S I - 10

遺物番号 標印番号 同版番号	取上番号	器種	法 番 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po109 35 55	S Y C 区 S I - 01 No397	甕	復口徑 7.5	やや外反しながら立ち上がる口縁。小型甕。	外面ヨコナゲ。	胎土 燒成 色調 石英を含む 良好 内外面淡褐色。
Po110 35 55	S Y C 区 S I - 01 No397	甕	復口徑 7.1	瓶状の口頭部。端部にヘラ状工具による刻み目を施す。	内外面ヨコナゲ。	胎土 燒成 色調 石英、長石を含む。
Po111 35 55	S Y C 区 S I - 01 No392	甕	復口徑 18.0	頸部から「く」の字状に屈曲し、口縁部は内側にして下に膨張する。外壁に3条の凹線。頸部に透彫刻状突変を駆使する。	内外面ヨコナゲ。外表面深彫刻をなでつける。	胎土 燒成 色調 石英、長石を含む 良好 内外面淡褐色。
Po112 35 55	S Y C 区 S I - 01 No397	甕	復口徑 25.9	頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部は内側にして下に膨張する。外壁に3条の凹線と刃彫りを施す。頸部に透彫刻状突変がある。	内外面ヨコナゲ。	胎土 燒成 色調 石英、長石、雲母を含む 良好 内外面赤褐色。
Po113 35 55	S Y C 区 S I - 01 No392	甕	復口徑 16.6	頸部は「く」の字状に屈曲する。くりあげ口縁で外壁に凹線を施す。	外面ヨコナゲ。内面ナゲ。	胎土 燒成 色調 石英、長石を含む 良好 内外面淡褐色。
Po114 35 55	S Y C 区 S I - 01 No420	甕	復口徑 19.5	頸部から「く」の字状に屈曲し、外壁に3条の凹線を施す。外壁に不明瞭な透彫刻を施す。	口頭部、内外面ヨコナゲ。体部外壁タハケ。内面ヨコハケ後ナゲ。	胎土 燒成 色調 長石を含む 良好 内外面淡褐色。
Po115 35 55	S Y C 区 S I - 01 No397	甕	復口徑 16.2	頸部から「く」の字状に屈曲し、内外面ヨコナゲ。外壁に3条の凹線を施す。外壁に不明瞭な透彫刻を施す。	胎土 燒成 色調 石英、長石、雲母を含む 良好 内外面淡褐色 黒斑あり。	

摺表16 下山南遺跡豎穴住居跡弥生土器觀察表③

## S I - 10

遺物番号 種類番号 区分番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 廓	手 法	備 考
Po116 35 55	S Y C K S I - 01 No397	甌	復口径 14.8	頭部から「く」の字状に屈曲し、底部は僅かに弧張する。外面に2条の凹縫を施す。	外面部ナゲ。内面部コナデ。口縫部内外面コナデ。底部内面にユビオサ。	胎土 石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 内外面淡褐色
Po117 35 55	S Y C K S I - 01 No397	甌	復口径 13.2	頭部から「く」の字状に屈曲し、口縫部は内傾して上下に弧張する。外間に3条の凹縫を施す。	口縫部内外面コナデ。底部内面にユビオサ。	胎土 石英、雲母を含む。 焼成 良好 色調 内外面淡褐色
Po118 35 55	S Y C K S I - 01 No415, 186,427, 397	甌	復口径 15.1	頭部は「く」の字状に屈曲し、口縫部はほぼ直立して、立ち上がりの複合口縫。底部内面には数条の横筋平行縫を施す。下部には6条の凹縫を施す。	口縫部内外面コナデをミガキ消す。内面へラミガキ後コナデ。底部以下へラケツリ後ミガキ。	胎土 石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 内外面茶褐色
Po119 35 55	S Y C K S I - 01 No425	甌	復口径 15.6	頭部から外反して立ち上がる複合口縫。口縫部及び底部外周には数条の横筋平行縫を施す。下部には7条の凹縫を施す。	外面部コナデ。内面部頭部ヘラミガキ、底部以下へラケツリ。	胎土 石英、長石、雲母を含む 焼成 良好 色調 内外面淡褐色 特徴 ス付管
Po120 35 55	S Y C K S I - 01 No430	甌	復口径 17.2	頭部は「く」の字状に屈曲し、底部は外反せず直立する。底部内面に凹縫をもつ。外周には横筋平行縫を施す。下部には5条の凹縫を施す。	外面部コナデ。内面部頭部ヘラミガキ。底部コハケ。	胎土 長石、雲母を含む 焼成 良好 色調 内外面茶褐色
Po121 35 55	S Y C K S I - 01 No418	甌	復口径 20.8	外反気味に立ちあがる複合口縫。外周には横筋平行縫を施す。底部内面に压縫文あり。	口縫部内外面コナデ。内面部下位へラケツリ後ナゲ。	胎土 石英、長石、雲母を含む 焼成 良好 色調 淡褐色
Po122 35 55	S Y C K S I - 01 No397	高杯	復口径 22.0	深い底の複合口縫。底部は内傾して上方に弧張する。底部にはヘラカット工具による刻み目。外周外縫に凹縫を施す。	口縫部ヘラミガキ。内面コナデ後ヘラミガキ。	胎土 石英、長石を含む 焼成 良好 色調 内外面灰褐色、外面淡褐色
Po123 35 55	S Y C K S I - 01 No397	高杯	復口径 13.7	「ハ」の字状に開く脚部。端部に凹縫をもつ。	外面部頭部ヘラミガキ。底部コナデ。内面へラケツリ。底部ヘラミガキ。	胎土 大粒の石英、長石を含む 焼成 良好 色調 淡褐色
Po124 35 55	S Y C K S I - 01 No417	高台	口縫18.6	長い底部から大きくながる複合口縫の受部。下部には「下垂する」外面に6条の横筋平行縫・波状文を施す。底部内面にしおり目あり。	底部外縫へラミガキ。底部内面ナゲ。底部へラケツリ後ナゲ。	胎土 石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 内外面赤褐色

## S I - 11

遺物番号 種類番号 区分番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 廓	手 法	備 考
Po125 37	S Y C K S I - 04 No542	甌	復口径 17.6	口縫端部は上下に弧張するくりあけ口縫。外面に3条の凹縫を施す。	口縫部内外面コナデ。体部内外面タデハケ。	胎土 石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 内外面淡褐色
Po126 37	S Y C K S I - 04 No557	甌	復口径 24.6	口縫端部は内傾し、上方に弧張するくりあけ口縫。外面に3条の凹縫を施す。	外面部コナデ。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 内外面淡褐色
Po127 37 55	S Y C K S I - 04 No546	甌	復口径 16.6	頭部「く」の字状に屈曲し、端部は上部に弧張するくりあけ口縫。外間に2条の凹縫を施す。	口縫部内外面コナデ。体部内外面タデハケ。	胎土 石英、長石を含む 焼成 不良 色調 内外面淡褐色
Po128 37	S Y C K S I - 04 No557	甌	復口径 13.6	口縫部は内傾し、頭部はやわらかみあるあけ口縫。外間に2条の凹縫を施す。	口縫部内外面コナデ。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 内外面淡褐色
Po129 37	S Y C K S I - 04 No557	甌	復口径 16.0	口縫部は内傾し、頭部は上方に弧張するくりあけ口縫。外間に2条の凹縫を施す。	外面部コナデ。	胎土 石英、長石を含む 焼成 良好 色調 内外面淡褐色
Po130 37	S Y C K S I - 04 No543	甌	口縫端部を上方に弧張するくりあけ口縫。外間に2条の凹縫を施す。口縫端部穴欠け。	口縫部内外面コナデ。体部内外面タデハケ。	胎土 石英、長石を含む 焼成 良好 色調 内外面淡褐色	
Po131 37	S Y C K S I - 04 No557	甌	復口径 18.2	口縫端部は内傾し、頭部は上方に弧張するくりあけ口縫。外間に2条の凹縫を施す。	外面部コナデ。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 内外面淡褐色
Po132 37	S Y C K S I - 04 No552	甌	復口径 19.8	口縫端部は内傾して上方に弧張するくりあけ口縫。外間に3条の凹縫を引き込み口を施す。	外面部コナデ。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 内外面淡褐色

挿表17 下山南遺跡堅穴住居跡弥生土器観察表④

## S I - 11

遺物番号 測定番号 測定番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態	手 法	備考
Po133 37	S Y C 区 S I - 04 No577	要	復口円 21.2	縫部を上方にやや弧張するくりあけ口。外面に突き目を施す。	内面ヘラミガキ。外周ヨコナデ。	胎土 燒成 色調 石英、長石を含む 良好 内外面淡褐色
Po134 37 55	S Y C 区 S I - 04 No558	要	復口円 22.6	口縫部はやや底凹して上下に沈嵌する。外面の凹部の上に突き目を施す。脇部に貼付指印痕が施される。	内面ヨコナデ。	胎土 燒成 色調 石英、長石を含む 良好 内外面褐褐色
Po135 37 55	S Y C 区 S I - 04 No558	要	復口円 15.0	ほぼ直立する台形である。外面に標識平行線文を施す。脇部に貼付指印痕が施される。	口縫部内外面ヨコナデ。脇部内外面ヘラミガキ。脇部内外面ヘラミガキ。	胎土 燒成 色調 良好 内外面褐褐色
Po136 37 55	S Y C 区 S I - 04 No558 S I - 03 No511	要	復口円 18.9	外側する複合口である。外面には6条の標識平行線文を施す。脇部には口縫部にによる押引沈像文。下部に波状文。	口縫部内面ヘラミガキの他、内面外表面をナデ消す。脇部内外面ヘラミガキ。内面打部以下ヘラミガキ。	胎土 燒成 色調 大粒の石英、長石を含む 良好 内面暗褐色。外周淡褐色
Po137 37	S Y C 区 S I - 04 No549	扁坏	復口円 19.6	内側する受部。口縫部は内外に弧張し、正面には斜格子文、脇部に突き目を施す。	内外面ヘラミガキ	胎土 燒成 色調 石英を含む 良好 内外面淡褐色
Po138 37 55	S Y C 区 S I - 04 No551	扁坏	復脚部 12.0	「ハ」の字形に開く脚部部。背面は上下に凹張する。脇部外面に標識平行線文を施す。	内外面ヨコナデ。	胎土 燒成 色調 砂粒を含む。 良好 内外面褐褐色
Po139 37 55	S Y C 区 S I - 04 No537	輪台	復口円 29.4	口縫部外反する深めの受部。脇部は丸い。外側に標識平行線文を施す。	口縫部内外面ヨコナデ。口縫部内面ヘラミガキ。脇部内外面ヘラミガキ。	胎土 燒成 色調 大粒の石英、長石を含む 良好 内外赤褐色
Po140 37	S Y C 区 S I - 04 No558	底部	復底盤 6.1	平底。	外周ヘラミガキ。内面ナデ。	胎土 燒成 色調 大粒の石英、長石を含む やや不良 内面淡褐色
Po141 37	S Y C 区 S I - 04 No549	底部	圓底盤 6.4	平底。	外周ヘラミガキ。内面ナデ。	胎土 燒成 色調 砂粒、玄母少し含む。 良好 内外赤褐色

## S I - 12

遺物番号 測定番号 測定番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po142 38	S Y C 区 S I - 03 No509	要	復口円 21.8	口縫が大きく外反し、脇部を上方にのみあける。外面には2条の凹縫跡後へラミ工具による突き目を施す。脇部に貼付指印痕が施される。	口縫部内外面ヨコナデ。	胎土 燒成 色調 石英、長石、金雲母含む 良好 内外面褐褐色
Po143 38	S Y C 区 S I - 03 No502	要	復口円 14.3	脇部「く」の字形に屈曲。くりあけ口。背面に突き目を施す。	内外面ヨコナデ。脇部クチハケ内道ナデ。	胎土 燒成 色調 石英、長石を含む 良好 内外面淡褐色
Po144 38 55	S Y C 区 S I - 03 No512	要	口縫14.5	口縫部「く」の字形に屈曲し、口縫部内外面ヨコナデ。脇部ヘラミガキ。脇部以下ヘラミガキ。	胎土 燒成 色調 石英、長石を含む 良好 内外面褐褐色	
Po145 38 55	S Y C 区 S I - 03 No508	要	圓口盤 13.1	口縫部「く」の字形に屈曲し、ほぼ直立する複合口。口縫部内外面ヨコナデ。脇部ヘラミガキ。	胎土 燒成 色調 石英、長石を含む 良好 内外面淡褐色	
Po146 38 55	S Y C 区 S I - 03 No505	要		脇部「く」の字形に屈曲する複合口。口縫部内外面ヨコナデ。脇部ヘラミガキ。	胎土 燒成 色調 石英、長石を含む 良好 内外面褐褐色	
Po147 38	S Y C 区 S I - 03 No513	底部	復底盤 6.0	平底。	内外面ナデ。	胎土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内外面淡褐色
Po148 38	S Y C 区 S I - 03 No507	底部	底盤 5.8	平底。	内外面ナデ。脇部ヘラミガキ内面ナデ。	胎土 燒成 色調 黒雲母を少量、石英を含む 良好 内面淡褐色、外周褐色 底盤裏面あり

插表18 下山南通遺跡整穴住居跡弥生土器観察表⑤

## S I -13

遺物番号 標印番号 記入番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po149 39 55	S Y C 区 S I - 05 No453	盃	復口径 10.6	無底盃。口縁部に4条の凹線を施す。円孔あり。	外面部へラミガキ。内面部ヨコナデ。脇部細いハケ。	胎土 砂粒、石英を含む 焼成 良好 色調 内外面褐色

## S I -15

遺物番号 標印番号 記入番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po150 42 55	S Y C X S I - 02 No477 No482	盃		頭部上位に刻み目突起。その下位に波状突起。表面は平行線で凹線を交互に施す。口縁部、脇部以下次第に大型化。	内面部上位ヨコハケ。脇部上位にユビオザエが見られる。その後部下位タハケ。	胎土 石英、長石を含む 焼成 良好 色調 桃褐色 特徴 黒斑あり
Po151 42	S Y C X S I - 02 No461	盃	復口径 25.0	口縁部内側に面をもじり刻み目を施す。	内外面部ヨコナデ。	胎土 石英を含む 焼成 良好 色調 内外面褐色
Po152 42 55	S Y C X S I - 02 No456	盃	復口径 17.8	頭部は「く」の字状に屈曲し、端部は円錐形に突き出る。外面に1条の凹線を施す。	口縁部内外面部ヨコナデ。脇部外側タハケ。内面部ナデ。	胎土 長石を含む 焼成 良好 色調 内外面明褐色
Po153 42 55	S Y C X S I - 02 No465	盃	復口径 11.6	頭部は「く」の字状に屈曲し、底部には凹線を施す。	口縁部内外面部ヨコナデ。体部外側タハケ。内面部ヨコナデ。	胎土 長石を含む 焼成 良好 色調 内外面黑褐色
Po154 42	S Y C X S I - 02 No470 No477	盃	復口径 17.5 復底径 6.6	頭部が「く」の字状に屈曲する。底部はやや弧度を有する。外側に2条の凹線を施す。頭部中位に刺突を施す。平底。頭部は全体に薄い。	口縁部内外面部ヨコナデ。脇部内側タハケ。脇部外側タハケ。底部内側ナデ。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 内外面明褐色
Po155 42 55	S Y C X S I - 02 No462	高杯		筒状の脚部。外側に凹線を施す。その下部に四角形の透かし孔を施す。	外面部タハケ。内面部ナデ。	胎土 石英、長石を含む 焼成 良好 色調 内外面褐色 特徴 黑斑あり
Po156 42	S Y C X S I - 02 No454	底部	底径 7.4	平底。	外面部へラミガキ。底面ナデ。内面部ナデ。	胎土 石英を含む 焼成 良好 色調 内外面褐色
Po157 42	S Y C X S I - 02 No466	底部	底径 5.9	基部をもつ平底。	外面部へラミガキ。内面部ナデ。底面ナデ。	胎土 石英、長石を含む 焼成 良好 色調 内外面茶褐色、外侧面黒褐色
Po158 42	S Y C X S I - 02 No468	底部	復底径 6.1	平底。	外面部へラミガキ。内面部ナデ。底面ナデ。	胎土 石英を含む 焼成 良好 色調 内外面明褐色 特徴 一部黒斑あり
Po159 42	S Y C X S I - 02 No483	内部	復底径 5.6	半底。	外面部へラミガキ。内面部ナデ。	胎土 石英を含む 焼成 良好 色調 内外面深褐色 特徴 内外面に黒斑帯有
Po160 42	S Y C X S I - 02 No452 No459	底部	復底径 11.6	平底。	外面部へラミガキ。内面部ナデ。内面部離のため不明。	胎土 石英、長石を含む 焼成 良好 色調 内外面茶褐色

掲表19 下山南通遺跡堅穴住居跡跡生土器観察表⑥

## S B -12

遺物番号 標印番号 記入番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po161 54	S Y C X 2 F - P 8 No412	甌		肩の張らない胴型	外面部ヨコナデ後ハケメ。内面部ヨコナデ後タハケ。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 内外面褐色

掲表20 下山南通遺跡掘立柱建物跡跡生土器観察表

## S K - 01

遺物番号 採取番号	収上番号	器種	法 量 (cm)	形	態	手 法	備 考
Po162 57 56	S Y B区 SK-01 No773	甕	復口徑 13.0	頭部は「く」の字状に屈曲し、口縁部内外面暗ナゲ。腹部内外面に兔み目を施す。腹部中、クテハケ。			粘土 燒成 色調 胎土 砂粒を含む。 良好 内外面深褐色
Po163 57	S Y B区 SK-01 No772	底部	底径 7.2	平底。	外縁底部内面テラミガキ後ナゲ。内面ヘラケズリ後ナゲ。底面オサエナゲ。		粘土 燒成 色調 胎土 砂粒を多量含む。 良好 内外面深褐色 内外面一部裏斑有り。

## S K - 02

遺物番号 採取番号	収上番号	器種	法 量 (cm)	形	態	手 法	備 考
Po164 58 56	S Y B区 SK-02 No766	甕	復口徑 18.1	頭部は「く」の字状に屈曲し、口縁部内面は内傾して上下に拡張する。外縁は直文を施す。腹部には指揮頭痕帯を貼付する。	口縁部内外面暗ナゲ。腹部外側タテハケ。内面ヘラケズリ。		粘土 燒成 色調 胎土 砂粒含む 良好 内面深褐色。外面明褐色

## S K - 03

遺物番号 採取番号	収上番号	器種	法 量 (cm)	形	態	手 法	備 考
Po165 60 62	S Y B区 SK-03 No755. 756. 806	甕	復口徑 17.4 高さ32.6 底径 7.4	頭部は「く」の字状に屈曲し、口縁部内面はやや肥厚する。頭部内面に上位工具による圧痕を施す。中位に工具による圧痕を施す。下位に工具による圧痕を施す。腹部は頭がはらない。平底。	口縁部内外面ヨコナゲ。外縁頭部タテハケ。腹部ヨコハミガキ。内面頭部タテハケ。腹部上位ヨコハミガキ。下位ヘラケズリ後ナゲ。底部ユビタサ。		粘土 燒成 色調 胎土 石英、良石を含む。 良好 内面深褐色。外面暗茶褐色
Po166 60 56	S Y B区 SK-03 No805 807 819	甕	口径 19.6	頭部は「く」の字状に屈曲し、口縁部内面はややまみあげる。腹部は頭がはらない。平底。	口縁部内外面ヨコナゲ。外縁頭部タテハケメ。下位タテハケメ。内面頭部上位タテハケ。腹部ユビタサ。		粘土 燒成 色調 胎土 石英を含む。 良好 内面深褐色。外面暗茶褐色。
Po167 60	S Y B区 SK-03 No804	底部	底径 6.2	平底。器壁は薄い。	外縁タテハミガキ。内面上位ナゲ下位ヨコハミガキ。		粘土 燒成 色調 胎土 石英を含む。 不良 内面深灰褐色。外面淡褐色

## S K - 05

遺物番号 採取番号	収上番号	器種	法 量 (cm)	形	態	手 法	備 考
Po168 63 56	S Y B区 SK-05 No784	甕	口徑 17.6	二輪部が大きく外反し、上面に横い平行頭面をもつ。上面に羽状文を施す。腹部は兔み目文と平行文。兔み目文切妻を交互に施す。二輪部に斜格子文。腹部は指揮頭痕帶を施す。腹部は頭がはらない。平底。	外縁頭部ヨコタハケメ。下位ヨコハミガキ。		粘土 燒成 色調 胎土 石英を含む。 良好 内面深褐色。外面赤茶褐色。
Po169 63 56	S Y B区 SK-05 No786. 799	甕	口徑 12.2 最大直径 26.0 底径 7.2	頭部は丸かく外反する口縁部。頭部に兔み目を施す。腹部は兔み目文を施す。腹部は球形に變り出し最大径は中位にある。	外縁頭部、頭部タテハケメ。頭部ヨコハミガキ。内面ヨコハミガキ。頭部ヨコハミガキ。腹部ヨコハミガキ。腹部ヨコハミガキ。		粘土 燒成 色調 胎土 石英、長石を多量に含む。 不良 内面深褐色。外縁頭部色。
Po170 63	S Y B区 SK-05 No788. 789	甕	復口徑 30.0	「く」の字状に屈曲する口縁部。二輪部が角ぼり、T.刃による切り込みを施す。	外縁頭部、頭部タテハケメ。頭部ヨコハミガキ。内面ヨコハミガキ。腹部ヨコハミガキ。腹部ヨコハミガキ。頭部ヨコハミガキ。	F	粘土 燒成 色調 胎土 0.5~1mm程の石英を含む。 良好 内面不規則 外面深褐色
Po171 63 56	S Y B区 SK-05 No798	甕	復口徑 27.0	「く」の字状に屈曲する口縁部。二輪部が角ぼり、T.刃による切り込みを施す。	外縁頭部ヨコハミガキ。頭部タテハケメ。		粘土 燒成 色調 胎土 砂粒を含む。 良好 内面深褐色
Po172 63 56	S Y B区 SK-05 No799	甕	口徑 17.0	頭部は「く」の字状に屈曲し、頭部内面は内傾して上下に拡張する。腹部に斜格子文を施す。腹部に斜格子文を施す。	外縁頭部ナゲ。頭部タテハケメ。内面ヨコハミガキ。内面ヨコハミガキ。頭部タテハケメ。		粘土 燒成 色調 胎土 0.5~1mm程の石英、長石を含む。 良好 内面深褐色
Po173 63	S Y B区 SK-05 No769	甕	復口徑 19.4	「く」の字状に屈曲する口縁部。器壁やや肥厚し角ぼり。	口縁部内外面ヨコナゲ。頭部タテハケメ。		粘土 燒成 色調 胎土 0.5mm程の石英を含む。 良好 内面深褐色

擇表21 下山南通遺跡土壤称生地器観察表①

## SK-05

遺物番号 採取番号 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po174 63 56	S Y B 区 SK - 05 No.727, 787, 791	高杯	口径13.7	碗状に内側する外縁は水平に並び、端部に気泡目を残す。上面の相対する位置に2個の穿孔。	外面环面ココヘラミガキ。底部タグヘラミガキ。	粘土 焼成 色調 石英を含む。 良好 内面明褐色。外面淡褐色。
Po175 63 56	S Y B 区 SK - 05 No.787	底部	底径 7.0	平底。	外面タテヘラミガキ。内面ナゲ。	粘土 焼成 色調 石英を含む。 良好 内面淡褐色。外面淡褐色。
Po176 63	S Y B X SK - 05 No.788, 790	底部	底径 9.2	平底。隔壁は薄い。	外面タテヘラミガキ。底面ナゲ。 内面氧化によって鉄質不明。	粘土 焼成 色調 石英、長石を含む。 良好 内面淡褐色。外面淡褐色。

## SK-06、22

遺物番号 採取番号 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po177 64	S Y B 区 SK - 06, 22 No.823	腹	腹口径 19.5	外方に大きく膨らむ口縁。端部に気泡目を残す。	口縁部内外面ナゲ。	粘土 焼成 色調 石英を少量含む。 良好 内外面赤褐色
Po178 64	S Y B 区 SK - 06, 22 No.822	底部	復底径 3.6	不明瞭な平底。内面剥離が激しい。	内外面ナゲ。	粘土 焼成 色調 石英、石英含む 不良 内面淡褐色。外面褐色

## SK-07

遺物番号 採取番号 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po179 65 56	S Y B 区 SK - 07 No.814	腹	腹口径 17.2	腹部「く」の字状に開曲し、口縁端部は上下に並列する。外縁には口縁部に二つの凹文。腹部には折頂部直交窓を付ける。	口縁部内外面ナゲ。肩部外表面タグヘラミガキ。内面低いケメーリー。	粘土 焼成 色調 0.5~2mm程の石英含む 良好 内外面淡褐色~褐色
Po180 65 56	S Y B 区 SK - 07 No.808	腹	腹口径 15.6	腹部は「く」の字状に開曲し、口縁端部は上下に並列する。外縁には口縁部に二つの凹文。腹部には折頂部直交窓を付ける。	内外面ナゲ。	粘土 焼成 色調 長石、石英を多量含む 不良 内面赤褐色。外面褐色
Po181 65	S Y B 区 SK - 07 No.815	底部	復底径 6.0	薄手平底。	外縁ヘラミガキ。底面ナゲ。内面ハラケズリ放ヘラミガキ。底面オサエナ。	粘土 焼成 色調 石英を多量含む。 良好 内面褐色。外面褐色
Po182 65	S Y B 区 SK - 07 No.809	底部	復底径 8.2	下底の底部片。底部外縁より穿孔が見られる。	外縁ヘラミガキ。ナゲ。底面ナゲ。内面ナメハケ放ナゲ。底面にエビオサ。	粘土 焼成 色調 石英、長石を多量含む。 不良 内面赤褐色 底部外縁に一部焦斑あり

## SK-08

遺物番号 採取番号 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po183 66	S Y B 区 SK - 08 No.789	腹	腹口径 17.5	「く」の字状に開曲する口縁。端部はやや尖る。	口縁部内外面ナゲ。肩部外表面タグヘラミガキ。内面ナゲハケ放ナゲ。	粘土 焼成 色調 砂粒を含む。 良好 内面褐色。外面明褐色
Po184 66	S Y B 区 SK - 08 No.788	腹	腹口径 14.2	脚部の所持。口縁端部に丸をもつた切込み口縁。外縁は一束の比較及び端部に付ける。	口縁部内外面ナゲ。生ヘラミガキ。	粘土 焼成 色調 砂粒を含む。 良好 内面褐色。外面明褐色
Po185 66	S Y B 区 SK - 08 No.780	底部	復底径 6.5	脚付底部	脚台部内外面ナゲ。脚部外縁ヘラミガキ放ナゲ。内面ヘラミガキ。	粘土 焼成 色調 砂粒を含む。 良好 内面明褐色

挿表22 下山南通遺跡土壤弥生土器観察表(2)

## SK-09

遺物番号 種類 区分 同級番号	取上番号	器種	法 量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po186 67	S Y B 区 SK-09 No803	壺	腹口径 22.5	「く」の字状に屈曲する口縁。 外面に斜格子刻み目を施す。	内外面口部ナゲ。	胎土 砂粒を含む 燒成 良好 色調 内面赤褐色
Po187 67	S Y B 区 SK-09 No801	底部	復底径 10.0	平底	外面ヘラミガキ。底面ナゲ。内 面ヘラケズリ後ヘラミガキ底部 オサエナゲ。	胎土 石英を多量含む。 燒成 良好 色調 内面赤褐色。外側褐色

## SK-11

遺物番号 種類 区分 同級番号	取上番号	器種	法 量 (cm)	形 態	施 手 法	備 考
Po188 69	S Y B 区 SK-11 No887	底部	復底径 9.5	平底。	外面ヘラミガキ。内面ユビナゲ。	胎土 石英、長石を含む 焼成 良好 色調 内面赤褐色。外側明褐色 特徴 内面に模花物付着。

## SK-15

遺物番号 種類 区分 同級番号	取上番号	器種	法 量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po189 73	S Y B 区 SK-15 No888	高环		筒状の环部。口縁部は周曲し水 平にのびる。	11縫部ヨコナゲ。环部外側タチ ハケメ後ヘラミガキ。内面ヨコ ヘラミガキ。	胎土 石英を多量含む 焼成 良好 色調 内面淡褐色。赤褐色 特徴 一部スリット

## SK-16

遺物番号 種類 区分 同級番号	取上番号	器種	法 量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po190 74 56	S Y B 区 SK-87 No1234	壺	口径15.0	指部はやや細かく、口縁部は外 反し端部に丸い窓をもつ。外縁 に刻み目を施す。	外側沿削以下クタハケメ。口縁 部内外面ヨコナゲ。内面端部以 下ナゲ。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 内面赤褐色。外側暗褐色
Po191 74 57	S Y B 区 SK-87 No1237	壺	反口径 14.0	「く」の字状に屈曲する口縁。 端部は丸く、刻み目を施す。窓 はない。	口縫部内面ヨコナゲ。外面タ ハケメ。内面ナゲ。	胎土 石英を含む 焼成 良好 色調 内面赤褐色。外側暗褐色
Po192 74 57	S Y B 区 SK-87 No1233 1235 1236 1239	壺	底径 5.6	口縁部欠損。腹部は肩がはくな り、底部は平底で穿孔あり。	頂部内外面ヨコナゲ。外側肩部 タハケメ。腹部以下ヘラケメ リ、背部ナゲ。一部ヨコナゲ。	胎土 石英、長石を含む やや不良 焼成 色調 内面赤褐色。外側暗褐色
Po193 74	S Y B 区 SK-87 No1239	底部	復底径 11.5	かなり大型の平底	外側ハケメ後タチヘラミガキ。 内面ヘラケズリ一部ヨコハ ケメ。	胎土 石英を含む 焼成 良好 色調 内面淡褐色。外側灰褐色

## SK-17

遺物番号 種類 区分 同級番号	取上番号	器種	法 量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po194 75	S K B 区 SK-88 No1106	壺	腹口径 21.1	口縁部破片。端部は膨張し、内 面粗粒の面をもつ。頸部に斜格子 文。11縫下部刻み目突起。	内面ナゲ後ヨコヘラミガキ。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 内面赤褐色。外側灰褐色
Po195 75	S K B 区 SK-88 No1106	壺	腹口径 21.3	大きめ外壁する口縁部。端部は膨 張し内壁する平底窓をもつ。 窓間に波状文。口縁外側に刻み 目突起。下位に平行線文を施す。	内面ナゲ	胎土 石英、長石を含む 焼成 良好 色調 内面茶褐色。外側暗褐色
Po196 75 57	S K B 区 SK-88 No1106 1104	壺	腹口径 30.0	大きめ外壁する口縁部。端部は膨 張し内壁する平底窓をもつ。 窓間に波状文。指輪压痕突 起を施す。窓壁は厚い。	外側タハケメ。内面ヨコヘラ ミガキ。	胎土 石英を含む 焼成 良好 色調 内面明褐色。外側茶褐色
Po197 76 57	S K B 区 SK-88 No1245	壺	腹口径 19.5	「く」の字状に屈曲する口縁。 端部は漸かにつまみあげる。	11縫内外面ヨコナゲ。外側脇部 タハケメ。内面軋部ナゲ。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 内面淡褐色。外側明褐色

捕表23 下山南通遺跡土埴彌生土器観察表(3)

## S K - 17

遺物番号 種類 区分番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po198 76 57	S Y B IX SK - 88 No126	甕	復口径 28.5	「く」の字状に屈曲する口縁。端部は面をもち刻み目を施す。 底部に滑溜化粧文。	口縁部内外面ヨコナガ。外面側 部タテハケメ。内面側部ヨコヘ ラミガキ。	胎土 鉄成 色調 良好 内正面褐色。外圓淡褐色
Po199 76	S Y B IX SK - 88 No126	甕	復口径 17.8	「く」の字状に屈曲する口縁。	口縁部内外面ヨコナガ。外面側 部ハケメ。内面ナア。	胎土 鉄成 色調 良好 内正面褐色
Po200 76 57 1230, 1231, 1247, 1248	S Y B IX SK - 88 No1230, No1231, No1247, No1248	甕	口縁径32.5	「く」の字状に屈曲する口縁。 器頸に滑溜化粧文、側部に 横彫工具による圧痕を2段に 施す。	口縁部内外面ヨコナガ。外面側 部シラタケハケメ。下部タテヘ ラミガキ。内面側部シラタケズリ 後段ハケメ。	胎土 鉄成 色調 良好 内正面褐色。外圓食黃色
Po201 76	S Y B IX SK - 88 No1245	高杯	復口径 22.0	瓶状の形態。口縁端部は端面 と内縫する面をもち、端面に斜絞 文字を施す。口縁部に押耳あり。	外面側部タテハケメ後タテヘラ ミガキ。内面ヨコヘラミガキ。	胎土 鉄成 色調 良好 内正面褐色
Po202 76	S Y B IX SK - 88 No1247	底部	底径 6.4	平底。底部に穿孔。	外面タテヘラミガキ。内面タテ ヘラケズリ。	胎土 鉄成 色調 良好 内正面褐色。外圓明褐色
Po203 76	S Y B IX SK - 88 No1246, No1244	底部	復口径 9.2	空窓。	外面タテヘラミガキ。底面トド 内凹ヘラケズリ。	胎土 鉄成 色調 良好 内正面褐色。外圓淡褐色
Po204 76	S Y B IX SK - 88 No1232	腹窓部	底径 6.4	大型の窓の腹部から底部。底部 は平底。	外側側部ハケメ後ヨコヘラミガ キ。内側側部タテラミガキ。内面 ハケメ後不規則なヘラミガキ。 底面ヨビオサ。	胎土 鉄成 色調 良好 内正面褐色。外圓黃褐色。

## S K - 37

遺物番号 種類 区分番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po205 94	S Y B IX SK - 37 No839	甕	復口径 12.2	「く」の字状に屈曲する口縁部。 側部はあまり張らない。	内外面タテ。	胎土 鉄成 色調 良好 内正面褐色
Po206 94	S Y B IX SK - 37 No839	甕	復口径 14.4	「く」の字状に屈曲する口縁部。 側部はあまり張らない。	11縁部内外面タテ。窓面内外面 一筋タテハケメ。	胎土 鉄成 色調 良好 内正面褐色

## S K - 38

遺物番号 種類 区分番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po207 97 57	S Y B IX SK - 38 No868	甕	口縁径 20.0	口縁部は大きく外反する。端部 は肥厚し面をもち、斜格子文、 円形突文を施す。窓部に刻 み目。下部には3本の刻み目突 文。窓部に滑溜化粧文を施す。 側部は端面をめぐらす。	外側11縁部ナダ。多部タテハ ケメ。内面11縁部、窓部ヨコハ ケメ後タテ。窓部下段11縁部後ハ ケメ。窓部から側部ナダハ ケメ。	胎土 鉄成 色調 良好 内正面褐色。外圓淡褐色
Po208 97 57	S Y B IX SK - 38 No869	甕	復口径 15.3	窓部から「く」の字状に屈曲す る。11縫施をつまみあげる。 側部は張らない。	窓部内外面ナダ。窓面外側タテ ハケメ。内面ナダメハケメ後ナ ダ。	胎土 鉄成 色調 良好 内正面褐色。外圓食黃色

## S K - 39

遺物番号 種類 区分番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po209 99 57	S Y B IX SK - 39 No870, 873, 744	甕	二口径21.3	口縁部は大きく外反し、肥厚した 平窓部に斜格子文、側部に刻 み目。下部には3本の刻み目突 文。窓部滑溜化粧文を施す。	外面タテハケメの後窓部ナダ。 内面ナダメハケメ後タテ。	胎土 鉄成 色調 良好 内正面褐色
Po210 99	S Y B IX SK - 39 No867	底部	復口径 7.9	下底。	内外面ヘラミガキ。窓面不堅ナ ダ。	胎土 鉄成 色調 良好 内正面褐色

摺表24 下山南通遺跡土壤弥生土器観察表④

## S K - 39

遺物番号 測定番号 図版番号	取上番号	器種	法 (cm)	形	態	手	法	備	考
Po211 99	S Y B 区 SK-39 No.869	壺胴部	復原径 9.5	平底。		外面ヨコヘラミガキ後テハラ ミガキ。底面不整ナダ。内面剥 離のため不明。	粘土 焼成 色調	白英を多量含む。 不良 内外面淡褐色～褐色	
Po212 99	S Y B 区 SK-39 No.869	底部	復原径 8.2	平底。		外面ヘラミガキ。内面剥離のた め不明。	粘土 焼成 色調	大粒の石英を多量に含 む 不良 外表面褐色	

## S K - 42

遺物番号 測定番号 図版番号	取上番号	器種	法 (cm)	形	態	手	法	備	考
Po213 103 57	S Y B 区 SK-42 No.892	壺	口径 18.6 肩部最大 径 28.1 底径 7.8 高さ 34.8 断面 34.8	平底から外傾してたちあがり、 肩部最大径は中位で崩が張る。 筋状の頸部から口縁部は大き く外反する。内部に櫛描波状文。 細部はやや角があり。櫛描波状文 を施す。頸部に貼付穴帯。肩部 中位に刺み目を施す。		外面胸部中央ヨコヘラミガキ。 他はタテヘラミガキ。口縁部内 外面ヨコナダ。肩部内面ハケメ 一部エビオサ。	粘土 焼成 色調	石英を少量含む。 良好 内面褐色。外表面褐色。	
Po214 103	S Y B 区 SK-42 No.891	壺	復原径 17.4	口縁部は大きく外反し、肩部は 厚壁で半球面をもつ。外面上に 斜格子文。内面に櫛描波状文。		内外面ヨコナダ。	粘土 焼成 色調	石英を含む。 良好 内面茶褐色。外表面褐色	
Po215 103 57	S Y B 区 SK-42 No.891	壺	底径 8.2 肩部最大 径 24.0	平底から外傾してたちあがり。 肩部は張りがある。胸部最大径 は中位。肩部には数点の櫛描半 円形、櫛描波状文を施す。		外面ヘラミガキ。内面タナハケ メ。肩部に貼付穴帯。	粘土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好 内面褐色。外表面褐色	

## S K - 43

遺物番号 測定番号 図版番号	取上番号	器種	法 (cm)	形	態	手	法	備	考
Po216 104	S Y B 区 SK-43 No.889	壺	復原径 16.0	頸部は「く」の字状に屈曲し、 口縁部に刺み目を施す。		内外面ヨコナダ。	粘土 焼成 色調	石英を含む。 良好 内外面赤褐色	
Po217 104 57	S Y B 区 SK-43 No.893	壺	復原径 16.0	頸部は「く」の字状に屈曲し、 口縁部に刺み目。肩部は張る ない。		内外面ヨコナダ。肩部外 面ヨコハケメ。肩部内面ハケメ 後ナダ。	粘土 焼成 色調	石英を含む。 良好 内面赤褐色	
Po218 104	S Y B 区 SK-43 No.893	底部	復原径 7.5	平底。		底部外面タナハラミガキ。内面 ナダ。底面ナダ。	粘土 焼成 色調	石英、長石を多量含む。 良好 内面褐色	

## S K - 44

遺物番号 測定番号 図版番号	取上番号	器種	法 (cm)	形	態	手	法	備	考
Po219 105 57	S Y B 区 SK-89 No.1166	壺	復原径 14.0	頸部は「く」の字状に屈曲し、 口縁部は上方につまみあげる 外面上に工具による刺み目を施す		外面肩部ナダ。口縁部内外面ヨ コナダ。肩部内面ハケメ。	粘土 焼成 色調	石英を含む。 良好 内外面褐色	

## S K - 45

遺物番号 測定番号 図版番号	取上番号	器種	法 (cm)	形	態	手	法	備	考
Po220 107	S Y B 区 SK-90 No.1197	壺		肩部から小さくすぼまる施部。 外面上に7条の櫛描平行線文の間 に羽状文を交互に施す。		外側タケハケメ。内面ハケメ後 ナダ。上位にしごり日。	粘土 焼成 色調	石英を含む 良好 内面淡褐色～褐色。外表面褐色	
Po221 107	S Y B 区 SK-90 No.1197	壺	復原径 16.0	「く」の字状に屈曲する口縁。 施部に貼付し面をもつ。		口縫部内外面ヨコナダ。	粘土 焼成 色調	砂粒を含む 良好 内面褐色	
Po222 107 57	S Y B 区 SK-90 No.1198	壺坏	口径	碗状の外縁。口縫端部は外方に 膨張し、上面に斜格子文。円形 浮文を施す。施部に刺み目。		环部内外面ヨコヘラミガキ。	粘土 焼成 色調	石英を含む 良好 内面褐色	

摺表25 下山南通遺跡土塙捺模生土器観察表(5)

## SK-45

遺物番号 採取場所 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形	態	手	法	備	考
Po223 107	S Y B 区 S K - 90 No1197	底部	復底径 6.1	平底。		外圓細かいタテハケメ後ヘラミ ガキ。内面ナゲ。		粘土 石英を含む 良好 色調	良好 色調灰褐色。外側暗褐色
Po224 107	S Y B 区 S K - 90 No1197	底部	復底径 6.5	平底。		外側タテヘラミガキ。底面ナゲ 内面ヘラケズ。		粘土 石英を含む。 良好 色調	良好 内外面暗茶褐色

## SK-47

遺物番号 採取場所 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形	態	手	法	備	考
Po225 109 57	S Y B 区 S K - 47 No840	底	復口径 13.4	「く」の字状に屈曲する口縁。 内側底部には刷み目。肩部に擦 状工具による圧痕文を施す。		口縁部内外面ヨコナゲ。肩部外 面タテハケメ。内面ナナメハケ メ。		粘土 石英を多量。骨粉を少量 含む。 良好 色調	良好 色調灰褐色。内面淡褐色

## SK-48

遺物番号 採取場所 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形	態	手	法	備	考
Po226 110 57	S Y B 区 S K - 48 No864	底	復口径 19.0	「く」の字状に屈曲する口縁。 底部は張らない。		リ肩部内外面ナゲ。肩部外側タ テハケメ。内面ナゲ後ヘラミバ キ一部ハケメが残る。		粘土 石英、骨粉少量含む 良好 色調	良好、骨粉少量含む 良好 色調

## SK-49

遺物番号 採取場所 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形	態	手	法	備	考
Po227 111 62	S Y B 区 S K - 49 No896	訪穀車	轆轤径 5.1 軸径 4.7 孔径	強化七輪転用の訪穀車。穿孔あ り。		外側タテハケメ。内面ヘラミガ キ。内面底部打ち欠き型孔。		粘土 石英を多量に含む 良好 色調	良好、骨粉少量含む 良好 色調

## SK-50

遺物番号 採取場所 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形	態	手	法	備	考
Po228 112 58	S Y B 区 S K - 50 No880	底	復口径 19.6	外張する口縁。縁部は下方に 膨張し斜格子文。口縁上端に削 み目。縁部に二本の刻み目を有 し内側斜格子文及び刻文文を施す。		外側タテハケメヨコナゲ。内面 ヘラミガキ。頭部ユビオサエ。		粘土 石英を含む 良好 色調	良好 色調 内面淡褐色。外側淡灰褐色
Po229 112	S Y B 区 S K - 50 No841	底部	復底径 12.0	平底。		外側底部ヘラミガキ。底面ナゲ。 内面ヘラミガキ。		粘土 石英を含む。 良好 色調	良好 内外面黑褐色

## SK-52

遺物番号 採取場所 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形	態	手	法	備	考
Po230 115 58	S Y B 区 S K - 52 No890	底	復口径 26.2	外張する口縁。口縁部は芯張 し膨張斜状文。外側に削み目を有 し4本以上めくらす。		外側面ヨコナゲ。		粘土 石英を含む 良好 色調	良好 色調 内外面黑褐色
Po231 115	S Y B 区 S K - 52 No884	底部	復底径 16.5	平底。		外側ヘラミガキ。底面ナゲ。内 面ナゲ。		粘土 石英を含む 良好 色調	良好 内外面淡灰褐色
Po232 115	S Y B 区 S K - 52 No890	底部	復底径 4.3	平底。		外側ヘラミガキ後ナゲ。内面ナ ゲ。		粘土 石英を含む 良好 色調	良好 内外面黑褐色。外側淡灰褐 色。

摺表26 下山南通遺跡土器類索表⑥

## S K - 56

遺物番号 測定番号 回収場所	取上番号	器種	法 量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po233 129 58	S Y B 区 S K - 56 No.943	甕	復口径 29.8	口縁部は大きく外反し口縁端部 は上に広張する。外面に刻み 目を施す。	外面部細かいタナハケメ。内 面ヨコヘラミガキ。	粘土 灰好 焼成 色調 石英を含む 良好 内面淡黄褐色。外面赤茶 褐色
Po234 129 58	S Y B 区 S K - 56 No.943	甕	復口径 17.2	底部は「く」の字状を呈し、口 縁端部は上方に斜張する。底部 に削出頭道をめぐらし、側 部はやや張り出す。	口縁内外面ヨコナガ。肩部外側 タナハケメ。内面肩部ヨコヘラ ミガキ。胸部ヨコハケメ。	粘土 灰好 焼成 色調 石英、長石を含む 良好 内面淡黄褐色。外面赤茶 褐色
Po235 129	S Y B 区 S K - 56 No.943	底部	復底径 7.8	平底。器壁はやや厚い。	外因タナハラミガキ。内面風化 によって調整不明。	粘土 灰好 焼成 色調 石英を多量に含む 良好 内面淡黄褐色。外面赤茶 褐色
Po236 129	S Y B 区 S K - 56 No.950	底部	復底径 8.0	平底。	外因タナハラミガキ。内面剥離 のため調整不明。	粘土 灰好 焼成 色調 石英を含む 良好 内面淡黄褐色。外面赤茶 褐色
Po237 129	S Y B 区 S K - 56 No.950	底部	復底径 6.0	平底。	外因タナハラミガキ。内面ヘラ ケタナ後ナガメ。	粘土 灰好 焼成 色調 石英、長石を含む 良好 内面淡黄褐色
Po238 129 62	S Y B 区 S K - 56 No.943	砂輪車	長径 短径 丸径	生土器転用の砂輪車。	外因ヘラミガキ。内面部根付 で大き整形。	粘土 灰好 焼成 色調 石英を含む 良好 内面褐色。外面暗褐色

## S K - 57

遺物番号 測定番号 回収場所	取上番号	器種	法 量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po239 122 58	S Y B 区 S K - 57 No.1075	甕	復口径 20.8	大きく外反する口縁。端部は膨 張し圓を上す。内面に3条の擦 痕波状文。端部内側に斜格子文 跡跡。2本の點打突痕。肩部に 2条の擦痕波状文。横幅平行準 文と斜格子文を残す。	端部外面ヘラミガキ後ヨコナガ。 内面兜部ヨコナガ。胸部ナガ。 底部内側ヨコナガ。	粘土 灰好 焼成 色調 石英、長石を含む 良好 内面淡黄褐色。一部赤色。 スヌ付裏。
Po240 122 58	S Y B 区 S K - 57 No.1076	甕	復口径 21.7	大きく外反する口縁。端部は上 方に膨張し両端を持つ。内面に刻 波状文。円形浮文、斜格子文。等 斜斜格子文。底面目を入れる。 端部に2本の點打突痕。	上部外面ハケ一部ヨコナガ。 底部内側ヨコナガ。下部内側 ヨコハケメ。	粘土 灰好 焼成 色調 石英、長石を含む 良好 内面淡黄褐色
Po241 122 58	S Y B 区 S K - 57 No.1070	甕	復口径 18.8	口縁部は大きくくぼれる。端部 はやや肥厚して下沿部を立ち羽 状文を施す。	口縁部内外面ヨコナガ。頭部外 面タナハケメ。内面剥離した 不規。	粘土 灰好 焼成 色調 砂粒、石英を多量に含む 良好 内面淡黄褐色
Po242 122 58	S Y B 区 S K - 57 No.1057, 904, 907, 940, 1072, 1077, 1074	甕	復口径 18.7	口縁部は大きくくぼし端的に斜 面。脇の虫食い跡が2つある。 胸部上位に刻文文。	口縁部ヨコナガ。脇面一開面 外見ナガハケ。内面油部ナガ後 ヘラミガキ。胸部ナガ。	粘土 灰好 焼成 色調 石英、長石を含む 良好 内面淡黄褐色。外面褐色 口縁端部黒斑あり。
Po243 122 58	S Y B 区 S K - 57 No.917	甕		窓の頸部。上位に刻み凸唇 が3本。	外因タナハケメ後ヨコナガ。内 面ヘラミガキ。	粘土 灰好 焼成 色調 石英を多量含む。 良好 内面暗灰色。外面淡黄褐色
Po244 122	S Y B 区 S K - 57 No.954	甕	復口径 18.2	外反する端部は上位に刻み凸唇。 大きく外反する口縁部がつぶ く。	外因内外面ヨコナガ。頭部内 外面タナハケメ後ヨコナガ。下位不堅 ナガ。	粘土 灰好 焼成 色調 微砂粒を含む。 良好 内面淡黄褐色
Po245 122 58	S Y B 区 S K - 57 No.954	甕	復口径 18.2	走形は「く」の字状に屈曲し口 縁端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナガ。頭部内 外面タナハケメ後ナガ。	粘土 灰好 焼成 色調 微砂粒を含む。 良好 内面淡黄褐色
Po246 122	S Y B 区 S K - 57 No.056	甕	復口径 18.4	折りのない肩に「く」の字状に 屈曲する颈部がつぶ。口縁端 部は彫かにつまみあげる。	頭部内外面ヨコナガ。頭部内 外面ヨコハケメ後ナガ。	粘土 灰好 焼成 色調 微砂粒を含む。 良好 内面淡黄褐色。 底底あり。
Po247 122 58	S Y B 区 S K - 57 No.954	甕	復口径 29.4	「く」の字状に屈曲する颈部に 彫みの凸唇がつぶ。端部は彫 かにつまみあげる。	頭部内外面ヨコナガ。頭部内 外面ヨコハケメ後ナガ。内面風化 のため調整不明。	粘土 灰好 焼成 色調 微砂粒を含む。 良好 内面暗褐色。
Po248 122 58	S Y B 区 S K - 57 No.958	甕	復口径 29.4	二槽側部は腰を埋り、外側に削 出。胸部は下位に「く」字状に削 曲し、底部を填充せらる。胸 部は彫らない。	内外面ヨコナガ。頭部内 外面ヨコハケメ。内面ナガ後ヘラ ミガキ。	粘土 灰好 焼成 色調 微砂粒を含む。 良好 内面暗褐色

押表27 下山南通遺跡土壙弥生土器觀察表⑦

## SK-57

遺物番号 採取場所 回収番号	取上番号	形種	法量 (cm)	形態	手法	備考
Po249 122 58	S Y B 区 SK-57 No.908, No.909	甕	復口甕 17.2	口縁面は内傾し、上方に軽度する。外側に擦状工具による圧痕文。頭部指輪状痕突起。	口縁部内外面ヨコナナ。肩部内外面タテハケ後ナナ。外側一部ヘラミガキ。	粘土 良好 色調 内外面黄色
Po250 122 58	S Y B 区 SK-57 No.917 1077, 903	壺	底径11.2	壺状の壺部。「ノ」字形に開く脚部。壺端部は外反し、面をもつ。	脚部外側タテハラミガキ。内面ほり抜カナ。脚部内外面ヨコナナ。壺部内面円盤充填。ハケメ後ヘラミガキ。	粘土 石英、長石を含む 良好 色調 内外面青褐色
Po251 123	S Y B 区 SK-57 No.903	底部	復底径 9.0	平底。	外縁ヘラミガキ、内面風化のため窪凹不明。底面ナナ。	粘土 石英、長石を含む やや不良 色調 内面灰白色。外側淡黃白色。底面に黒斑。
Po252 123	S Y B 区 SK-57 No.908	底部	底径 11.8	平底。	外縁ヘラミガキ。底面付近ヘラミガキ後ヨコナナ。底面ナナ。内面剥離のため調整不明。	粘土 良好 色調 内外面青褐色 神微
Po253 123	S Y B 区 SK-57 No.905	底部	復底径 6.3	平底。	外縁ヘラミガキ。内面ユビオサエ、ナナ。	砂粒を含む 粘土 良好 色調 内面青褐色。外側切削褐色。黑斑あり。
Po254 123	S Y B 区 SK-57 No.958	底部	復底径 9.2	平底。	外縁ヘラミガキ後ナナ。内面ヘラミガキ後不整ナナ。底面ナナ。	粘土 良好 色調 内面青褐色 神微
Po255 123	S Y B 区 SK-57 No.940	底部	復底径 7.2	平底。	外縁ヘラミガキ後ナナ。内面ユビオサエ、ナナ。底面ナナ。	粘土 良好 色調 内面黑色。外側淡黃褐色 神微
Po256 123	S Y B 区 SK-57 No.1056	底部	底径 5.4	平底。	外縁ヘラミガキ後ヨコナナ。内面ヘラミガキ後ナナ。底面ナナ。内面ヨビオサエナナ。	粘土 良好 色調 内面青褐色 神微
Po257 123	S Y B 区 SK-57 No.919, 923	底部	復底径 9.5	平底。	底部へ瘤部外側ヘラミガキ。底面外側ヨコナナ。内面ユビオサエ、ナナ。	粘土 良好 色調 石英を含む。 内面青褐色。外側褐色

## SK-58

遺物番号 採取場所 回収番号	取上番号	形種	法量 (cm)	形態	手法	備考
Po258 124 59	S Y B 区 SK-58 No.915	甕	復底径 19.8	甕から内面気泡中にちあがる大崩頭部。口縁部欠損。脚部中央にE字紋。	外縁脚部上位タラハメ。下位タラハメ後ヘラミガキ。底面E字紋。内面脚部ナナ。	粘土 良好 色調 内面灰褐色。外側淡黃褐色 神微

## SK-62、72

遺物番号 採取場所 回収番号	取上番号	形種	法量 (cm)	形態	手法	備考
Po259 127 60	S Y B 区 SK-72, 92 No.1225	甕	復口甕 22.2	大きさ附く口縁。口縁端部は拡張し、2条の凹溝の上に2段目、1段目内面に斜格子文を施す。よみ間に内から外へ厚み、半減文を施す。	口縁部内外面ヨコナナ。	粘土 良好 色調 内面灰褐色一部淡褐色。外側淡褐色
Po260 127 39	S Y B 区 SK-72, 92 No.1095, 1229, 711	甕	口径20.6	大きさ附く口縁部。口縁端部は拡張し、2条の凹溝の上に2段目、1段目内面に斜格子文による凹凸文をめぐらす。	外縁口縁部ヨコナナ。瓶部外側タテハケ後ナナ。内面剥離が苦しいため不明。	粘土 良好 色調 内面淡褐色
Po261 127 59	S Y B 区 SK-72, 92 No.1223~ 1225 1227, 1207	甕	復底径 30.4	瓶部はやや膨脹する。脚部は球形で大きく盛り出し、最大径はほぼ中位にある。瓶部には復底部と底部に脚部の跡付。口縫、底部には横筋。	外縁脚部上位タラハメ後ナナ。脚部中位カットナナ。脚部内面ヘラミガキ。瓶部内面ハラミガキ。	粘土 良好 色調 内面淡褐色 脚部黒褐色
Po262 127 60	S K - 72, 92 No.143, 1129, 1151, 1141, 1147	甕	口径20.7	大きさ外反する口縁部、口縫部を斜めに面をもつ。面には墨書き波状文、瓶部には刻み目。本の前み口突帯、瓶部には横筋平行線文、波状文を交叉にめぐらす。	外縁口縫部ナナ、瓶部タテハメ、内面: 瓶部ヘラミガキ後ナナ。底部ヘラミガキ。	粘土 石英を少第、砂粒を含む 良好 色調 内面赤褐色

挿表28 下山南通遺跡土壤弥生地器観察表(8)

## SK-62、72

遺物番号 採取番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 横	手 法	備 考
Po263 127 60	S Y B 区 S K - 72. No1094 No1067	甌	復口径 20.5	大きく述反する口縁部。口縁部に凹をもつ。面には斜格子文が刻まれる。口縁外周に5本の筋目付く。筋目には斜筋平行線文。波状文を交互にめぐらす。	外周口縁部ナデ。頸部タテハケメ。内周口縁部ナデ。頸部ヘラミガキ。	胎土 焼成 色調 石英を含む 良好 内面暗赤褐色。外面赤褐色
Po264 127 60	S Y B 区 S K - 72. 92. No1147, 1151, 1221, 1148, 1222, 1225, 1227, 1391	甌	復口径 28.3 復口径 32.9	腹部は「く」の字形に屈曲する口縁。口縁部をつまみあげ、外周に筋目を施す。	口縁部内外面ヨコナナ。外周腹部上位タテハケメ。下位ヘラミガキ。内周腹部上位ナメハケメ。下位ナメハケメ後ナデ。	胎土 焼成 色調 砂粒を含む 良好 内外面淡褐色
Po265 127 60	S Y B 区 S K - 72. 92. No1150	甌	復口径 24.4 34.9	「く」の字形に屈曲する口縁。口縁部をつまみあげ、外周に筋目を施す。	口縁部内外面ナデ。頸部外面タテハケメ。内面ナメハケメ。	胎土 焼成 色調 石英を少含む 良好 内外面淡褐色
Po266 128	S Y B 区 S K - 72. 92. No1137, 1144, 1095	甌	II型17.3 復口径 19.8 腹高29.3 底径 5.7	「く」の字形に屈曲する口縁。口縁部は肥厚し筋目を施す。腹高はほとんどとんどあらない。腹部中位に2条の筋筋文をめぐらす。半底。	内外口縁部ヨコナナ。頸部上位タテハケメ。下位タテヘラミガキ。内周腹部ヘラミガキ。腹部ナメハケメ下位タテハケメ後ナデ。	胎土 焼成 色調 石英、長石を少量含む 良好 内面淡褐色。外面淡褐色
Po267 128	S Y B 区 S K - 72. No1095	甌	復口径 21.2	「く」の字形に屈曲する口縁。口縁部に筋目を施す。	口縁部内外面ナデ。外周腹部タテハケメ。内面ナメハケメ。	胎土 焼成 色調 石英を含む。 良好 内面赤褐色。外面赤褐色
Po268 128 60	S Y B 区 S K - 72. 92. No1142	高环	復口径 21.7	ゆるやかに内凹する深い环。口縁部は肥厚して平滑面をもつ。口縁部に筋筋文を施す。口縁部に筋筋文を施す。口縁部に筋筋文を施す。口縁部に筋筋文を施す。	II型内部内外面ヨコナナ。环部外側ナメハケメ後ヘラミガキ。内面不整ハケメ後ヘラミガキ。	胎土 焼成 色調 石英を少含む 良好 内面暗褐色。外周暗褐色 环部外周黒斑あり
Po269 128	S Y B 区 S K - 72. 92. No1222	高环	高环深部「へ」の字形に開く脚	外周内面タテハケ後ナデ。下位ヘラミガキ。内面しばり。ナデ。	胎土 焼成 色調 石英、長石を少含む 良好 内面淡褐色	
Po270 128	S Y B 区 S K - 72. 92. No1269	底部	底径 6.1	平面	外周ヘラミガキ。底ナデ	胎土 焼成 色調 石英、長石を少含む 良好 内面暗褐色。外周暗褐色
Po271 128	S Y B 区 S K - 72. 92. No1209	底部	底径 5.2	台付の底部	外周タテハケ後ナデ。頸部強いナデ。内面ナデ。	胎土 焼成 色調 砂粒、長石を少含む 良好 内面淡褐色
Po272 128 62	S Y B 区 S K - 72. No1095	纺錘車	長径 4.3 短径 4.0 孔径 0.4	鉛牛土器軸用。	表面ヘラミガキ。矮次痕	胎土 焼成 色調 微砂粒を含む。 良好 内面淡褐色。外周淡褐色

## SK-63

遺物番号 採取番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 横	手 法	備 考
Po273 129	S Y B 区 S K - 63 No949	甌	復口径 18.0	外反する口縁。腹部をつまみあげ。内面に2条の筋筋文を施す。底部には筋筋文が付く。	外周口縁部ヨコナナ。	胎土 焼成 色調 0.5mm程の石英を含む。 良好 内外面淡褐色
Po274 129	S Y B 区 S K - 63 No948	底部	底径 7.5	平面。	外周タテハミガキ。底ナデ。内面風化のため調整小窓。底部にスビオサ。	胎土 焼成 色調 石英を含む。 良好 内面淡褐色

## SK-64

遺物番号 採取番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 横	手 法	備 考
Po275 131 59	S Y B 区 S K - 64 No1081, 1082, 1088, 1089	甌	複刻紋大 底径 28.6 腹高 7.8	平底から内凹部にたちあがり。口縁部は肥厚しやや上位にある。底部は縦に縦筋文を施す。腹部の上位に圧迫文を施す。	外周タテハケメ後ヨコヘラミガキ。下部タテヘラミガキ。内面ヨコナナ。底部には2条の筋筋文を施す。	胎土 焼成 色調 石英を含む。 良好 内面暗灰褐色。外周明茶褐色
Po276 131	S Y B 区 S K - 64 No1082	高环	復口径 21.2	内凹する浅めの环。口縁部は肥厚し平底な形をもつ。上部に斜格子文。下端部に筋筋文を施す。	外周环部ハケメ後タテヘラミガキ。内面ナデ後ヨコヘラミガキ。	胎土 焼成 色調 石英を含む。 良好 内面淡褐色

表29 下山南遺跡土壙弥生土器観察表⑨

## SK-64

遺物番号 採取場所 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po277 131	S Y B 区 SK-64 No1082	底部	復底径 8.0	平底。器壁は厚い。	外面部テハラミガキ。内面タテ ハケメ、底部にユビオサエ。	粘土 燒成 色調 石英を多量に含む やや不良 内外面暗茶褐色
Po278 131	S Y B 区 SK-64 No1082	底部	復底径 10.0	平底。	外面部テハラミガキ。内面タテ ハケメ、底部にユビオサエ。	粘土 燒成 色調 石英を含む 長石 内外面明茶褐色

## SK-65

遺物番号 採取場所 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po279 132	S Y B 区 SK-65 No989	施	復口径 13.8	「く」の字状に屈曲する口縫。 内部は張らない。	口縫部内外面ヨコナデ。外面部 タテハケメ、内面脣部ユビオ サエ。底部ナナヘラミガキ。	粘土 燒成 色調 石英を含む 良好 内外面暗褐色

## SK-66

遺物番号 採取場所 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po280 134 59	S Y B 区 SK-66 No685, 591, 591, 593, 595, 599, 601, 603, 603, 607, 609	煮	口縫径 22.0 底径 11.2 高さ 52.7	口縫部は人字型外反し。端部は鉛 蓋する。口縫外縫に 4 本の割込み 有る。口縫部をめぐらす。腹部の最大 径は中位にあり 2 本に直角腹文を 有する。平底。	外面部、脣部タテハラミガキ。 側縫部ヨコハラミガキ。下位タテ ハケメ。脣部下位ヨコハラミガキ。 肩部以下不整ハケメ。	粘土 燒成 色調 石英を含む 良好 内外面明茶褐色
Po281 134 59	S Y B 区 SK-66 No972	煮		「く」の字状に開曲する口縫。 上端部はやわらみ出る。脣は 張らず、なだらかな胸部に続く。	口縫部内外面ヨコナデ。脣部外 面タテハケメ。脣部下位ヨコハ ラミガキ。内面脇部不整ハケメ。	粘土 燒成 色調 石英を含む 不良 内外面暗褐色
Po282 134	S Y B 区 SK-66 No366	底部	底径 7.5	平底。	外面部テハラミガキ。内面風化 のため不明。	粘土 燒成 色調 石英を含む 良好 内外面灰褐色
Po283 134	S Y B 区 SK-66 No964	底部	復底径 5.7	平底。	底面外縫ハラミガキ。内面ヘラ ケスナ。底面内外面ナナ。	粘土 燒成 色調 石英、良石を含む 良好 内外面暗褐色
Po284 134	S Y B 区 SK-66 No962 964	高坏	此径 13.6	「ハ」の字状に広がる脚部。端 部は肥厚する。	外面部テハラミガキ。内面脚部 上位しおり。ナナ。下位ナナ。	粘土 燒成 色調 石英を含む 良好 内外面茶褐色
Po285 134 59	S Y B 区 SK-66 No974	高坏	底径 14.0	「ハ」の字状に大きく広がる脚部。 端部に面をもつ。	外面部肥厚ハケメ。脚部タテハ ラミガキ。内面端部円盤充填、ハ ケメ。脚部上位しおり。下位 ナナ。	粘土 燒成 色調 石英を含む 良好 内外面暗褐色
Po286 134	S Y B 区 SK-66 No961-1018	高坏	復口径 13.1	「ハ」の字状に開く脚部。端部 はやや肥厚し、面をもつ。	脚部外縫タテハケメ。内面脚 部ヨコナデ。	粘土 燒成 色調 石英を含む 良好 内外面褐色
Po287 134	S Y B 区 SK-69 No1059	高坏	復底径 13.2	「ハ」の字状に開く脚部。端部 に面をもつ。	脚部外縫ハラミガキ。内面タグ。 脚部ヨコナデ。	粘土 燒成 色調 石英、長石を含む 良好 内外面暗茶褐色
Po288 135 59	S Y B 区 SK-66 No687-693 No1010-1013	煮	口縫径 24.4 底径 10.5 高さ 57.1	口縫部は大きく外反する脚部を 内側に「さきみだす」。端部は面を もち円形渦文、前み日を施す。 外縫に 4 本の割込み文帯。筋部 より脚部中位に横縫平行縫文。 波状文を交互にめぐらす。脚部 最も人字形。平底。	外面部脚部ヨコナデ。外縫部 中位ヨコハラミガキ。下位タ テハラミガキ。内面口縫部ナナ。 脚部下から上方にハケメ。	粘土 燒成 色調 石英を含む 良好 内外面明茶褐色

## SK-69

遺物番号 採取場所 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po289 138 60	S Y B 区 SK-69 No1059	煮	復口径 11.7	「く」の字状に屈曲する口縫。	外面部口縫部ヨコナデ。外縫部 中位ヨコハラミガキ。内面口縫部ナ ナ。脚部ハケメ。脚部ヘラケスリ。	粘土 燒成 色調 石英を含む 良好 内外面淡褐色

摺表30 下山南通遺跡土壤弥生土器観察表⑩

## SK-70

遺物番号 種類 区分番号	取上番号	器種	法 量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po290 139 60	S Y B 区 SK-70 No.1070	甕	復口径 17.0	「く」の字状に外反する口縁、 上端を少しつまみあげる。肩部 がやや盛り、球形を呈す。	口縁部内外面ナデ。外縁タチハ ケメ。内側ナナメハケメ。	胎土 焼成 色調 石英を多量含む 良好 内面赤褐色。外側黒褐色
Po291 139	S Y B 区 SK-70 No.999	底部	復底径 5.3	平底	内外面ナデ。	胎土 焼成 色調 石英、貝石を含む 良好 内外面赤褐色

## SK-71

遺物番号 種類 区分番号	取上番号	器種	法 量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po292 140	S Y B 区 SK-71 No.1004	甕	復口径 17.0	複部僅かに面をもつ口縁	内外面ナデ	胎土 焼成 色調 石英、砂粒を含む 良好 内外面淡明褐色

## SK-73

遺物番号 種類 区分番号	取上番号	器種	法 量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po293 141	S Y B 区 SK-86 No.1102	甕	復口径 16.3	外反する口縁部。端部は丸い。	口縁部内外面コロナデ。頭部外 側タチハケメ。	胎土 焼成 色調 石英を少量含む 良好 内面茶褐色
Po294 141 60	S Y B 区 SK-86 No.1171	高杯	復口径 2.8	前部の杯部。口縁端部は内外に 拡張し、半球面をもち、上面に 斜格子文、端部に割み目を施す。 口縁上部穿孔あり。	口縁端部内外面コロナデ。杯部 外表面ヘラミガキ。内面ヨコナデ 後ヘラミガキ。	胎土 焼成 色調 石英、貝石を含む 良好 内面赤褐色。外側黒褐色
Po295 141 60	S Y B 区 SK-86 No.1104	高杯		「ハ」の字状に開く瓶部。脚部 上位に2条の貼付突帯を施す。	外表面ヘラミガキ。内面上位から 中腰に絞り目。下位ナデ。	胎土 焼成 色調 石英を含む 良好 内面赤褐色
Po296 141	S Y B 区 SK-86 No.1170	底部	復底径 8.8	平底。	瓶部下面ヘラミガキ。内面ヘラ ミガキ後横ナデ。内面ヘラケズ り後ナデ。底面ナデ。	胎土 焼成 色調 石英、貝石を含む 良好 内面淡茶褐色。外側赤褐色 特徴 黒斑あり。
Po297 141	S Y B 区 SK-86 No.1103	底部	復底径 7.0	平底。	外表面部ヘラミガキ。底面ナデ。 内面ナデ。	砂粒を含む 良好 内面淡茶褐色。外側茶褐色 一部黒斑あり。
Po298 141	S Y B 区 SK-86 No.1102	底部	復底径 5.4	平底。	外表面ヘラミガキ。底面ナデ。内 面ナデ。	石英、貝石を含む 良好 内面暗褐色。外側赤褐色

## SK-77

遺物番号 種類 区分番号	取上番号	器種	法 量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po299 146	S Y B 区 SK-77 No.993	甕	復口径 28.1	外傾する口縁、端部に割み口を 施す。	内外面ヨコナデ	胎土 焼成 色調 砂粒を含む 良好 内外面淡明褐色

## SK-78

遺物番号 種類 区分番号	取上番号	器種	法 量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po300 147	S Y B 区 SK-78 No.1003	底部	復底径 9.3	平底。	外表面ヘラミガキ後ナデ。内面ヘ ラケズリ後ナデ。	胎土 焼成 色調 石英、貝石を少量含む 良好 内面淡褐色。外側明褐色

插表31 下山南通遺跡土塙弥生土器観察表⑪

## S K - 79

遺物番号 採取場所 採取番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態	手法	備考
Po301 148	S Y B 区 SK-79 No1091	壺	復口径 17.2	大きく外反する口部。外面に 螺旋状け模文。颈部に指輪状 突起附付け。	口縁部外面ナゲ。腹部外面タテ ハケメ、内面ナゲ。	粘土 燒成 色調 口縁部内面黒斑
Po302 148	S Y B 区 SK-79 No1091	壺	復口径 22.0	「く」の字状に屈曲する口縁。 底部をつまみあげる、胸部はあ まり張らない。	口縁部外面ヨコナゲ。胸部外 面タテハケメ。内面ナゲ。	粘土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内外面淡褐色
Po303 148	S Y B 区 SK-79 No1091	壺底部	復底径 15.4	「く」の字状に広がる脚部。脚 部は開き、奥目を施す。 底部に大きな穿孔。	外面ナメハケ後ナゲ。内面ヨ コナゲ。	粘土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内面淡褐色 色

## S K - 81

遺物番号 採取場所 採取番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態	手法	備考
Po304 150 60	S Y B 区 SK-81 No1123	壺	口径20.8	大きく外反し、肩部に面をもつ て斜面外側に螺旋状け模文を施す。 颈部に2本刺み且尖端貼付 り。	外面口縁部タテハケメ、内側口 縫部ヨコナゲ。腹部ナゲ。	粘土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内外面淡褐色
Po305 150	S Y B 区 SK-81 No1181	壺	復口径 25.4	「く」の字状に屈曲する口縁。 脚部は丸い。胸はなだらか。	口縫部外面ヨコナゲ。外側脚 部タテハケメ、内面ハケメ後 部ハラミガキ。	粘土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内外面淡褐色
Po306 150	S Y B 区 SK-81 No1112	壺	復口径 20.5	「く」の字状に屈曲する口縁。 口縫脚部は丸い。肩部などから 張り出している。	口縫部外面ヨコナゲ。外側脚 部タテハケメ。内面ハケメ。	粘土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内面淡褐色
Po307 150	S Y B 区 SK-81 No1112	壺	復底径 6.4	あげ底氣味の平底。	外側タテヘラミガキ。内面ナゲ。	粘土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内外赤褐色 特徴
Po308 150	S Y B 区 SK-81 No1128	壺	復底径 5.8	平底	外側タテヘラミガキ。内面ヘラ ケズリ。底部ニオササ。	粘土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内面赤褐色 特徴
Po309 150	S Y B 区 SK-81 No1122	壺	復底径 4.3	平底	外側タテヘラミガキ。内面ナゲ。	粘土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内面黒褐色 外側淡褐色

## S K - 82

遺物番号 採取場所 採取番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態	手法	備考
Po310 153 60	S Y B 区 SK-82 No1165	壺	復口径 22.2	丸頭する口縫部。腹部は肥厚し て表面をもつ。上面に割み目や 縫合を施し、外側に压溝を施す。 底部に刻み目模様。脚状突起を 施付けている。	口縫部内面不規方角ヘラミガキ 口縫部ヨコナゲ。	粘土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内外赤褐色
Po311 153 60	S Y B 区 SK-82 No1113	壺	復口径 23.0	「く」の字状に屈曲する口縫部。 腹部は丸く削みを施す。	外側口縫部ヨコナゲ。胸部外 面暗かいタテハケメ、胸部内面 ハケメ。	粘土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内外面淡褐色
Po312 153	S Y B 区 SK-82 No1113	壺	復口径 17.8	「く」の字状に屈曲する口縫部。 腹部は丸い。	口縫部外面ヨコナゲ。外側口 縫部ナゲ。内面不規則なヘラミガ キ。	粘土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内面淡褐色 外側氣孔
Po313 153	S Y B 区 SK-82 No1113	壺	復口径 23.5	「く」の字状に屈曲する口縫部。 腹部はややつまみあげて削みを 施す。張り出している。	口縫部外面ヨコナゲ。外側脚 部タテハケメ。内面ハケメ。	粘土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内面茶褐色 外側乳白色
Po314 153	S Y B 区 SK-82 No1113	壺	復口径 17.0	口縫部深いやや肥厚し、わずかな 面をもつ。外側に貫頭筋跡跡によ るし痕。	内外側ヨコナゲ。	粘土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内外面茶褐色
Po315 153 60	S Y B 区 SK-82 No1113	壺	復口径 26.0	口縫部やや角びる。腹部に指 輪状突起を施す。	口縫部内外側ヨコナゲ。胸部外 面ハケメ。	粘土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内外面茶褐色
Po316 153	S Y B 区 SK-82 No1113	壺	復底径 11.0	平底。脚部はやや厚い。	外側タテヘラミガキ。内面ナゲ。	粘土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内面淡褐色 外側淡褐色
Po317 153	S Y B 区 SK-82 No1113	壺	底径 9.0	平底。	外側タテヘラミガキ。内面トガ 底部ユビゼササ。	粘土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内面暗褐色 外側明褐色

擲表32 下山南通遺跡土壤弥生土器観察表⑫

## S K-83

遺物番号 図版番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形	態	手	法	備考
Po318 155 60	S Y B 区 S K - 83 No195	甕		ゆるやかに張る肩部。4条の縦折平行線文。縫合状文を交互に施文する。	肩部外側タテハケメ、内面剥離のため調整不明。	胎土 燒成 色調	石英を含む 良好 赤茶褐色。外面暗茶褐色	
Po319 155	S Y B 区 S K - 83 No194	甕	復口徑 17.0	口縁は「く」の字状に屈曲する。口縁部は裏面につまみあげる。	口縁部内外面ヨコナデ、内面肩部タテハケメ。	胎土 燒成 色調	石英、長石を含む。 良好 内面明褐色。外面暗褐色	

## S K-85

遺物番号 図版番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形	態	手	法	備考
Po320 157	S Y B 区 S K - 85 No1100	豆	復口徑 9.2	ゆるく屈曲する頭部から外傾し立ちあがる口縁。端部は外方に抵張し肩み口を施す。	内外面ヨコナデ。	胎土 燒成 色調	石英を含む 良好 赤茶褐色。内外面明褐色	
Po321 157	S Y B 区 S K - 85 No1100	甕	復口徑 14.0	「く」の字状に屈曲する口縁。底部は上方につまみあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。	胎土 燒成 色調	石英を含む 不良 内面明褐色。外面暗茶褐色	

## S K-90

遺物番号 図版番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形	態	手	法	備考
Po322 163 60	S Y C 区 S K - 21 No520	甕		外反する口縁部。頭部上位削み口を施す。下位に7条の縦折平行線文を施す。	頭部外面上位ヨコナデ。下位タテハケメをヨコナデ。内面下部ヘラミガキ後口ヨコハケ。	胎土 燒成 色調	長石、石英を含む 良好 内外面赤褐色	
Po323 163	S Y C 区 S K - 21 No520	甕	復口徑 15.5	口縁部は内傾して卜下に抵抗する。外面に3本の凹縫を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。	胎土 燒成 色調	砂粒を含む 良好 内外面淡褐色	
Po324 163	S Y C 区 S K - 21 No520	甕	復口徑 18.0	外反する口縁。端部は頭をもつた凹縫を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。	胎土 燒成 色調	石英、長石を含む 良好 内外面赤褐色 外底黒斑あり	
Po325 163 66	S Y C 区 S K - 21 No561	甕	復口徑 18.0	口縁部は内傾して卜下に抵抗する。外面に2条の凹縫を施す。底部は「く」の字状に屈曲する。頭部やや張る。	内外面口縁部ヨコナデ。頭部外凹タテハケメ。胴部内面ヨコハケ。	胎土 燒成 色調	石英、長石を含む 良好 内面赤褐色。外面淡赤褐色	
Po326 163	S Y C 区 S K - 21 No562	高杯	復口徑 20.5	口縁部は大きめ開き口縁部は強く内窪する。	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部内外面ヘラミガキ。	胎土 燒成 色調	多量の長石を含む 良好 内外面淡黑褐色	

## S K-91

遺物番号 図版番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形	態	手	法	備考
Po327 164	S Y C 区 S K - 22 No521	甕	復口徑 18.0	口縁部は上下に抵抗し頭をもつ。外面に凹縫を施す。	内外面ヨコナデ。	胎土 燒成 色調	砂粒を含む 良好 内面褐色。外面淡赤褐色	

## S K-92

遺物番号 図版番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形	態	手	法	備考
Po328 165	S Y C 区 S K - 23 No527	甕	復口徑 15.0	頭部は「く」の字状に屈曲し、卜下にやや張る。口縁部は内傾して頭部を施す。外側に凹縫を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。外面頭部上位タテハケメ。止位タテハケメ。内面頭部上位タテハケメ。内面ヨコハケメ。内面ヘラミガキ。底面付近ヘラミガキ。	胎土 燒成 色調	砂粒を含む 良好 内面褐色。外底黒褐色	
Po329 165	S Y C 区 S K - 23 No531	底部	開底径 5.4	平底。	外底ハケメ頭タテヘラミガキ。内面タテハケメ。	胎土 燒成 色調	砂粒を含む 良好 内面暗褐色。外底黒褐色	

挿表33 下山南遺跡土墳跡生土器観察表⑪

## S K-93

遺物番号 採集番号 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po330 167 60	S Y C X SK-24 No522	亞	復口徑 8.6	口縫部はほぼ直立し、肩部は上部に半曲面をもつ。	調部外面部ヨコハケメ。内面ヨコナダ。	粘土 燒成 色調 石英、長石を含む 良好 内外面淡灰褐色
Po331 167 60	S Y C 区 SK-24 No522	甕	復口徑 16.2	口縫端部は内傾して上方に拡張する。外面上には2条の凹線を施す。肩部はあまり張らない。	内外面口縫部ヨコナダ。肩部外面部ハケメ後タテハケメ。内面タテハケメ後ナダ。	粘土 燒成 色調 滑砂粒を含む 良好 内外面淡褐色
Po332 167 60	S Y C 区 SK-24 No522	甕	復口徑 16.0	口縫端部は内傾してやや上下に拡張する。外面上には2条の凹線を施す。頂部は下へく、の字状に屈曲し、肩部につづく。	内外面口縫部ヨコナダ。肩部外面部タテハケメ。内面内面粗いハケメナダ。	粘土 燒成 色調 極細砂粒を含む 良好 内外面淡褐色
Po333 167	S Y C 区 SK-24 No522	甕	復口徑 15.6	口縫端部は内傾して面をもち、2条の凹線を施す。頂部は下へく、の字状に屈曲し、肩部につづく。	内外面口縫部ヨコナダ。肩部タテハケメ内面ヨコハケメの後ナダ。	粘土 燒成 色調 石英、長石を含む 良好 内面淡赤褐色。外面淡褐色
Po334 167 69	S Y C 区 SK-24 No522	高坏	復脚径 12.7	「ハ」の字状に開く脚台部。肩部は肥厚して、面をちらり2条の凹線。肩部は上部より、貼付袋帶。4条の凹線、三角形造り、7条の凹線の頭に脚部まで施す。	筒部内面ヨコナダ。中位に絞り。	粘土 燒成 色調 石英、長石を含む 良好 内外面淡褐色

## S K-94

遺物番号 採集番号 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po335 168	S Y C 区 SK-25 No519	高坏	復口徑 20.0	浅い環部で口縫は内漸する。外面に2条の凹線を施す。	内外面横ナダ。	粘土 燒成 色調 石英、長石を含む 良好 内外面淡褐色
Po336 168	S Y C 区 SK-25 No519	底部	復底径 5.3	平底。	外側タテヘラミガキ。内面ヘラケスリ後ナダ。	粘土 燒成 色調 滑砂粒を含む 良好 内外面暗黒褐色
Po337 168	S Y C 区 SK-25 No519	底部	復底径 5.5	平底。	外側タテヘラミガキ。内面ヘラケスリ後ナダ。	粘土 燒成 色調 石英、長石を含む 良好 内外面深褐色

## S K-97

遺物番号 採集番号 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po338 171 61	S Y B 区 SK-97 No1277	甕	復口徑 15.8	頭部は「く」の字状に折れ、口縫端部は内傾して上方に膨張する。外面上に2条の凹線。肩部は張らない。	内外面口縫部ヨコナダ。肩部外面部ハケメ。肩部内面ヘラケスリ。	粘土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内面淡褐色。外面黑褐色
Po339 171	S Y B 区 SK-97 No1277	底部	復底径 5.4	平底。	外側タテヘラミガキ。底面ナダ。底部ユビオサエ。	粘土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内面灰褐色。外側深褐色

## S K-101

遺物番号 採集番号 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po340 175	S Y D 区 SK-05 No26	甕	復口徑 15.8	「く」の字状に屈曲する。上部に膨張する。外面上に凹線を施す。器壁は薄い。	内外面口縫部ヨコナダ。	粘土 燒成 色調 砂粒を含む 良好 内外面淡褐色
Po341 175	S Y D 区 SK-05 No26	甕	復口徑 17.2	口縫端部を拡張し、面をもつ。器壁は油い。	口縫部内外面ヨコナダ。器部は強くナダる。	粘土 燒成 色調 石英を少含む 良好 内外面淡灰褐色

挿表34 下山南通遺跡土塙彌生土器観察表⑩

## SK-105

遺物番号 施設番号 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po342 179 61	S Y C 区 SK-13 No.398	甕	復口径 21.7	口縁部は内側して上方に弧張りし、平底面をもつ、外周に4条の凹縫を入れ、その上に卯み目と円形摩耗を施す。頭部に卯み目突起をめぐらす。	外周部強引なナメ。頭部ナメハケ。内面ナメ。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 内外面淡褐色
Po343 179	S Y C 区 SK-13 No.399	底部	復口径 8.0	平底。	底部外周ヘラミガキ。底面外周ナメ。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 内外面淡褐色

## SK-106

遺物番号 施設番号 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po344 181 61	C区 SK-01 No.360	甕	復口径 6.1 胴部最大 直径 22.9 底径 6.5 復底高 29.3	頭部は「く」の字状に屈曲し、口縁部上端をつまみあげるくりあけ口縫。外側には2条の凹縫、頭部はゆるやかに張りだし平底におわる。	口縁部内外周ヨコナメ。外周部上位タマヘケイ、下位ハラミガキ。内面頭部上端ナメハケ。下位ヘラケズリ後ナタハケ。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 内外面淡褐色
Po345 181 61	C区 SK-01 No.360、 361	甕	口口径 16.2 胴部最大 直径 19.8 底径 6.0 復底高 29.2	頭部は「く」の字状に屈曲し、口縁上端を張り立てるくりあけ口縫。頭部はゆるやかに張り、平底におわる。口縁部2条の凹縫、底面2条の凹縫を施す。	外周部ヨコナメ。外周部上位ハケメドヘラミガキ。内面頭部ナメハケ、下位ヘラケズリ、底面ユビオサ。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 内外面淡褐色 特徴 外面一部スス付着
Po346 181 61	C区 SK-01 No.360、 361	甕	口口径 16.2 胴部最大 直径 21.8 底径 6.5 復底高 31.7	頭部は「く」の字状に屈曲し、口縁上端を張り立てるくりあけ口縫。頭部はゆるやかに張り、平底におわる。口縁部3条の凹縫を施す。	内外周部ヨコナメ。頭部上位タマヘケ、下位ヘラミガキ。内面ヨコナメ。内面頭部上位相いハケメ、下位ヘラケズリ。底面ヘラケズリ後ユビオサ。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 内外面淡褐色 特徴 外面スス付着
Po347 181 61	C区 SK-01 No.360、 361	甕	復口径 17.0	頭部は「く」の字状に強く屈曲し、口縁上端をつまみあげるくりあけ口縫。外側に3条の凹縫、頭部には3条の凹縫、底面には3条の凹縫を施す。	口縁部内外周ヨコナメ。頭部外周ナタハケ。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 内外面淡褐色 特徴 外面黒斑あり
Po348 181 61	C区 SK-01 No.360	甕	復口径 18.9	頭部は「く」の字状に屈曲し、口縁上端を張り立てるくりあけ口縫。外側には3条の凹縫、頭部には3条の凹縫を施す。	口縁部内外周ヨコナメ。頭部内外面ハケメ。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 内外面淡褐色
Po349 181 61	C区 SK-01 No.360	甕	復口径 17.7	頭部は「く」の字状に屈曲し、口縁上端を張り立てるくりあけ口縫。外側には3条の凹縫、頭部には3条の凹縫を施す。	口縁部外周ヨコナメ。頭部外周ナタハメ。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 内外面淡褐色
Po350 181	C区 SK-01 No.361	壺		「ハ」の字状に開く瓶部。	外周ヘラミガキ。内面しほり。底部ナタハケ。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 内外面淡褐色

## SK-107

遺物番号 施設番号 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po351 182 61	S Y C SK-02 d No.357	甕	復口径 22.4	口縁部は内側して頭をもち、上方はつまみ出す。頭部は丸みと突起をめぐらす。	口縁部内外周ヨコナメ。頭部ナメハケ後ナタハメ。	胎土 砂粒を含む 焼成 不良 色調 内外面淡褐色

## SK-108

遺物番号 施設番号 回収番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po352 183	C区 SK-08 No.377	甕	復口径 16.0	大きめ外反する口縫で、端部をつまみあげる。	内外面ヨコナメ。	胎土 砂粒を多量に含む 焼成 良好 色調 内外面淡褐色
Po353 183	C区 SK-08 No.377	底部	復底径 6.9	平底。	外周ヘラミガキ。底面ヨコナメ。内面ナメ。	胎土 砂粒を多量に含む 焼成 良好 色調 内外面淡褐色

插表35 下山南通遺跡土壤弥生土器観察表⑩

## S K-109

遺物番号 種類番号 記版番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態	手法	備考
Po354 183 62	C IX SK-10 No.382	纺錘車	長径 6.6 短径 6.2 厚さ 0.65	弥生土器転用の纺錘車未成品。 穿孔不明。	表面ヘラミガキ。	胎土 砂粒を含む 良好 色調 内面淡灰褐色、外周暗褐色

## S K-110

遺物番号 種類番号 記版番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態	手法	備考
Po355 185 No.387	C IX SK-12 No.387	甌	復口径 17.1	「く」の字状に屈曲し、口縁はわずかに内傾し上方に叢聚する。外周に3条の凹縫を施す。	内外面ナデ。	胎土 砂粒を含む 良好 色調 内外面淡褐色
Po356 185 No.343	C IX SK-12 No.343	甌	復口径 11.6	「く」の字状に折れる口縁。底部はやや圓をもつ。	内外面ナデ。	胎土 砂粒を含む 良好 色調 内外面淡褐色
Po357 185 No.431	C IX SK-12 No.431	高坏		「ハ」の字状に開く高坏脚部。長方形透孔有り。	外面タテヘラミガキ。内面剥離のため不明。	胎土 砂粒を含む 良好 色調 内外面淡褐色
Po358 185 No.34	C IX SK-12 No.34	高坏		漏斗状の脚部。2本の貼付突部を施す。	外面タテハケメ。内面しほり。内壁充填。	胎土 砂粒を含む 良好 色調 内外面淡茶褐色
Po359 185 No.433	C IX SK-12 No.433	高坏	復脚径 12.0	「ハ」の字状に開く脚部。脚端部は面をもじ内凹する。	外面ヘラミガキ。内面ヘラケメ。脚端部ヨコナデ。	胎土 砂粒を多量含む 良好 色調 内外面淡褐色 赤色
Po360 185 No.386	C IX SK-12 No.386	高坏	復脚径 11.5	「ハ」の字状に開く脚部。脚端部は面をもじ、上端をつまみ上げる。	外面ヘラミガキ、端部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	胎土 砂粒を含む 良好 色調 内外面淡褐色
Po361 185 No.299	C IX SK-12 No.299	底部	復底径 5.4	平底。	外側ヘラミガキ、底面ナデ。内面ナデ後ヘラミガキ。	胎土 砂粒を含む 良好 色調 内外面灰褐色
Po362 185 No.343	C IX SK-12 No.343	底部	復底径 6.2	平底。	内外面ナデ。	胎土 砂粒を多量含む 良好 色調 内外面灰褐色
Po363 185 No.434 388	C IX SK-12 No.434 388	底部	復底径 8.8	平底。	外面ヘラミガキ。底面ナデ。内面ヘラケズリ後ナデ。	胎土 砂粒を含む 良好 色調 内外面淡褐色
Po364 185 No.388	C IX SK-12 No.388	底部	復底径 7.3	平底。	外面タテヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	胎土 砂粒を含む 良好 色調 内外面淡褐色
Po365 185 No.389	C IX SK-12 No.389	底部	復底径 6.6	平底。	外面ヘラミガキ、底面ナデ。内面底部ヘラケズリ、底面ヘラケズリ後ナデ。	胎土 砂粒を含む 良好 色調 内外面淡褐色

## S K-111

遺物番号 種類番号 記版番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態	手法	備考
Po366 186 61	S Y C IX SK-06 No.367	甌	復口径 25.4	口縁部が大きく開き、下端が拡張され平底をもつ。外周に凹縫3条を施す。口縁部外周に3名の貼付突部を施す。	内外面ナデ。	胎土 砂粒を含む 良好 色調 内外面淡褐色
Po367 186 No.363	S Y C IX SK-06 No.363	甌	復口径 17.0	腹部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は複数して面をもつ。外周に2条の凹縫を施す。	口縫内外面ヨコナデ。肩部内外面ナデ。	胎土 砂粒を含む 良好 色調 内面褐色、外周黒褐色
Po368 186 No.363	S Y - C SK-06 No.363	底部	底部径 8.0	平底。	底部外圓ミガキ。内面ヘラケズリ。底面ナデ。内面ナデ。ユビオサエアリ。	胎土 砂粒を含む 良好 色調 内外面褐色
Po369 186 62	S Y C IX SK-06 C-a No.364	纺錘車	長径 5.4 短径 4.9 孔径 0.5	弥生土器転用の纺錘車。表面に黄緑状工具による施文。	外面ヘラミガキ。内面ナデ。周縁部は打ち欠き跡形。	胎土 砂粒を含む 良好 色調 内外面淡褐色

插表36 下山南通遺跡土壤弥生土器観察表⑯

## SK-112

遺物番号 地図番号 区分番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形	態	手	法	備考
Po370 189 61	S Y C X SK-07 No370	壺	復口径 19.4	大きく外反する口縁部。端部に横溝をもつ。外側には凹縫と内側には凸縫と斜めの凹縫を施す。	内外面ヨコナゲ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む 良好 内外面赤褐色	
Po371 188	S Y C X SK-07 No372	壺	復口径 19.2	口縁部内側に横溝と上下に凹縫がある。外側には凹縫と斜めの凹縫を施す。	内外面ヨコナゲ。	胎土 焼成 色調	石英を含む やや不良 内外面淡褐色	
Po372 188	S Y C X SK-07 No373	壺	復口径 17.7	頭部「く」の字形状に屈曲し、口縁部は内傾して上方に凹縫をもつ。外側には3条の凹縫と斜めの凹縫を施す。	内外面ヨコナゲ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む 良好 内外面淡褐色	
Po373 188 61	S Y C X SK-07 No369 A B No190 3 C No115, 117, 163	壺	復口径 19.8	頭部「く」の字形状に屈曲し、口縁部は内傾して上方に凹縫をもつ。外側には3条の凹縫と斜めの凹縫を施す。	口縁部内外面ヨコナゲ。頭部外側にタグハケメ後ナゲ。内面粗いサザ。	胎土 焼成 色調	細砂粒を含む 不良 内外面赤褐色	
Po374 188 61	S Y C X SK-07 No374	壺	口径 9.8	小型の笠形。頭部につまみが付く。端部わずかに面をもつ。円孔が2穴を対に4穴穿孔。	内外面ヘラミガキ。つまみオサ ナナゲ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む 良好 内外面淡褐色	
Po375 188	S Y C X SK-07 No372	底部	底径 8.5	不明瞭な平底。	内外面ナゲ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む 良好 内外面赤褐色	
Po376 188	S Y C X SK-07 No373	底部	復底径 7.6	平底。	外側底部ヘラミガキ。底面ナナ ゲ。内面ヘラクセリ後ナゲ。	胎土 焼成 色調 特徴	砂粒を含む 良好 内外面淡褐色 黒褐色	
Po377 188	S Y C X SK-07 No370	底部	復底径 7.6	平底。	外側底部ヘラミガキ。底面コ ナナゲ。内面ヘラミガキ	胎土 焼成 色調	砂粒を含む 良好 内外面赤褐色	
Po378 188	S Y C X SK-07 No373	底部	復底径 6.2	平底。	外側底部ヘラミガキ。底面ナナ ゲ。内面ヘラクセリ後ナゲ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む 良好 内外面暗灰褐色	

## SK-113

遺物番号 地図番号 区分番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形	態	手	法	備考
Po379 189	C区 SK-04 No359	壺		頭部が「く」の字形状に屈曲し、胎部はやや肥厚する。	口縁部内外面ヨコナゲ。頭部外 面タテハケ。内面ナナメハケ。	胎土 焼成 色調	細砂粒を少景含む 良好 内外面淡褐色	
Po380 189	C区 SK-04 No359	壺	復口径 13.2	頭部が「く」の字形状に屈曲し、 縦縫は上方に凹縫である。外側2 本の凹縫を施す。	口縁部内外面ヨコナゲ。頭部内 面ハケ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む やや不良 内外面淡褐色	
Po381 189	C区 SK-04 No359	壺		壺状の頭部。頭部は内側に強張 し半球形をもち3本の凹縫を施す。 环部外側3本の凹縫を施す。	内面底部トドリコナゲ。下位ヘ タミガキ。内面ヨコナゲ後ヘラ ミガキ。	胎土 焼成 色調	白青多量含む やや不良 内外面淡褐色	
Po382 189	C区 SK-04 No359	窓部	仰底径 9.4	平底。	内面ヘラミガキ。底面コナナ ゲ。内面ナナゲ。	胎土 焼成 色調	細砂粒含む やや不良 内外面淡褐色	
Po383 189	C区 SK-04 No359	窓部	復底径 9.8	平底。	外側タテハケ後ヘラミガキ。底 面ナナゲ。内面ナナゲ。外側タテ ミガキが残る。	胎土 焼成 色調	右翼を含む 良好 内外面黒褐色	

## SK-115

遺物番号 地図番号 区分番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形	態	手	法	備考
Po384 192	S Y C X SK-33 No561	壺	復口径 16.7	口縁部は内傾して上方に強張 りあぐ二縫。外方に3条の凹縫を施す。	内外面ヨコナゲ。	胎土 焼成 色調	細砂粒を含む 良好 内外面黒褐色	
Po385 192	S Y C X SK-33 No570	底部	底径 7.8	平底	外側ヘラミガキ。底面ヨコナゲ。 底面内面ヒュオサニ。	胎土 焼成 色調	石英、良石を含む 良好 内外面赤褐色	

插表37 下山南通遺跡土墳弥生土器観察表⑪

## SK-117

遺物番号 測定番号 回収番号	取上番号	器種	法 量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po386 194	S Y C 区 S K - 34 No564	甕	腹口径 16.6	内傾し、底部を上方に拡張する くりあげ口縁で二条凹縁を施す。	内外面ヨコナダ。	粘土 良好 色調 内外面茶褐色。一部黒色
Po387 194 61	S Y C 区 S K - 34 No564	高杯	腹口径 6.2	腹部中位に付突委窓、下位三角 窓を有する。脚窓を七方にく りあげる。	脚部外面ハケ後ナダ。脚部ヨコ ナダ。内面脚部ナダ。	粘土 良好 色調 細妙紋を含む 内外面茶褐色
Po388 194	S Y C 区 S K - 34 No564	底部	腹底径 4.8	平底。	脚部外表面ハラミガタ。直面ナダ 内面ナダ。	粘土 良好 色調 石英を含む 内外面茶褐色

## SK-121

遺物番号 測定番号 回収番号	取上番号	器種	法 量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po389 195	S Y C 区 S K - 29 No586	甕	腹口径 19.2	口縁脚部は上方に被瘞するくり あげ口縁。外縁に3条の凹縁を 施す。	内外面ヨコナダ。	粘土 良好 色調 細妙紋を含む やや不良 内外面茶褐色

## SK-122

遺物番号 測定番号 回収番号	取上番号	器種	法 量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po390 196	S Y C 区 S K - 16 No551	甕	腹口径 10.6	外反する口縁と底を窪みにつま みあける。埋部外側には突み目 を施す。	内外面ナダ。	粘土 良好 色調 細妙紋を含む 内外面茶褐色
Po391 196	S Y C 区 S K - 16 No509	底部	腹底径 5.6	平底。	外正面底部へラミガタ。底面ナダ。 内面へラケズリ後ナダ。底部中央 丸孔。	粘土 良好 色調 石英を含む やや不良 外表面茶褐色。内面灰黑 色

插表38 下山南通遺跡土壤弥生土器観察表⑥

## B区集石-01

遺物番号 測定番号 回収番号	取上番号	器種	法 量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po392 200 61	S Y B 区 6 - 0 No529	甕		口縁が大きく外反する鉢形。外 側に複数個痕跡をめぐらす。 (口縁部欠損)	外周テクハテ。内面上面ヨコハ ナダ。下位ナダ。	粘土 良好 色調 石英を含む 内外面茶褐色
Po393 200 61	S Y B 区 6 - 0 No527	甕		外反する鉢形。外縁に付突突 部を施す。(口縁部欠損)	外周面がいきナダハテ。内面剥離 のため不明。	粘土 良好 色調 石英を含む 内外面茶褐色
Po394 200 61	S Y B 区 6 - 0 No528	甕		脚部に向かってだらかに開く 口縁。外縁に7~8条の横縫半 円線と波状変化を呈する。	外周テクハテメ。内面風化によ り調整不明。	粘土 良好 色調 石英を含む 内外面茶褐色
Po395 200 61	S Y B 区 6 - 0 No527	甕	腹口径 19.0	外反する口縁部。縁部は被瘞し て上部には斜格子文、底部には、 工具による刮込みを施す。外縁に剥 離が見られる。浮 石を助持付。	外周ナダ。内面ナダ後一部ミガ キ。	粘土 良好 色調 石英を含む 内面茶褐色。外表面茶褐色

插表39 下山南通遺跡集石弥生土器観察表

## C区P出土土器

遺物番号 測定番号 回収番号	取上番号	器種	法 量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po396 201 61	S Y C 区 2 F P - 6 No408	甕	腹口径 15.8	脚部「く」の字型に鉗曲し、口 縁部内側にて上下に被瘞する。 外縁には3条の凹縁を施す。	口縁部内外面ヨコナダ。外周部 ヨコハテナダ。内面ナダ。	粘土 良好 色調 石英を含む 内面茶褐色。外表面茶褐色
Po397 201 61	S Y C 区 3 D P - 29 No449	甕	腹口径 21.6	口縁部は内傾して口下に鉗張 し、外縁に3条の凹縁を施す。	内外面ヨコナダ。	粘土 良好 色調 細妙紋を含む やや不良 内外面茶褐色
Po398 201	S Y C 区 2 F P - 2 No413	甕	腹口径 6.0	口縁部はつまみあげ部をもつ。 外周凹縁後刻み目を施す。	内外面ヨコナダ。	粘土 良好 色調 細妙紋を含む 内面茶褐色

遺物番号 部品番号 部品番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形	態	手	法	備考
Po399 201	S Y C 区 2 F P-2 No413	甕	復口径 11.8	口縁端部内側して下に膨張する。外側には2条の凹線を施す。	内外面ヨコナゲ。		胎土 燒成 色調	石英、長石を含む。 良好 内外面褐色
Po400 201 61	S Y C 区 2 E P-45 No446	甕	復口径 19.0	口縁端部は上下に膨張して面をもつ。頭部は「く」の字状に彎曲する。頭部に刻み目突帯を施す。	内外面ヨコナゲ。		胎土 燒成 色調	鐵砂粒を含む。 やや不良 内外面灰褐色
Po401 201 61	S Y C 区 3 F P-13 No439	高环-	復口径 19.5	碗状の环部下半から屈曲し外反する口縁。口縁端部は丸くおきめる。	环部外縁ヘラミガキ後ナゲ。内面ヘラミガキ。頭部ヨコナゲ。		胎土 燒成 色調	石英を含む。 良好 内面淡黄褐色。外面赤褐色
Po402 201	S Y C 区 2 F P-1 No407	底部	復底径 6.8	平底。	外縁底部ヘラミガキ後ナゲ。底面ナゲ。内面ヒビオサ後ナゲ。		胎土 燒成 色調	石英、長石を含む。 良好 内面淡赤褐色。外面淡褐色

表40 ピット出土弥生土器観察表

## B区南部自然河川

遺物番号 部品番号 部品番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形	態	手	法	備考
Po403 202 62	S Y B 区 SD-01 No1256 No1184 4 M No701	甕	復口径 24.8	大きく外傾する口縁部。底部は丸く膨張する。内面に「く」の字状に凹線を施す。口縁部をもつて頭部に「く」の字状に凹線を施す。頭部に刻み目。外側に刻み目突帯と棒状突起を施す。	外縁部上位ヨコナゲ。内面粗いヘラミガキ。		胎土 燒成 色調	石英を含む。 良好 内面明茶褐色。外面茶褐色
Po404 202 62	S Y B 区 SD-01 No1256	甕	口径 5.0	細い筒状の口縁部。底部は面もつ。	外縁ヘラミガキ。内面ナゲ。		胎土 燒成 色調	石英、長石を含む。 良好 内外面褐色
Po405 202	S Y B 区 SD-01 No1256 No1275	豆	復口径 10.8	口縁がやや外反しながら立ち上がる直口部。底部はやや肥厚する。	外縁口部ヨコナゲ。肩部タケハケメ。内面ヨコナゲ。		胎土 燒成 色調	砂粒を含む。 良好 内外面淡褐色
Po406 202 62	S Y B 区 SD-01 No1256	甕	口径13.7	「く」の字状に彎曲する口縁部。底部に面もつ。肩部は張らな。	口縁部内外面リコナゲ。肩部タケハケメ。内面ヨコナゲ。内面ヘラミガキ。		胎土 燒成 色調	石英を含む。 良好 内外面淡褐色
Po407 202 62	S Y B 区 SD-01 No1256	甕	復口径 21.4	底部に「く」の字状に彎曲する。底部は内傾し、下に弧張する。外側に3条の凹線を施す。頭部に刻み目突帯を施す。胴部にはやや張り付いている。	外縁直口部ヨコナゲ。胴部外側ヨコタケハケメ。内面ヘラミガキ。		胎土 燒成 色調	砂粒を含む。 良好 内外面淡褐色
Po408 202 62	S Y B 区 SD-01 No1258	蓋	復口径 9.7	外反気味に聞く笠状を呈し突出する。内面に「く」の字状に凹線を施す。口縁部には1箇所の穿孔があり、外側に軋転による鉛錠跡。	外縁ナゲ。内面ヘラミガキ。		胎土 燒成 色調	石英を含む。 良好 内面明褐色。外面明褐色
Po409 202 62	S Y B 区 SD-01 No1258	甕	口径 9.7 底径 2.6	笠状を呈し、突出したつまみをもつ。口縁部に2箇1単位の穿孔がある。	内外面ナゲ。		胎土 燒成 色調	砂粒を含む。 良好 内面黄灰褐色。外面淡褐色

## 南部遺構外（1）

遺物番号 部品番号 部品番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形	態	手	法	備考
Po410 203 63	S Y B 区 深溝口レ ンチ No395, 482, 334	甕	口径30.7 復口径 49.5 底径12.5 高さ54.3	口縁部は大きく外反し、頭部は肥厚する。肩部が張り出し平底につながる。最大腹部は割合上位やや上にある。口縁端面に「く」の字状に凹線を施す。頭部に刻格子文、口縁内面に平行諺文、頭部に刻格子文、頭部に施す。頭部に刻み目突帯を3本貼り付ける。頭部に平行諺文、頭部に刻み目突帯を3本貼り付ける。頭部に平行諺文、頭部に刻み目突帯を3本貼り付ける。頭部に平行諺文、頭部に刻み目突帯を3本貼り付ける。	外縁口縁部ヨコナゲ。頭部タケハケメ。頭部ヘラミガキ。頭部ナメハケメ。口縁端面ヘラミガキ。頭部ナメハケメ。		胎土 燒成 色調 位置	石英、長石を多量に含む。 良好 内面淡褐色。口縁部に一部黒斑あり。
Po411 203 63	S Y B 区 No1284	甕	復口径16	大きく外反する口縁部。内面に「く」の字状に凹線を施す。頭部外側に刻み目。	口縁部内面ヨコナゲ。		胎土 燒成 色調	長石を含む。 良好 明褐色

表41 遺構外弥生土器観察表①

遺物番号 組合番号 同数	取上番号	器種	法量 (cm)	形	態	手	法	備考
Po412 203 63	S Y B K 6 P No.898	亞	復口徑 18.0	口縫部は大きく外反し、内面に斜格子文。縫合工具による正裏表文を施し、その間に1cm間隔で穿孔がある。口縫部は半坦面をもつ。斜格子文を施す。	口縫部内外面ナデ。		胎土 焼成 色調	長石を含む。 良好 内面茶褐色。外周暗褐色
Po413 203 63	S Y B K 8 M No.1069	煮	復口徑 16.0	大きく外反する口縫部。内面に斜格子文を施す。1cm間隔の穿孔。斜格子文を施す。	外面部頸部ハケメ。底ナデ。		胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好 内面淡褐色。外周暗褐色
Po414 203 63 Na.479	S Y B K 8 M No.1069	煮	復口徑 20.0	外反する口縫部。口縫部肥厚で斜格子文を施す。斜格子文を施す。内面に斜格子文を施す。下位に縫合工具による穿孔5本。下位に縫合工具による穿孔4本。	口縫部内外面ナデ。口縫外ナデ。内面ヘミガキ。		胎土 焼成 色調	石英、長石、雲母少含む。 良好 内面淡褐色。外周暗褐色
Po415 203 63 No.517	S Y B K 8 M No.517	亞	口徑17.5	外反する口縫部。口縫部肥厚で斜格子文を施す。斜部に斜目片付文を施す。口縫外側に斜目片付文を施す。口縫4本。	内外面ナデ。端部ヨコナデ。		胎土 焼成 色調	石英を少量含む。 良好 内面淡褐色
Po416 204 63	S Y B K 8 M No.539 475, 517	煮	復口徑 39.5 底径11.0	口縫部は外反し、肩部が大きく突出する。半底、最大胴幅は中位よりや下にある。口縫外側に斜目片付文を施す。端部に斜目片付文を施す。斜部にかけて油赤平行線文。被伏文が交叉しにめぐらす。下位に直筋文を施す。	外底部から門跡タテハケメ。肩部より下にヨコヘラミガキ。下位タテハラミガキ。内面底部ナデ。脚部ナメハケメ。		胎土 焼成 色調	石英を少量含む。 良好 内面淡褐色
Po417 204 63	S Y B K No.1284	煮		大きく外反する口縫部。内面に斜格子文による被伏文を施す。横筋に斜目片付文を施す。直筋文を施す。	口縫部内側ヨコナデ。		胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好 内面赤茶褐色
Po418 204 62	S Y B K 8 M No.241, 566, 536	亞	復口徑 16.9 底径 3.5	球形の胸階。平底。口縫部欠損部に横筋文を施めぐらす。直筋文を施す。	外底部ナメハケメ後ナデ。脚部中位ハラミガキ下位タテハラミガキ。内面削傷のため下部ヨコナデ。		胎土 焼成 色調	石英を含む。 やや不良 内面淡褐色
Po419 204 63	S Y B K 5 Q No.895	煮	復口徑 19.5 底径 3.5 高さ34.5	広い底部から大きく外反する口縫部。端部は斜目片付文を施す。直筋文を施す。斜部は斜目片付文を施す。2条の直筋文を施す。直筋平底。	口縫部内外面ヨコナデ。外面部。肩部タテハケメ。脚部ヨコヘラミガキ。下位タテハラミガキ。内面底部ヨコヘラミガキ。脚部ナメハケメ。底部にユビオリエ。		胎土 焼成 色調	石英を含む。 良好 内面茶褐色。外周茶褐色
Po420 204 63	S Y B K 8 M-d No.1065	煮	口徑16.5	腹部は「く」の字状に屈曲し、端部は内傾して肥厚する。外面に斜格子文をめぐらす。斜目片付文を貼り付ける。颈部に直筋文を施す。直筋上位に直筋文を施す。	胸窓外面タテハケメ。内面口等部ヨコナデ。脚部ヨコヘラミガキ。脚部内四組1:1ハケメ。		胎土 焼成 色調	砂粒を多く含む。 やや不良 内面淡褐色
Po421 205 63	S Y B K 8 M No.343	亞	復口徑 15.9	「く」の字状に屈曲する嘴部。直筋に斜目片付文を施す。直筋は強張らない。	口縫内外面ヨコナデ。肩部外側ヨコナデ。内面ナデ。		胎土 焼成 色調	少々含む。 良好 内面淡褐色
Po422 205 64	S Y B K 8 M No.736	煮	口徑15.3	「く」の字状に屈曲し、直筋に斜目片付文を施す。直筋は強張らない。	内外側頭部ヨコナデ。肩部以下外側ヨコナデ。脚部内側ハケメ。		胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好 内面淡褐色
Po423 205 63	S Y B K 8 P No.732	煮	復口徑 15.0	油筋は「く」の字状に屈曲し、口縫部はほどほほ立筋の複合口縫。口縫部に数條の平行油文がありナデ消される。	肩部ハラケズリ。内外面口縫部ヨコナデ。		胎土 焼成 色調	火物の灰石を含む。 良好 成褐色
Po424 205	S Y B K 5 M No.1192, 702	煮	口徑27.3 底径 7.2 高さ42.0	口縫部はやや肥厚で直筋をもつ。直筋は「く」の字状に屈曲し、直筋に斜目片付文を施す。斜目片付文を施す。直筋は強張らない。	口縫部内外面ヨコナデ。肩部外側ヨコナデ。脚部内側ハケメ。直筋ナデ。脚部内側ヨコナデ。直筋ナデ。直筋ナデ。直筋ナデ。		胎土 焼成 色調	石英を多量含む。 良好 内面淡褐色
Po425 205 63	S Y B K 8 M No.384	煮	復口徑 31.1 底径 7.2 高さ41.6 底径 7.5	ゆるやかに内湾する环形。口縫部はやや肥厚する。直筋に斜格子文。円形浮文を施す。斜部に斜目片付文を施す。直筋文を2条に施す。	口縫部内外面ヨコナデ。頭部外側ヨコナデ。中位タテハケメ。下位タテハラミガキ。脚部内側ヨコナデ。中位ハラミガキ。直筋ナデ。直筋ナデ。		胎土 焼成 色調	砂粒を多量含む。 良好 内面淡褐色
Po426 205 63	S Y B K 6 P No.717	高坏	復口徑 23.5	ゆるやかに内湾する环形。口縫部はやや肥厚する。直筋に斜格子文。円形浮文を施す。斜部に斜目片付文を施す。直筋文を施す。	外面部ヨコナデ。下位ナデ。脚部ナメハケメ。下位タテハラミガキ。内面ヘラミガキ。		胎土 焼成 色調	石英、長石を含む。 良好 明褐色
Po427 205 63	S Y B K 0 L-b No.679	高坏	復口徑 23.6	やゆらぎのある环形。内筋に肩部はやや直筋をもつ。外筋に2条の凹筋を施す。	外面部ナメハケメ後ハラミガキ。内面ナデ。		胎土 焼成 色調	石英、長石を含む。 良好 明褐色

挿表42 遺構外弥生地器観察表②

## 北部遺構外

遺物番号 神奈川県考古 団体登録番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態	手法	備考
Po428 206	S Y C K 1 J No209	壺	復口径 22.8	口縁部は大きく外反し、端部にはヘラ状突起による倒み目。口縫部内面に3条の凹線。	内外面頸部ナゲ。	胎土 焼成 色調 石英、長石を含む。 良好 内外灰褐色
Po429 206	S Y C K 3 C No241	壺	復口径 9.1	大きく外反する口縁。端部外面には2本の凹線。内面には櫛刷毛状文。3条の凹線を施す。	内外面ヨコナゲ。	胎土 焼成 色調 石英、長石を含む。黒雲母を少量含む。 良好 内外灰褐色
Po430 206	S Y D K No28	壺	復口径 23.0	口縁部が大きく外反し、端部は内傾し、やや膨張する。外面に2条の凹線と倒み目を施す。	外面風化により調整不明。内面ナゲ。	胎土 焼成 色調 長石を含む。 良好 内外灰褐色
Po431 206	S Y C K 3 B No246	壺	復口径 21.0	口縁部は肥厚して、わずかに外方につまむず無頭轍。端部に筋目有。上面に4条の凹線。胴部は浅い凹線と倒み目を交互に施す。	口縁部外側強いナゲ。内面口縫部へラミガキ後ナゲ。肩部外面ハケ後ナゲ。	胎土 焼成 色調 砂粒を含む。 良好 内外灰褐色
Po432 206	S Y C K 4 E No209	壺	復口径 15.0	外反する口縁。端部は内傾し、上面に凹線と倒み目。内面には櫛刷毛状文を施す。	内外面ヨコナゲ。	胎土 焼成 色調 砂粒、黒雲母を含む。 良好 内外灰褐色
Po433 206 64	S Y C K 1 J No271	壺	復口径 15.3	口縁部欠損。肩部が屈曲し強く裏返す出脚部。肩部はやや上位にある。底部は平底。	外側底部ハケメ後ヨコヘラミガキナゲ。下位トクテハケミガキ。圓窓ナゲ。内面肩部上位ナメハケ。下位ヘラミガキ。	胎土 焼成 色調 砂粒を含む。 良好 内外灰褐色
Po434 206 64	S Y D K No 2	壺	復口径 17.0	「く」の字状に屈曲する口縁。腰部はややまみあげ、外面に2条の凹線を施す。	内外面肩部ナゲ。外面肩部タナハケ。内面肩部以下ヨコヘラミガキ。	胎土 焼成 色調 砂粒を含む。 良好 内外灰褐色
Po435 206 64	S Y D K No34	壺	復口径 23.5	「く」の字状に屈曲する口縁。腰部はややまみあげ、外面に凹線を施す。	内外面口縫部ヨコナゲ。肩部外タナハケ。肩部内側ナゲ。	胎土 焼成 色調 石英を含む。 良好 内外灰褐色
Po436 206 64	S Y D K No34	壺	復口径 17.0	「く」の字状に屈曲する口縁。腰部はややまみあげ、外面に2条の凹線を施す。	内外面口縫部ヨコナゲ。胴部外ナゲ。胴部内面ナメハケ。	胎土 焼成 色調 砂粒を含む。 良好 内外灰褐色
Po437 206 64	S Y C K 4 F No349	壺	復口径 26.6	腰部「く」の字状に屈曲する。口縫部内は削除し、上端を拡張する。外面は凹線でヘラ状凹線による倒み目。凹線部を施す頭部に削み目突起を付加する。頭部に節状工具による刻文を施す。	口縫部内外面ヨコナゲ。肩部外タナハケ、内面ハケメ後ナゲ。	胎土 焼成 色調 石英、長石を含む。 良好 内外灰褐色
Po438 206 64	S Y C K 1 J No363	壺	II型14.1	口縫部内は削除し、外面上に2条の凹線を施す。頭部は「く」の字状に屈曲し、頭部は削み目突起。平底。	内外面口縫部ヨコナゲ。胴部外ナメハケ、胴部内側下位ヘラミガキナゲ。	胎土 焼成 色調 砂粒を含む。 良好 内外灰褐色
Po439 206 64	S Y C K 1 J No311, 322, 327	壺	口径 19.4	口縫部内は削除して上下に試張する。外面に3条の凹線を施す。頭部は削み目大突起。頭部はやや膨張がある。	内外面口縫部ヨコナゲ。胴部外タナハケ、内面ナメハケ。	胎土 焼成 色調 砂粒を含む。 良好 内外灰褐色
Po440 206 64	S Y C K 6 A No248	壺	復口径 20.7	頭部から「く」の字状に屈曲し、外面上に4条の凹線を施す。外面に4条の凹線を施す。頭部は削み目突起。頭部は削み目突起を施す。	口縫部内外面ヨコナゲ。頭部外タナハケ。内面削いナゲ。	胎土 焼成 色調 石英、長石を含む。 良好 内外灰褐色
Po441 206 64	S Y C K No311, 322, 327	壺	復口径 15.0	II型壺部は内傾してヒドに拡張する。外面に3条の凹線を施す。頭部は削み目大突起。頭部は削み目突起。	内外面口縫部ヨコナゲ。胴部外タナハケ。	胎土 焼成 色調 砂粒を含む。 良好 内外灰褐色
Po442 207	S Y C K 1 J No271	壺	復口径 14.2	口縫部内は削除して上下に試張し、外面上に4条の凹線を施す。頭部は削み目突起。頭部は削み目突起。	内外面口縫部ヨコナゲ。頭部外タナハケ、頭部内面削いナゲ。	胎土 焼成 色調 砂粒を含む。 良好 内外灰褐色
Po443 207 64	S Y C K 3 C No241	壺	復口径 17.2	頭部「く」の字状に屈曲し、口縫部内は削除して上下に試張する。外面にはヘラ状凹線による削み目を施す。	口縫部内外面ヨコナゲ。頭部外タナハケ。内面ヘラミガキ。	胎土 焼成 色調 石英、黒雲母を少量含む。 良好 内外灰褐色
Po444 207	S Y C K S K - 19 No484	壺	復口径 16.6	口縫部はほぼ直立し、端部は上位に拡張する。外面には2条の凹線を施す。頭部には削み目突起を施す。	内外面ナゲ。	胎土 焼成 色調 砂粒を含む。 良好 内外灰褐色
Po445 207	S Y C K No191	壺	復口径 19.5	蓋部「く」の字状に屈曲し、口縫部内は10条の凹線を施す。頭部は削み目大突起による削み目を施す。	内外面口縫部ヘラミガキ後、II型頭部内外面ナゲ。胴部ヘラミガキナゲ。	胎土 焼成 色調 石英を含む。 良好 内外灰褐色

摺表43 遺構外弥生土器観察表③

遺物番号 発掘場所 回収番号	出土番号	器種	法 量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po446 207 64	S Y C 区 6 A No.248	蓋	復口径 17.7	やや外傾してたちあがる複合口 縁。底部は直をもつ、外側に11 条の網状平行縫。底部にヘラミ ガキによる焼文状態。	内外両口縁部コロナ。底部内面 ヘラミガキ。底部内面ヘラミ ガキ。底部以下ヘラケツリ。	粘土 焼成 色調 石英、長石を多量に含む。 良好 内外淡黄褐色
Po447 207	S Y D 区 No.34	高杯	復口径 22.0	外傾。端部は肥厚し、角み目を 施す。上面を上から下へ穿孔す る。	外側口縁部ヨコイダ。底部ナ ハケ。内側ヨコヘラミガキ。	粘土 焼成 色調 石英を含む。 良好 内外淡茶褐色
Po448 207	S Y D 区 No.34	高杯	復口径 21.8	ゆるやかに内窪し、底部が凹 し面をもつ。外側面部に刻み目 を施す。	外下部ハクチヘラミガキ後、ヨ コヘラミガキ。内面ヨコヘラミ ガキ。	粘土 焼成 色調 石英を含む。 良好 内外淡茶褐色
Po449 207 64	S Y C 区 3 C No.183	高杯	復口径 31.0	輪状の外傾。口縁部は強く内窪 し、底部は平坦で丸みをもつ。 外側に4条の凹縫をもぐらす。	輪部上面強烈ヨコイダ。外側ナ ハケ。ヨコハケ後ヘラミガキ。内 面ヨコハケ後ヘラミガキ。	粘土 焼成 色調 石英を少額含む。 良好 内外淡茶褐色
Po450 207 64	S Y C 区 3 C No.183	高杯	復脚附 16.4	「ハ」の字状に開く脚部。脚部 上部をつまみ上げる。外側に 1条の凹縫。脚部造りしあり。	脚部のため調整不明。	粘土 焼成 色調 石英、長石を含む。 不良 内外淡茶褐色
Po451 207	S Y C 区 S K 19 No.484	高杯	-	口縁部・脚部欠損。受部と脚部 の境に2条の凹縫。	外側ヘラミガキ。	粘土 焼成 色調 砂利を含む。 良好 内外淡灰褐色
Po452 207	S Y C 区 No.188	高杯	復脚附 11.6	「ハ」の字状に開く脚部。端部に 1条の凹縫をもつ。三角形の 透しもある。	外側タテハケ。内面ヘラケズリ 輪部ナナ。	粘土 焼成 色調 石英を少額含む。 良好 内外淡茶褐色
Po453 207	S Y C 区 No.190	蓋	復口径 11.0	直線的に開く笠形。天井部欠損 穿孔あり。	外面直線ハケ。内面ヘラミガキ 輪部ナナ。	粘土 焼成 色調 石英、長石を含む。 良好 内外深黑褐色
Po454 207	S Y C 区 S D - 01 No.569	底部	底径 6.5	半底。	外側底部ヘラミガキ。底部ナ ハケ。内面ヘラケズリ。	粘土 焼成 色調 長石、石英を含む。 良好 内外深黄褐色。 外面黒斑あり。
Po455 207	S Y D 区 No.32	底部	底径 5.6	半底。	外面ナナヘラミガキ。内面ヘラ ケズリ。	粘土 焼成 色調 石英を含む。
Po456 207	S Y D 区 No.28	底部	底径 8.0	不明瞭な半底。	外側ナナヘラミガキ。内面風化 によつて不明。	粘土 焼成 色調 石英を多量に含む。 不良 内外深灰褐色。外面淡褐色
Po457 207	S Y D 区 No.28	底部	便底径 11.0	平底。底壁は厚い。	外側タテヘラミガキ。内面ヘラ ミガキ。	粘土 焼成 色調 石英を含む。 良好 内外深褐色
Po458 207 61	S Y D 区 No.2	彷彿車	孔径 1.9 厚さ 0.6	張生土岩転用鉗道車。中心部穿 孔。周縁部縫り切り調整。	外側ヘラミガキ。内面ヘラケズ リ後ヘラミガキ。	粘土 焼成 色調 砂利を含む。 良好 内外淡茶褐色
Po459 207 61	S Y C 区 No.348	彷彿車	長さ 4.8 幅 4.6 厚さ 0.35~0. 5	張生土岩転用の彷彿車。	ナナメハケ後ナナ。	粘土 焼成 色調 砂利を含む。 良好 内外淡明褐色
Po460 207	S Y C 区 1 G No.233	彷彿車	長さ 3.1 幅 3.3 厚さ 0.35~0. 5	張生土岩転用の彷彌車木製品。	ハケ後ミガキ。	粘土 焼成 色調 砂利を含む。 良好 内外深灰褐色

插表44 造構外弥生土器観察表④

No	標名番号	回収番号	分類	出 土 位 置	出 土 番 号	大きさ (mm)	最大 幅 (mm)	厚 さ (mm)	重 さ (Kg)	石 材
S 59	27	65	石 盤	S I - 04	1048	25.0	(17.1)	4.2	1.5	サスカイト
S 60	76	65	"	S K - 17	1251	32.8	21.2	5.1	1.9	黒曜石
S 61	76	65	"	"	1250	34.4	18.0	3.5	1.3	サスカイト
S 62	"	"	S K - 62 + 72	1153	(19.3)	10.2	2.5	0.5	"	
S 63	192	65	"	S K - 115	567	22.0	12.2	3.0	0.5	黒曜石
S 64	208	65	"	C 区 3 E P 7	491	23.0	17.3	3.5	1.1	サスカイト
S 65	208	65	"	B 区 S D - 01	1257	21.3	15.0	3.1	0.6	"
S 66	208	"	"	2 N	1193	25.5	19.2	4.0	1.3	"
S 67	208	"	C 区	3D	132	21.6	15.5	3.6	0.8	"
S 68	208	65	"	4 F	341	(23.4)	18.5	4.6	1.7	"
S 69	208	65	"	屏下中	490	21.9	(15.4)	4.3	0.9	黒曜石
S 70	"	65	B 区	S D - 01	1257	22.0	14.4	4.0	0.6	"

插表45 下山南通造跡剝片石器一覽表( B・C 区 ) ①

No.	所定番号	区段番号	分類	出土位置	取上番号	最大長さ (mm)	最大幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材
S71		65	台 磨	B区 SD-01	1257	29.2	14.8	3.1	0.6	黒曜石
S72			〃	C区 1F	267	18.7	14.8	4.0	0.9	〃
S73			〃	〃 2F	391	18.2	12.7	2.9	0.6	〃
S74			〃	〃 1G	394	20.7	11.4	4.5	0.7	〃
S75			〃	〃 4E	283	19.8	11.6	2.3	0.4	〃
S76			〃	〃 1D	182	28.6	15.2	4.0	1.3	サヌカイト
S77			〃	〃 1F	267	23.5	10.9	3.4	1.1	〃
S78	67	65	石 磨	S区 K-09	802	57.0	26.0	12.0	17.5	〃
S79	209	65	石 磨	B区北壁トレーナー	38	65.0	22.0	6.2	10.3	黒曜石
S80	209	65	石 磨	C区 SD-01	613	60.7	34.6	5.7	8.4	サヌカイト

標表46 下山南通遺跡削片石器一覧表(B・C区)(2)

No.	所定番号	同定番号	分類	出土位置	取上番号	遺存状態	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材
S81	209		電石・融石	B区 基下	1276	亮	11.0	8.2	5.2	0.71	安山岩
S82	209		〃	C区 7B	588	暗	20.3	6.4	6.7	1.15	中生代火山岩類
S83			〃	C区 放置トレンド	52	〃	13.2	6.6	3.7	0.51	角閃石安山岩
S84	35		断石・敲打石	S I-10	424	光沢	5.7	8.6	4.1	0.28	角閃石安山岩
S85	192		〃	S区 SK-115	563	光沢	7.6	6.2	4.8	0.39	安山岩
S86	209		〃	B区 基下	1274	〃	13.8	7.6	4.6	0.91	砂岩
S87			〃		1276	亮	6.5	5.8	4.7	0.33	砂妙岩
S88			〃	C区 單土	187	〃	8.9	6.5	7.6	0.69	中生代火山岩類
S89	210		〃	C区 岩下	217	〃	12.2	8.3	5.3	0.94	閃綠岩
S90			〃		1276	〃	6.7	6.5	6.2	0.61	矽晶岩
S91			〃	B区 S-O	706	〃	11.9	6.6	6.0	0.71	石英安山岩
S92	209	65	〃	IV C区 1D	152	〃	5.6	2.7	0.5	0.01	種流紋岩
S93	33	65	〃	VI S I-09	21	〃	13.2	9.1	4.8	0.71	角閃石安山岩
S94		65	打 破 石	S区 SK-106	362	刃部欠	(15.8)	6.7	5.2	1.01	劣れい岩
S95	211	65	〃	B区 S-D-01	1261	光	18.5	13.2	3.8	0.96	安山岩
S96	211	65	〃	C区 2D	130	基礎欠	9.7	8.8	3.1	0.42	中生代火山岩類
S97			〃	C区K-10レンチ	4	刃部欠	8.4	8.7	3.4	0.29	中生代火山岩類
S98	95	65	磨 砕 石	S区 SK-38	862	〃	11.5	5.5	4.4	0.46	ミロナイト
S99	211	65	〃	C区 4E	428	亮	13.6	5.8	4.1	0.57	閃綠岩
S100	212	65	〃	C区 2H	273	〃	12.1	3.3	2.8	0.21	少碧岩
S101			〃	B区 鋸切跡	1274	基部欠	5.8	5.4	3.4	0.16	閃綠岩
S102			〃	C区 2F	569	刃部欠	7.2	5.3	4.2	0.20	中生代火山岩類
S103	212	65	縫 破 古	C区 8C	279	刃欠	14.0	3.1	0.42	安山岩	
S104	212	65	石	C区 2D	135	亮	28.0	17.1	6.6	4.94	花崗岩
S105	21	65	砸	S I-01	797	不明	5.4	5.1	1.6	0.04	溶氷化燃岩
S106	27	65	〃	S I-04	1281	光	44.2	28.0	8.5	17.7	輝石安山岩
S107	35	65	〃	S I-10	428	一期欠	8.4	2.6	2.3	0.09	兩面質砂岩
S108	43	65	〃	S I-15	464	光	24.8	17.5	5.7	3.53	角閃石安山岩
S109	123	65	〃	S区 SK-37	1073	不明	6.0	7.2	3.4	0.19	安山岩
S110	128	65	〃	S区 SK-72	982	光	10.9	4.5	1.2	0.09	泥灰岩月片岩
S111	128	65	〃	〃	1128	不明	9.0	6.6	1.4	0.16	角閃石安山岩
S112	142	65	〃	S区 SK-73	1255	刃欠	14.3	16.0	3.8	3.30	角閃石輝石安山岩
S113	142	65	〃	〃	1169	不明	20.5	18.6	6.9	4.32	角閃石輝石安山岩
S114	142	65	〃	〃	1161	〃	6.4	3.5	3.6	0.12	安山岩
S115	199	65	〃	集石-01	983	光	22.2	15.5	6.2	1.24	角閃石安山岩
S116			〃	〃	932	不明	10.2	6.5	5.5	0.60	角閃石安山岩
S117			〃	〃	934	〃	10.1	9.1	4.9	0.54	角閃石安山岩
S118	210	65	〃	B区 4O	1157	不明	8.3	7.9	2.6	0.26	アフライト
S119			〃	1L	698	亮	20.0	7.0	4.5	1.07	ひん岩
S120			〃	10L	748	〃	10.3	3.2	2.3	0.12	安山岩
S121			〃	C区 1F	267	不明	6.2	4.1	1.5	0.06	アフライト
S122			〃	2 F	599	〃	5.0	2.7	3.0	0.05	アフライト
S123			〃	B区 真土	699	〃	10.3	8.8	2.1	0.29	アフライト
S124			〃	C区 真土	188	〃	7.6	6.5	1.5	0.12	鶴島片岩
S125			〃	素上中一透	1293	〃	5.5	4.8	2.3	0.49	織物花崗岩
S126	212	65	石 道	B区 基下	761	13.1亮	12.0	4.8	0.6	0.06	墨岩

標表47 下山南通遺跡石核石器・研磨器一覧表①

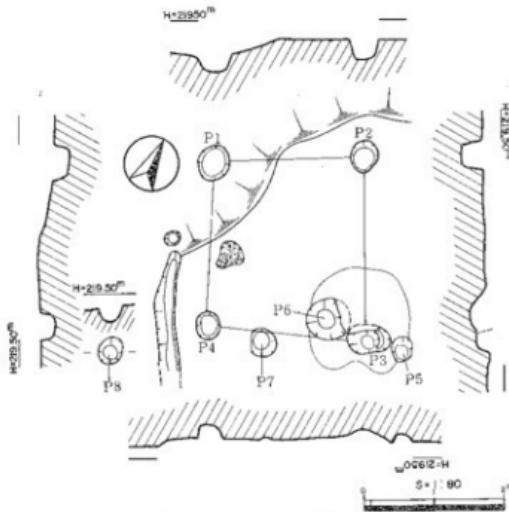
## 第5章 古墳時代以降の遺構と遺物

古墳時代以降の下山南通遺跡では平安時代前期の製鉄関連遺構（SB-07）と、C区中央を流れている旧自然河川より近世陶磁器を検出したのみである。

### 第1節 製鉄関連遺構

#### SB-07

- 位 置** C区中央南側の4Eグリッドに位置する。弥生時代北部遺構群の中央にあたり、北西下がりの傾斜面に立地している。弥生時代後期後半の竪穴住居S I-11と切り合っており、周辺にはSK-115~117が存在している。標高219.40mを測る。
- 形 態** 梁間1間（2.29m）、桁行1間（2.65m）の建物である。柱穴間距離はP1から217、265、229、232cmを測り、主軸はN-23°Wをとる。主柱穴間を結ぶ長方形の面積は5.46m<sup>2</sup>となる。
- 柱 穴** 各柱穴の規模はP1（53×47-25）、P2（46×41-33）、P3（61×41-24）、P4（41×34-22）cmを測る。各柱穴とも柱痕は認められなかった。
- 土 層** 各柱穴とも埋土は黒色粘質土一層であり、S I-11の土層断面ベルト（挿図37）でみるとP3はS I-11の埋土を切って掘り込まれている。
- ビット** SB-07の周辺には同時期と考えられるビットが4基検出された。P5、P6は主柱穴P3の内外に隣接し、S I-11床面でP5が（36×28-9）、P6（径65-12）cm、P3、4の中間にあるP7が（42×37-14）、P4の南西1.2mにあるP8が（36×23）cmを測る。これらのビットは柱穴とは考えられず、P6は埋土中に埋れた土



挿図213 SB-07遺構図

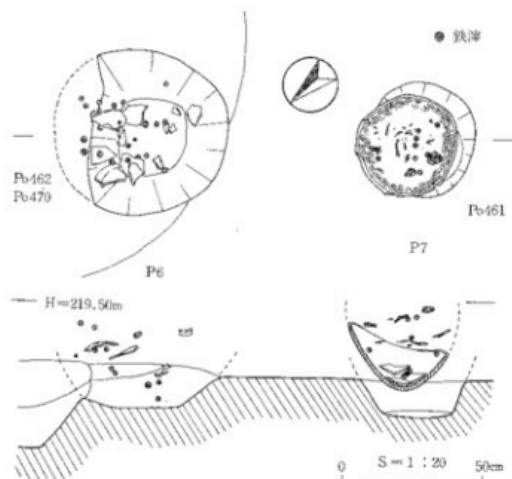
師器壺片 P o 466, 474 と鉄滓、炭化物が混在し、P 7 には、須恵器壺 P o 465 が埋め立てられ、鉄滓、炭化物、土師器片が入れられていた(挿図214)。P 8 からも鉄滓が出土している。但し焼上等は認められなかった。

遺物 ピット出土の土師器、須恵器、鉄滓の他に、S I-11埋土中からも、同時期の土師器片が出土している。さらに遺跡全体としてみると、S B-07 の位置する 4 E、4 F グリッドからのみ当該期の土師器壺、土師器壺 (P o 463) 黒色土器 (P o 464) が出土しており、本節に一括して掲載した。

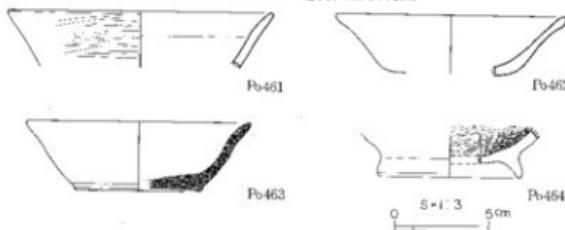
性格 鉄滓の出土からみて、S B-07 及び周辺ピットは、製鉄関連遺構と考える。その性格については第6章第3節、報告に譲る。

時期 出土土器から平安時代前期と考えられ、「<sup>14</sup>C」の分析結果によると、P o 465 内出七の炭化物の測量値は  $1100 \pm 15$  で、年輪年代は 9 世紀後半～10 世紀初頭となる。

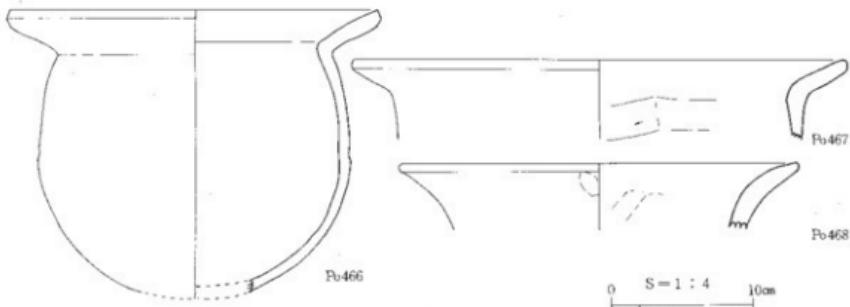
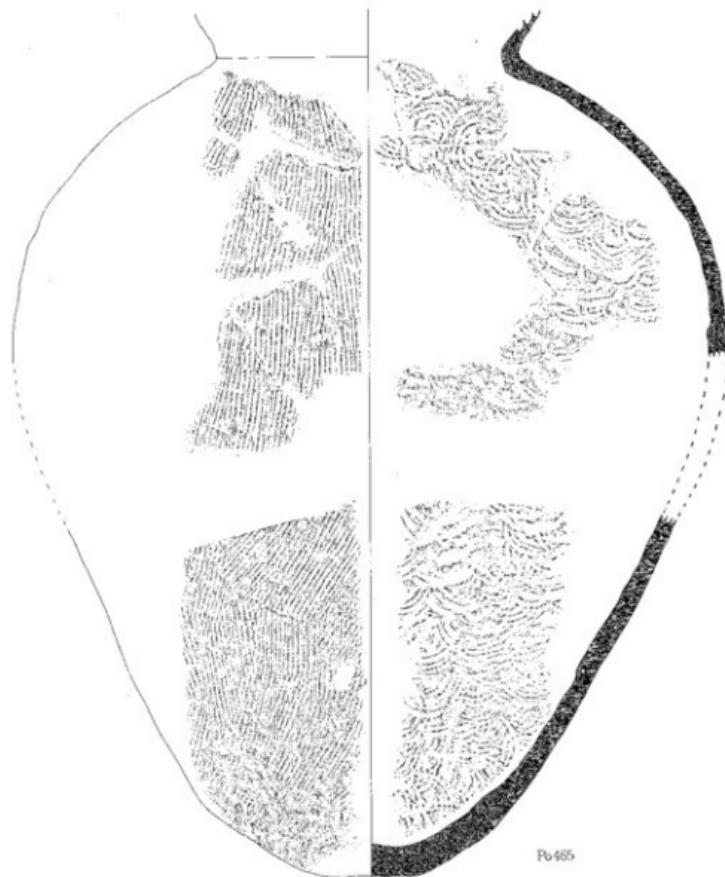
特筆事項 S B-07 の南東 2.5m に位置する SK-116 は時期判定の決め手を欠くが、炭化材を検出したことから、本遺構に伴う可能性が強い。



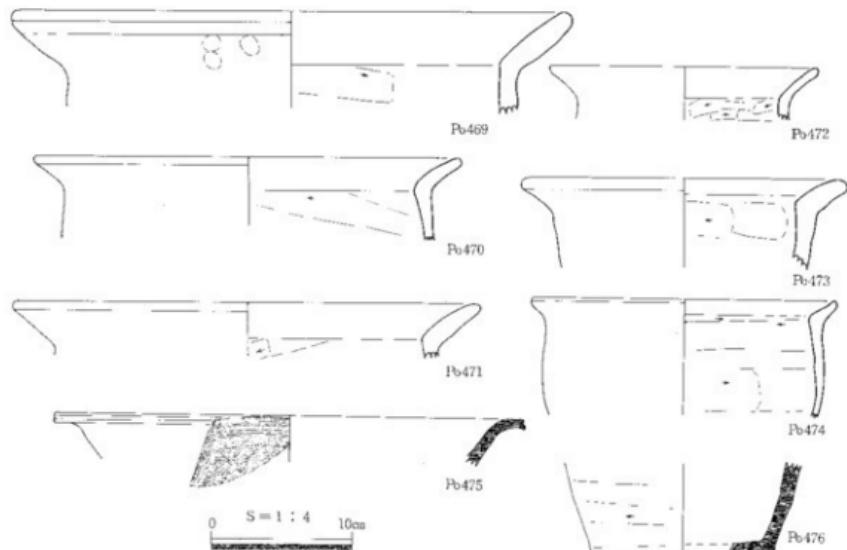
挿図214 S B-07 遺物出土状況図



挿図215 S B-07 関連遺物図①



插図216 S-B-07関連遺物図②



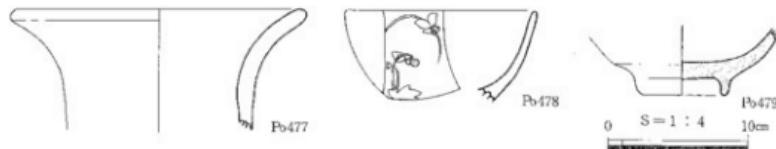
插図217 S B-07関連遺物図③

## 第2節 陶磁器

出土地点 P o 1～3は弥生時代北部遺構群の中央を北東から南西へ貫流する旧自然河川の1 Hグリッド付近で、埋土中から出土している。ローリングを受けた弥生土器等と共に伴して出土しており、流入したものである。P o 477は青磁花瓶？の口縁で中国产品と考えられる。P o 478は伊万里系の染付で18～19世纪の江戸時代後半のものである。

下山南通遺跡では平安時代初頭の製鉄関連遺構以後、近世陶磁器を除けば遺物は全く検出されていない。本遺跡から東へ150mの下谷川との接点際に製練渾を出土する下山南通たら跡が存在し、近くに鉄山墓と考えられる宝永7年（1710年）銘と刻んだ墓碑があることから、これに伴う遺物の可能性が高い。

註 「鳥取県生産遺跡分布調査報告書」鳥取県教育委員会 1984年



插図218 C区自然河川出土近世陶磁器実測図

遺物番号 古墳番号	取上番号	部 機	法 直 (cm)	形 種	手 法	備 考
Po461 215	S Y C 区 S I - 64 No557	环 (土器部)	便口径 14.0	薄手の环。口縁は外傾して聞く。 端部は丸くおさめる。	内外面強いナデ。	粘土 焼成 色調 石英を含む 良好 内外面暗赤褐色
Po462 215 66	S Y C 区 4 F No329	环 (土器部)	便口径 12.2	薄手の小型环。口縁は外傾して聞く。 端部はやや肥厚する。	内外面ヨコナデ。	粘土 焼成 色調 石英を含む 良好 内外面暗赤褐色
Po463 215 66	S Y C 区 4 F No338	环 (土器部)	便口径 12.0 深底径 6.8 高さ 3.7	上げ底袋足の内底から、ゆるや かに外傾す。端部は丸くおさめ る小型环。底部は糸切り後研磨 している。	内外面ヨコナデ。底面部切りぬき。	粘土 焼成 色調 紙状粉を含む 良好 内外面淡灰褐色
Po464 215	S Y C 区 4 F No289	环 (黑色 瓦)	便底径 7.6	やわらかな袋足の高台がつく。内 面両コロナデ。内面底部吸着後 再する环。	内外面コロナデ。内面底部吸着後 ヘタミガキ。	粘土 焼成 色調 砂粒を含む 良好 内面深黑色。外面明褐色
Po465 216 66	S Y C 区 4 F No223, 345, 332, 329 4 E No206, 209 S I - 04 No532	袋 (直筒型)	便口径 26.0	口縁部を欠損するが、丸底で側 縫部の胸部を丸くおさめる。底部 は張らない。器壁は厚い。	底部外面平行タタキ。内面タタ キによる同心円文。	粘土 焼成 色調 大粒の砂粒を多量に含む 不良 被覆色 外側一部スズ付着
Po466 216	S Y C 区 S I - 04 (土器部) No532, 536	袋 (直筒型)	便口径 26.0	「く」の字状に屈曲する単純口 縁。底部は丸くおさめ、器壁は 厚い。底部は張らない。	外周ヨコナデ。内面ナデ。	粘土 焼成 色調 石英、長石を多量含む 良好 褐色より深褐色
Po467 216	S Y C 区 3 E No601	便口径 (七筒型)	34.8	「く」の字状に屈曲する単純口 縁。底部は丸くおさめ、器壁は 厚い。底部は張らない。	外側エビタサエ後ナデ。内面口 縁ナデ。底部ナデ。	粘土 焼成 色調 大粒の安山岩粉を多量に 含む 良好 内面、淡褐色
Po468 216	S Y C 区 4 E No221	袋 (土器部)	便口径 27.9	ゆるやかに屈曲する単純口縁。 底部は丸くおさめ、器壁は厚い。 底部は張らない。	外周ヨコ縫部ナデ。他ユビオサ エ後ナデ。内面ヨコ縫部ヨコナデ。 底部ヘラケズリ後ナデ。	粘土 焼成 色調 大粒の安山岩粉を多量に 含む 良好 内面淡褐色、外側暗褐色 外側スズ付着
Po469 217 66	S Y C 区 4 F No336	袋 (土器部)	便口径 38.4	「く」の字状に屈曲する単純口 縁。底部は丸くおさめ、器壁は 厚い。底部は張らない。	外周ヨコ縫部ナデ。他ユビオサ エ後ナデ。内面ヨコ縫部ヨコナデ。 底部ヘラケズリ。	粘土 焼成 色調 石英、長石を多量に含む 良好 内面淡褐色、外側暗褐色 外側スズ付着
Po470 217 66	S Y C 区 4 F No332, 338	袋 (土器部)	便口径 29.9	「く」の字状に屈曲する単純口 縁。底部は丸くおさめ、器壁は 厚い。底部は張らない。	外周ヨコ縫部ナデ。他ヨコナデ 内面ヨコ縫部ヨコナデ。脚部ヘラ ケズリ。	粘土 焼成 色調 石英、長石を多量に含む 良好 内面、長石に多く含む 良好 内面淡褐色
Po471 217	S Y C 区 4 F No223	袋 (七筒型)	便口径 32.4	「く」の字状に屈曲する単純口 縁。底部は丸くおさめ、器壁は 厚い。底部は張らない。	外周ヨコ縫部ナデ。他ヨコナデ 内面ヨコ縫部ヨコナデ。脚部ヘラ ケズリ。	粘土 焼成 色調 大粒の安山岩粉を多量に 含む 良好 内面淡褐色
Po472 217 66	S Y C 区 4 F No629	便口径 (七筒型)	19.0	ゆるやかに屈曲する単純口縁。 底部は丸くおさめ。やや厚唇す る。器壁は厚い。底部は張らない 。	外周ヨコナデ。内面ヨコ縫部ヨコ ナデ。脚部ヘラケズリ。	粘土 焼成 色調 石英、長石を含む 良好 内面、明褐色 外側
Po473 217 66	S Y C 区 4 F No536	便口径 (土器部)	便口径 21.9	「く」の字状に屈曲する知い單 純口縁。底部は丸くおさめ、器 壁は厚い。底部は張らない。	外周ヨコ縫部ナデ。他ヨコナデ 内面ヨコ縫部ヨコナデ。脚部ヘラ ケズリ。	粘土 焼成 色調 石英、長石を含む 良好 内面淡褐色
Po474 217 66	S Y C 区 S I - 04 No536	便口径 (土器部)	便口径 21.4	「く」の字状に屈曲する知い單 純口縁。底部は丸くおさめ、内面 気孔す。底部は丸くおさめ。器壁は やや厚い。底部は張らない。	外周ヨコナデ。内面ヨコ縫部ケシリ後 ナデ。脚部ヘラケズリ。	粘土 焼成 色調 石英、長石を含む 良好 内面、明褐色 外側
Po475 217 66	S Y C 区 4 F No532	沿口 (直筒型)	便口径 33.0	受溝。端部外反し、頭をもつ。 外側に被試文を施す。	内外面ヨコナデ。	粘土 焼成 色調 紙状粉を多量含む 良好 内面淡青色、外側青灰褐色
Po476 217	S Y C 区 4 E No206	便口径 (直筒型)	便底径 13.0	平底。底部には直立気味の びり。	外周ヘラケズリ後底転ナデ。内 面ヨコナデ。	粘土 焼成 色調 長石、石英を含む 不良 内面淡褐色
Po477 218 66	S Y C 区 S D - 01 No572	便口径 (花瓶?)	便口径 10.6	背腹縫の口縁部。ゆるやかに外 反し、端部を丸くおさめる。	内外面輪。	国産と推われる
Po478 218 66	S Y C 区 S D - 01 No572	便口径 (花瓶?)	便口径 6.8	青色の染付を施した口縁部。	内外面輪。	伊万里系。下手。
Po479 218 66	S Y C 区 S D - 01 No614	便口径 (花瓶?)	便口径 6.8	輪の底部。底部に輪が浅く残る	内外面輪。	

拂表48 古墳時代以降土器観察表

## 第6章 若干の考察

### 第1節 繩文時代

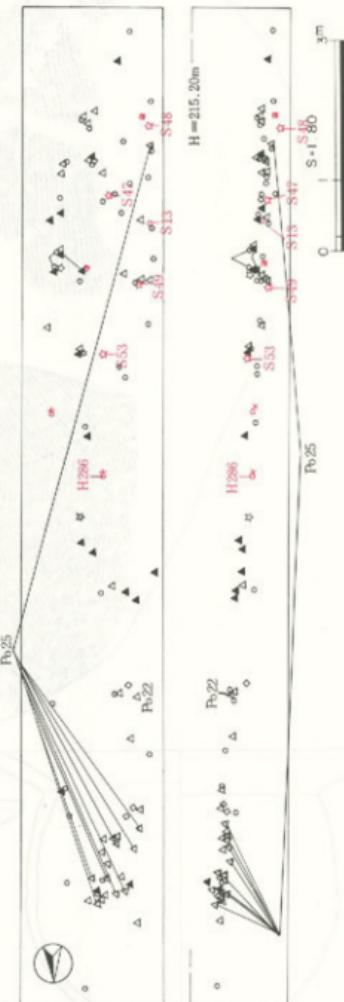
#### 居住空間の復原 (DOT-MAP 付図2~4参照)

今回の調査に伴なって作成したDOT-MAPを検討し、当時の居住空間の復原を試みる（出土遺物のほぼ全てをポイントあげている）。まず、垂直分布をみて該当遺跡の資料の妥当性を確認する。

垂直分布は、土器と石器・剣片・石核を別々に示しているが、そのうち現段階で明確に時期の相違が知られるものは、古い順に□（押型文土器）と△・▲・★（繩文・条痕系・刺突文土器）と●（無文粗製土器）の3段階である。遺物包含層は30~70cmの間にあり、包含層の厚い箇所では新旧の上下関係を、薄い箇所ではそれらの混在する状況を認めることができる。従って新しい時期の遺物は現位置を保つと考えられ、当時の居住空間を復原する資料として妥当性を持つと考える。以後、平面分布を参考にし検討を加えていく。

##### ①早期後半の居住空間（挿図222）

当時期の遺物と考えられるものは、押型文土器・無文土器の1部（Aブロック垂直分布で下位にDOTされるもの等）、少量の石器・剣片・石核である。それらの分布範囲をみると、2Aグリッド北西部及び東部、1Bグリッド東部、1Aグリッドの南東部～1Bグリッドにかけてそれぞれ分布する。大きくブロック分けしてみると、2Aグリッドに第1ブロック、1Bグリッド東部に第2ブロックが存在し、その中間に少量の遺物が散布する。これらの遺物分布範囲は、後に此地に居住した人間による清掃行為によって変化させられている可能性もあるが、その出土量が僅かなこと、分布範囲が小規模であることからして、当時の人間の此地における居住はキャンプ的居住であったと考えられる。また、石器・剣片・石核については、垂直分布より早期後半の時期に相当するものは極少



挿図219 下山南通り遺跡第20tr DOT-MAP

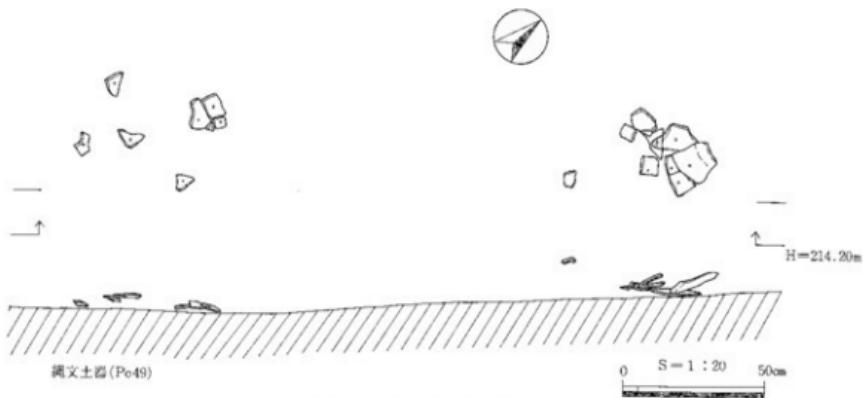
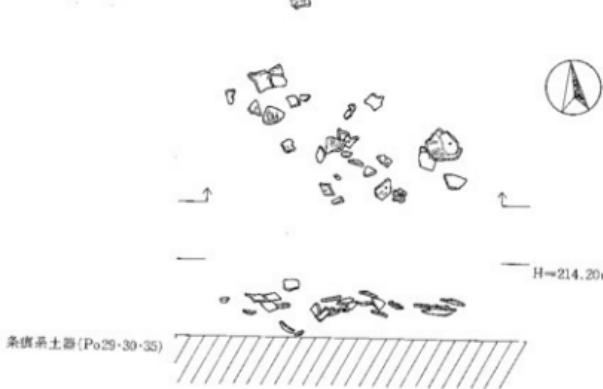
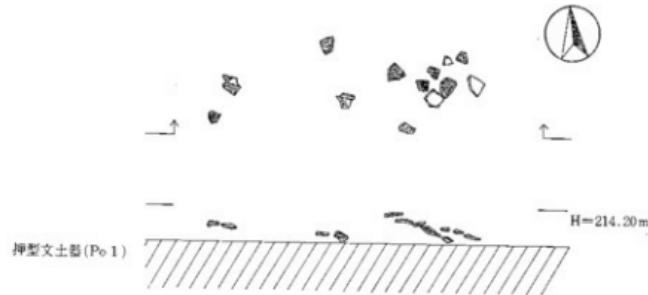


插圖220 線文土器出土狀況

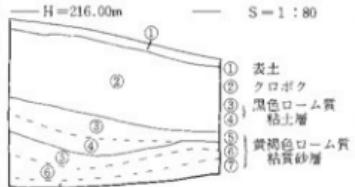
量であり、石器製作活動等については言及できない。

## ②早期末～前期初頭の居住空間（挿図223）

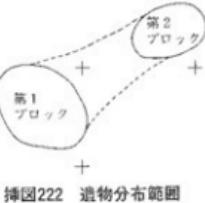
当時期の遺物と考えられるものは、縄文・条痕系・沈縫文・無文土器、石器・剝片・石核である。まず、土器の分布をみると、2Aグリッド東半部（第1ブロック）、1Bグリッド東部（第2ブロック）に特に集中し、1Aグリッド東部～1Bグリッド西部にかけて（第3ブロック）もまとまりをもって分布する。ここで興味深いのは、平面・垂直分布において、縄文土器と条痕系土器が同様な分布状況をみせることである。共伴関係にあると考えてよからう。石器・剝片・石核の分布をみると、2Aグリッド東南部（S1）に集中し、他（S2・S3）、は土器の分布範囲から外れることなく散布する。S1では横形剝片・剝片・石核等の出土がみられ、石器製作活動の存在を明確に示している。S1ほど明確ではないがS2・S3についても同様な性格を持つ地点と考えられる。

以上の土器分布と石器・剝片・石核分布を総合すると、まず、その出土量より長期間に及ぶ居住が想定できよう。そして、土器、石器・剝片・石核の分布は相互に重なり合い、且つ、それぞれにまとまりがみられ、複数のブロック（分布集中地点）を形成する。ブロックの数は土器の方が多く存在し、石器・剝片・石核のブロックは、そのうちに含まれる。これは日常居住空間（土器分布範囲）の中に石器製作の場（剝片・石核分布範囲）が存在したことを示している。本遺跡に住み着いた縄文人は、狭いテラスの上で土器を持ち歩いたり、時には石器製作を行なっていたのである。残念ながら居住跡を検出することはできなかつたが、おそらくは明瞭な掘り方を持たない構造のものであったのだろう。

従来、東日本においては、早期末～前期初頭にかけて住居数が増加し集落の定型化がみられるようになると言われているが、それとほぼ同時期に本遺跡に住みついた人間は、小規模な居住空間の中で日々を過ごしていたのである。西日本においては、縄文期の住居跡の発見例は乏しく、当然その変遷等について



挿図221 A区土層断面図



挿図222 遺物分布範囲



挿図223 遺物分布範囲

も不明瞭のままである。今後、あらゆる角度からのアプローチが加えられ、各時期の居住形態、集落形成等のパターンを究明していくことが、当時代の文化を知る上で重要な役割りを果たすであろう。最後になったが、調査初期に設定した第20トレンチ内の出土遺物DOT-MAPを挿図219に、本遺跡A区の土器出土状況を挿図220に、基本層位を挿図221に、出土遺物組成を挿表49・50に示した。参照して頂きたい。  
 (太田正康)

註1 土器1個体がまとめて出土している場合には、全破片のポイントを掲載するとポイントが潰れてしまう為代表となる破片のポイントを用いた。

註2 繩文・条痕文・刺突は現段階では共伴関係にあると考える。

註3 下山南遺跡A区では、当初独自のグリッド設定を行ない、その地区割りを用い調査を進めた。途中で変更することにより生じる混乱を恐れ、最後迄B・C・D区における一連の地区割りを利用しなかった。尚、各グリッドの北西に位置する杭をもってその地区名とする。

註4 土器の垂直分布と石器・剝片・石核の垂直分布を重ねると、早期後半の土器と同程度に下位に分布するものは極少量である。また、該当時期における石器製作活動は、此地ではほとんど行なわれなかつたと考えるのが妥当であろう。

註5 第20トレンチの大体の位置は付図2・3中に破線でその輪郭を示した。

文様	グリッド	1 A	2 A	3 A	0 B	1 B	2 B	0 C	1 C	2 C	20tr	その他	計
押型文		3	42			3	3				5	2	58
繩文		50	139	7	6	36	5				47	3	293
沈線文			7	3			2				2	2	16
条痕文系		85	147	9	7	263	7	1	1		24	15	559
刺突文			11			3	1	1					16
無文		28	276	1	2	126	18		2	1	42	5	501
無文(鉢製)			8			10						21	39
計		166	630	20	15	441	36	2	3	1	120	48	1,482

挿表49 A区出土縄文土器組成表

形態	グリッド	1 A	2 A	3 A	0 B	1 B	2 B	0 C	1 C	2 C	20tr	その他	計
石核			3			1						2	6
剥片		18	73	3	2	19	3				2	5	125
横形剥片		16	91	5	1	21	7				1	8	150
石刃						1							1
石刃状剥片			1										1
縦石刃			4			2	1				2		9
石鏃		3	17			5					3	1	29
石器			1			1							2
磨石・敲石		1	7	1		2	1				4		16
石斧		1											1
石錐				1		1							2
石頭			1										1
砥石												1	1

挿表50 A区出土石器・剥片・石核組成表

## 第2節 弥生時代

### 1. 壁穴住居跡

総 数 下山南通遺跡で検出した壁穴住居は、総数15基（段状遺構と呼ばれるものを含む）  
時 期 を数え、時期的には、弥生時代中期中葉、中期後葉、後期後半の3期に分けられる。  
位 置 位置的には、南部遺構群（中期中葉）、北部遺構群（中期後葉、後期後半）の2地域に  
分布している。内訳は、中期中葉3基（S I-01、04、05a・b・c）、中期後葉5基  
(S I-06、07、09、13、15)、後期後半3基（S I-10、11、12）である。その他、  
時期の判定できなかった住居については、その位置及び周辺の土壤の時期からS I-  
02、03、08を中期中葉、S I-14を中期後葉として扱った。しかしながら南部遺構群  
段状遺構 のうち、S I-07、14、15は所謂「段状遺構」と呼ばれるものであり、ここでは住居  
として扱うが、壁穴住居の構造変遷の資料としては除くことにする。

#### 弥生時代中期中葉（S I-01、02、03、04、05a・b・c、08）

平面形 平面形は、円形3基（S I-01、02、05a・b・c）、隅丸方形1基（S I-04）、  
主柱構造 隅丸長方形1基（S I-08）、方形1基（S I-03）であり、S I-01、02は2主柱構造、  
S I-05aは7主柱構造、S I-05b・cは8主柱構造、S I-03、08は無主柱構造である。S I-04は、5基のピットを検出したが、他住居の主柱穴の規模と比較  
するとかなり貧弱であるため、従常的な居住のための住居構造に伴う主柱穴とは異なる  
ものであろうと判断した。S I-03、08を除く住居には、床面直上に焼土や炭が堆  
積しており、すべての住居の床面は固く叩きしめられている。

#### 弥生時代中期後葉（S I-06、09、13）

平面形 平面形は、円形1基（S I-13）、隅丸方形1基（S I-06）、隅丸長方形1基（S  
主柱構造 I-09）であり、S I-13は3主柱構造（推定）、S I-06は3主柱構造、S I-09は無主  
柱構造である。焼土はS I-13にのみ存在しておらず、S I-06、13の床面は叩きしめられ  
ている。

#### 弥生時代後期後半（S I-10、11、12）

平面形 平面形は、不整円形1基（S I-12）、隅丸方形1基（S I-11）、隅丸五角形1基（S I-  
10）であり、S I-12は3主柱構造、S I-11は4主柱構造、S I-10は5主柱構造である。  
いずれも残存壁高が50~70cmと最も高く、土堤の巡る中央ピット、焼土面等が普遍的に認められる。  
また、S I-10では鉄器が出土しており、鉄器の使用が既に始まっていることが窺われる。

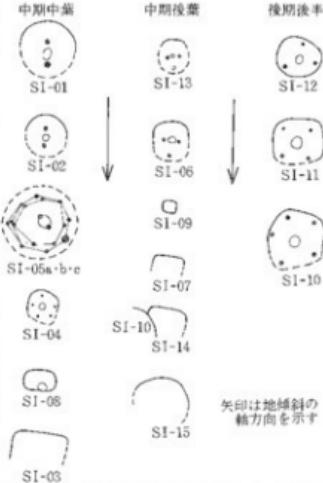


図224 壁穴住居模式図 (S=1:600)

## 竪穴住居の変遷

米子市背木遺跡では弥生時代の竪穴住居平面プランの変遷は、円形→隅丸方形→隅丸多角形をとるとされている。本遺跡では、遺構数が少ないため明確なことはいえないが、全体的にはこの流れに沿っていると想定される。

個別にみると、S I-01、02（中期中葉）からS I-06、13（中期後葉）への一連の変遷が認められる。S I-01、02は、2主柱構造を持つ円形の住居で、S I-06、13は、3主柱構造を持つ隅丸方形、円形の住居であるが、中央ピットを挟んで2本の主柱が存在するという点で類似している。また3本目の主柱は、S I-06に見られるように、床面に対して斜めに立てられており、これは、S I-01、02の2本の主柱が地傾斜に平行に立てられているのに対し、S I-06、13では地傾斜に直交して建てられるに起因するものと考える。つまり、中央ピットを挟んで2本の主柱を立てるという基本は変わらないが、地傾斜に対する配置の変化によって3本目の主柱を建てる必要性が生じたのであろう。その理由として、S I-06、13は、S I-06で床面の1位、S I-13で16位を境に、黄色粘土（地山）面が急傾斜で下方（北側）にもぐり、軟質な暗茶褐色粘土層に変わることから、S I-01、02と同様な立て方をした場合、斜面下方の主柱を軟弱な地盤に立てるしかなく、これを避けるために、2本の柱を堅固な地盤（黄色粘土）に立て、支えとして3本目の主柱を立てた結果、前述の構造となつたのであろうと考えられる。また、S I-01、02及びS I-06、13の類例が、背木遺跡及び岸本町林ヶ原遺跡等で認められないことから、本遺跡独自の住居構造であ

遺構番号	平面形	規模(m)	床面積m <sup>2</sup>	床面傾斜	床面變遷	土柱穴	副溝	既窓	中央ピット	出土遺物	時期
S I-01	円 形	(5.30) × (3.40)	28	19.1	2	あり			あり	瓦、漆器、竹織籠、器G	新石器時代 中期 中葉
12	*	(4.10) × (2.40)	14	6.1	2	なし			なし		中期
03	万 形	-25.90	9.19	14.4		なし					中期（後葉）
04	隅丸方形	25.22-30	7.3	28.8	(5)	なし		あり	瓦、漆器、竹織籠、器G、漆串、石圓、漆台	中期 中葉	
a	円形（推定）	(4.5.76)			7						
05. b	*	(16.50)	55.4	0	8			あり	（漆、瓦器、漆串）	中期 中葉	
c	*	(16.50)			8						
06	隅丸方形	長23.00	11.5	13.5	3	あり		あり	瓦、漆器	中期 後葉	
07	隅丸方形 (又は長方形)	-23.10		14.8		なし					(後葉 定)
08	隅丸方形	3.26 × 1.95	5.71	28.9		なし		あり			中期（推定）
09	*	2.22 × 1.92	3.78	18.4		なし			漆、瓦器、漆串、漆台、漆串	中期 後葉	
10	隅丸丘角形	幅5.86	23.28	67.5	5	なし	あり	あり	漆、瓦器、漆串、小型壺、漆壺、漆器、漆串、石圓	中期 後葉	
11	隅丸方形	-25.5.1	26.0	30.4	4	なし	なし	なし	漆、瓦器、漆串	後葉	
12	円 形	3.94 × 3.64	10.96	32.2	3	なし		なし	瓦、漆器	後葉	
13	d				8.5	(3)	なし	(あり)	漆器	中期 後葉	
14	隅丸方形	-25.40	18.5	19.5						中期（推定）	
15	e	長26.44		24.8					漆、瓦、高環、瓦器、漆	中期 後葉	

摺表51 竪穴住居一覧表

( ) 中の数値は推定値

るといえる。

また、青木遺跡では中央ピットの位置の変遷は、床面中央楕円形→中央方形(二段)→壁際方形(二段)となり、青木V・VI期に竪穴方形化とあいまって、壁際に固定されるとあるが、本遺跡のS I-08(隅丸長方形、無主柱)は、この原則に反するものであり、林ヶ原遺跡でも類例が認められることから、これも本遺跡に見られる特徴としてあげられる。

(松本琢己)

## 参考文献

『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅲ』 1976～78 烏取県教育委員会

『久古第3遺跡・貝田原遺跡・林ヶ原遺跡発掘調査報告書』 1984 烏取県教育文化財団

## 2. 挖立柱建物跡

**総 数** 下山南通遺跡において検出した掘立柱建物は、総数14棟を数える。時期的には、柱穴より弥生時代中期に比定される土器片を出土したS B-11、12、13、平安時代前期に比定される遺物を伴うと考えられるS B-07等、判断の下し得る建物もあるが、大部分は遺物を全く出土しなかった。そこで、本遺跡に関しては、その属する遺構群に準拠することにし、南部遺構群(S B-01～05、弥生時代中期中葉)と北部遺構群(S B-06～14、弥生時代中期後葉・後期後半)とに分けた。

**建物の形態** 建物の形態の内訳は、南部遺構群で1×2間が2棟、1×3間が1棟、2×5間が2棟、北部遺構群で1×1間が2棟、1×2間が3棟、2×2間が1棟、2×3間が1棟、2×4間が1棟、不明(?×3間)が1棟である。

**南部遺構群** そのうち、南部遺構群のS B-01では、遺構内に隅丸長方形の土壙S K-01が存在していた。桁行において、P 1～4ならびにP 10～13までの各柱穴間距離は、P 5・6ならびにP 8・9間の柱穴間距離とほぼ等間隔だが、P 4・5ならびにP 9・10間の柱穴間距離は他に較べて長い。これは土壙の存在と関係があるようと思われる。

建物内に地下構造をもつものは、本遺跡ではこの一例のみで注目に値する。

**北部遺構群** また、北部遺構群のS B-12は、束柱をもった2×2間の総柱建物で、柱穴規模がS B-07に次ぐ大きさであり、他の建物に較べて大きい。同遺構群で、S B-12より間数の多いS B-14(2×4間)のような比較的大きな建物ですら、1×2間の建物(S B-9、10、11)と変わらない柱穴規模をもつことから機能の違いが想定される。

**配置構成** 全体をながめてみると、掘立柱建物は、南北両遺構群において、大きな建物と小さな建物が隣接している。すなわち、南部遺構群では、①S B-01、08、②S B-02、03、05の2群、北部遺構群では、③S B-09、10、④S B-11、12、⑤S B-13、14の3群である。さらに、各建物群は、それぞれ周辺にいくつかの竪穴住居および袋状土壙と混在している。建物群①ではS I-01、02、08およびS K-18、建物群②ではS I-03、05およびS K-17、43、44、56、57、69、81、建物群③ではS K-108・109、建物群⑤ではS K-99、100、102である。土壙の不足、住居の欠落については、調査区外に含まれていたり、あるいは、後世の水路(A～C区、D区と調査区を2分する

もの)による消滅の可能性が考えられる。

袋状土壌 このように、大・小の建物、住居、袋状土壌に一つのセット関係が成り立つようである。その場合、袋状の土壌は、植物遺体の検出はできなかったが、貯蔵的な機能を果したと推定され、小規模な掘立柱建物は袋状土壌との関連より、穀物等の食料以外のものを納める倉庫的意味合いが強いと考えられる。しかし、厳密にいえば、建物の時期が特定できない以上、その同時期性については、今少し検討の余地がある。ここで、小さな建物を倉庫と考えてみると、貯蔵内容の相違、乃至は貯蔵形態の時期的変遷を窺うことが可能となろう。また、大きな建物についていえば、長棟建物の存在を考え合わせると、共同作業場等が推定できよう。  
(西原徳尊)

註1 鳥取県教育委員会「青木遺跡発掘調査報告書」1976においては、12m<sup>2</sup>以下を倉庫、それ以上の規模を住居と考えている。

註2 主軸方向の規則性を時期の変遷に試みたが、その規則性は見出しえなかつた。

遺構名	桁×梁(間)	桁行(m)	梁行(m)	長方形度	床面積(m <sup>2</sup> )	主軸方向		
S B-01	5×2	7.86	7.85	2.88	2.87	2.73	22.58	N-24'-W
S B-02	5×2	7.29	7.27	2.84	2.81	2.56	20.57	N-80'-W
S B-03	2×1	3.08	3.03	2.38	2.21	1.29	7.01	N-32'-W
S B-04	2×1	3.44	3.11	2.81	2.62	1.22	8.90	N-7'-W
S B-05	3×1	5.60	5.09	2.56	2.49	2.18	13.50	N-66'-E
S B-06	3×2	4.11	3.97	3.39	3.30	1.21	13.51	N-16'-W
S B-07	1×1	2.65	2.32	2.29	2.17	1.15	5.85	N-23'-W
S B-08	3×?	5.05	—	—	—	—	—	N-29'-E
S B-09	2×1	4.74	4.53	2.81	2.66	1.68	12.68	N-33'-W
S B-10	2×1	3.08	2.81	2.32	2.18	1.32	6.63	N-48'-E
S B-11	2×1	3.19	2.94	2.03	1.94	1.57	6.08	N-37'-E
S B-12	2×2	3.36	3.09	2.82	2.70	1.19	8.90	N-9'-E
S B-13	1×1	2.38	2.35	2.24	2.20	1.06	5.25	N-25'-W
S B-14	4×2	5.89	5.62	3.10	2.86	1.90	17.16	N-54'-E

挿表52 掘立柱建物一覧表

(長方形度=桁行/梁行)

### 3. 土壌

下山南遺跡における土壌の総数は、123基にのぼり、その内、南部遺構群で85基、北部遺構群で38基を数える。ここでは、土壌数の多かった南部遺構群を中心に、土壌のまとめとしたい。南部遺構群に存在する土壌は、S I-04に付属すると思われるSK-75・76・77を除いては、すべて南西下がりの緩傾斜地に帯状に遺構を連ね、住居跡5基、掘立柱建物跡5棟に対して土壌の数は85基とその群を抜いている。SK-60の縄文土壌1基の他は皆、弥生土壌と考えられ、その内63基までが弥生中期の土器片を出土している。以下、南部遺構群における弥生土壌について、特徴的なものをとりあげてまとめたが、その中で割愛したものも多い事を了承されたい。

土壌の平面形態から見ると大きく、円形27基、楕円形22基、隅丸長方形34基、不明なもの2基に、また、断面形態から見ると袋状、及び袋状に近いもの（壁の最小傾斜角が90°未満）18基、直

立形(壁の最小傾斜角が90°～100°未満)23基、逆梯形(壁の最小傾斜角が100°以上)41基、皿状2基、不明のもの2基に分類できる。規模においては、深さ<sup>±1</sup>が浅いもので8cm(S K-55)、深いもので80cm(S K-57)とばらつきが見られるが、過半数は、20～30cmの範囲に含まれる。また床面積については、3m<sup>2</sup>を越えるS K-05、07、82のような大型のものから、0.5m<sup>2</sup>にも届かない小型のものまであり大小様々である。

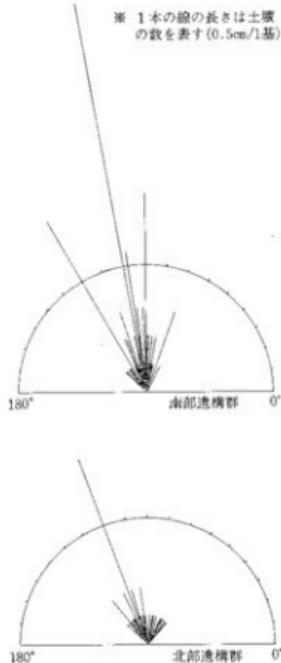
#### 袋状貯蔵穴 土壙の中で袋状土壙と言われるものは、その

使用法について諸説があるものの一般的に貯藏穴とされており、ここではこれに従いたい。南部遺構群においては、明らかに袋状を呈すると思われるS K-17、18、43、56、57、69、81がこれにあたる。いずれも入口が狭く、内側で広くなっている袋状を呈し、底面形がS K-17、56が梢円形に近い橢丸長方形を呈する事を除けば、梢円形、円形の典型的な袋状土壙である。またこれらの土壙に壁溝、ピットを伴うものは1つもなかった。規模は、床面積が2m<sup>2</sup>を越えるもの(S K-17、43、56、57)から1m<sup>2</sup>に満たない小型のもの(S K-18)まであり、深さも30～80cmと様々である。この他の土壙で袋状に近いものは、20基近く見られるが、これらの土壙もかつて袋状土壙であった可能性を考えられる。特に南部遺構群の北東側に集中する小型土壙群(S K-18、21、23～29、32、33、35)は、壁の最小傾斜角が90°未満あるいはそれに近いものが多い事、また埋土の状態が壁の崩壊土と思われる左右対称の層を持っているものがある事など袋状土壙の可能性が強い。これら小型土壙群が貯蔵穴であるとするならば、大型の袋状貯蔵穴が散在する事と合わせて興味深い現象である。この事は、大小の貯蔵穴間で何らかの使い分けがあったものか、或いは、所有形態の差によるものであるかもしれない。

袋状貯蔵穴の中には、弥生中期中葉と考えられる土器を出土しているものが多数あるがそれらの検出状況は、土器、円礫が無造作に投げ込まれた状態のもの(S K-57)や後の流れ込みと思われるもの(S K-17、81など)が多い。この様な類例は他でも報告されているが、貯蔵穴として使用された後、土器、その他廃棄物の処理場として利用された可能性が高いと考えられる。<sup>26</sup>

北部遺構群において袋状貯蔵穴と思われる土壙はS K-93、96、99、100、102、105、108の7基が数えられる。いずれも底面が円形を呈する袋状土壙である。

\* 1本の線の長さは土壙の数を表す(0.5cm/1基)



插図225 土壙の最小傾斜角

**長方形土壙** 南部遺構群には、平面形、断面形共に袋状土壙とは異なる長方形土壙が存在する。所謂、平面形態による分類で隅丸長方形としたものである。土壙総数84基中34基とその $\frac{1}{2}$ 以上を示め、規模的には、床面積が1m<sup>2</sup>未満の3基を除くなら、2m<sup>2</sup>以上が12基と、比較的規模の大きなものが目立つ。これらの土壙が何を意図して掘られたかは明らかではないが、袋状土壙とは性格が異なると思われる。壁の最小傾斜角、埋土の様子からかつては袋状を呈していたと思われる土壙も3基（SK-01、52、80）存在するが、所謂袋状貯蔵穴と呼ばれるものを意識して造られたとは考えられない。これらの土壙は四隅が比較的明瞭な長方形を呈すA類（SK-01、08、15、27、35、46、47、49、52、58、70、72、76、80、86）と、四隅の丸いB類（SK-03、05、07、09、36、38、39、48、63、65、66、77、82、83）とに大きく分類できる。A類の中で注目されるものにSK-01がある。これは南部遺構群の東側にある土壙でSB-01の柱穴プラン中に存在し、SB-01に付属するものと考えられるが、上部構造、性格等は不明である。その他に、北部遺構群ではあるが土器の出土状況の解かるSK-106がある。底面に土器が密着した状態で重なりあって出土し、ほぼ完形品になる甕が3個体ほど存在した。これは、土壙墓などの出土状況とは異なっており、また、袋状貯蔵穴にみられる土器のあり方とも似ていない。袋状貯蔵穴にA類の土壙がない事からも、袋状貯蔵穴とは機能の違う土壙である事が推測される。B類中においては、SK-66が注目される。この土壙からは、文様を華麗に飾った大型壺、甕、高坏が据え置かれた様な状態で出土している事、また、高坏の数が多い事など他の土壙とは区別されるものである。SK-83はSK-84（底面形は円形）と同様に焼土が土壙中央に10cm程の厚さで堆積していた。炭化物の出土がなかった事、割合やわらかい焼土が厚く堆積している事等から焼土は人為的に入れられたものと思われる。北部遺構群でもSK-90に見られ、焼土は固く叩きしめられていた。これらの事から、墓、貯蔵穴などとは考えにくく、それ以外の性格を持っていたと推測される。北部遺構群においてもA類（SK-95、106、117）、B類（SK-07、114、115）が存在する。

**集石状土壙** 南部遺構群で1基、土壙中に石が塊まって存在するSK-45がある。埋土中には炭化物や焼土は含まれておらず碳も赤変していない事から火を使った可能性は薄く炉として使用されたものではないと考えられる。北部遺構群にも集石状土壙SK-97、110が存在するが、これらもSK-45と同様石が投げ込まれたというよりも人為的に集められたという感じの検出状況であった。SK-110はSK-45、97と比べて規模も大きく形態も不整形を呈している事、また土壙中に環状の石列が見られる事など様相を異にしており、性格も若干違うと考えられる。その他、袋状貯蔵穴と考えたSK-109なども壙内一杯に塊石を詰め込んでいる事など注意したい。これら集石状土壙が、どのような性格を持っていたかは不明であるが、これらの土壙が皆同じ機能であったとは考え難く、今後検討していくべき問題である。

**特殊土壙** 多数の土壙の中でどの土壙とも全く様相を異にしているものに、南部遺構群西側に

位置するSK-62、72がある。これらの土壙は、土層断面より、SK-62を72が切っているという見方と、SK-62、72が一つの土壙であるという見方の二つが想定される。これを一つの土壙として捉えた場合、考えられる性格として木棺土壙墓が挙げられるが、断面観察では、木棺痕跡も見られず小口板の埋め込み溝もみられなかった。遺物出土状況も半ば、投げ込まれた様な状態で出土した事と合わせて、土壙墓という可能性にも疑問が残る。しかし、これを2つの土壙の切り合い関係とする見方も肯綮難く、土壙墓でも形態が違うものとして捉えたい。

以上、南部遺構群の土壙について主なものを見てきたが、袋状貯蔵穴の他は性格の不明なものが多くいた。弥生時代中期中葉を中心とする南部遺構群の土壙は、住居跡、掘立柱建物跡の数に比較して圧倒的多数を占める事、また、これと関連して袋状貯蔵穴が南部で8基、弥生時代中期後葉、後期後半を中心とする北部で7基とあまり大差ないに比べ、その他の土壙数が南部で著しく多い事は注目すべき事である。これらの現象は時期的な差になるものと考えられるが、掘立柱建物跡の分布などからも考察していくべきであろう。また、それに加えて、大型袋状貯蔵穴と小型袋状貯蔵穴の分布の問題、また、今回の下山南遺跡で明確な墓域を持つ様な土壙墓が確認出来なかつた事など、長方形土壙をはじめとする土壙群の性格も合わせて今後の課題としたい。

註1 円形、楕円形、隅丸長方形の3分類を行なったが、その中には、不整円形、不整楕円形なども含まれる事を了承された。

註2 土壙の断面で壁の角度が最小である所を測った。これは、壁の崩れも比較的少なく、従来の断面形態を最も良く残していると思われる所である。

註3 あくまでも検出面から底面までの深さであり、本米の深さよりは浅いと思われる。

註4 土壙墓という説もあるが土器の出土状況などからここでは貯蔵穴と考える方が妥当であろう。

註5 岡山県津市、大田十二社遺跡においてもその群在傾向が認められる。中山俊紀『大田十二社遺跡』津市市教育委員会 1981

註6 『久古第3遺跡、貝田原遺跡、林ヶ原遺跡』鳥取県教育文化財団 1984

註7 岡山県津市、竹ノ下遺跡では貯蔵穴とは機能が異なるとされる。中山俊紀『京免・竹ノ下遺跡』津市市教育委員会 1982

註8 B類に袋状土壙の可能性が強い土壙が多い傾向がありA類には見られない。(浅川美佐子)

土壙名	平 形	新圓形	高 底 小 幅(横径×縦径×高さ)	幅( cm )	床面積 ( m <sup>2</sup> )	長軸方向	短軸方向	頂 物	時 期
SK-01	隅丸長方形	空 状	87°	216×110 47	2.4	N-65°-E	223.00	施、底部	中期中葉
SK-02	不 整 円 形	逆梯形	109°	125×123-38	1.2		221.48	要	中 期
SK-03	隅丸長方形	直 立	93°	121×91-23	1.3	N-75°-E	222.32	施、底部	中期中葉
SK-04	不 整 円 形	逆梯形	120°	37×27-37	0.1		218.20	なし	( 中 期 )
SK-05	隅丸長方形	逆梯形	103°	200×156 54	3.1	N-68°-E	221.78	査、裏、窓環、底部	中期中葉
SK-06	円 形	逆梯形	120°	127×127-25	1.3		221.09	土器片	中期(中葉)
SK-07	隅丸長方形	逆梯形	100°	225×182-50	4.0	N-10° W	220.55	施、底部	中 期
SK-08	隅丸長方形	梯形	100°	165×160 60	2.6	N-63°-E	219.80	施、窓環、底部	中期中葉
SK-09	隅丸長方形	逆梯形	120°	144×92-28	1.3	N-19°-W	219.70	査、底部、石塊	中 期
SK-10	椭 圆 形	横 状	89°	132×58-27	0.6	N-10°-W	220.76	なし	( 中 期 )
SK-11	椭 圆 形	直 立	90°	216×65-33	1.1	東北	220.86	底部	中 期
SK-12	扇 形	逆梯形	114°	106×65-15	0.5	N-8°-W	220.76	なし	( 中 期 )
SK-13	隅丸長方形	逆梯形	108°	96×26-22	0.2	N-44° W	221.54	なし	( 中 期 )

土壤名	半面形	断面形	断面角	断面小角	幅(溝溝×幅幅)	幅(溝溝×幅幅)	断面積(m <sup>2</sup> )	長軸方向	体面積(m <sup>3</sup> )	腐物	時期
SK-14	千明	直状			(50) × (40) - 26				222.80	なし	(中期)
SK-15	溝丸長方形	直立	94°		135 × 91 - 57	1.2	N-14°-E	220.40	腐化		中期
SK-16	不整圓形	逆傾形	136°		97 × 45 - 33	0.3	N 13°-E	215.71	豊、瘦、遠部		中期中葉
SK-17	溝丸長方形	袋狀	77°		181 × 160 - 33	2.9	N-20°-W	215.64	豊、瘦、高坏、底部 石砾		中期中葉
SK-18	円形	袋狀	81°		81 × 77 - 39	0.5		224.32	土器片		中期
SK-19	円形	直立	98°		84 × 78 - 25	0.5		224.24	なし		中期
SK-20	円形	袋狀	88°		86 × 77 - 37	0.5		223.86	土器片		中期
SK-21	円形	直立	90°		94 × 88 - 38	0.6		223.72	なし		(中期)
SK-22	円形	逆傾形	100°		107 × 107 - 35	0.9		220.92	豊		中期中葉
SK-23	円形	直立	90°		87 × 83 - 31	0.6		223.68	土器片		中期
SK-24	円形	直立	96°		77 × 76 - 24	0.5		223.52	なし		(中期)
SK-25	円形	直立	90°		83 × 79 - 31	0.5		223.38	なし		(中期)
SK-26	円形	袋狀	84°		107 × 106 - 39	0.9		223.36	なし		(中期)
SK-27	溝丸長方形	直立	90°		122 × 94 - 27	1.1	N-60°-E	222.90	土器片		(中期)
SK-28	橋円形	逆傾形	100°		68 × 57 - 24	0.3		223.86	なし		(中期)
SK-29	横円形	直立	98°		57 × 37 - 29	0.2		223.30	なし		(中期)
SK-30	横円形	逆傾形	130°		89 × (28) - 15	0.2	N 4°-W	220.53	なし		(中期)
SK-31	溝丸長方形	直立	98°		140 × (47) - 43	0.7		219.72	なし		(中期)
SK-32	円形	逆傾形	100°		112 × 97 - 33	0.9		222.80	土器片		中期
SK-33	円形	逆傾形	100°		96 × 85 - 24	0.6		222.96	土器片		中期
SK-34	橋円形	直状			89 × 78 - 27	0.5		223.90	なし		(中期)
SK-35	溝丸長方形	直立	98°		131 × 108 - 30	1.4	N-63°-E	223.17	土器片		(中期)
SK-36	溝丸長方形	袋狀	67°		167 × 110 - 44	1.8	N-87°W	221.86	なし		(中期)
SK-37	不整圓形	袋狀	78°		135 × 97 - 37	1.0	N-20°-W	222.20	豊		中期中葉
SK-38	溝丸長方形	逆傾形	100°		148 × 110 - 32	1.6	N-43°-W	221.17	豊、瘦、石原		中期中葉
SK-39	溝丸長方形	逆傾形	100°		170 × 121 - 40	2.1	N-60°-W	221.66	豊、底部		中期
SK-40	円形	逆傾形	100°		117 × 104 - 30	1.1		221.55	土器片		(中期)
SK-41	不整橢円形	逆傾形	102°		(112) × 95 - 26	0.8		222.03	土器片		(中期)
SK-42	橋円形	逆傾形	108°		123 × 91 - 31	0.9	N 25°-W	223.27	豊		中期中葉
SK-43	円形	袋狀	84°		171 × 171 - 48	2.3		221.65	豊、底部		中期中葉
SK-44	円形	袋狀	85°		154 × 150 - 60	1.8		215.28	豊		中期中葉
SK-45	不整圓形	直立	92°		122 × 112 - 30	1.1		217.64	豊、瘦、高坏、底部		中期中葉
SK-46	溝丸長方形	袋梯形	120°		148 × 108 - 18	1.6	東北	218.15	土器片		(中期)
SK-47	溝丸長方形	直立	98°		202 × 130 - 28	2.6	N-25°-W	221.95	豊		中期中葉
SK-48	溝丸長方形	逆傾形	100°		175 × 97 - 42	1.7	N-54°-E	221.42	豊		中期中葉
SK-49	溝丸長方形	直立	96°		128 × 82 - 18	1.0	N-35°-W	221.53	訪跡車		(中期)
SK-50	圓形	逆傾形	100°		132 × 116 - 30	1.2	N-7°-W	221.32	豊、底部		中期
SK-51	不整橢円形	逆傾形	100°		72 × 65 - 10	0.4	N 64°-E	221.40	なし		(中期)
SK-52	溝丸長方形	袋狀	89°		127 × 77 - 26	1.0	N-16°-W	221.80	豊、底部		中期
SK-53	不整橢円形	逆傾形	120°		113 × 100 - 18	0.9	N-42°-W	220.86	土器片		(中期)
SK-54	橋円形	直立	96°		124 × 94 - 27	0.9	N-50°-E	223.22	土器片		中期
SK-55	橋円形	逆傾形	124°		135 × 79 - 8	0.8	N 8°-W	215.84	土器片		中期
SK-56	溝丸長方形	袋狀	89°		182 × 143 - 45	2.6	N-40°-W	218.28	豊、瘦、底部		中期
SK-57	円形	袋狀	82°		190 × 170 - 81	2.5		217.46	豊、瘦、高坏、底部		中期中葉
SK-58	溝丸長方形	逆傾形	109°		117 × 78 - 41	0.9	N-12°-W	218.46	豊		中期

土壤名	平面形	剖面形	最小 厚度(cm)	幅×廣(cm) (24×48-88)	地面積 (cm <sup>2</sup> )	長軸方向	面積 (cm <sup>2</sup> )	遺物	時期
SK-59	椭円形	直立	97	78×75-32	0.5	N-75°-E	218.47	土器片	中期中葉
SK-60	不明			(13)				陶片	漢文字跡
SK-61	椭円形	逆傾形	120°	75×50-26	0.3	N-40°-E	215.60	土器片	中葉
SK-62	椭丸長方形	逆傾形	112°	169×148-36	2.3	南北	215.12	なし	不明
SK-63	椭丸長方形	直立	93°	162×107-40	1.7	N-15°-W	218.10	直、底部	中期中葉
SK-64	円形	直立	97°	147×137-29	1.6		220.83	底、高坏、底部	中期中葉
SK-65	椭円形	直立	90°	210×154-44	2.2	N-40°-W	218.95	底	中期中葉
SK-66	椭丸長方形	逆傾形	110°	178×142-18	2.5	東西	218.29	茎、茎、高坏、底革	中期中葉
SK-67	円形	逆傾形	116°	157×150-16	1.8		219.30	なし	(中期)
SK-68	円形	逆傾形	126°	123×123-15	1.2		220.93	なし	(中期)
SK-69	円形	袋狀	70°	139×135-72	1.5		218.20	茎	中期中葉
SK-70	椭丸長方形	逆傾形	106°	155×135-61	2.1	南北	218.27	底、底部	中期中葉
SK-71	円形	逆傾形	135°	78×68-10	0.4	N-17°-W	218.24	茎、底部	中期中葉
SK-72	椭丸長方形	逆傾形	111°	148×122-32	1.8	東西	218.22	茎、底、高坏、底革、動植物、鐵石、磁器、	中期中葉
SK-73	椭丸長方形	直立	93°	176×105-33	1.8	N-86°-W	216.1	茎、底部、底部	中期(中葉)
SK-74	椭丸長方形	逆傾形	120°	160×107-13	1.7	N-30°-W	217.80	なし	(中期)
SK-75	円形	逆傾形	108°	81×69-27	0.4		219.65	土器片	中期中葉
SK-76	椭丸長方形	逆傾形	100°	124×71-18	0.9	N-40°-W	220.00	土器片	中期
SK-77	椭丸長方形	逆傾形	106°	154×121-30	1.9	N-40°-E	220.20	底	
SK-78	円形	直立	90°	98×92-27	0.7		217.99	底部	中期
SK-79	椭円形	直立	95°	121×104-36	1.0	東西	217.83	茎、底、高坏	中期中葉
SK-80	椭丸長方形	袋狀	86°	224×127-34	2.8	N-32°-W	217.96	土器片	中期
SK-81	椭円形	袋狀	70°	178×154-50	2.2	N-33°-W	216.92	茎、底、底部	中期中葉
SK-82	椭丸長方形	袋狀	89°	200×155-38	3.1	N-22°-E	216.90	茎、底、底部	中期中葉
SK-83	椭丸長方形	袋狀	70°	190×120-32	2.3	N-73°-E	216.46	茎、茎	中期中葉
SK-84	円形	逆傾形	112°	67×63-11	0.3		216.47	なし	中期
SK-85	不整円形	逆傾形	111°	95×86-14	0.6		216.62	茎、茎	中期中葉
SK-86	椭丸長方形	逆傾形	122°	92×56-10	0.5	N-67°-W	220.86	なし	(中期)
SK-87	円形	逆傾形	115°	48×41-26	0.1		221.28	なし	(中期)
SK-88	椭円形	逆傾形	106°	78×61-12	0.4	南北	221.56	土器片	(中期)
SK-89	円形	逆傾形	118°	65×59-14	0.3	N-60°-W	221.65	土器片	(中期)
SK-90	椭丸長方形	逆傾形	110°	154×103-42	1.6	N-50°-W	221.70	茎、茎、高坏	中期中葉
SK-91	椭丸長方形	直立	97	144×107-45	1.5	N-50°-W	221.80	底	中期中葉
SK-92	不整円形	逆傾形	120°	93×90-31	0.7		222.72	茎、底部	中期中葉
SK-93	円形	袋狀	48°	144×144-82	1.6		221.60	茎、茎、高坏	中期中葉
SK-94	椭丸長方形	逆傾形	110°	(145)×(95)-25	1.2		221.74	高坏、底部	中期中葉
SK-95	椭丸長方形	逆傾形	125°	189×139-16	3.0	N-55°-E	224.05	なし	(中期)
SK-96	円形	袋狀	73°	103×96-68	0.8		223.15	土器片	中期
SK-97	不整円形	逆傾形	110°	130×116-47	1.2		224.30	茎、底部	中期後葉
SK-98	椭円形	逆傾形	130°	176×(53)-10	0.7	東西	224.70	なし	(中期)
SK-99	円形	袋狀	60°	110×105-51	0.9		223.33	土器片	(中期)
SK-100	円形	袋狀	89°	75×72-64	0.4		224.21	土器片	(中期)
SK-101	椭円形	袋狀	87°	83×76-80	0.5	N-65°-E	224.04	底	中期
SK-102	円形	袋狀	78°	63×61-69	0.3		223.44	土器片	(中期)

土器名	平面形	所面形	縦横角	幅(単位:cm)	深さ(cm)	埋置状況	鉢輪	鉢輪方向	底面形	遺物	時期
SK-103	圓丸長方形	逆梯形	101°	83×57-29	0.5	N-65°W	220.65	なし		(中期)	
SK-104	不整形	不明	不明	55×42-22	0.2	東西	220.54	なし		(中期)	
SK-105	円形	袋状	62°	122×118-54	1.1			219.29	甕、底部	中期後葉	
SK-106	圓丸長方形	逆梯形	110°	203×130-22	2.6	東西	218.91	甕、壺、石斧		中期後葉	
SK-107	圓形	逆梯形	129	132×60-12	0.6	東西	219.16	甕		中期	
SK-108	円形	袋状	57	95×95-38	0.7			218.70	甕、底部	中期	
SK-109	円形	袋状	32	90×90-36	0.6			218.70	纺錘車	中期	
SK-110	不整形	逆梯形		222×90-32	1.6	N 40°W	218.4	甕、壺、底部		中期(後葉)	
SK-111	不整形	逆梯形	108	80×56-24	0.6			218.56	甕、壺、紡錘車	中期後葉	
SK-112	円形	逆梯形	106°	90×73-27	0.5			218.69	甕、壺、底、底部	中期後葉	
SK-113	圓丸形	皿状	134×102-10	1.1	N-35°W	218.8	甕、外部、底部			中期後葉	
SK-114	圓形	逆梯形	129	157×85-8	1.0	N 57°E	218.87	土器片		(中期)	
SK-115	圓丸長方形	直立	95°	75×59-58	0.4	N 30°W	219.47	甕、底部、砾石、石核		中期後葉	
SK-116	圓丸形	逆梯形	137°	160×160-20	2.6			219.70	弦生土器片、土器器	平家初期	
SK-117	圓丸長方形	逆梯形	120°	193×138-20	2.7	N-42°E	219.24	甕、壺、底部		中期後葉	
SK-118	円形	逆梯形	117°	59×52-18	0.2			219.14	なし	中期	
SK-119	円形	逆梯形	110°	50×50-20	0.2			219.06	なし	中期	
SK-120	圓丸長方形	逆梯形	110°	55×71-61	0.4	N-65°E	219.40	なし		中期	
SK-121	円形	直立	97°	88×46-25	0.3	N-35°E	219.39	なし		中期	
SK-122	円形	逆梯形	115	254×245-23	4.9			219.92	甕、底部	中期	
SK-123	圓形	皿状		100×67-36	0.5	N 77°E	220.16	なし		不明	

插表53 土壤一覧表

## 4. 集落

下山南通遺跡ではB～D区において総数152に及ぶ遺構と多量の遺物を検出したが、その大半は弥生時代に属するものである。またその遺構分布から南・北2つの遺構群を認め、さらに北部遺構群は出土遺物の時期範囲から、2時期の集落であることがわかる。併せて下山南通遺跡には最低3つの弥生集落が存在したことが明らかである。遺構の同時併存の認定は詳細な土器の比較検討をもって行なわれるべきで、土器の比較検討の充分でない、本遺跡においては所謂「単位集団」に君とすべき条件が整わないわけであるが、中期中葉・中期後葉・後期後半という大雑把な時間幅を前提として、弥生集落の変遷を概観しておきたい。

**中期中葉** 南部遺構群と呼称してきたものである。堅穴住居跡5基、掘立柱建物5棟、土塹84基が検出された。S I-05に2回の建て替えがみられる如く、時間幅があり、すべて同時期に存在した遺構ではない。但し、遺構の切り合いか殆どみられないことから、継続的に営まれた集落と考えるのが妥当である。S I-05は規模も大きく、構造的にも多主柱構造をとる。建て替えの事実からみても、この集落の中心的建物として存続していたものであろう。他は、S I-01、02といった2主柱構造をとる住居跡が一般的であるようだが、他遺跡の例に比べて、貧弱さはまぬがれない。また、S I-04、08といった構造的に特異な存在は注目される。特にS I-04は、位置的に他遺構と離れていること、柱穴が恒常的な構造をとらないこと、遺物の出土状況（廃棄時）が焼

土、高坏類を伴う特異な状況を示すことから、集落とやや隔離しなければならない存在であったものと考えられる。掘立柱建物は時期の判るものが少いが、南部遺構群において、この時期以外の遺物は殆ど出土しなかったことから同時期のものと考えられる。多くは竪穴住居に伴う付属施設（納屋・作業場等）と考えられるが、S B-01・02といった長棟の建物は、集落における何らかの共同作業の為の建物であったと推定される。遺構中、最も多数を占める土壙は袋状貯蔵穴が多く、純柱の高床式倉庫がみられないことと併せて、穀類の貯蔵を袋状土壙等の地下貯蔵に依存していたことがわかる。この他長方形土壙・特殊土壙・集石状土壙といった性格を明らかにし得なかつた土壙も多い。前者は恐らく各住居に伴うものであろうが、後二者は集落全体の祭祀行為に係る可能性が強い。大まかに全体をみると、S I-04の如く竪穴住居、掘立柱建物に、ある種の機能を有する土壙（袋状土壙・長方形土壙）が伴って一単位となるようである。確実に埋葬施設とできる遺構は発見していない。

中期後葉 北部遺構群の古い段階に相当する。竪穴住居には中期中葉のS I-01・02等の2主柱構造の系譜に連なる2主柱+補助柱構造がみとめられる一方、斜面を段状に加工して、掘立柱建物を建てたりもする。竪穴住居に大規模のものはみられない。掘立柱建物はやはり大・小の建物が認められる一方、高床式の建物と想定されるS B-12が存在し、中期中葉にみられた大型の袋状土壙が存在しない点から考えれば、貯蔵形態の変化を窺うことができる。遺構分布は全体的に散在的であり、Gラインを境に北東グループと南西グループの偏りがみられる。出土遺物や住居構造の類似からみて、南部遺構群の中期中葉集落と、北部遺構群の中期後葉集落は継続的に営まれたものと考えられ、集落の移動を想定したい。

後期後半 下山南通遺跡の弥生集落は後期前葉を欠落する。後期後半としては北部遺構群の南端斜面に3基の竪穴住居跡がみられるだけであり、掘立柱建物・土壙等を全く伴わない。S I-12にみられる3主柱構造を、中期後葉の2主柱+補助柱構造の発展と考えることもできようが、現状では推定の域を出ない。したがって、中期後葉まで継続して営まれた集落が、後期後半の集落と同一集団によるものかについては、俄かに判断し難い。出土土器からみて居住は比較的短期間であったと思われる。（中原 齊）

註1 この点について森岡秀人は「…遺構群が土器の編年研究が著しく細分化の方向を歩んできた今日、果して時間的共有関係を保ち得るか否か…」として、慎重な検討を求めている。

森岡秀人「論評・二つの高地性集落」『古代学研究』100、1983年

また、藤田憲司は、竪穴住居の構造的なスペースと火災時の延焼距離を論拠に、竪穴住居間距離が10mを下る場合の併存例はあり得ないとしている。

藤田憲司「単位集団の居住領域」『考古学研究』第31巻第2号 1984年

## 5. 土器

下山南通遺跡における出土遺物の大半は弥生土器が占める。再三記述したように本遺跡の弥生土器には大きく弥生時代中期中葉、中期後葉、後期後半の3時期がみとめられる。中期後葉と後期後半の間には空白期が存在し、かつ、中期後葉、後期後半の土器が量的に少く、器種構成を復

原し得ないことから、ここでは南部遺構群出土の中期中葉の土器を分類し（挿図226）、その編年的位置付けを試みることとする。

**壺形土器** 壺は南部遺構群において質・量とも豊富な資料が検出されている。形態によりA～F類に分類した。

**壺A類** 最大径を中位にもつ体部に、筒状の長い頸部が続き、強く外反して水平あるいは下垂する口縁をもつ壺で頸部下位に突帯をもつものが多い。口縁の外反度と長さ・器高によりA-1～3類に細分できる。

A-1類 口縁部が短く、水平にのびる口縁は端部をやや上方につまみあげる小型の壺、底径が大きく、安定している。口縁端部に刻み目、胴部外面に圧痕文を施す。胴部外面ハケメの後・中位をヨコ、下位をタテへラミガキし、内面はハケメで調整する。

A-2類 口縁は水平にのびて、端部が僅かに肥厚して面をもつ中型の壺。口縁端部あるいは上面に刻み目、波状文、体部中位に圧痕文を施し、頸部下位に1～2本の貼付け突帯をもつ。調整は頸部～体部外面タテ方向のヘラミガキで、中位にのみヨコ方向のヘラミガキを施す。内面はハケメ調整する。

A-3類 口縁は強く外反し、端部は下垂して、やや広い面をもつ大型の壺で、頸部下位に2本の突帯をめぐらす。Po239、240のように外反度はやや弱く口縁端部・上面・肩部を櫛描斜格子・鋸歯文等で飾るものもある。Po168は上面に一方を注ぎ口とする2本の刻み目突帯をめぐらしている。調整はA-1類に同じである。

**壺B類** 外反する口頭部をもち、口縁部下に4～5本の刻み目突帯をめぐらす。端部は肥厚して面をもつ。各種櫛描文・突帯文・浮文で飾る大型の壺で、口縁の形状で2細分する。

B-1類 外反度がゆるく、端部平坦面が水平になる口縁。全体のわかる個体がないが、器形・文様・調整ともB-2類に同じと思われる。

B-2類 やや強く外反し、端部が内傾する口縁をもつ。SK-66 Po280、288が良好な完形品で、胴部中位に最大径をもつ器高60cm前後の大型壺である。Po288は口縁端部に円形浮文をもち、頸部から胴部中位まで櫛描平行線文と波状文を交互に施す。Po280は胴部中位に2段の圧痕文をもつ。調整は胴部外面中・下位はヘラミガキ、上位～頸部はハケメを施し、内面もハケメ調整する。

**壺C類** 全体のわかる個体がないが、短く太い頸部と屈曲する口縁をもち、端部は下垂する。器壁は厚く、口径30cmを測る大型壺である。端部にヘラ描きによる刺突文、斜格子文を施す。Po196は頸部に指頭圧痕突帯をめぐらす。

**壺D類** 口頭部は「く」の字状に屈曲し、胴部最大径を中位にもつ壺。口頭部の破片のみでは壺との区別は困難である。Po83のように口縁端部が肥厚して丸みを帯びるものもある。体部外面中位やや上に圧痕文を施す。外面体部上位はハケメ、中～下位はヘラミガキし内面はハケメ調整する。

**壺E類** 口縁部がやや外傾気味に直立する直口壺の類。Po320のみで、全体を知り得る個体はみられなかったが、端部を外方につまみ出して刻み目を入れる。

**變形土器** 調査区全域で出土しており、量的には多いが煮沸形態の為か器形的な変化にとほしく、完形品もそう多くない。法量と頭部指頭圧痕突帯の有無で、A・B・C 3分類し、胸部の張り、口縁部・頭部突帯の細い形態からさらに細分する。

**壺A類** 口径12cm前後を測り、器高は20cm以下になると思われる小型の壺である。B類に比べて胸部の張りが弱く、口縁端部に刻み目を施すものが多い。胸部外面ハケメ、内面ナデ調整するが、ヘラケズリがかなり上位までみられる。

**壺B類** 口径16~20cm、器高26~34cmを測る中型の壺で、最も普遍的なタイプである。砲弾なし倒卵形の胸部に「く」の字状に屈曲する口縁がつく。口縁端部を僅かにつまみあげるものが多いが、拡張した端面をもつものはない。胸部最大径は中位にあり、口縁端部に刻み目、胸部中位に圧痕文を施す場合もある。調整は胸部外面上半をハケメ、下半をヘラミガキし、内面は上半はハケメかナデ調整するが、下半にヘラケズリがみられる。

**壺C類** 口径20~30cm、器高は大きいもので46cm前後となる大型の壺である。口縁形態により細分する。

**C-1類** 「く」の字に屈曲する口縁で端部に刻み目を入れるものもある。胸部のあまり張らない器形で、最大径はやや上位にある。頭部には指頭圧痕突帯をめぐらすことを特徴とし、胸部中位に圧痕文を施す。調整は胸部上~中位はハケメ、下位はヘラミガキする。内面はハケメ調整する。

**C-2類** 口径20cmを測る中型の壺で、口縁端部を上方に拡張して内傾させ、圧痕文・斜格子文を施す。肩の張る器形で、壺D類に近い存在ではあるが、頭部突帯から一応ここでは壺と考えた。

**高坏形土器** 量的には比較的多く検出しているが、意図的な破棄によるものか完形となるものはない。脚部は「ハ」の字状に開く単純な脚部で、端部は角張る。上位外面に断面三角形突帯を2本貼り付けるものもある。透し孔はみられない。坏部はA・B類がみられるが、いずれも脚部は同じ形態をとる。坏部底面は円盤充填による。

**坏部A類** 口径20cm前後を測る大型の高坏。やや浅めの椀状を呈する。端部の形態で細分する。

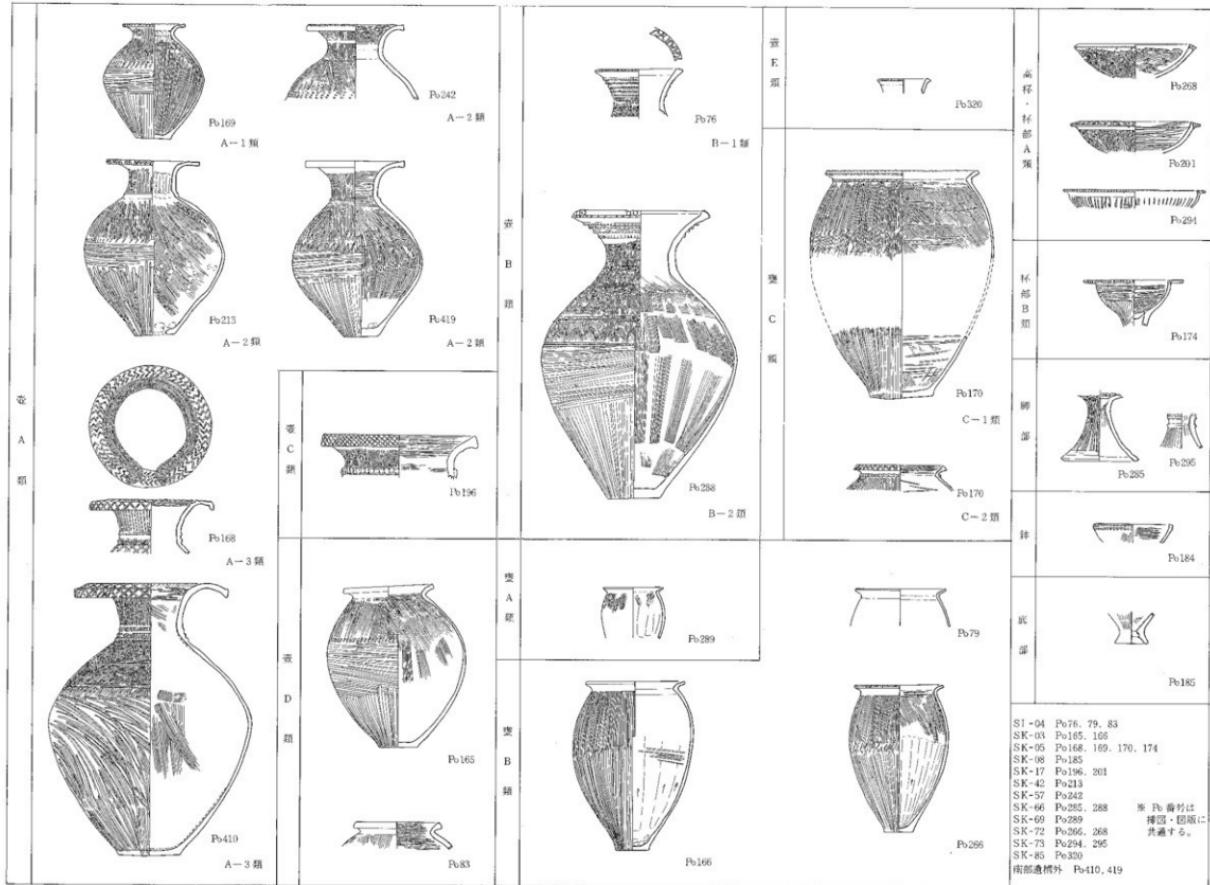
**A-1類** 端部は僅かに肥厚するが角張っている。外側に刻み目を施し、端部近くに2孔1対の小孔がみられ蓋留の紐通孔と思われる。内外面ハケメの後ヘラミガキする。

**A-2類** 端部を内外に拡張して、斜格子文・円形浮文を施す。紐通孔は、A-1類と異り、拡張した端面から下方に向けて穿孔している。調整はA-1類と同じ。

**坏部B類** やや深めの半球状を呈する坏部で、水平にのびる口縁をもち、端部に刻み目を入れる所謂「水平口縁」で2孔1対の紐通孔がみられる。調整は内外面ヘラミガキする。

**鉢形土器** 口径14cmを測るやや浅めの鉢であるが、全体のわかる個体はない。口縁外面に凹線状の凹みを入れ、その上・下に刻み目を入れる。内外面ヘラミガキする。また、他遺跡の例からすれば高坏A-1類の中には台付鉢に属するものもあると思われる。

以上、下山南遺跡における弥生時代中期中葉の土器について器形ごとの特徴を記述したが、次に、調整、文様、胎土・焼成・色調について若干まとめておく。



插図226 下山南通・弥生中期中葉土器群・基盤分類図

## 調整

壺は成形を終えた段階での施文以前の調整としてハケメを施し、施文後、胴部中位～下位へラミガキする。胴部中位よりやや上に圧痕文を施す例が多いが、これを境にして中位をヨコ方向のヘラミガキ、下位をタテ方向のヘラミガキしている。ミガキ調整の範囲は器形上半部の文様に規定されている。壺の場合は圧痕文のある中位以下をタテ方向のヘラミガキするが、次の中期後葉と比べるとヘラミガキの単位は細く丁寧で、ハケメが残るということはない。ミガキの範囲も中位よりやや上まで施されている。壺の内面調整はハケメを施し、ケズリは全くみられない。壺も基本的にはハケメ・ナデで調整するが下半部に限りヘラケズリがみられる。但し、ヘラケズリ後ミガキあるいはナデている個体もあり、ヘラケズリの単位も不明瞭である。小型壺A類の場合ヘラケズリがかなり上位まで及んでいる。

## 文様（写真4）

**突帯文** 断面三角形突帯文と指頭圧痕突帯文がみられる。断面三角形突帯<sup>1</sup>は粘土紐をヨコナデによって断面三角形になるよう貼付けたものであるが、さらに刻み目を入れたもの（刻み目突帯文<sup>2</sup>）が圧倒的に多く、A-1類を除く△類壺の頸部下位とB類壺の口縁外面に普遍的にみられる。高坏脚部上位にも断面三角形突帯をもつ例がある。特異な例としてはPo168にみられる口縁内面の突帯文は周防地方にみられるものであり、当地では類例の稀な存在である。指頭圧痕突帯<sup>3</sup>は從来「ネクタイ」と通称されているものである。大型壺C類の頸部に特徴的にみられ、粘土紐を貼り付け、2指の腹で挟み込む連続押圧によって器壁に密着させている。指頭圧痕突帯は中期後葉では1指の指先刺突による連続押圧<sup>4</sup>にかわり、さらにヘラ状工具（おそらく半截竹管）による刻み（圧痕）という省略化をたどるもので、中期後葉に入ると、口縁部のヨコナデ調整により、ナデつぶされる傾向<sup>5</sup>もみられる。装飾以上に頸部の補強を重視されるのである。壺ではPo261（A類？）と、C類Po196にみられるのみである。この2種類の突帯文は、文様効果としては似かよっているが、若干の混用はあるものの、壺には断面三角形（刻み目）突帯文、壺には指頭圧痕突帯文を明瞭に使い分けている。

**四線文** 中期後葉に盛行する凹線文<sup>6</sup>は下山南通遺跡の中期中葉の土器群には全く認められない。例外的にはS I-04Po75とS K-72Po259が口縁端部に2～4条の凹線を施し、その上から刻み目を入れている<sup>7</sup>。Po75はS I-04の上層一括遺物で、住居跡の廃絶に伴う下層の遺物と時期差が認められることからしても中期中葉より降る可能性がある。

**横描文** 中期前葉にヘラ書き文に取って替わり、中期中葉に盛行期を迎える施文手法であり、下山南通遺跡の中期中葉壺形土器にも、直線文<sup>8</sup>～<sup>11</sup>、波状文<sup>10</sup>・斜格子文<sup>9</sup>・<sup>11</sup>、鋸歯文、羽状文、円弧文<sup>12</sup>等に多彩な活用をみせている。特にA-3類とB類の装飾壺の胴部上位以上あるいは口縁内面にはこれらを組み合せて華麗な文様構成をみせている。

**圧痕文** 原体は、刷毛状工具・櫛状工具<sup>13</sup>・ヘラ状工具<sup>14</sup>・貝殻腹縫等がみられ、壺・壺・高坏・鉢の口縁端部あるいは突帯に、刻み目（刻み目状）として施されるものの他に、口縁端面、胴部中位に所謂「刺突文」として施されるものがある。

**浮文** 円形浮文<sup>15</sup>は壺・高坏の口縁端面、棒状浮文<sup>16</sup>はB類壺の口縁外側複数突帯上に貼り付

けられるが、個体数はそれほど多くはない。次の中期後葉まで若干残るようである。

小円孔文<sup>国</sup> 壺A-2、3類の水平あるいは下垂気味にのびた口縁の上から下へ向けて径2~3mmの小孔を貫通するものが3例みられた。間隔はPo412・413の1cm前後のものと、Po259の2cm前後のものがある。機能的には蓋の類を紐により固定することが考えられるが、やや厳重にすぎることと、口縁内面まで櫛描文・圧痕文で飾る個体にのみみられることから何らかの装飾的意味を想定しておきたい。小円孔文は、畿内・山陰にもみられるが、中部瀬戸内に特徴的だといわれている。

記号文<sup>国</sup> A-2あるいは3類の壺の口縁内面Po417に1例みられる。2条を単位とする櫛状原体による沈線を雷文状に4本並列させ、それを丸く（おそらく櫛円形）に埋んでいる。所謂記号文は弥生時代後期、畿内南部地域を中心に分布し、文字に先行する表現として評価されている。前期・中期に遡る例もあり、山陰では所謂「スタンプ文」が有名はあるが、これらとのつながりは認められない。記号文の性格については十分な解明がなされていないため、本例のサインとしての意味については今後類例の増加を待ちたい。

#### 胎土・焼成・色調

中期中葉の土器の胎土は、1~2mmの石英・長石を含み、ごく稀に2mm程度の角閃石がみられる。大まかに後期後半よりは密であるが、中期後葉よりはやや粗いといえる。焼成はおおむね良好で色調は灰白色系のものもみられるが、大半は黄褐~明赤橙色系を呈している。

#### 中期中葉土器群の編年的位置

山陰の弥生土器編年において中期は、ヘラ描きに替わる多条化した櫛描文の出現、櫛描文の盛行、凹線文の盛行と櫛描文の衰退をメルクマールとした前葉・中葉・後葉の3区分が認められている。下山南通遺跡の中期上器群は、この中期中葉～後葉の様相をみせている。鳥取県西部では米子市青木遺跡において、大規模な発掘調査成果をもとにした弥生時代中期中葉～古墳時代後期、奈良時代前半までの集落出土土器による編年が行なわれている。青木編年を弥生時代中期についてみると、報告Iの段階では中期後葉をI期として青木遺跡の集落形成期に位置付けしていたが、報告IIでは、DS X10、FS K11といった中期中葉に通り得る資料の再評価を行ない、青木0期=中期中葉と設定するに至っている。0期設定に際しては米子市奈喜良遺跡T3トレンチ拡張部出土土器を援用しているが、なおかつ、甕を除く壺・高环らの様相は明らかになっていない。また、青木報告IIでも触れられているように中期中葉といつても、青木0期の甕は若干口縁端部を拡張し、凹線状文を施し、内面胴部下半にヘラケズリがみられることから、出雲市天神遺跡にみられる凹線文・ヘラケズリを伴わない資料との関係において、天神遺跡を中期中葉古段階、青木0期を中葉新段階において、新・旧の関係で把えようとしている。形態からみても天神遺跡では口縁が逆L字状に屈折するものがあり、胴部最大径が口径を大きく上まわることはないのに対し、青木0期資料では口頭部はくの字状に屈折し、胴部は口径よりやや張り出している。当地域において青木0期に先行する資料は現在殆ど確認されないが、会見町宮前遺跡等に若干みられるようである。下山南通遺跡中期中葉の甕は口頭部はくの字状を崩し、端部は僅かにつまみあげ、胴部内面下半には不明瞭ながらヘラケズリがみられることから青木0期に併行する資料である。但し、

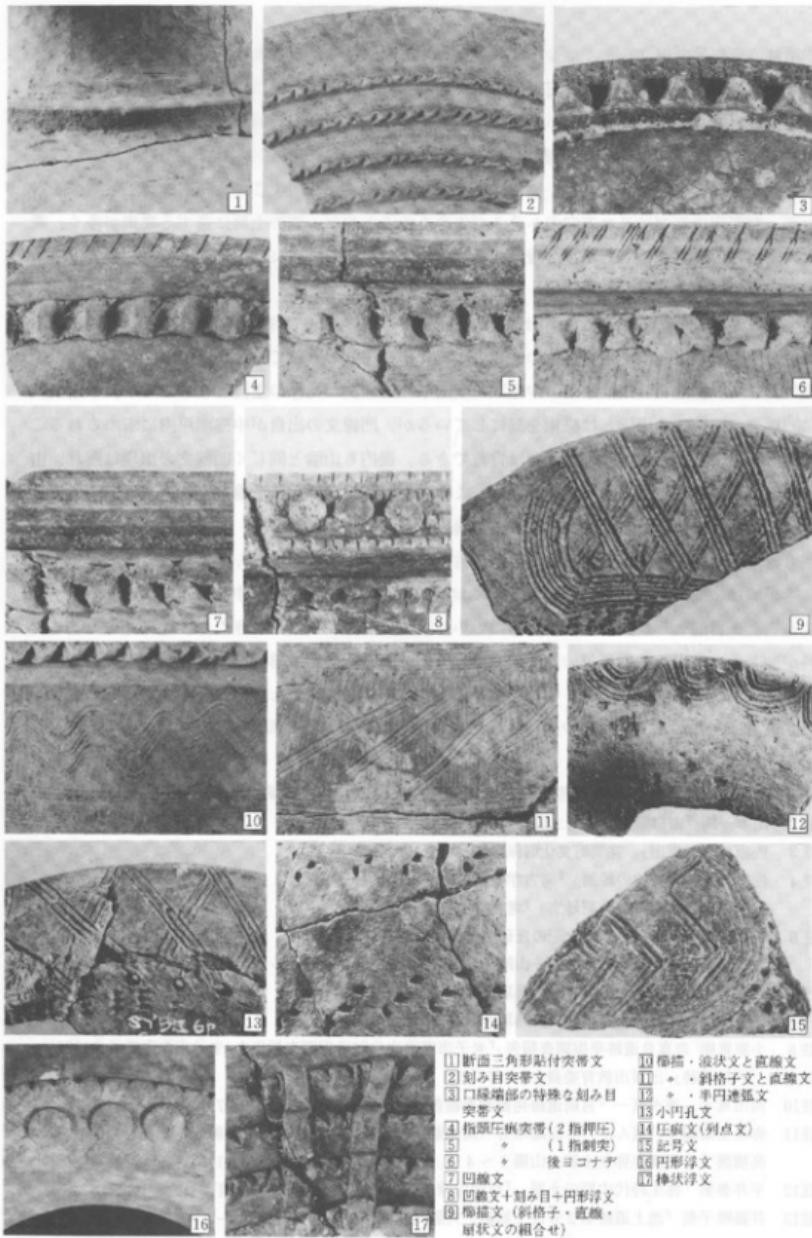


写真4 弓生中期中葉の土器文様

本遺跡の資料は凹線文を全く伴なっていない点で、凹線文を伴う青木0期より若干古相を示し、将来的には青木0期を細分する可能性を示唆している。壺・高環については、山陰において、中期中葉の良好な資料が欠落していたものを本遺跡の一括性の高い資料で埋めることができる。この時期主流をなすA・B類壺の形態が明らかとなったことは特筆に値しよう。壺D類については、從来壺とされてきたものである。壺に比べて胴部が著しく張り出すこと、頸部指頭圧痕突起をもたず、胴部中位外面にヨコ方向のヘラミガキをもつことなど、壺形土器に通ずる要素が多く、煮沸に用いた痕跡もないことから、壺として扱った。煮沸に用いられない壺形土器については再検討が必要であろう。

他地域との併行関係をみると岡山県百間川遺跡では甕の器形や内面下半ヘラケズリの手法から青木0期の甕は百間川・中・II期の新相の土器に併行するとされている。百・中・IIの新相の段階はすでに、蘆池式（中期中葉の中相）で成立した凹線文が文様の主流となっており、中期後葉に凹線文の盛行する山陰とは様相を異にしているが、凹線文の出自が中部瀬戸内に求められることからして、その盛行が遅れる現象は肯綮できる。畿内も山陰と同じく凹線文の出現は遅れ、III様式古段階には凹線文は全く見られない。このような凹線文の有無を重視すれば、下山南通遺跡南部遺構群の中期中葉土器群はIII様式古段階により近づくこととなり、水平口縁の高環B類の存在も含めて本遺跡例が中葉新段階でもやや古い段階に相当する可能性も考えられる。

本稿では、從来、山陰の弥生土器編年において不明瞭であった中期中葉の器種構成を明らかにすることを目的とした。特に壺形土器については良好な資料を提示できたが、他に比較できる資料が殆どない為、その器形毎の変遷は今後の課題である。甕形土器については出雲市天神遺跡、青木0期資料との比較により、中期中葉を細分する可能性を模索している。現在整理中の米子市日久美遺跡・松江市タチヨウ遺跡・出雲市天神遺跡の資料等を加えて再び検討することとした。

（中原 齊）

註1 出宮健尚他「南方（国立病院）遺跡発掘調査報告」岡山市教育委員会1981年 P67、128、129

註2 山本一朗『山口県の弥生式土器』周陽考古学研究所2 1979年

註3 佐原真『紫雲出』、蛇間町文化財保護委員会 1964年

註4 佐原真『弥生時代の絵画』『考古学雑誌』第66巻第1号 1980年

藤田三郎『弥生時代の記号文』『考古学と古代史』 1982年

註5 東森市良他「八雲立つ風土記の丘研究紀要I」 1977年

東森市良『入門講座弥生土器－山陰1～3－』『考古学ジャーナル』185、188、192 1981年

註6 「青木遺跡発掘調査報告書I」鳥取県教育委員会 1976年

註7 「青木遺跡発掘調査報告書II」鳥取県教育委員会 1977年

註8 小原貴樹『奈喜良遺跡発掘調査報告』米子市埋蔵文化財発掘調査報告I 米子市教育委員会1976年

註9 『天神遺跡』出雲市教育委員会 1977年

註10 岡田竜平、清水真一『宮前遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会 1979年

註11 弥生土器編年の進んでいる山陽地方（岡山県）では中期中葉を古・中・新に3細分している。

高橋護『入門講座弥生土器－山陽1～4－』『考古学ジャーナル』173、175、179、181 1980年

註12 半井泰男『弥生時代中期の土器』『百間川墓基・今谷遺跡I』岡山県教育委員会 1982年

註13 井藤曉子他『池上遺跡第2分冊土器編』大阪文化財センター 1979年

## b. 石器

石器の分類については、第3章第2節bを参照されたい。

### 1. 剝片石器〔挿図208・209、挿表45・46、図版65〕

#### ①石鏃 (S 59~77)

総数19点。このうち、石材は黒曜石9点(47%)、サヌカイト10点(53%)である。完形のもの15点について、長さ・幅・厚さの関係を挿図に示す。長さは18.2~34.4mmの間にあり、18.0~22.0mmに含まれるもののが8点あり、53%を占める。幅は10.9~21.2mmの間にあり、11.0~16.0mmに含まれるもののが9点あり、60%を占める。厚さは2.3~5.1mmの間にあり、長さ・幅・厚さの相関関係は、第3章第2節bの挿図を参照されたい。

#### ②その他の剥片石器 (S 78~80)

3点出土した。内訳は、サヌカイト製石槍1点、黒曜石製削器1点、サヌカイト製石匙1点である。

### 2. 石核石器・礫石器〔挿図209~212、挿表47、図版65〕

#### ①磨石・敲石

##### 磨石・敲石II (S 81~83)

3点出土した。敲痕が長軸方向の端部のみ認められるもの(S 82、83)、周縁部に認められるもの(S 81)がある。

石材は安山岩、中生代火山岩類、角閃石安山岩である。

##### 磨石・敲石III (S 84~91)

8点出土した。磨痕があり、敲痕が周縁部にのみあるもの(S 86、87、81、82)、敲痕が両面又は片面に及ぶもの(S 88・89)などがあり、これらの中には過度の磨耗・敲打により平坦面を持つもの(S 87、86)がある。S 88は、磨製石斧を転用したものであろう。

石材は、角閃石安山岩、砂岩、閃緑岩、中生代火山岩類、結晶片岩などである。

##### 磨石・敲石IV (S 92)

石材は輝緑凝灰岩である。表面に敲打による凹みと、磨痕が認められる。他の磨石・敲石と比べて最も小さい石器であり、磨る、敲くという本来の用途で使用されたものではないと考えられる。

##### 磨石・敲石IV (S 93)

石材は角閃石安山岩である。両面の中央部に凹みが認められ、周縁部に向って磨面が、周縁部に敲面が認められる。過度の磨耗、敲打によって平坦面が現出している。

#### ②石斧

##### 打製石斧 (S 94~97)

4点出土した。基端と刃端にのみ打撃を加えたもの(S 94)、基部と刃部の両方に打撃を加えたもの(S 95~97)があり、刃部は両凸刃(S 95、96)である。S 95は、ローリングを受けており、磨滅が著しいため、剥離が不明瞭になっている。

石材は、斑れい岩、安山岩、中生代火山岩類である。

### 磨製石斧（S 98～102）

5点出土した。基部、刃部共に研磨されており、刃部は両凸刃でいわゆる蛤刃である。S 98、99は、石斧正面と両側縁に明瞭な稜を持たず、刃端は過度の研磨により光沢を持つ。またS 100は、石斧正面と両側縁に明瞭な稜を持ち、断面形は隅丸長方形を呈する。

石材は、ミロナイト、閃綠岩、砂岩、中生代火山類などである。

### ③環状石斧

石材は、安山岩である。一定程度が欠損しているが、直径は140cmを測る。周縁は両面剥離によって刃部が作り出されている。石斧正面及び穿孔部は研磨による整形が認められるが、径2mm程度の敲打痕が多数残っており、全体的に整形は雑である。穿孔は両側からなされており、孔径は、表側で外径3.1cm、裏側で外径3.4cm、内径は2.0cmを測る。

### ④石皿（S 104）

石材は、花崗岩である。扁平な平石を利用しておらず、表裏面、肉緑は、過度の磨耗により中央部が大きく凹んでいる。表面の中央付近（クボミ中央）には、淡赤褐色に変色した部分が見られ、また裏面のほぼ全面にはススが付着していることから、石皿として使用された後、火を使う調理用具として利用された可能性が考えられる。

### ⑤砥石（S 105～125）

21点出土した。扁平な平石を利用したもの（S 106、108、112、113、115）、比較的小さな石（径10cm程度）を利用したもの（S 105、107、110、118）などがある。

石材は、細粒花崗岩、凝灰質砂岩、角閃石安山岩、絹雲母片岩、アブライトなどがある。

### ⑥石庖丁

石材は硬砂岩である。両側から穿孔がされており、孔径は、右側で、外径6.5mm、内径3.7mm、左側で外径7.0mm、内径3.2mmを測る。刃部はギザギザしており、使用痕が認められる。（松本琢己）

## 第3節 製鉄関連遺構について

砂鉄産地　中国山地は中世末後期白亜紀に噴出した花崗岩類を主とした地質で、伯耆（鳥取県中・西部）、出雲（島根県東部）にはたらいた製鉄の原料となる良質の砂鉄を含む風化花崗岩が広く分布している。近年鳥取県教育委員会によって行なわれた、古代から近世までの「生産遺跡分布調査」においても、その大半をたらいた製鉄関係遺跡が占め、豊富な原料を用いたたら焼きが盛んに行なわれたことが窺われる。その分布は日野郡（日南・日野・江府・溝口町）、東伯郡（関金町・三朝町）、倉吉市の一部といった山間部で県内例の80%を占めており、溝口町には55ヶ所のたら関連遺跡がある。溝口町は中央を日野川が南北に貫流し、その右岸は赤目砂鉄（褐鉄鉱）、左岸は真砂砂鉄（磁鉄鉱）を産することが知られている。真砂砂鉄は低チタンの極めて良質の砂鉄で、還元性が良く不純物の少い優れた和銅の原料となるという。

下山南通遺跡　下山南通遺跡は、この日野川左岸の真砂砂鉄地帯でなく、右岸の赤目砂鉄を産する大山西麓の丘陵台地上にある。第5章第1節で記述した如く、下山南通遺跡C区4Eグリッドで製鉄に関係すると思われる掘立柱建物S B-07とピット数基を検出した。

これを製鉄関連遺構としたのはピット及びピットに埋め立てた須恵器甕中から鉄滓が鉄滓化学分析 出土したことによるものである。出土した鉄滓については、日立金属株式会社安来工場和銅記念館において化学分析及び金属学的調査が行なわれ、その結果は同記念館佐藤豊副館長により報告を戴いている。順序は逆になるがC区出土の鉄滓について、調査報告を引用させて戴くと

- SY-C区より出土した資料No.1～4 鉄滓は比較的低温度で製練された製練滓と推定した。また金属鉄を多く含んだ部分を選別した可能性が強い。
- 資料No.1～5とも砂鉄を原材料に用いた製鉄法である。

という結果が出ている。詳細は報告に譲る。

<sup>14</sup>C年代測定 また、鉄滓に伴って出土した木炭を京都産業大学理学部年代研究室 山田治教授に液体シンチレーション<sup>14</sup>C年代測定を依頼し、以下の結果を得た。

#### 鳥取県下山南通遺跡 <sup>14</sup>C年代測定結果報告

測定番号	試料名	測定値(B P Y)
K S U-1153	木炭 SY-C区No.534 SI-04内SF.85.09.19	1100±15

註1 B Pは、元来は Before Present の略であります。(RADIO CABON 誌にもそう書かれています。)しかし、Present が毎年動いては附るので、AD1950年をもって Present、すなわち 0 B P とすることに国際的な約束で決められております。

註2 <sup>14</sup>Cの半減期は5568年を用いる約束になっていますので、上記の結果も5568年で計算されています。もし5730年で出したい時は、上の結果に1.029を掛けて下さい。

註3 年代の誤差は1標準偏差(1シグマ)であらわされることに約束されています。数学的には、真の値が含まれる確率は次のようにになっています。(普通は、真の値を含む範囲が1標準偏差の4倍を超えることは殆どありません。)

1シグマ(1標準偏差)中に68%、2シグマ中に95%、3シグマ中に99.7%、例えば、5000±100B Pとなっているときは、4900B Pないし5100B Pである確率が68%であり、4800ないし5200B Pである確率が95%、4700ないし5300B Pである確率が99.7%であります。

註4 <sup>14</sup>C年代が得られると、それから年輪年代(絶対年代)が求められています。詳しくは次の文献を御覧ください。

E. K. RalPh et al. MASCA News Letter, 1973

H. N. Michael, E. K. Ralph. RADIO-CARBON, 1984

東村 武信『考古学と物理化学』(学生社)

年輪年代 この<sup>14</sup>C年代を年輪年代(絶対年代)に置き換えると

<sup>14</sup>C年代 年輪年代

1100±15 AD850~910

となり、ほぼ9世紀後半~10世紀初頭(平安時代前期)に相当する。

土器 ピット及び周辺部からは、鉄滓に共伴すると思われる土器が多数出土している。胴部の張らない粗製の土器甕類が殆どを占め、若干須恵器を伴うが、全体として奈良時代後半~平安時代前期の土器様相を示す。小型灰陶(土器・黒色土器)を伯耆国<sup>13</sup>の土器編年と比較してみると、Po463は復口径12cm、器高3.7cmを測り、やや小型化

している。焼成は不良であり、軟質でもろい上磨滅により明瞭ではないが、糸切り未調整でロクロ成形されるものである。SD-38・39出土土器に近く、10世紀前半代に降る。黒色土器Po464は内面にのみ炭素を吸着させたA類であり、限定はできないが、大まかに9~10世紀として矛盾はない。これらの土器様相は、<sup>14</sup>C年代から割り出した年輪年代とほぼ一致する。これにより平安時代の初め頃に下山南通に製鉄に関連する人々が居たことは明らかである。しかしながら、その製鉄の実態は、本例において製鍊炉はもちろん炉壁・羽口といった具体的な製鉄関係資料が、何一つ発見されていない為全く不明である。ただ、分析報告にあるように、比較的低温度での製鍊が推定されるならば、あまり発達した炉構造は考えにくいと思われる。

鉄 淵 本遺跡における鉄滓の出土状況は極めて特異である。ピット5における壊れた土師器甕片に伴う出土状況は廃棄を思わせるものであるが、ピット6において須恵器甕中に入れた在り方は土・炭化物・土器片と混在するといえ廃棄とは考えにくい。須恵器甕に納められた例としては、福岡県宗像市浦谷古墳群H-4号墳の例があるが、これは古墳の横穴式石室墓道に所在する須恵器埋甕中に鉄滓を1個を納めたもので、本例とは性格を異にする。そこで、No.1資料にみられる1000°C以上の高温から急冷した現象を、鉄塊を割り易くするための強制冷却と考えれば、金属鉄を多く含んだ部分を選別した可能性と併せて再度の製鍊の為の一時的な集積と考えることもできよう。周辺で、製鍊に直接関係する遺構・遺物を見出せなかつことと、日常雑器の甕類が多數検出されていることと併せて、SB-07は近傍に存在するたたら炉を営む人の住居と考えられ、おそらく恒常的な住居ではなかったであろう。いずれにしても、類例の増加を待って判断したい。

伯耆・出雲の山間部におけるたたら製鉄の上限は、出雲風土記に川砂鉄を産出する記録があり、大山町源平山古墳、島根県伯太町座毛7号墳例などにより、かなり遡ることが知られているが、発掘調査によって古代まで遡る製鉄関連遺跡が確認された例は殆どない。鳥取県においては、大山北麓名和町東坪・上寺谷たたら跡が発掘調査され、長さ3m、幅1mの溝状の本床中央部に長さ0.9m、幅0.5mほどの炉壁状の堅く焼きしまった部分を確認しており、炭と小鉄滓と焼土を検出している。石材を用いない在り方から奈良時代まで遡るものと考えられている。本床の東3mには、径2mほどの土壙が2基あり、製鍊滓を多く含んでいたが、焼けているなどの状況はみられなかったという。下山南通遺跡のピット5と同じ在り方が注目される。伯耆国は延喜主計式によれば調・庸として、鐵・鐵を納めていたとされ、古代から鉄製鍊および鍛冶が行なわれていたことは明らかで、本遺跡はその実態をさぐる1例として、重要な資料と考えられる。

(中原 肇)

註1 清水真一編『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』鳥取県教育委員会 1984年

註2 <sup>14</sup>C年代をもとにした年輪年代の計測は報告註4を参照して当方で行なった。

註3 関淳一郎他『伯耆国庁跡発掘調査概報(第5・6次)』倉吉市教育委員会 1978年

註4 原俊一氏の教示による。『浦谷古墳群I』宗像市教育委員会 1982年

註5 大山町誌編さん委員会編『大山町誌』 大山町 1980年

註6 青木博『岩屋谷古跡他発掘調査』伯太町教育委員会 1981年

註7 註1と同じ

市長 告辭

第 1 頁

#### 第4節 おわりに 内閣官房産業局の鷹千洋・山崎吉喜博士の講義と下山南通遺跡

遺跡から間近に仰ぐ大山の峰々は、僅かばかりの冬の名残りを留めている。早春の4月に、江府町佐川遺跡群と併行して始まった調査も瞬く間に四季を過ごし、ようやく調査報告書を上梓する運びとなった。下山南通遺跡では約16,000m<sup>2</sup>が発掘調査され、縄文時代～平安時代に至る総数153基の遺構と約3,000点に及ぶ遺物を調査することができた。具体的な調査記録は本編中に収められているが、課題は山積みされ、本遺跡の歴史的な位置付けは今後の評価を待たねばならない。

下山南通遺跡の発見は昭和60年2月に遡る。降りしきる雪の中のトレンチ調査で確認されるまで、本遺跡は一部の地元有識者を除けば全く存在を知られていなかった。昭和になって開拓の歴が入れられるまで、大山山麓の原野であったであろう此地に、石の槍で獲物を狩る人々、大陸から伝えられた農耕文化を携えた人々、砂鉄から鉄を造り出す人々が移り住み、また何處ともなく去っていったなどと誰が想像し得たであろうか。中国横断自動車道関連の調査では大山西麓の貴重な遺跡と引き換えに、そうした古代社会と古代人の足跡を解明する糸口が与えられたのだと考えたい。掘り起こされた資料に光を当ててやるのが私達の仕事であった筈だが、力及ばず不十分な成果を送り出すことになった。この発掘調査による成果を地域の歴史という形で還元できないことは、地域の方々には誠に申し訳ない次第ではあるが、敢えてご寛恕いただきたい。

最後に大規模な発掘調査を円滑に進めるにあたっては、発掘作業に参加していただいた作業員の方々を始め、地元の協力は不可欠のものであった。また、遺物整理及び報告書の作成も、鳥取県埋蔵文化財センターの職員、整理作業員の方々のおかげで、力量以上のことができたと思う。未筆ではあるが感謝の意を表したい。

(中原 齊)



写真5 調査に参加した人々